

磐城山遺跡（第 9・10 次）発掘調査報告書

－農地改良工事に伴う緊急発掘調査－

2021 年 3 月

鈴鹿市

序

三重県鈴鹿市の北部を流れる鈴鹿川の流域には、縄文時代から中近世に至るまで、多くの遺跡が存在しています。三重県は、地理的な要因から、東西の文物が交錯し、時代ごとに様々な様相を呈しています。

ここに報告する鈴鹿市河曲地区は、古代の河曲郡に相当します。壬申の乱の際に、大海人皇子（天武天皇）が通過した、「川曲の坂下」の有力な候補地でもあります。また、天皇家に采女を献上している、古代豪族大鹿氏の本貫地ともされています。後に、伊勢国の国分寺が建立され、河曲駅家が整備されるなど、交通の要衝として栄えた地域です。

磐城山遺跡の発掘調査では、弥生時代や古墳時代の文物が多く確認されるとともに、古代や中世の遺構も確認されはじめています。これらの貴重な資料をもとに、鈴鹿市の歴史とその意義を発信し、豊かな地域社会の形成に少しでも貢献できれば幸いです。

発掘調査にあたっては、三重県教育委員会をはじめとし、市民の皆さま、地元である河曲地区、木田町自治会等から多大な御協力とともに、暖かい御支援をいただきました。文末となりましたが、皆さまの御誠意ある対応に、心から御礼申し上げます。

令和3年3月

例 言

1. 本書は、三重県鈴鹿市木田町字上條所在の磐城山遺跡第9・10次の発掘調査に係る報告書である。
2. 調査は、平成28年度及び平成29年度に行った農地改良工事に伴う記録保存の緊急発掘調査である。
3. 発掘調査は以下の体制で実施した。

(平成28年度;第9次調査時)

調査担当	鈴鹿市	文化スポーツ部	文化財課	発掘調査G	
組織及び構成	鈴鹿市	文化財課	課長	浅野 浩	
			発掘調査G L	新田 剛	
			発掘調査G	藤原 秀樹	
				田部 剛士 (※ 現地調査担当)	
				吉田 隆史	
				太田 有香	

(平成29年度;第10次調査時)

調査担当	鈴鹿市	文化スポーツ部	文化財課	発掘調査G	
組織及び構成	鈴鹿市	文化財課	課長	新田 剛	
			発掘調査G L	青井 和徳	
			発掘調査G	藤原 秀樹	
				田部 剛士 (※ 現地調査担当)	
				吉田 隆史	
				太田 有香	
				佐藤 梨花	

4. 現地調査に係る発掘費用は、各年度の国庫補助金で負担し、報告書の印刷製本費は令和2年度の国庫補助金で執行了。
5. 現地調査及び本書の作成及び編集は、鈴鹿市 文化スポーツ部 文化財課 発掘調査グループの田部が行った。
6. Fig.3 では、国土地理院発行 1:25,000 地形図鈴鹿の一部を使用した。
7. 本調査に係る遺物・図面・写真は、全て鈴鹿市考古博物館で保管している。
8. 発掘調査及び報告書作成にあたっては、以下の各氏から有益な御教示等をいただいた。記して感謝したい。
渡辺 寛・小澤 毅・赤塚次郎・穂積裕昌・石井智大・渡邊和仁・宮原佑治・小原雄也・狭川真一・土井孝之・森 泰通・山口通介・三重県埋蔵文化財センター (敬称略・順不同)

本文目次

序	5 土坑	74
例言	6 小結	94
目次 / 表目次 / 図版目次 / 写真図版目次	第V章 出土遺物	99
第I章 はじめに	1 竪穴建物	99
1 調査の契機	2 溝	117
2 調査の経過	3 土坑	129
第II章 位置と環境	4 掘立柱建物	134
1 地理的環境	5 柱穴	136
2 歴史的環境	第VI章 自然科学分析	161
第III章 調査の方法	1 分析するにあたって	161
1 調査区	2 放射性炭素年代測定	161
2 地区割り	3 市内遺跡出土遺物に付着する赤色顔料分析	165
3 遺構番号	4 分析結果の検討	166
4 基本層序	第VII章 調査の成果と課題	167
第IV章 検出遺構	1 竪穴建物に付随する溝について	167
1 竪穴建物	2 SH09104の規模について	167
2 溝	3 SH09104の出土土器について	168
(1) 竪穴建物に付随する溝	4 倉庫群と区画について	171
(2) 道路側溝・地割溝	5 中世城館に関わる遺構について	171
3 掘立柱建物	～方形竪穴の確認～	171
4 柵	参考・引用文献	173
	奥付	

表目次

Tab.1 磐城山遺跡の発掘調査履歴	3	Tab.6 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果	163
Tab.2 掘立柱建物の一覧表	98	Tab.7 分析対象一覧	165
Tab.3 遺物観察表	141-160	Tab.8 三重県における大型竪穴建物	167
Tab.4 分析試料一覧表	161	報告書抄録	225
Tab.5 測定試料および処理	162		

図版目次

Fig.1 鈴鹿市の位置	9	る溝)	18
Fig.2 鈴鹿市の地質	9	Fig.7 第9・10次調査区遺構配置図(掘立柱建物・柵・土坑・中世以降)	19
Fig.3 遺跡の位置	10	Fig.8 第9・10次調査区遺構配置図①(北半)	20
Fig.4 調査区の地区割り	13	Fig.9 第9・10次調査区遺構配置図②(南半)	21
Fig.5 第1・10次調査区遺構配置図	15-16	Fig.10 SH08215/216/228 平面・断面図	22
Fig.6 第9・10次調査区遺構配置図(竪穴建物+付随す			

Fig.11	SH0903・SH0910/11・SH1090/91/93 平面・断面図	23	Fig.52	SB09146 平面・断面図	64
Fig.12	SH0930/31/32・SH0935・SH0947 平面・断面図	24	Fig.53	SB09147 平面・断面図	64
Fig.13	SH0942/49 平面・断面図	25	Fig.54	SB09148 平面・断面図	65
Fig.14	SH0960/80 平面・断面図	26	Fig.55	SB09149 平面・断面図	65
Fig.15	SH0962/159 平面・断面図	27	Fig.56	SB09150 平面・断面図	66
Fig.16	SH0963 平面・断面図	27	Fig.57	SB09126/127 平面図	67
Fig.17	SH0966 平面・断面図	28	Fig.58	SB09126 平面・断面図	68
Fig.18	SH0973 平面・断面図	29	Fig.59	SB09127 平面・断面図	69
Fig.19	SH0974・SH0976 平面・断面図	29	Fig.60	SB09128 平面・断面図	70
Fig.20	SH0997 平面・断面図	30	Fig.61	SB09156 平面・断面図	71
Fig.21	SH0987・SH0992・SH0993 平面・断面図	31	Fig.62	SB09157 平面・断面図	72
Fig.22	SH0994/95 平面・断面図	33	Fig.63	SB09158 平面・断面図	72
Fig.23	SH09102 平面・断面図	34	Fig.64	SB10158 平面・断面図	73
Fig.24	SH09104・SH09107/108 平面・断面図	35	Fig.65	SB10159 平面・断面図	73
Fig.25	SH09104 土層断面図	36	Fig.66	SB10160 平面・断面図	74
Fig.26	SH09104 主柱穴遺物出土状況	37	Fig.67	SB10161 平面・断面図	75
Fig.27	SH09135/136 平面・断面図	38	Fig.68	SB10162 平面・断面図	76
Fig.28	SH09140 平面・断面図	39	Fig.69	SB10163 平面・断面図	77
Fig.29	SH1011 平面・断面図	40	Fig.70	SB10123 平面・断面図	78
Fig.30	SH1016/17 平面・断面図	40	Fig.71	SB10136 平面・断面図	79
Fig.31	SH1031・SH1040/60 平面・断面図	41	Fig.72	SB10155 平面・断面図	80
Fig.32	SH1032/33/34 平面・断面図	42	Fig.73	SA0928 平面・断面図	81
Fig.33	SH1051 平面・断面図	42	Fig.74	SA09151/152/153/154 平面・断面図	81
Fig.34	SH1065 平面・断面図	43	Fig.75	SA09155 平面・断面図	82
Fig.35	SH1069/164/165・SH1080 平面・断面図	44	Fig.76	SA09164 平面・断面図	82
Fig.36	SH1070 平面・断面図	45	Fig.77	SK0901 平面・断面図	83
Fig.37	SH1073 平面・断面図	46	Fig.78	SK0938/52 平面・断面図	84
Fig.38	SH1086/95 平面・断面図	47	Fig.79	SK0939 平面・断面図	84
Fig.39	SH1089・SH1096・SH1099 平面・断面図	48	Fig.80	SK0943 平面・断面図	85
Fig.40	SH10101 平面・断面図	49	Fig.81	SX0905 平面・断面図	86
Fig.41	SH10106・SH10111・SH10116・SH10120 平面・断面図	50	Fig.82	SX0958 平面図①	87
Fig.42	SH10133/114/115 平面・断面図	51	Fig.83	SX0958 平面図②	88
Fig.43	SH10107/118 平面・断面図	52	Fig.84	SX0958 平面図③・断面図	89
Fig.44	SH10127 平面・断面図	53	Fig.85	SK0977 平面・断面図	90
Fig.45	SH10156/157 平面・断面図	54	Fig.86	SK09110 平面・断面図	90
Fig.46	SH10138/144/147/148/149 平面・断面図	54	Fig.87	SX09115・SX09116 平面・断面図	91
Fig.47	竪穴建物に付随する溝	57	Fig.88	SX1026 平面・断面図	92
Fig.48	中世の主要な遺構配置図	59	Fig.89	SK1029 平面・断面図	93
Fig.49	中世の道路状遺構の土層断面図	61	Fig.90	SK1058 平面・断面図	93
Fig.50	SB0927 平面・断面図	63	Fig.91	SK1084 平面・断面図	93
Fig.51	SB09145 平面・断面図	63	Fig.92	SK1081 平面・断面図	94
			Fig.93	SX10100 平面・断面図	95
			Fig.94	SK10119 平面・断面図	95
			Fig.95	SX10102 平面・断面図	96
			Fig.96	SX10143 平面・断面図	97

Fig.97	SH0903・SH0910・SH1090/91/92/93 出土遺物	99
Fig.98	SH0930/31/32・SH0947 出土遺物	100
Fig.99	SH0942/49 出土遺物	101
Fig.100	SH0960/80 出土遺物①	101
Fig.101	SH0960/80 出土遺物②	103
Fig.102	SH0963出土遺物	104
Fig.103	SH0974出土遺物	104
Fig.104	SH0966出土遺物	105
Fig.105	SH0997出土遺物	106
Fig.106	SH0987・SH0993 出土遺物	106
Fig.107	SH0994/95 出土遺物	107
Fig.108	SH09102 出土遺物	107
Fig.109	SH09104 出土遺物①	107
Fig.110	SH09104 出土遺物②	108
Fig.111	SH09104 出土遺物③	109
Fig.112	SH09104 出土遺物④	111
Fig.113	SH09135/136 出土遺物	112
Fig.114	SH09140 出土遺物	113
Fig.115	SH1070出土遺物	114
Fig.116	SH1089出土遺物	114
Fig.117	SH10107 出土遺物	114
Fig.118	その他の竪穴建物の出土遺物	115
Fig.119	SD0902出土遺物	117
Fig.120	SD0908出土遺物	118
Fig.121	SD0909出土遺物①	119
Fig.122	SD0909出土遺物②	120
Fig.123	SD0940出土遺物	121
Fig.124	SD0964出土遺物	121
Fig.125	SD0972出土遺物	122

Fig.126	SD0975 出土遺物	122
Fig.127	SD09111 出土遺物	123
Fig.128	SD09125 出土遺物	124
Fig.129	SD09126 出土遺物	124
Fig.130	SD1022出土遺物	124
Fig.131	SD1059出土遺物	125
Fig.132	SD1077 出土遺物	125
Fig.133	SD1085 出土遺物	125
Fig.134	SD1098/117 出土遺物	126
Fig.135	その他の溝の出土遺物	127
Fig.136	SX0905 出土遺物	129
Fig.137	SX0958 出土遺物	129
Fig.138	SX1026 出土遺物	130
Fig.139	SK0952 出土遺物	130
Fig.140	SK09110 出土遺物	131
Fig.141	SK0977 出土遺物	131
Fig.142	その他の土坑の出土遺物	132
Fig.143	掘立柱建物の出土遺物	133
Fig.144	柱穴の出土遺物①	135
Fig.145	柱穴の出土遺物②	137
Fig.146	柱穴の出土遺物③	139
Fig.147	暦年校正結果	164
Fig.148	試料採取位置 / 赤色顔料付着部位の実体顕微鏡写真 / 赤色顔料の生物顕微鏡写真	165
Fig.149	赤色顔料の蛍光 X 線分析結果	166
Fig.150	SH09104 平面図 (上層遺構を除く)	168
Fig.151	菟上遺跡 SH71 実測図	169
Fig.152	SH09104 の器種組成	170
Fig.153	掘立柱建物の方位の分析	171
Fig.154	区画溝と掘立柱建物の位置関係	172

写真図版目次

PL.1	第9次調査区完掘, 第9次調査区完掘②	176
PL.2	第9次北西区検出, 第9次北西区検出②, SH0930/31/32 完掘	177
PL.3	第9次中央北区中世道路完掘, 第9次中央北区完掘	178
PL.4	SH0966・SH0960/80 等完掘, SH0966 完掘	179
PL.5	SH0960/80 検出, SH0960/80 完掘	180
PL.6	SH0974 完掘, SH0994/95 完掘	181
PL.7	SH0960/80・SH0993 完掘, SH0993 完掘	182
PL.8	SH0962 完掘, SH0962 完掘②	183

PL.9	SH09104 検出, SH09104 床面検出	184
PL.10	SH09104 完掘, SH09104 完掘②	185
PL.11	SB09126/127 検出, SB09126/127 検出②	186
PL.12	第9次北東区～北西区完掘, 第9次南東区完掘	187
PL.13	SH09102 完掘, SH09140 完掘	188
PL.14	SH09135/136 検出, SH09135/136 完掘	189
PL.15	SD09101/111/119 の接続, SB09156 掘削・検出	190

PL.16	SD0902・SD0909, SD0909とSD0925・SD0926の接続, SK0901半裁, SK0901完掘, SK0939礫検出, SK0952完掘, SX0905礫(1段目)検出, SX0905礫(2段目)検出……………191
PL.17	SX0905礫(3段目)検出, SX0905完掘, 第9次北西区検出作業, P0964出土遺物(報告番号578), SX0958礫(2段目)検出, SX0958礫(3段目)検出, SX0958礫(4段目)検出, SX0958完掘……………192
PL.18	SH0960南西隅出土遺物, SD0972出土遺物, SH0966地床炉とSD0972出土遺物, SH0993南辺周壁溝出土遺物(報告番号126), SK0977出土遺物(縄文土器), SK0977半裁, SX0958礫検出作業, SH0960遺物清掃作業……………193
PL.19	SH09104地床が(P09936), SH09104南辺中央土坑土層断面, SH09104南辺中央土坑出土遺物(報告番号185), SH09104南西主柱穴(P09923)出土遺物, SH09104北西主柱穴(P09938)出土遺物, SD09125出土遺物(報告番号413), SD09111出土遺物(報告番号404・405等) ……194
PL.20	SB09127(P09687)の根巻石, SB09126(P09575)の根巻石, SB09126(P09723)の根巻石, SB09126/127の根巻石撤去作業の様子, SD09103出土遺物(報告番号457), SD09111出土遺物(報告番号412), SH09140南辺中央土坑出土遺物(報告番号241), SX09115完掘……………195
PL.21	第10次東区から西区完掘, 第10次東区から西区完掘②……………196
PL.22	第10次東区検出, SH1011検出……………197
PL.23	道路状遺構 SC1007 検出, 道路状遺構 SC1007完掘①……………198
PL.24	道路状遺構 SC1007 完掘②, 第10次中区検出……………199
PL.25	SH10132/33/34・SX1026 検出, SH1032/33/34・SH1031等完掘……………200

PL.26	第10次西区～北西区検出, SH1065・SH1070検出……………201
PL.27	SH1070完掘, SH1080完掘……………202
PL.28	SH10106・SH10116等検出, SH10107/118検出……………203
PL.29	SH10111 検出, SH10111 完掘……………204
PL.30	SH10107/118・SH10111 完掘, 第10次北区～北西区完掘①……………205
PL.31	SB10136 検出, SB10136 完掘……………206
PL.32	SX10126出土遺物(報告番号490), SX1026出土遺物(報告番号503), SX1026出土遺物(報告番号502), SX1026出土遺物(報告番号501), SX1026出土遺物(報告番号485), SH1070南辺中央土坑出土遺物, 第10次西区作業風景, SD1046/48/49/54等土層断面……………207
PL.33	SH10116東辺周壁溝出土遺物(報告番号284), SH10107東辺周壁溝出土遺物(報告番号259), 第10次北区～北西区完掘②, SH10144/148/149等完掘, 第10次拡張区(西2区)検出第10次拡張区(西2区)完掘, SX10143掘削状況, SX10143土層断面……………208
PL.34	出土遺物(報告番号446)……………209
PL.35	出土遺物(報告番号38-71)……………210
PL.36	出土遺物(報告番号72-110)……………211
PL.37	出土遺物(報告番号114-157)……………212
PL.38	出土遺物(報告番号158-191)……………213
PL.39	出土遺物(報告番号187-213)……………214
PL.40	出土遺物(報告番号218-276)……………215
PL.41	出土遺物(報告番号275-309)……………216
PL.42	出土遺物(報告番号311-371)……………217
PL.43	出土遺物(報告番号372-400)……………218
PL.44	出土遺物(報告番号402-457)……………219
PL.45	出土遺物(報告番号437-498)……………220
PL.46	出土遺物(報告番号499-533)……………221
PL.47	出土遺物(報告番号534-627)……………222
PL.48	出土遺物(報告番号630-656)……………223

第I章 はじめに

1 調査の契機

磐城山遺跡の発掘調査は平成5年の県道敷設工事に先立って開始され、平成9・10年の市道敷設工事関連へと続いた（Tab.1）。その後、しばらく発掘調査されることはなかったが、平成21年に地元から、敷設した道路面まで隣接する畑を床下げしたいという旨の協議が寄せられた。過去に発掘調査された隣地であり、遺構の存在が確実視される場所であったので、幾度か遺跡保護のために協議を行ったが、農地改良工事はやむを得ずとの結論に至り、事前に発掘調査を行って記録を残すこととなった。

届出された範囲は5,000㎡以上と広大で、単年度での調査は不可能であったため、数100㎡を単位として複数年かけて調査を行うこととし、調査が終了した部分から工事を着手することとなった。この一連の調査は、平成21年の第3次調査から開始し、平成30年度で第11次を数えるまでとなった。なお、令和2年度の第13・2次調査を以て、一通りの発掘調査を終了している。

これまでの発掘調査の成果は、第3次調査のみ『鈴鹿市考古博物館年報』第14号の中に掲載したが（田部2011）、他は第4・5次、第6・7次、第7・2・8・8・2次として磐城山遺跡の単独の報告書を刊行している（田部2014, 2015, 2018）。なお、市道敷設工事に伴う第1・2次調査の成果は未報告となっている。本書では、既に報告した調査以降に該当する、平成28年度の第9次調査と、平成29年度の第10次調査について正式に報告する。

第9次調査は第8次調査区の南側及び第3・4次調査区の西側に相当する。平成28年4月11日から平成29年3月28日まで1年をかけて調査している。平成28年度からは調査費用が増額できたため、長期にわたって調査を継続することができ、750㎡を発掘することができた。実際には4月から10月まで掘削作業を継続した後、一時掘削作業を中断して、それまでに完掘した範囲の図化作業を12月にかけて行っている。その後、翌2月から再び掘削作業を再開し、年度末の3月まで継続した。ちょうど、最も遺存状態の良いところであり、多数の遺構が重複して確認できた。

第10次調査は第9次調査区の南側及び西側に設定した。平成29年5月22日から平成30年3月30日まで、のべ700㎡を1年をかけて調査している。2月8日まで遺構掘削を継続した後、2月から3月にかけて遺構平面

図を作成した。調査区の北側は台地の端部に相当し、土砂の流出が著しいため遺存状態は悪かった。反対に、第9次調査区の南側では、遺存状態が良好であり、多くの遺構を確認した。

いずれも、既に表土除去が済んでいたため、発掘作業員6～10名/日によって遺構の検出と掘削を繰り返して行った。第9次調査区に残りの良い地点では堅穴建物の深さが0.5mもあったが、床面近くまで削平されているものも多く存在した。

2 調査の経過

発掘調査の経緯や概要については既刊の概要報告があるが（田部2018, 2019）、以下調査日誌を抄録することで調査の経過に替える。

【調査日誌】

第9次調査(750㎡, 平成28年4月11日～平成29年3月28日)
4月11日 北西区の検出を開始。
4月12日 検出作業継続。
4月13日 降雨のため、作業中止。
4月14日 北端の一部分のみ、人力作業により表土除去。検出作業継続。
4月15日 検出作業継続。遺構略測図作成開始。
4月18日 午前中水抜き。午後、遺構検出継続。
4月19日 SB08211, SB0859の西側の柱穴列を掘削。
4月20日 完掘後、清掃し、写真撮影。現代溝掘削開始。
4月21日 降雨予報のため、平面図作成作業のみ実施。午後から降雨。
4月22日 降雨のため、作業中止。
4月25日 現代溝①～③完掘。午後から、遺構掘削開始。
4月26日 SE0901 半掘開始。深く、狭いため土層断面の図化をしながら北半も掘り下げることをする。土壌幕なしし井戸の可能性を考える。SH0902 周壁溝から須恵器出土。SX0905 掘削着手。礫が出土し、土壌幕になりそうと判断する。山茶検出土。
4月27日 SH0903/04 埋土完掘。SH0902は堅穴でなく溝であると認識を改める。SX0905から白磁が出土。SE0901, SD0909 掘削継続。
4月28日 5月8日まで大型連休のため休業。
5月9日 降雨のため、作業中止。
5月10日 降雨のため、作業中止。
5月11日 午後から、水抜き作業実施。
5月12日 SD0902, SD0909 掘削継続。SD0917 掘削。SH0918/19/20 認定。周壁溝掘削。SD0921は深いことが判明。SX0905の礫出土状況図（1段目）作成。
5月13日 SD0902 完掘。SD0924, SD0926 掘削開始。両者とも南へ派生し、SD0909に接続していることを確認する。ピット掘削開始。SD0928, SD0929 掘削。
5月16日 降雨のため、作業中止。

5月17日 午前、水抜き作業。ビット掘削継続。SD0925、SD0926、SH0910/11 周壁溝完掘。SH0930/31/32 埋土撤去開始。

5月18日 ビット、SH0930/31/32 埋土掘削継続。SD0908 完掘。SD0933 掘削着手。SH0927 南辺平段開始。

5月19日 SH0930/31/32 埋土掘削継続。SH0939 からは礫が出土する。SX0905 の2段目を掘削開始。SD0936、SD0937 完掘。

5月20日 SH0930/31/32 埋土及び周壁溝掘削。この周辺に堅穴建物6棟以上建つと理解する。SD0940、SD0941、SD0942 完掘。SK0943 掘削。礫出土し、SK0939 と同様の構造をとる。土師器皿出土。SX0905 礫出土状況図(2段目)作成。

5月23日 SD0902、SD0909、SD0940 の出土状況の撮影後、遺物取り上げ。SE0901 の3層目まで掘削完了。SH0932 埋土掘削完了。SX0905 礫出土状況図(3段目)作成。

5月24日 SD0909 の遺物取り上げ終了。SH0927、SD0936 完掘。SH0935 周壁溝掘削。西側から掘り残していたビットを完掘していく。

5月25日 降雨のため、作業中止。

5月26日 降雨のため、作業中止。

5月27日 中央北区の検出作業に着手。中世後半、木田城跡に係る道路状遺構を確認。本日、基準点のレベルが間違っていることが発見。KBM1 が35.920 m→36.391 mに訂正。KBM3 を35.066 →37.239 mに訂正。KBM2 は測定値なし→37.227 mとする。

5月30日 中央北区の検出作業継続。SH0930、SH0935 周壁溝完掘。

5月31日 中央北区の遺構検出状況の写真撮影。SD1047、SH1030/31、SH0932、SH0935 周壁溝等完掘。中央北區でSD0944 とSD0945 を認定。道路側溝と想定する。

6月1日 SH0931/32/33 内ビット掘削。現代溝⑤完掘。現代溝④掘削着手。SD0945、SH0946、SH0949 等掘削。

6月2日 SH0930/31/32 内ビット掘削継続。SD0945 完掘。SK0952、SD0948、SH0951 等掘削開始。

6月3日 都合により、作業中止。

6月6日 SD0948 完掘。現代溝④以西のビットを完掘する。SH0930/31/32 北東区の埋土の掘削開始。SK0952 完掘。SD0940 はSH0930/31/32 の北東隅に接続しそうで、排水溝の可能性を考える。

6月7日 SH0930/31/32 北東区埋土掘削完了。SK0952 出土遺物取り上げ。SH0941 周壁溝完掘。午後から降雨のため、作業中止。

6月8日 SD0954 とは別の溝としてSD0955 を認識して掘削する。SD0954 はSD0955 に重複すると理解する。SH0930/31/32 北東区のビットと周壁溝の掘削に着手する。SD0941 はSH0932 の南辺中央土坑からのびることが判明する。中央北区の南東隅で検出した大きなビットは掘立柱建物に該当しそうと考える。

6月9日 降雨のため、作業中止。

6月10日 北西区の全体清掃後、各種完掘遺構の写真撮影を実施する。

6月13日 降雨のため、作業中止。

6月14日 SD0955 完掘。SD0956、SD0957 掘削着手。SD0955 の中央に東側へやや膨れた所から人頭大の礫が出土するので、土壇墓の可能性がでる。

6月15日 SD0956、SD0957、SD0959 完掘。SX09581 段下げ完了。SH0960 西半の掘削着手。焼土ブロックや炭が比較

多く入っているため、焼土住居の可能性も考慮する。SD0961 掘削。

6月16日 都合により、作業中止。

6月17日 中央北区の北西隅からビットを完掘していく。SH0960 西半の掘削継続。ようやく床面が顔を出す。SH0962/63 埋土掘削着手。

6月20日 ビット掘削継続。SD0964 掘削着手。SH0960 西半の床面まで完掘する。CM50 区以南のSD0959-SD0945 間に黒色土が広がっているが、赤生土器から中世の羽釜までの遺物が出土する。中世後半の整地層かと理解する。

6月22日 SK0953 完掘。SH0930/31/32 南東区の埋土掘削開始。SH0963 埋土掘削完了。SD0959 完掘後、SD0964 着手。

6月23日 SH0966 北半埋土掘削開始。SH0930/31/32 南東区の埋土掘削完了。SH0960 南東区の埋土掘削に着手。SD0964 掘削継続。

6月24日 SH0960 北東区の埋土掘削にも着手。南東区も継続。SH0966 掘削中、より新しいと判断できるSH0967 を認識し、遺物を分けて取り上げる(後に取り消してSH0966 に統合する)。

SH0942、SH0949、SH0962 等の周壁溝を掘削。SD0964 掘削継続。

6月27日 SH0966/67 北半完掘後、南半へ移動。SH0960 埋土掘削完了。貼り床があり、2 棟重複していると判断する。SD0964、SD0968、SD0969 等完掘。

6月28日 降雨のため、作業中止。

6月29日 中央北区のビットをほぼ掘削完了する。SH0967 南半掘削継続。SH0963 東辺周壁溝完掘。市内の教員スパイラル研修受け入れ(1名)。

6月30日 SD0970、SH0967 南東区埋土完掘。SH0947 南側のビット等を掘削。

7月1日 午前中は水抜き作業を実施。午後から、各種連発状況の写真撮影。ビット、SD0963 北辺周壁溝等の掘削を再開する。

7月4日 SH0966 西辺周壁溝から山中式の高杯出土。SH0960 内ビットの掘削着手。SX0958 にて2段目の礫まで検出。SH0962、SH0963、SH0972 内のビット及び周壁溝を掘削。

7月5日 SH0966 周壁溝完掘後、SD0975 掘削開始。SH0973 周壁溝及びビット完掘。SH0960、SH0966/67 内の周壁溝及びビットは掘削を継続する。SX0958 の2段目礫出土状況の写真撮影。

7月6日 SD0972 北半を完掘する。SH0960、SH0966/67 内の周壁溝及びビット掘削継続。SH0974 埋土撤去。SH0974 は円形建物になることが判明する。SH0962/63 北側埋土掘削開始。

7月7日 都合のため、作業中止。

7月8日 SH0967 南辺中央土坑掘削。山中式の高杯が出土する。SH0960 内のビット及び周壁溝の掘削継続。SH0974 埋土、周壁溝掘削継続。

7月11日 重機を搬入し、北東区及び南西区の表土除去を開始する。表土除去が終了した範囲から、遺構検出を開始する。

7月12日 降雨のため、作業中止。

7月13日 降雨のため、作業中止。

7月14日 表土除去完了。南西区、中央南区、北東区の遺構検出。

7月15日 遺構検出継続。南西区から中央南区にかけてグリッドを設定する。

7月19日 遺構検出継続。北東区の検出は終了。北東区のグリッドを設定する。

7月20日 南東区の遺構検出も追加して検出作業を継続する。南西区の検出は終了する。

Tab.1 磐城山遺跡の発掘調査履歴

※ゴシック体は本書に掲載

調査 回数	調査要因	調査 面積 (㎡)	調査期間	調査担当	報告書 (未完の場合は概要報告書)	調査概要	遺構 番号
プレ 1次	道路建設 (県道)	1,100	1993/5/11 ～ 1993/8/6	森川常厚	1994『磐城山遺跡発掘調査報告書』 三重県埋蔵文化財センター	中世城館(西側に隣接する本田城跡)に係る堀状遺構を確認する。 一部、竪穴建物や中世の土坑を検出する。	01～
第1次	道路建設	3,000	1997/9/12 ～ 1998/2/23	杉立正徳	1998『Ⅱ.6.磐城山遺跡』 『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報』 V 鈴鹿市教育委員会	丘陵端部を横断する環状の溝(山中式)を検出し、その西側で竪穴建物等が多数確認される。	01～
第2次	道路建設	2,000	1998/8/20 ～ 1999/1/22	岡田雅幸	2000『V.7.磐城山遺跡(2次)』 『鈴鹿市考古博物館年報』第1号	弥生時代後期と古墳時代後期の竪穴建物を多数確認。古代の溝や掘立柱建物も確認される。柱穴から水品出土。	01～
第3次	農地改良	740	2010/6/21 ～ 2011/3/31	田部剛士	2011『IV.6.磐城山遺跡(第3次)』 『鈴鹿市考古博物館年報』第13号	弥生時代後期と古墳時代後期の竪穴建物を多数確認。古代の溝が南北にのびることを確認。	0301～
第4次	農地改良	315	2011/4/4 ～ 2011/10/2	田部剛士	2014『磐城山遺跡第4・5次発掘調査報告書』 鈴鹿市考古博物館	竪穴建物や弥生時代後期初頭(八王子宮式)まで遡ることが確認される。	0401～
第5次	農地改良	620	2012/6/25 ～ 2013/1/11	田部剛士	2014『磐城山遺跡第4・5次発掘調査報告書』 鈴鹿市考古博物館	丘陵北東端では遺構の残りが悪いものの、古墳時代後期の竪穴建物が多くなる。また、1次調査の環濠は丘陵北端では確認されない。	0501～
第6次	農地改良	325	2013/8/20 ～ 2014/3/25	田部剛士	2015『磐城山遺跡(第6・7次)発掘調査報告書』 鈴鹿市考古博物館	弥生時代を中心とした竪穴建物に加え、中世の土壇墓2基が確認された。	0601～
第7次	農地改良	650	2014/4/2～ 2014/8/22	田部剛士	2015『磐城山遺跡(第6・7次)発掘調査報告書』 鈴鹿市考古博物館	弥生時代・古墳時代の竪穴建物と共に、古代の直線的な溝(区画溝)を確認した。	0701～
第7・2次	農地改良	87	2015/2/6 ～ 2015/3/18	田部剛士	2018『磐城山遺跡(第7・2・8・8・2次)発掘調査報告書』 鈴鹿市	弥生時代後期の竪穴建物とともに掘立柱建物を確認した。	
第8次	農地改良	426	2015/6/2 ～ 2015/11/5	田部剛士	2018『磐城山遺跡(第7・2・8・8・2次)発掘調査報告書』 鈴鹿市	弥生時代後期の竪穴建物の他、ほぼ同じ場所で見出された建物(倉庫)が8棟建て替えられていることを確認した。	0801～
第8・2次	農地改良	220	2016/1/25 ～ 2016/3/25	田部剛士	2018『磐城山遺跡(第7・2・8・8・2次)発掘調査報告書』 鈴鹿市	第8次調査区から続く、竪穴建物や掘立柱建物等の延長を確認した。	
第9次	農地改良	750	2016/4/11 ～ 2017/3/28	田部剛士	2018『磐城山遺跡(第9次)』 『鈴鹿市考古博物館年報』第19号	東西11.0m、南北9.2mの県下最大級の竪穴建物(弥生時代後期)を検出した他、6～7世紀の根巻き石を伴う掘立柱建物等を確認した。	0901～
第10次	農地改良	700	2017/5/22 ～ 2018/3/30	田部剛士	2019『磐城山遺跡(第10次)』 『鈴鹿市考古博物館年報』第20号	弥生時代後期の竪穴建物多数に加え、中世後半の道路や方形竪穴を検出した。	1001～
第11次	農地改良	516	2018/4/10 ～ 2019/3/29	田部剛士	2020『磐城山遺跡(第10次)』 『鈴鹿市考古博物館年報』第21号	円形(五角形)の竪穴建物や他の竪穴建物より下位で検出した。また、中世後半の門らしき遺構を確認した。古代の直線的な溝は検出されなかった。	1101～
第12次	農地改良	225	2019/5/7 ～ 2019/11/29	田部剛士	2021『磐城山遺跡(第10次)』 『鈴鹿市考古博物館年報』第22号掲載予定	弥生時代後期の竪穴建物を多数検出した。その内1棟は五角形を呈する。	1201～
第13次	農地改良	198	2019/7/10 ～ 2020/3/24	田部剛士	2021『磐城山遺跡(第10次)』 『鈴鹿市考古博物館年報』第22号掲載予定	弥生時代の竪穴建物に加え、中世の井戸や土坑を検出した。土坑には溝が付随するものや壁が壊れて、石組を持つもの等がある。	1301～
	合計	11,872					

7月21日 南東区の検出も終了。神戸中学校郷土史部発掘体験(7名)。市内の教員スパイラル研修受け入れ(1名)。遺構掘削再開。SH0974 周壁溝掘削。SH0960 北西区内の土坑掘削。縄文土器が出土する。

7月22日 都合により、作業中止。

7月25日 都合により、作業中止。

7月26日 降雨のため、作業中止。

7月27日 南東区検出完了。SH0960内ビット掘削継続。SH0966内ビット掘削開始。SH0974内ビット掘削着手。

7月28日 SH0974内ビット完掘。SH0960内ビット、SH0978等掘削継続。教員スパイラル研修受け入れ(5名)。

7月29日 SX0958掘削再開。検出当初よりも方形となる。SH0978、SH0947埋土掘削完了後、内部ビット等掘削着手。

7月30日 発掘体験会開催。午前58名、午後35名の参加あり。

8月1日 SH0978内ビット完掘。全体清掃開始。

8月2日 全体清掃完了後、写真撮影。SX095周辺ビット掘削完了。SK0939、SK0943礫撤去後、下部を掘削する。

8月3日 都合により、作業員休み。教員スパイラル研修受け入れ(1名)。

8月4日 SH0960南東拡張。床面までほぼ完了。SD0986掘削。白磁出土。北東区の東端の現代溝⑤掘削着手。

8月5日 SD0986掘削継続。現代溝⑥、⑦掘削完了。SH0962、SH0988埋土掘削開始。教員スパイラル研修(4名)と博物館実習生(1名)受け入れ。

8月8日 SD0986完掘。SH0987内ビット掘削継続。SH0988、SH0962埋土掘削後、ビット掘削に着手。

8月9日 SH0987、SH0962内ビット及び周壁溝の掘削継続。SX0958露出土状況(3段目)の図化作業。

8月10日 SH0987内ビット等掘削完了。SX0989、SX0890、SX0891掘削。いずれも掘削のようでは、明確な遺構ではないと判断。SH0962周壁溝掘削中、2棟が重複していることが判明。外側が新しく、内側が古い。SH0994/95/96の西半分の掘削に着手。教員スパイラル研修(3名)受け入れ。三重県埋蔵文化財センター宮原佑治・渡辺和仁氏来路。指導。

8月11日～8月14日 盆休み。

8月15日 作業員2名にて、ブルーシートの養生や土嚢袋の直し等、現場の整理・整頓を行う。

8月16日 作業員2名にて、手ガリ等発掘用具の手入れを実施する。

8月17日 調査再開。SH0962、SH0987内ビット、溝等を掘削。SH0996西半、SH0997埋土掘削着手。

8月18日 SH0962、SH0978内貼床撤去後、内部ビット掘削。SH0978が最も古く、次いでSH0987-81、最後にSH0960/80と新しくなると判断する。

8月19日 SH0987内ビット等完掘。SH0994/95/96南東区埋土掘削開始。SB0998/99認定し、掘削に着手する。

8月22日 SH0987とSH0994/95/96までの間のビット群を掘削。

8月23日 SH0987とSH0994/95/96間のビット群を完掘。SH09104の上面検出のビットの掘削に着手。SH0994/95/96の北東区埋土掘削開始。併せて、SH0994/95/96西半のビット、周壁溝掘削。SH09101/102内ビット掘削継続。

8月24日～8月29日 降雨のため、作業中止。

8月30日 水抜き作業実施。SH0994/95内ビット、SH09104

上ビット、SH09101内ビット等掘削継続。SD09100掘削。

8月31日 SH09104上面検出の溝掘削開始後、SH0987の排水溝(SD09106)と判断される。SH09107～SH09109を認定。いずれもSH09104上面で確認され、削平が著しく詳細不明である。SH0994/95/96内ビット掘削継続。SH0997内ビット完掘。

9月1日 南東区再検出。SK09110、SD09111掘削開始。SH0994/95/96内ビット群、周壁溝等掘削継続。SH09107～SH09109完掘。

9月2日 SD09106、SH0994/95/96内ビット、SH09104上ビット掘削継続。南東区掘削撤去開始。

9月5日 都合により、作業中止。

9月6日 SD09100、SH09104上ビット掘削継続。

9月7日 SH09104上ビット再検出後、再掘削。SD09100、SD09106完掘。SK09110の南西にもう一つ別の土坑があると判断して掘削を進めるが、同一の土坑となる。方形で箱形となるため、弥生時代の土壌層の可能性を推定する。

9月8日 降雨のため、作業中止。

9月9日 午前中、水抜き作業実施。SH09104上にSH09118を認定。掘削後、清掃してSH09104検出状況として写真撮影実施。併せて、露出土の掘立柱建物SB09126/127の写真撮影。

9月12日 大型竪穴建物であるSH09104の埋土の掘削に着手する。SD09101、SD09111、SH09102周壁溝等を完掘。KBM4新設し、レベル移動(KBM-36.959m)。

9月13日 降雨のため、作業中止。

9月14日 水抜き作業実施。SH09104埋土掘削継続。南東区の残りのビット、溝の掘削継続。

9月15日 SH09104埋土、SH09102内ビット及び周壁溝掘削継続。SD09119掘削開始。

9月16日 SH09104埋土掘削継続。SH09102内ビット及び周壁溝完掘。SH0962埋土完掘後、ビット掘削開始。SK09115掘削再開。

9月19日～10月10日 降雨続きのため、作業中止。

10月11日 午前、水抜き作業実施。午後から、遺構掘削再開。SH0960/80、SH0966/67、SH0994/95/96等のベルト撤去開始。SX0958露出土状況(4段目)図化作業。

10月12日 SH0966/67、SH0994/95/96ベルト撤去完了後、下部検出のビット等掘削着手。SH0960/80ベルト撤去継続。SK09115、SH0962周壁溝完掘。三重県埋蔵文化財センター石井智大氏来路。指導。

10月13日 SH09104内埋土完掘。壁立式の竪穴になりそうだが、東半分の調査時(SH0555)には発見できていないため悩む。SX0958の5段目掘削。SH0960/80ベルト撤去完了。SH09104内にあるSD09106、SD09111等はSH09104上位の溝であることを再確認する。

10月14日 SH0960/80ベルト下部のビット掘削。SH0960/80も壁立式になることが判明。SH0987の南側に広がる竪穴建物を確認。SH0993とする。砥石出土。SH0930/31/32ベルト撤去後、下部のビット等を掘削。SK09777北半を半掘。

10月17日 降雨のため、作業中止。

10月18日 水抜き作業。SH09104内、SD09111、SD09125/126等の遺物取り上げ。SX0958の5段目の露出土状況の図化。SH0993南辺周壁溝完掘。SH0993からの排水溝SD09125掘削。接続部の上部は黄褐色であったため暗黒であった可能性を考える。

10月19日 SH09104内東西ベルト以北のSD09111、SD09125/126完掘。北東区全体清掃開始。

10月20日 北東区全体清掃継続。SH09104 内東西ベルト以南のSD09111、SD09125/126 完掘。SK0977 完掘。縄文土器出土。

10月24日 全体清掃後、各種完掘写真の撮影。

10月25日 掘削は一時中断し、発掘用具整理。掘削終了した範囲の遺構平面図の作成を開始する。平面図 No.4・6 完成。図化の済んだ範囲から、レベリング作業実施。

10月26日 都合のため、作業中止。

10月27日 遺構平面図の作成継続。平面図 No.11 完成。

10月28日 遺構平面図の作成継続。午後から降雨のため、作業中止。

10月31日 都合のため、作業中止。

11月1日 降雨のため、作業中止。

11月2日 遺構平面図の作成継続。平面図 No.8・9 完成。

11月4日 遺構平面図の作成継続。平面図 No.13 完成。

11月7日 遺構平面図の作成継続。平面図 No.14 完成。

11月8日 遺構平面図の作成継続。平面図 No.15 完成。レベリング作業継続。午後から降雨のため、作業中止。

11月9日 遺構平面図の作成継続。平面図 No.12・16 完成。レベリング作業継続。

11月10日 遺構平面図の作成継続。平面図 No.17・22・23 完成。

11月11日～11月24日 一時、作業中止。

11月25日 遺構平面図の作成継続。平面図 No.18 完成。レベリング作業継続。

11月28日 降雨のため、作業中止。

11月29日 SH09104 土層断面図作成。

12月1日 降雨のため、作業中止。

12月2日 SH09104 東西ベルト撤去。レベリング作業継続。

12月7日 レベリング作業継続。

12月8日 遺構平面図の作成継続。平面図 No.19・20 完成。

12月9日 レベリング作業継続。碑の下で未掘削だった部位を全て完掘する。本日に、図化作業等の記録を終了。一時、現地調査を中断する。

2月1日 発掘調査再開。発掘用具搬入。ブルーシート、土糞袋等の現場整備。SH09104 床面を再検出。北辺、西辺の周壁溝の掘削に着手。

2月2日 SH09104 周壁溝掘削継続。同南西、北西主柱穴の半截に着手する。床面から30cm程度下げても基底面確認できず。

2月3日 SH09104 周壁溝完掘。同床面検出ビットの掘削に着手。南西主柱穴P923は70cmまで掘り下げても基底面を確認できない。

2月6日 強風で崖付近のため、SH09104の作業は行わないこととする。かわりに南東区の検出に着手する。堅穴建物2～3棟と溝、柱穴程度と判断する。

2月7日 都合により、作業中止。

2月8日 SH09104内ビット等掘削再開。

2月9日 降雪のため、作業中止。

2月10日 SH09104内ビット等掘削。主柱穴2ヶ所を除き、他は全て完了する。

2月13日 SH09104主柱穴掘削完了。南東区の掘削に着手する。SH09135 埋土掘削開始。

2月14日 SH09104 全体清掃後、完掘状況の写真撮影。

2月15日 SH09135埋土完掘。2棟重複していることを確認し、下部をSH09136とする。SH09135/136 周辺には柱穴が並ぶので、掘立建物等の可能性を考える。SK09137を掘削。空き缶等が含まれており、現代の攪乱と判明。

2月16日 SH09135/136 床面清掃後、写真撮影。内部ビットの掘削に着手。

2月17日 SH09135/136 内部ビット、南東区の他のビットを掘削。午後から、降雨のため作業中止。

2月20日 皇學館大学渡辺寛名誉教授、三重大学小澤毅教授、三重県教育委員会事務局竹田恵次副課長による現地指導。SB09126/127は形状から律令期ではなく、その前後となる。出土遺物から、その前に位置づけられるか、と助言される。

2月21日 降雪のため、作業中止。

2月22日 SH09135/136 周辺ビット掘削継続。SD09119 掘削着手。

2月23日 都合により、作業中止。

2月24日 南東区水抜き後、SH09135/136 周壁溝掘削。SH09140 上面の攪乱、及び現代溝を撤去。

2月27日 SH09135/136の下部にもう1棟あることが判明。SH09139とする。SH09140 埋土掘削着手。

2月28日 SH09140 埋土掘削継続。SH09135/136/139 周壁溝完掘。

3月1日 SH09140 埋土掘削継続。東端の現代溝以東のビット掘削着手。

3月2日 降雨のため、作業中止。

3月3日 SH09140 埋土掘削継続。SH09141かと推定していた遺構は存在しないことが判明。SH09140 埋土と理解できる。

3月6日 降雨のため、作業中止。

3月7日 SH09140 埋土掘削完了後、内部のビット及び周壁溝掘削着手。SH09135/136 ベルト撤去。

3月8日 SH09140内ビット掘削継続。SD09111、SH09135/136内ビット完掘。

3月9日 SH09140内ビット、周壁溝掘削継続。

3月10日 都合により、作業中止。

3月13日 SH09140内ビット、周壁溝掘削完了。

3月14日 SH09135/136 内の掘り残しを完掘する。北東区の礎の下部の掘削に着手する。

3月15日 降雨のため、作業中止。

3月16日 全体清掃開始。SH09140 ベルト撤去後、下部のビット及び周壁溝を完掘。写真撮影。

3月17日 都合により、作業中止。

3月21日 降雨のため、作業中止。

3月22日 水抜き作業実施。全体清掃を開始する。平面図作成開始。平面図 No.23・24 完成。

3月23日 全体清掃後、写真撮影。午後から南東区拡張の西側ビットを掘削。拡張範囲は中世の溝の東側までとする。平面図作成継続。平面図 No.21・25・26 完成。

3月24日 レベリング作業実施。

3月27日 レベリング作業完了。

3月28日 平面図 No.19・20 加筆後、レベリング作業実施。本日に、第9次調査の全てを終了する。

第10次調査(700mL、平成29年5月22日～平成30年3月30日)

5月22日 東区から遺構検出に着手する。3条の道路状遺構を確認する。

5月23日 東区検出状況の写真撮影後、遺構掘削開始。3条の道路は東が古く、西へ順に新しくなることを確認し、北側からその側溝の掘削に着手する。最も古い道路(SC1009)には、一

部側溝以外の埋土も観察されたが5cm程度と浅かった。波板状凹凸痕は検出できず。現代溝①掘削開始。

5月24日 都合により、作業中止。

5月25日 都合により、作業中止。

5月26日 降雨のため、作業中止。

5月29日 道路側溝及び現代溝①掘削継続。南端に東西方向にのびる溝(SD1010)を掘削完了。

5月30日 道路側溝の土層断面図作成後、全てを完掘する。道路から東側にあるたくさんのビット群を掘削開始。

5月31日 道路部分の全体清掃後、写真撮影。東側のビット群の掘削継続。

6月1日 東側のビット群の掘削継続。

6月2日 都合により、作業中止。

6月5日 東側のビット群の掘削継続。

6月6日 東側のビット群の掘削継続。明確に掘立柱等になるものは確認できない。

6月7日 降雨のため、作業中止。

6月8日 降雨のため、作業中止。

6月9日 東側のビット群の掘削継続。SH1011とSH1012を認定し、周壁溝等の掘削を開始する。

6月12日 ビット群の掘削継続。第9次調査区から続く円形建物をSH1014として掘削開始。SK1013は木根のようである。SH1015は床面が深まで大きく削平されており、道路状遺構の下位に広がる堅穴のようだと判断する。SH1016も埋土は5cm程度と浅い。

6月13日 SH1014埋土完掘後、内部ビット、周壁溝等の掘削開始。SH1017はSH1016よりも古く、SD1018はSH1016よりも新しいと認識する。最も西側の道路側溝よりも東側のビットの掘削完了する。

6月14日 ビット掘削継続。SH1014完掘。内部の南中央に土坑があり、そこから排水溝がのびることが判明する。SD1018完掘。SH1016/17内ビット掘削着手。一ノ宮小学校教員研修受け入れ(5名)。

6月15日 都合により、作業中止。

6月16日 SK1020認定。第1次調査区の埋め戻し土も確認し、わずかに調査区が重複していることを確認する。SH1016/17内ビット掘削継続。SH1019とSH1021の掘削を完了する。

6月19日 SH1011、SH1016/17内ビット及び周辺のビットを掘削継続。

6月20日 SH1011内及びその北側のビットを掘削継続。SD1022掘削開始。SD1022は、SH1016/17の北東端から派生し、SH1011の下部を抜けてのびていることを確認する。

6月21日 降雨のため、作業中止。

6月22日 都合により、作業中止。

6月23日 SH1011内及びビット、SD1022の掘削を継続する。SD1023/24掘削開始。

6月26日 水抜き作業後、ビット掘削継続。

6月27日 中区検出作業後、写真撮影。東区のビットの残り、SD1023、SD1025等掘削。

6月28日 降雨のため、作業中止。

6月29日 降雨のため、作業中止。

6月30日 降雨のため、作業中止。

7月3日 水抜き作業後、SD1022及び周辺ビット完掘。中区の遺構掘削に着手する。南端の第1次調査区の埋め戻し土を撤去。その下位部で調査済みのビットを複数確認する。ただし、その範囲においてにぶい黄褐色を呈するビットは未掘削であることが判

明する。おそらく明確な黒色土の遺構しか掘削していないため、第1次調査区と第3次調査区以降の遺構密度の違いとなっているのだと推測する。SH1026の南平から掘削に着手する。

7月4日 台風3号接近のため、午前の作業のみとする。南端の第1次調査区の埋め戻し土の撤去を継続。SD1010の延長を掘削。

7月5日 降雨のため、作業中止。

7月6日 SD1010、SX1028完掘。周辺ビット掘削。SH1026埋土掘削。

7月7日 SH1026埋土掘削継続。SH1026の基底面は平坦とならず、堅穴建物でない可能性が高くなる。座標移設。

7月10日 SH1026内ビット掘削開始。時期調査区の草刈作業実施。

7月11日 発掘用具、ブルーシート等の保管場所を移動させる。草刈作業継続。

7月12日 都合により、作業中止。

7月13日 草刈及び撤出作業継続。

7月14日 降雨のため、1時間の作業のみ実施。

7月18日 重機(0.1m)を搬入し、西区から表土除去を行う。併せて遺構検出作業開始。

7月19日 西区から北へ表土除去を進めていく。作業員は西区の遺構検出継続。土壌腐や井戸らしき大型土坑を1ヶ所確認する。7月20日 表土除去完了。北西区まで遺構検出完了。北区の遺構検出に着手する。

7月21日 都合により、作業中止。

7月24日 北区まで遺構検出完了後、写真撮影。調査グリッド設定。作業員は中区の遺構掘削に戻り、ビット掘削を再開する。7月25日 グリッド設定継続。中区のビットや周壁溝等の掘削継続。教員によるスパイラル研修受け入れ(3名)。

7月26日 都合により、作業中止。

7月27日 降雨のため、作業中止。

7月28日 休憩テント等移設。ブルーシート撤去後、水抜き作業実施。

7月29日 発掘体験開催。午前50名、午後50名の参加あり。

7月31日 都合により、作業中止。

8月1日 SH1031、SH1032、SH1033/34周壁溝、現代溝②及び③掘削開始。

8月2日 現代溝②完掘。同③は継続中。SH1026埋土完掘。SH1033周壁溝完掘後、内部ビット掘削開始。SD1025完掘。SD1025はSH1033の南辺中央土坑からのびる溝だと判明する。スパイラル研修受け入れ(3名)。

8月3日 SH1031、SH1032/33内ビットをほぼ掘削終了する。SH1026内ビットの北側を掘削開始。SD1037、SX1038完掘。スパイラル研修受け入れ(2名)。

8月4日 台風5号接近のため、テントやブルーシート等の対策を行う。

8月7・8日 台風5号のため、作業中止。

8月9日～15日 台風のため、予定を1日繰り上げ9日から盆休みとする。

8月16日 降雨のため、作業中止。

8月17日 水抜きやブルーシート等の復旧作業を行う。中区北半を再検出後、SH1031、SH1040、SD1039、SD1041、現代溝③等を完掘。

8月18日 降雨のため、作業中止。

8月21日 降雨予報のため、作業員1名にて水抜き実施。

8月22日 水抜き作業実施。SH1032/33北辺周壁溝上の

ビット掘削。SD1043, SD1044, SD1045 完掘。SD1045 は SH1031 の排水溝の可能性を考える。SH1042 埋土撤去後、周壁溝掘削着手。午後から、西区の遺構掘削を開始する。南端の第1次調査区の埋め戻し土撤去開始。

8月23日 都合により、作業中止。

8月24日 SH1026 ベルト下部を除き、中区のビットを完掘する。SH1026 土層断面図作成後、ベルト撤去開始。SD1046 認定。SD1050 とともに北へのびていくため、道路状遺構の可能性を考える。SX1047 掘削開始。SD1010 の西区部分を掘削着手。

8月25日 SH1026 としてきたものは、不整形となり堅穴建物ではなく大型土坑と理解し、以後 SX1026 と改める。SH1051, SD1050 掘削着手。SD1048, SD1010 完掘。SD1010 は北へ折れ曲がり SD1054 とつながることが判明する。つまり、SC1009 とした道路状遺構は第10次調査区と第1次調査区の間で西へ曲がり、第10次調査区の西端で再び北へ曲がる (SC1047) ことが確認された。インターン受け入れ (2名)。

8月28日 雨天のため、作業中止。

8月29～31日 都合により、作業中止。

9月1日 本日から別の現場へ派遣するため、作業員2名減となる。しばらく5名/日の体制となる。SX1047, SD1050 掘削継続。SC1047 の下部で検出したビットを南から掘削開始。SX1026 下部のビット掘削着手。

9月4日 SH1026 ベルト撤去完了。SD1056 完掘。SC1047 下部検出ビット、溝の掘削継続。SH1051 埋土掘削着手。

9月5日 都合により、作業中止。

9月6日 降雨のため、作業中止。

9月7日 降雨のため、作業中止。

9月8日 SX1047, SD1050 掘削継続。中区のベルト下部のビット群を掘削完了。SH1051 埋土掘削完了後、内部ビットの掘削に着手。

9月11日 SX1047, SD1048, SD1050, SD1046 等掘削継続。SH1051 内ビット完掘後、周壁溝掘削着手。SK1058 完掘。浅いが方形隅丸で、これまで土壌層としてきたものに類似する。SD1057 認定。SC1047 と平行するので、区画の内側の溝ではないかと推測する。

9月12日 降雨のため、作業中止。

9月13日 都合のため、作業中止。

9月14日 西区の北東全体を再検出。SH1051 完掘。西区内における SD1049, SD1050 の掘削は完了する。下部検出ビット掘削継続。白鳥中学校職場体験受け入れ (5名)。

9月15日 SD1061～SD1066 までの掘削を完了。いずれも不鮮明で、理解し難かった。SH1065 周壁溝掘削着手。SD1054 完掘後、下部検出ビット掘削継続。

9月19日 台風後の水抜き実施。SC1047 土層断面図作成後、ベルト撤去開始。SD1059 掘削継続。SD1068 完掘。

9月20日 西区のビット掘削。SC1047 ベルト撤去継続。SD1059 完掘。

9月21日 SH1069, SD1072, SH1070 上面検出ビット、SH1065 内ビット掘削開始。SD1061 は SH1065 の下位で東へ折れ曲がり堅穴建物の周壁溝となることが判明する。そのため、SD1061 や SX1067 としていたものを併せて SH1073 とする。

9月22日 SH1070 上面ビット掘削完了後、埋土の撤去開始。その他のビット掘削継続。

9月25日 都合により、作業中止。

9月26日 降雨のため、作業中止。

9月27日 都合により、作業中止。

9月28日 降雨のため、作業中止。

9月29日 水抜き作業実施。SH1070 埋土完掘後、内部ビット及び周壁溝の掘削に着手。SD1077, SD1078, SX1079 掘削に着手。SD1077 には遺物が多い。

10月20日 台風21号接近のため、テントやブルーシート等の対策を行う。

10月24日 本日から作業員を2名追加する。水抜き作業実施。SH1070 貼床層撤去後、下部検出の SD1072 を確認する。SH1070 周壁溝及び南辺中央土坑掘削開始。SH1080 周壁溝完掘。

10月25日 降雨のため、作業中止。

10月26日 水抜き作業実施。北西区東半分を再検出後、写真撮影。北西区の遺構掘削を開始する。SD1050 等を掘削。

10月27日 現代溝③掘削に着手。SK1081 完掘後、SH1069 周壁溝掘削着手。SD1050 完掘後、SD1049 着手。西区内の SH1070 内ビット及び周壁溝、SD1082 掘削完了。

10月30日 台風22号の影響のため、作業中止。

10月31日 水抜き作業実施。北西区の SH1070 埋土掘削開始。SD1054, SD1049 掘削。SD1083 完掘。

11月1日 SD1085 西側から掘削着手。SH1070 及び SH1080 の埋土撤去後、内部ビット及び周壁溝掘削開始。SD1054, SD1087 完掘。ビット群掘削開始。SK1081 の礫出土状況図作成。

11月2日 SC1047 土層断面図作成後、ベルト撤去。SH1080 は壁柱穴が付属することを確認。SH1069 の下部にもう1棟の建物があることを確認する。SD1088 完掘。SH1070 土層断面図作成。

11月6日 ビット群掘削継続。SH1089 内ビット掘削着手。SH1090/91/92/93 を認定。SH1093 がよく、順に新しくなると判断する。SD1094 完掘。羽釜が出たので、中世後半と理解する。

11月7日 SH1090/91/92/93 内ビット掘削。SH1080 のベルト撤去。SD1085 完掘。

11月8日 降雨のため、作業中止。

11月9日 SH1070 内ビット、SH1096 南辺周壁溝等掘削完了。SD1097, SD1098 掘削着手。神戸中学校職場体験受け入れ (5名)。

11月10日 SX10100 完掘。埋土等から中世の土坑 (墓か) として可。SH1099 埋土完掘。

11月13日 SH1090/91/92/93 等周壁溝掘削。ビット掘削継続。本日にて、北西区を完掘する。

11月14日 降雨のため、作業中止。

11月15日 都合のため、作業中止。

11月16日 北区の検出を開始後、全体清掃。

11月17日 北区の検出状況の写真撮影後、遺構掘削に着手する。SX10102, ビット群掘削開始。SD1054 完掘。

11月20日 現代溝③掘削開始。SH10106, SH10107 埋土撤去開始。SX10100, SX10102, SD10103, SD10109 等完掘。

11月21日 SH10107 埋土撤去すると、西辺に2条の周壁溝が確認できる。外側の新しい方を SH10107 とし、内側の古い方を SH10118 とする。SH10111, SH10116 埋土, SH10110, SH10113/114, SH10115 周壁溝等掘削開始。

11月22日 SH10107 埋土撤去完了後、内部ビット掘削開始。SH10111 埋土掘削は SH10106以西まで完了。SH10106 の東側の掘削に着手。地元の河曲公民館行事として発掘体験受け入れ (16名)。

11月24日 都合により、作業中止。

11月27日 SH10106 完掘状況の写真撮影。SH10107/118 周壁溝掘削。SK10119 完掘。SH10106 周辺ビット掘削着手。

11月28日 SH10111埋土撤去完了後、周壁溝の掘削に着手。SH10107/118の南東及び北西区画の掘削にも着手する。SH10113/114/115 検出。SH10120 完掘

11月29日 SH10111の内部ビット及び周壁溝掘削継続。SH107/118掘削継続。SB10123(2×2間)を認定する。

11月30日 SH10107/118の内部ビット及び周壁溝掘削。SD10126、D10127掘削開始。SH10111内ビット完掘。

12月1日 都合により、作業中止。

12月4日 SH10107/118土層断面図作成後、ベルト撤去開始。現代溝②の残土撤去完了。SH10106東辺周壁溝完掘。SD10124はSH10111の排水溝としてよい事を確認する。SH10115南辺周壁溝及び中央土坑完掘。

12月5日 SH10107/118ベルト撤去完了後、下部道構の掘削に着手。CH・C42区内のSD1098/117掘削。SH10115、SH10116周壁溝完掘。内部ビットの掘削着手。SH10115南辺周壁溝掘削後、SH10113の南辺周壁溝掘削に着手。SD10128、SD10129、SD10130完掘。SH10116東辺周壁溝から石製紡錘車出土。写真撮影。

12月6日 SH1098/117土層断面図作成後、完掘。SH10113南辺及びSH10116東辺周壁溝完掘。その他ビット完掘。本日にて、北区内の道構を全て掘削終了する。

12月7日 都合により、作業中止。

12月8日 都合により、作業中止。

12月11日 土袋袋を移動させ、水抜きをする等、全体清掃を開始する。東区おおむね完了。

12月12日 中区の全体清掃を継続。

12月13日 西区及び北西区の清掃継続。

12月14日 北区清掃完了後、全体写真及び個別道構写真の撮影。個別遺物の取り上げ実施。

12月15日 都合により、作業中止。

12月18日 拡張区の竹の草刈りを実施。

12月19日 草刈り継続。

12月20日～1月8日 正月休み。

1月9日 重機搬入。拡張区の表土除去を開始する。

1月10日 拡張区の表土除去完了後、遺構検出実施。北区の北端の表土残土の撤去を開始する。

1月11日 表土除去終了後、重機搬出。現在溝④及び⑤の撤去開始。現代溝④はやや浅く、同⑤はかなり深い。西側拡張区略図作成。

1月12日 現代溝④掘削継続。

1月13日 現代溝④掘削完了後、SD10132の掘削に着手。現代溝⑤は掘削継続。

1月16日 現代溝⑤完掘。南東隅からビットの掘削に着手する。SD10132、SD10133完掘。北端の落ち込みの掘削開始。

1月17日 降雨のため、作業中止。

1月18日 水抜き後、SB10136周辺清掃後、写真撮影。北端落ち込み掘削継続。SD10134、SD10135掘削開始。現代溝④以東のビット掘削。

1月19日 北端落ち込み掘削継続。階段等の道構はなく、急傾斜の崖となることが判明する。ビット掘削継続。SB10136平葎。

1月22日 北端落ち込み掘削継続。

1月23日 現代溝④以東のビット掘削完了。SH10138,141,142、SD10137,139、140等の掘削に着手する。

1月24日 北端落ち込み掘削継続。

1月25日 降雪のため、作業中止。

1月26日 降雪のため、作業中止。

1月29日 SH1038、SH10145、SD10146,SD10148等完掘。SH10147周壁溝、SH10144周壁溝、SD10146、SD10148等掘削。SX10143を25cmまで掘削する。25cmの深さから礫が出土するようになる。土層草か。

1月30日 SH10138、SH10147、SH10151等の周壁溝を掘削。SH10147の下にもう1棟別の建物(SH10149)があることを確認する。SX10143は-60cmくらいで基底面になりそう。羽釜も出土する。土層草でなく、方形竈(穴倉)かと想定し直す。SD10150着手。遺物が多い。SB10136土層断面図作成。

1月31日 SH10138内のビット完掘。北端落ち込み掘削再開。SX10143基底面まで到達する。基底面にて炭化物を採取する。SD10150掘削継続。やはり出土遺物多い。

2月1日 都合により、作業中止。

2月2日 降雨のため、作業中止。

2月5日 株式会社文化財サービスによるGPS測量実施。

2月6日 都合により、作業中止。

2月7日 都合により、作業中止。

2月8日 北側拡張区現代溝完掘。SH10153、SH10154周壁溝、SD10146/152等を掘削。SX10143土層断面図作成。

2月9日 道構平面図作成開始。No.4完了。No.3は途中まで。

2月13日 都合により、作業中止。

2月14日 平面図No.3完了。No.6は途中まで。

2月15日 平面図No.7完了。No.6加筆するも途中。

2月16日 平面図No.6完了。No.11は途中まで。

2月19日 平面図No.11加筆するも途中。

2月20日 平面図No.14完了。No.40は途中まで。No.11は加筆するも途中。

2月21日 平面図No.12・13・40完了。

2月22日 平面図No.11完了。

2月23日 平面図No.10着手。途中まで。

2月26日 平面図No.9完了。

2月27日 平面図No.10・16完了。

2月28日 平面図No.15・18完了。

3月1日 降雨のため、作業中止。

3月2日 都合により、作業中止。

3月5日 降雨のため、作業中止。

3月6日 水抜き後、平面図No.17着手。途中まで。

3月7日 平面図No.17完了。No.20は途中まで。

3月8日 都合により、作業中止。

3月9日 平面図No.21完了。No.20は途中まで。午後、水抜き実施。

3月10日 平面図No.19・20・24完了。No.28は途中まで。

3月13日 平面図No.23完了。No.26は途中まで。

3月14日 平面図No.22・25・26・27完了。No.29は途中まで。

3月15日 平面図No.29・30・35・36・37・38完了。

3月16日 降雨のため、作業中止。

3月19日 平面図No.29完了。

3月20日 仮設トイレ汲み取り。

3月22日 北側拡張区検出。仮設トイレ撤去。

3月23日 北側拡張区検出完了。略図作成。

3月25日 白鳥中学校歴史英語部の発掘体験を受け入れ(10名)。ビット等を掘削。

3月26日 レベリング実施。本日にて、10次調査を終了する。

第Ⅱ章 位置と環境

1 地理的環境

鈴鹿市は三重県の北部に位置する（Fig.1）。東は伊勢湾に面し、西は標高 900 m 前後の鈴鹿山脈によって伊賀盆地や滋賀県と隔てられている。主に市域の西部は山地となっており、東部では台地や丘陵、平地、海岸と多様な地形を有している。

市北部には、主要河川である鈴鹿川が東流しており、その左岸には台地が、右岸に沖積地が広がっている。この左岸の台地は、「水沢扇状地」と呼ばれている。山裾から東へ約 14km にわたって伊勢湾近くまで連なっており、右岸の沖積低地とは地理的な境界を明らかにしている。

水沢扇状地の地質は、第四紀更新世の地層である水沢扇状地堆積物からなり、内部川と御幣川によって形成されていたといわれている。各地に平坦面が残されているが、扇頂部では標高 250 m あるものの、鈴鹿川左岸の扇端部では 40 m まで下がってきている。表面には赤色土がよく発達しており、その下位にチャートや頁岩、砂岩、花崗岩等の人頭大程度の礫を多く含む礫層が堆積する。

磐城山遺跡は、この水沢扇状地の扇端部に位置し、緩やかに傾斜しながら南東へ張り出す舌状地形に位置している（Fig.2）。磐城山遺跡の周囲には同じような舌状の

台地が枝状に別れ、そこには弥生時代中期以降の多くの遺跡が残されている。遺構面は赤土の上面であり、本来その上面に存在したはずの黒ボク層は一切確認できない。

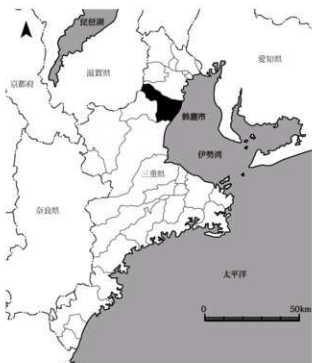


Fig.1 鈴鹿市の位置 (S=1/2,000,000)

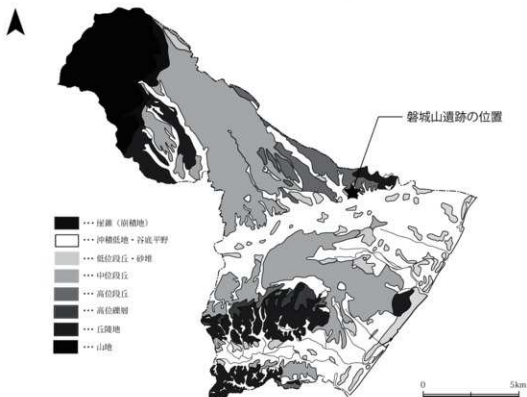


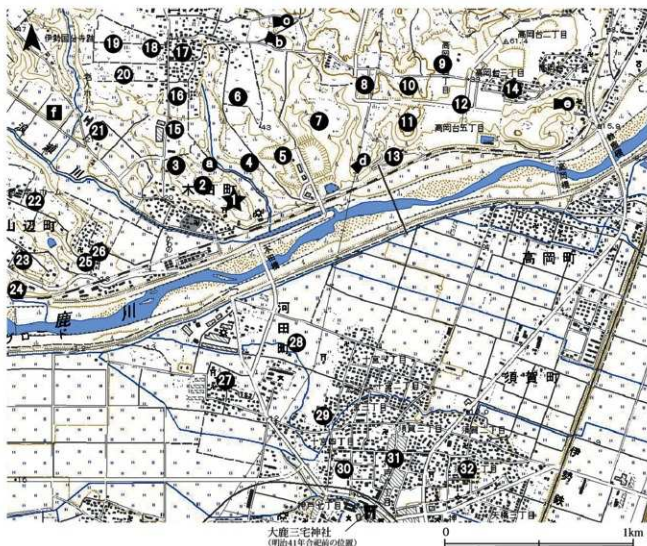
Fig.2 鈴鹿市の地質 (S=1/200,000)

2 歴史的環境

旧石器時代から縄文時代の遺構・遺物は少ないものの、台地上の西ノ岡A遺跡を中心に、茶山遺跡、富士山越遺跡、北松広遺跡、境谷遺跡等でナイフ形石器の採集が知られている (Fig.3)。西ノ岡A遺跡のナイフ形石器は22点採集されており、他にも搔器や削器が出土するなど、県下でも有数の旧石器時代の遺跡となる可能性がある (岡田 2005)。また、木田坂上遺跡では縄文時代晩期末の土器棺墓が2基確認されている (藤原 1996)。

磐城山遺跡周辺では、弥生時代に入ってから遺跡の形成が活発化する。弥生時代前期には、八重垣神社遺跡で大量の土器を包含する流路が幾筋も確認され (新田

2010)、沖積地の利用が確認できるようになる。第Ⅱ様式の存在がやや乏しいものの、下流に1.5km離れた須賀遺跡では第Ⅱ様式の環濠と目される大溝や方形周溝墓等が確認されている (吉田 2012、田部 2013)。第Ⅲ・Ⅳ様式以降は、再び台地上で遺跡の展開が活発化する。第Ⅲ様式には寺山遺跡や境谷遺跡等で円形の竪穴建物が見られ (浅野 2007, 2008、吉田 2007)、第Ⅳ様式には扇広遺跡や寺山遺跡、境谷遺跡、沖ノ坂遺跡、中尾山遺跡等で方形へと変化することが知られている (藤原 2005、新田 2003、2005)。また、第Ⅳ様式の終わりには、中尾山遺跡で集落が衰退し、方形周溝墓が群集して築かれるので、周囲の集落の消長と関連して考究する必要がある (指



- 1 磐城山遺跡 2 木田城跡 3 木田坂上遺跡 4 沖ノ坂遺跡 5 中尾山遺跡 6 国分東遺跡 7 境谷遺跡 8 寺山遺跡 9 扇広遺跡
10 西ノ岡A遺跡 11 西ノ岡B遺跡 12 東ノ岡遺跡 13 寺田山遺跡 14 青谷遺跡 15 南浦遺跡 16 国分南遺跡 17 国分遺跡
(推定伊勢国分尼寺跡) 18 国分西遺跡 19 伊勢国分寺跡 20 狐塚遺跡 (推定河曲郡衙跡) 21 間瀬口遺跡 22 添遺跡 23 口山
遺跡 24 南山遺跡 25 山辺遺跡 26 山辺東遺跡 27 河田宮ノ北遺跡 28 八重垣神社遺跡 29 宮ノ前遺跡 30 十古里遺跡
31 萱町遺跡 32 須賀遺跡

a 大鹿山1号墳 b 富士山1号墳 c 富士山10号墳 d 寺田山1号墳 e 高岡山9号墳 f 大谷古墳

Fig.3 遺跡の位置 (S=1/20,000)

摘されている。次いで遺跡が大きく展開するのは第Ⅴ様式後半から廻間式の頃で、青谷遺跡や磐城山遺跡、南山遺跡、一反通遺跡等で竪穴建物が検出される(大場・仲見 1972, 田部 2012, 2014, 2015, 藤原 2007, 新田 1998)。この頃の墓域は判然としなが、扇広遺跡や西ノ岡B遺跡で方形周溝墓が確認されているので、集落とは離れた丘陵上に群集している可能性はある。なお、第Ⅴ様式の前半は遺跡の痕跡が希薄といえる。ただし、扇広遺跡や磐城山遺跡で竪穴建物が確認されたり、八重垣神社遺跡で方形周溝墓が検出されたりしているので、近年になってようやくその間が埋まってきた観がある。この意味において、磐城山遺跡の調査は重要な知見をもたらしてくれているといえる。

古墳時代に入ると、台地上の青谷遺跡で竪穴建物が残るが、一方で磐城山遺跡等ではほぼ衰退する。環濠も第Ⅴ様式の段階で埋まっているようで、この時期には沖積地である八重垣神社遺跡や宮ノ前遺跡などで流路とともに集落跡が確認され、再度低地部へ遺跡の中心が移動するようである。なお、古墳時代中期段階の動向は不明確であるが、宮ノ前遺跡で初期須恵器が出土するなど、引き続き低地部に活動拠点があったものと推定される。さらに、宮ノ前遺跡や河田宮ノ北遺跡などで6世紀代の遺物を大量に含む自然河道も確認されており、この段階の居館がある可能性も指摘されている(伊藤 2004)。

一方、鈴鹿川下流域の古墳は、左岸の台地上に残されている。最古のものは寺田山1号墳と推定され、全長約80mの前方後円墳の鞍鏡形を呈す。発掘調査されたことはないが、5世紀初頭ないしは4世紀代に遡る可能性が指摘されている。他の前方後円墳としては、全長約50mの富士山1号墳、同40m級の高岡山9号墳、同14mの富士山10号墳等がある。富士山1号墳と高岡山9号墳は未発掘だが、富士山10号墳は、発掘の結果、埴輪列を伴う6世紀初頭の古墳であることが判明している(中森 1978)。寺田山1号墳が盟主的な古墳であり、富士山1号墳等がそれ以後続する古墳になるであろう。周囲に築かれた古墳群も含め、いずれも5世紀末から6世紀代の古墳であるようで、5世紀代まで遡り得る古墳としては、直径約35mの円墳である大鹿山1号墳が想定できるかもしれない。

古代になると、台地上に重要な施設が建ち並ぶようになる。7世紀後半には、南浦遺跡(通称「大鹿廃寺」)で早くも白鳳寺院が建立される。市内の7世紀代の瓦は、平田遺跡や天王遺跡、土師南方遺跡等で出土し(田部 2016, 林 2004, 山田 1973)、山辺瓦窯跡で生産の痕跡が窺える(杉立 1997)。なお、この7世紀頃の集落は、

境谷遺跡や国分寺跡などで確認されており、再び台地上で生活の痕跡が確認できる。また、詳細不明だが伊勢国分寺の南に隣接して、河曲部衝とされる孤塚遺跡が確認されている(藤原 2016)。品の字に配置された政庁跡に加え、西方約200mには正倉が整然と建ち並んでいる。なお、これらの建物は国分寺建立以前の建物と推定され、国分寺建立に際して移動しているが、その場所は未発見である。なお、8世紀後半以降は伊勢国分寺がそびえ、東方200～300mには国分尼寺も並存していたと推定される。なお、これらの国の重要施設は古代東海道とも無関係であったとは考えがたい。市内で明らかに東海道とできる遺構は確認されていないが、平田遺跡では幅9mの直線的な道路が断続的に約130mにもわたって検出されており(田部 2016)、ちょうど伊勢国分寺跡と「国府」の名が残る国府町との中間に位置するので東海道の可能性も示唆されている。

なお、古代豪族として『日本書紀』に大鹿氏の名が見え、鈴鹿市を本貫とする可能性が指摘されている(岡田 1995)。敏達天皇四年(575)の条がそれで、「次采女伊勢大鹿首小熊女菟名子夫人生太姫皇女更名櫻井皇女與糠手皇女更名田村皇女」とある。これによると、伊勢に大鹿氏という氏族があり、首姓を名乗っていること、小熊の娘に菟名子という人物がいて、采女として出仕していること、その菟名子が敏達天皇との間に2人の皇女を生んでいるとこと等が分かる。糠手姫皇女は後に坂押彦人皇子と結婚し、舒明天皇を生んでいる。大鹿氏は、代々采女を輩出した家系のように、『古事記』の雄略天皇の段にも「伊勢国三重の采女」や「伊勢の采女」との記述があり、大鹿氏の可能性が推定される。このように、大鹿氏は皇室家に繋がる家系であり、この時期に大鹿氏の本貫地でも何らかの変化があることも想像される。なお、大鹿氏の本貫地については、多気町相可の地を推定する説もあることを付記しておく。

その後は、伊勢神宮の創建から平安末期までの出来事を記した『太神宮諸雑事記』に、「河曲神戸預大鹿武則」の記録がある。河曲部には伊勢神宮の神戸が設定されていて、その管理を大鹿武則が負っていたようである。この時期の遺跡としては、鈴鹿川右岸の低位段丘上にある菅町遺跡で、9世紀代の竪穴建物がみつかったり、他、同じ段丘上で十宮古里遺跡や須賀遺跡等でもみつかったり。なお、河曲部は面積が小さい割りに、延喜式によると式内社が二十座も存在し、中には「大鹿三宅神社」の名前も見られている。

さらに、鎌倉時代には、源頼朝の命によって地頭御家人で駅家雑事の課役を負担していない者の名を提出させ

ているが、この役目を担当したのが「大鹿兼重」や「大鹿国忠」という人物であった。このことから、中世に至るまで大鹿氏が在地の氏族として活躍している様子が窺えるが、河曲郡内に目立った中世前期の集落跡等は確認できていない。

一方、中世後半になると考古的な知見は多くなる。沢城跡は、沼状の周囲に盛土して築城した平城であることが確認されている。内部には礎石建ちの建物も存在し、土師器皿を大量消費する行為が行われていたことが明らかにされている（田部 2009）。その後、16 世紀後半に神戸城へ移転したとされるが、館等はそのまま継続して利用されていた可能性も考えられる。また、十宮古里遺跡では、残念ながら建物の確認はなされていないが、おびたしい数の井戸が掘削され、多量の土器や陶磁器が投棄されていた（吉田 2018）。神戸城下の開発と軌を一にしている可能性があり、今後検証していく課題である。なお、磐城山遺跡でも、木田城に関わると推測される地割りとともに、礫を多数詰め込んだ土壇墓と推定される遺構が確認されている。

中世末期（1567 年）には、第 1 回目の織田信長の伊勢侵攻が行われる。この時は、神戸城の北約 3km の位置する高岡城において、山路弾正の指揮の下、これを防いだという。当然、高岡城の一つ西に位置する木田城も無関係であったとは考えがたく、高岡城を後ろから支える役割を果たしたのであろう。しかしながら、翌 1568 年の第 2 回目の伊勢侵攻で再び襲撃された際には耐え切れず、信長の三男である信孝が養子縁組みにより神戸城に入城し、城主として君臨することとなる。

第Ⅲ章 調査の方法

1 調査区

発掘調査は平成22年度の第3次調査から継続して行っている。第3次調査区は、既設市道（第1・2次調査区）の北東側に設け、毎年そこから北ないし西へ広げるように拡張して対応してきた。平成26年度の第7次調査区にて、台地の北端まで到達したので、そこから西側へと展開し、拡張を繰り返しながら調査区を広げて実施してきた。

本書に掲載する、第9次調査区は第8次調査区の南側に隣接している。地番としては、鈴鹿市木田町字上條2270番、2271番、2277番の一部、2278番の一部である。第10次調査区は、第9次調査区と第8次調査区を取り囲む形で南及び西に拡張した。地番は、同上條2277番の残り、2278番の残り、2279番の一部、2282番の一部である。

調査区は、例年の調査と同様、概ね150～200m程度の方角を目安として任意に区切った（Fig.4）。この小

位は、便宜上、調査年次毎に方位を用いた西区、東区、中区等と呼称し、一つの小単位を調査し終わった後に、次の調査区を順次拡張して進めた。第9次調査区は、北西区、中央北区、北東区、南東区の合計4単位の約700m²、第10次調査区は東区、中区、西区、北西区、北区、北端区（北2区）、拡張区（西2区）の7単位、約750m²を調査した。

2 地区割り

調査地内においては、国土座標第VI系に基づいて3m四方の格目（以下、グリッドとする）を設定した（Fig.4）。グリッドは、磐城山遺跡の存在する台地全体を被覆するように配慮し、X=-122,100、Y=41,000を基点として、記号と番号を割り振った。

南北方向には2桁の算用数字を与え、東西方向にはアルファベットの2文字を組み合わせて、北西隅の点をグリッドの名称とした。その結果、第9・10次調査区は、

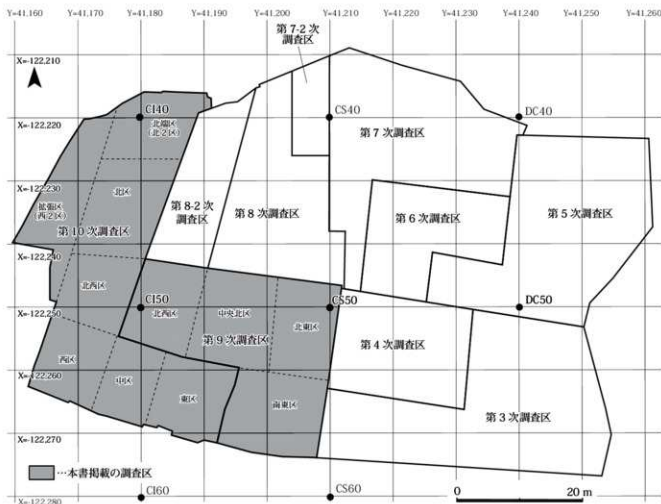


Fig.4 調査区の地区割り (S=1/600)

北が 38 ライン以南、南が 56 ライン以北に収まる。また、西は CA ライン、東は CS ラインまでに含まれる。

3 遺構番号

調査範囲が広大なため、原則として遺構番号は通し番号とし、調査の進行順に番号を付すことにした。本書では、調査時の番号をそのまま利用することとする。なお、遺構の表記としては SH0901 のように表す。これは、下記の性格を示す記号と調査次数を表す「09」、調査段階で付与した個別識別番号「01」からの連番の組み合わせ、という意味である。ただし、第 10 次調査区の一部は未完掘のまま第 11 次調査として引き継いでいるため、11 次調査にも一部「10」とした遺構番号が存在している。また、他の調査区と分割して調査している遺構の一部に複数の遺構番号がつけられているものもあるが、同一遺構と判断できたものはどちらか一つの遺構番号に統一して処理した。

なお、数字の前に表記したアルファベットの内容は下記の通りである。

SH・・・堅穴建物 SD・・・溝 SB・・・掘立柱建物
SA・・・柵 SK・・・土坑 SC・・・道路状遺構
SX・・・土墳墓、方形堅穴、性格不明のもの
pit・P・・・柱穴・ピット

4 基本層序

調査区内において 10 ～ 20cm の表土の直下で、黒褐色系の遺構埋土か黄褐色砂礫層の地山が存在する。第 9 次調査区では、表土直下が比較的黒褐色の遺構埋土で覆われており、遺構密度が濃かった。かつ、その深さも深い所で 40cm 以上に及び、良好に遺存している場所もあった。

一方、第 10 次調査区の北側にいくにつれ、表土の直下で地山あるいはその下層の礫層が確認されることが多く、遺構の密度が希薄であった。ちょうど、調査区の北端では丘陵が急激に落ち込んでいることから、地形的に土砂の流出が激しいことが推測される。これを検証するように、検出面からの遺構の深さも 5 ～ 10cm 程度と浅くなっている。

なお、地山とした黄褐色砂礫層（赤土）は、第 4 次調査区の辺りで 70cm 程度あり、その下部には人頭大の礫を多量に含むにふい黄灰色の層序が、約 2 m 堆積している。これらの層序は、更新世に堆積したとされる古期水沢扇状地堆積物に該当する。遺構は、この黄褐色砂礫層上面から掘削されているが、黄褐色砂礫層（赤色土）の流出が激しい丘陵端部では、下層の礫層まで遺構が掘り込まれている。

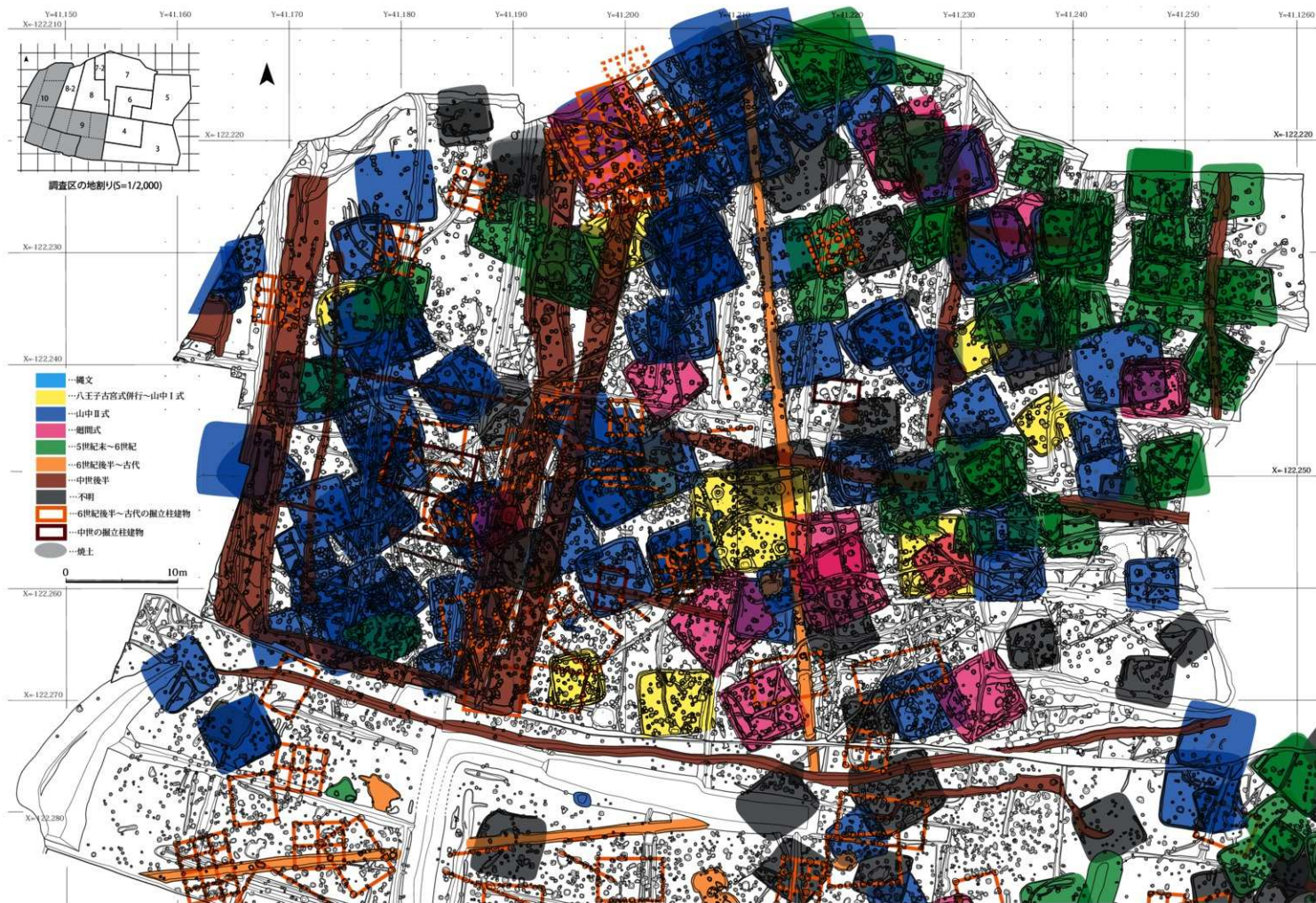


Fig.5 第1-10次調査区遺構配置図 (S=1/300)

第IV章 検出遺構

今回の調査では、これまでの調査と同じく数多くの遺構が確認された。特に、竪穴建物の重複が顕著であった（Fig.5～9）。なお、第10次調査区の北端では土砂の流失によって、遺構の上部は既に失われてしまっており、表土直下にいわゆる地山である明黄褐色シルト混砂礫層の下層である礫層（水沢扇状地堆積物）が現れていた。一方、第9次調査区では、地山が30～50cmほど堆積しており、遺構の残り方も良好であった。検出された竪穴建物の多くは、四隅（北東や北西隅が多い）ないしは周壁溝の南辺中央に掘られた土坑（以下、南辺中央土坑とする）から溝が伸びていた。この溝の多くは標高が低い北方へのびており、水を逃がす役割があったものと推定できる。

第9次調査の目立った成果は、三重県でも最大級の竪穴建物（SH09104）が検出されたことである。ちょうど、第4次調査区で東半分を調査していたが、今回の調査によって2棟の重複などでなく、東西10.9m、南北9.5mもの規模もことが判明した。磐城山遺跡では6～7m級の竪穴建物と比較的多く確認されているが、SH09104はその規模をはるかに凌駕しており、現在のところ、県下で第2位の床面積をもつと思われる。出土遺物もまとまっており、弥生時代後期前半の建物としてよいであろう。

また、そのSH09104の上面で、根巻石を持つ総柱建物（2×3間）が2棟確認された点も注目される。両者は同じ場所に建て替えられており、第8次調査区ほどではないが、その位置に固定されている傾向が窺える。SB09126は、第8・9次調査で分類した掘立柱建物群の第1群としたSB08129（田部 2018）やSB08128、SB08211、直線的な画溝SD0777の方位とほぼ一致することから無関係であったとは考えられない。SD08129等とSB09126は南北に約30m離れていること等、位置関係等からこれらは相互に関連する施設だと評価したい。なお、柱穴という性格上出土遺物は乏しく、古墳時代後期の須恵器が出土していることから、少なくともそれ以降だということが分かっている。

第10次調査でも多くの竪穴建物を確認されている。これらの内、2棟は円形ないしそれに近い建物である。出土遺物が乏しいため時期比定が困難であるが、ともに他の遺構よりも下位の遺構として検出されている。

また、中世後半の道路と想定される平行する溝も継続して確認され、これらの軸と平行する掘立柱建物2棟と方形竪穴1基を確認した。これまで中世後半の遺構は区

画溝と土壌墓、簡易な掘立柱建物程度であったが、市内でも珍しい方形竪穴が確認されたことは評価できる。西側に隣接する木田城跡に関連するものと想定されるが、今後調査が西方へ進展するに連れより中世後半の遺構が顕著になると想定される。

以下、比較的良好に検出できた遺構を中心に解説する。なお、各遺構は著しく重複しているもので、ある程度まとめると記述する。

1 竪穴建物

SH08215/216/228（Fig.10）

大部分が第8次調査区に含まれるが、第9次調査区の北西区で検出した。第8次調査時に2棟の竪穴建物が重複していると判断し、内側の古い建物側をSH08216、外側の新しい建物をSH08215としたものである。第9次調査の結果、もう1棟が重複していることが判明し、これをSH08228とした。都合、3棟の建物の重複と理解できたが、新たに確認したSH08228の新旧は不明である。SH08215とSH08216の周壁溝を掘削し終わった段階で南辺周壁溝を確認したので、3棟の中で最も古い建物である可能性を持つ。

SH08215は東西6.3m、南北6.2mのほぼ正方形を呈し、SH08216は東西5.5m前後、南北5.1m前後ある。いずれも建物も埋土は存在せず、検出面で周壁溝等のみを検出した。SH08228は不明確であるが、概ね東西、南北とも5.5m前後だと推定できる。いずれも4本柱の主柱穴を持つが、明確な火処は確認できなかった。建物の北東隅からのびる溝SD08217が排水溝に該当するようである。

出土遺物は乏しいが第8次調査では弥生時代後期の土器が出土しており、その頃の建物と推定できる。

SH0903・SH0910/11・SH1090/91/93（Fig.11）

第9次調査区の北西区から第10次調査区の北西区にかけて検出した。非常に煩雑であるが、都合6棟の竪穴建物が重複していると理解した。調査区がまたがっているため、以下のとおり整理して記述する。

建物① SH0903=SH1099 → SH0903

建物② SH0910=SH1092=SH1095 → SH0910

建物③ SH0911 → SH0911

建物④ SH0924=SH1090 → SH1090

建物⑤ SH0923=SH1091 → SH1091

建物① (SH0903) は北東部分しか検出できず、正確

建物②と③(SH0910/11)は2棟がほぼ同じ位置で建替られている。いずれも東西、南北6.5 m前後をはかる。

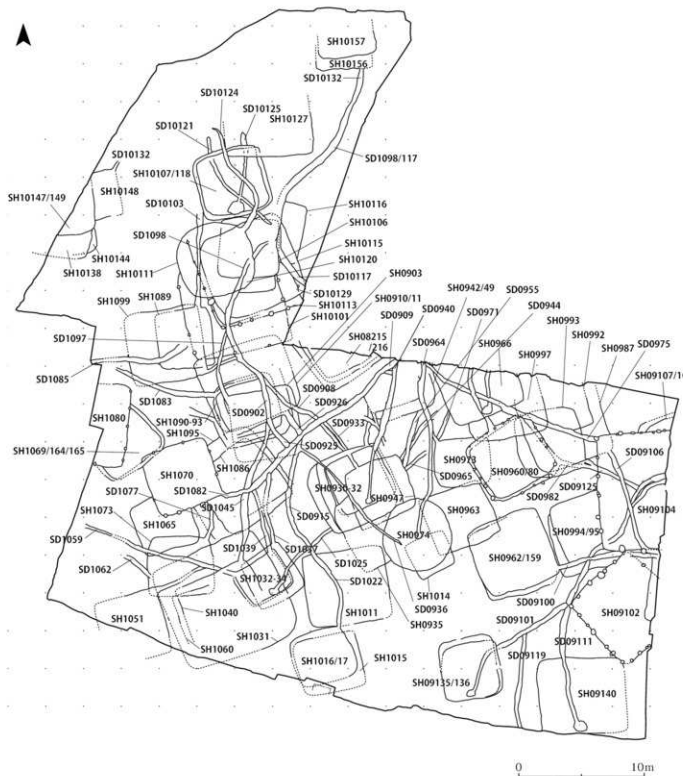


Fig.6 第9・10次調査区遺構配置図 (S=1/300) (竪穴建物+付随する溝)

埋土は存在せず、周壁溝のみの検出である。4本の主柱穴を持つが、排水溝や火処は不明である。

建物③～⑥（SH1090/91/93）は3棟の建替えである。最大規模のSH1093でも東西5.5m、南北4.5mと比較的小型である。SH1090では4.5m四方と、磐城山遺跡の中では、かなり小振りの部類である。埋土はほとんど存在せず、SH1090で0.05m程度であった。いずれ

も4本の主柱穴を持つようであるが、柱穴も小規模で明確でなく、不明な点が多い。

全体的に出土遺物は多くないが、一部須恵器が混じるものの、概ね山中式墳のもので占められる。6棟もの建物が建て替えられているが、概ね弥生時代後期の建物だと理解して問題ないだろう。

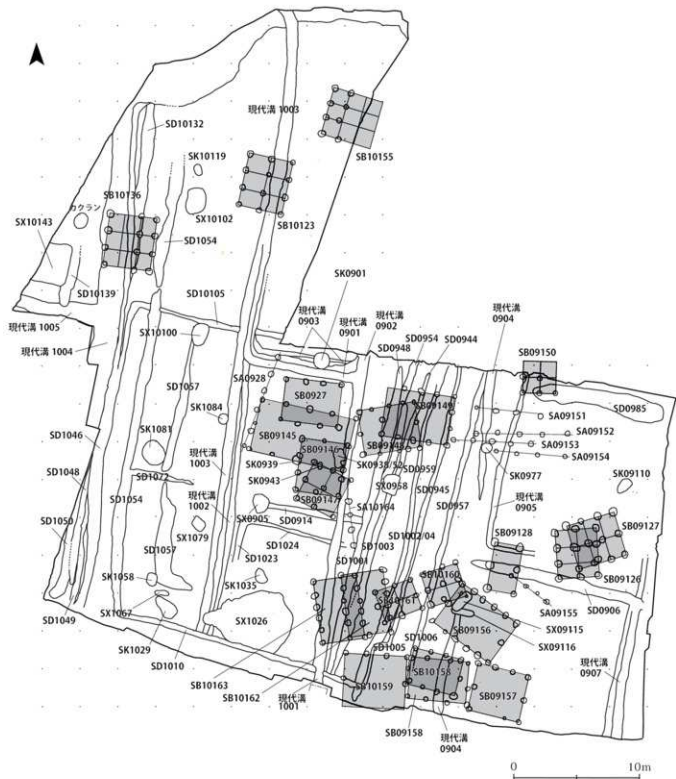


Fig.7 第9・10次調査区遺構配置図 (S=1/300) (掘立柱建物+柵・土坑・中世以降)

SH0930/31/32・SH0935・SH0947 (Fig.12)

第9次調査区の北西区から中央北区にかけて検出した。SH0930/31/32の3棟の建替えに加え、SH0935とSH0947が重複する。SH0930/31/32の新旧関係は不明瞭であるが、SH0930/31/32→SH0935→SH0947と新しくなることは確認できた。

SH0930は東西6.2m、南北6.0mの正方形である。北東隅から溝SD0940がのびており、排水溝に該当する可能性がある。SH0931は西辺のみの確認で、規模等は不明な点が多い。主柱穴の位置から、東西5.5m、南北5m前後だと推定されう。ともに埋土は0.05mと浅い。SH0932は小規模で、東西4.6m、南北4.3m前後である。埋土は0.1mほどあり、黒色砂礫泥シルト層を呈す。南辺周壁溝の中央に土坑を有する。その土坑から北東隅に向かって溝があり、SD0940へと続いている。SH0930/31の排水溝を再利用している可能性が考えら

れる。いずれも火処は確認できなかった。

SH0935は、SH0930/31/32から建物半分程度南にずれた位置で検出した。南北6.0mで、東西は5.5m前後である。埋土は0.02m程度とほぼないといってもよいほど削平されていた。

SH0947は、東西、南北とも4.8mをはかる。北辺の中央やや西側から北西方向へのびる溝SD0908/33があるが、SH0947との関わりを明らかにすることはできなかった。埋土は0.05m程度と浅い。

出土遺物は多くないが、SH0930/31/32からは主に弥生時代後期の山中式のものが出土し、SH0947からは廻間式の高杯が出土している。

SH0942/49 (Fig.13)

第9次調査区の中央北区で検出した。大きく削平され、かつ他の遺構の重複により遺存状態はよくない。SH0942

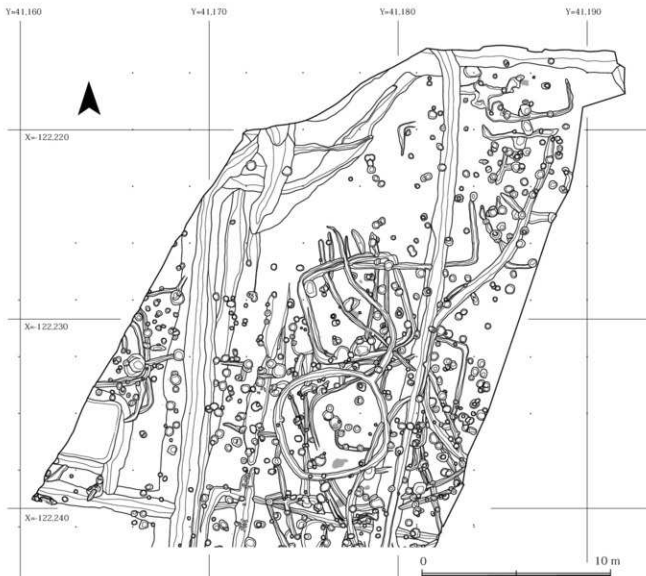


Fig.8 第9・10次調査区遺構配置図①(北半) (S=1/200)

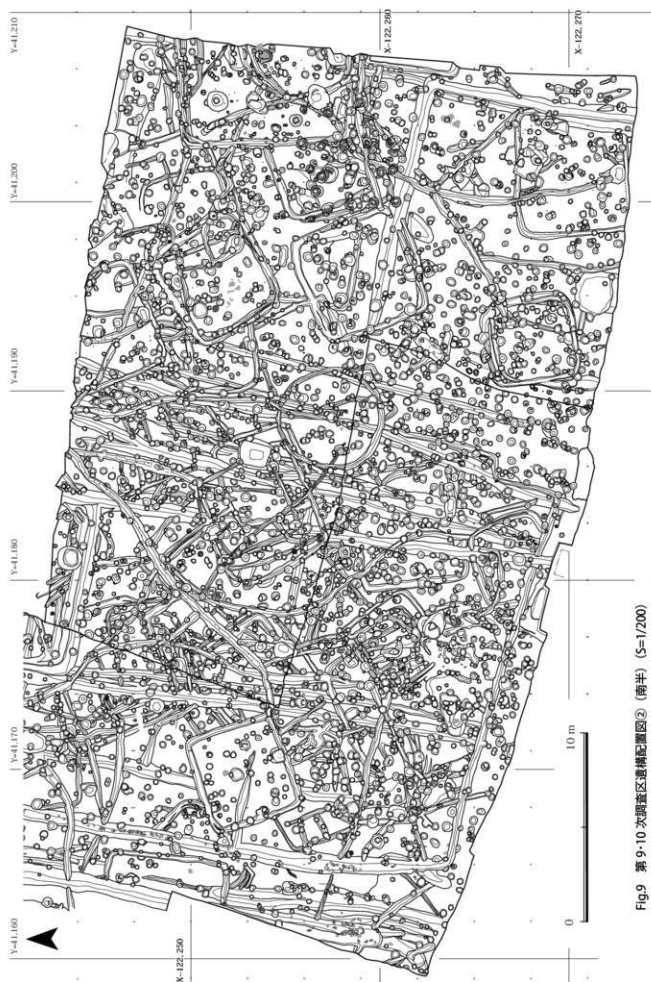


Fig.9 第9·10次調査区遺構配置図② (南半) (S=1/200)

とSH0949の新旧関係も不明であるが、ともにSH0966よりも古いことは確認できた。また、埋土は存在せず、検出面で周壁溝を確認したのみである。

SH0942の周壁溝は南辺と東辺の一部しか検出できなかった。主柱穴の位置から、東西5.7 m、南北5.6 m程度と推定できる。火処等は不明である。

SH0949の周壁溝は南辺のみを確認した。主柱穴は4本柱のようで、その規模等から5～6 m程度に復原できる。火処や排水溝等は不明である。

ともに出土遺物が少ないものの、SH0942の南東主柱穴(P09206)から弥生時代後期の土器が出土しているの、概ねその頃の建物だと判断できる。

SH0960/80 (Fig.14)

第9次調査区の中央北区から北東区にかけて検出した。2棟の建物がほぼ同じ位置で重複していた。外側をSH0960とし、内側をSH0980とした。SH0960が新しく、SH0960の埋土を床面まで掘削した段階でSH0980を検出した。検出面から床面までの深さは0.25 mほどあった。

SH0960は東西6.0 m、南北5.5 mを呈す。4本の主柱穴を持ち、中央やや西に地床が有する。埋土は黒褐色砂礫混シルト層の単層で、しまりもあり、やや粘性も

あった。また、周壁溝の肩部には1～1.5 m間隔でピットが巡り、壁柱穴になる。北辺の中央から北西方向へ排水溝SD0972がのびる。建物の南西隅を中心とした床面直上で良好な土器が出土し、山中式の一括資料として評価できる。

SH0980は東西5.5 m、南北5.2 mをはかる。北側の主柱穴はSH0960のそれを踏襲していると思われる。SH0980自体の出土遺物は乏しいが、SH0960直前の建物だと考えられる。

SH0962/159 (Fig.15)

第9次調査区の北東区で検出した。SB09128と重複するが、SH0962の方が古い。東西6.1 m、南北6.0 mをはかる。検出面から床面までの深さは0.1 mある。4本柱の主柱穴と中央に地床を確認できた。周壁溝の南辺中央やや西に土坑があるので、貯蔵穴になる可能性がある。南東隅には東方向のびる溝SD09100が接続している。同一場所で2棟が重複しているようだが、南東側のSH09159が新しい建物であることは確認できた。

遺物は少ないので不詳であるが、弥生土器ばかりであるので弥生時代の建物だと想定できる。おそらく山中式前後であろう。

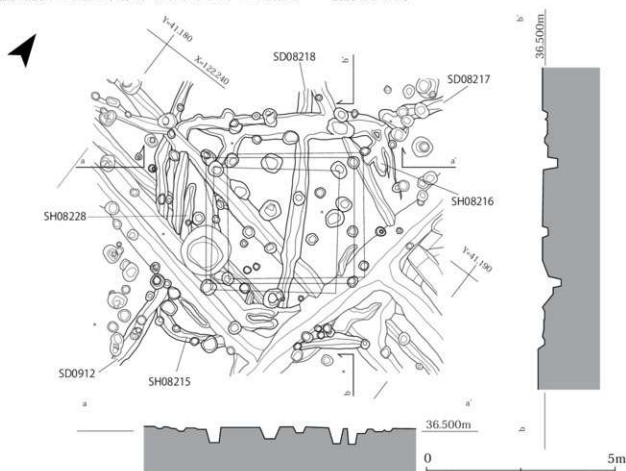


Fig.10 SH08215/216/228 平面・断面図 (S=1/100)

第9次調査区の北東区で検出した。東西4.8 m, 南北4.7 mで、4本柱の主柱穴と地床炉を確認した。SH0962、SH0974と重複するが、SH0962より古く、SH0974より

出土遺物は山中式の高杯や甕等が出土しており、弥生時代後期の建物であることが確認できた。



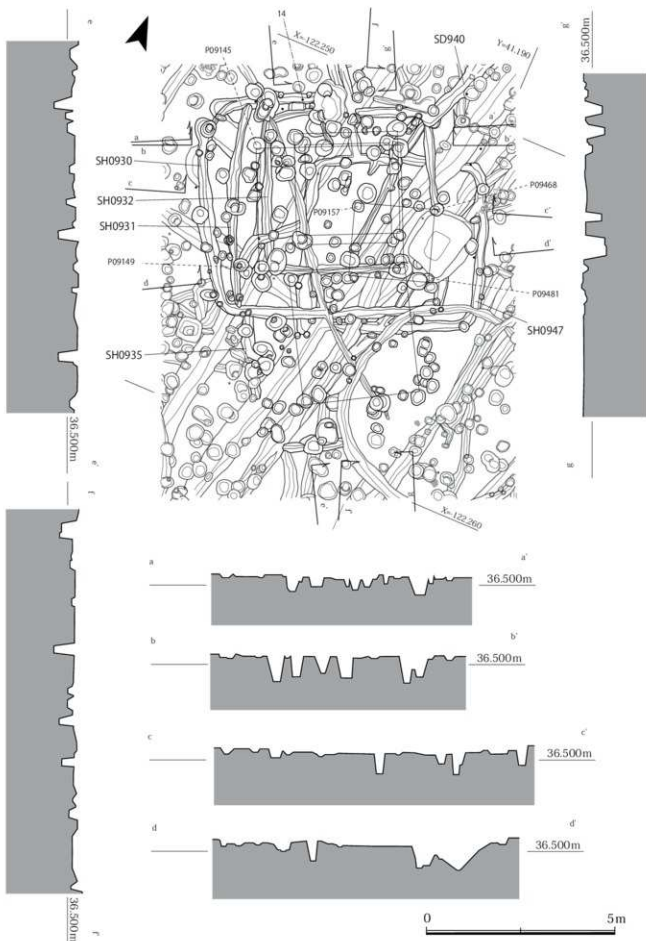


Fig.12 SH09030/31/32-SH0935-SH0947 平面·断面图 (S=1/100)

SH0966 (Fig.17)

第9次調査区の中央北区で検出したが、一部は第8次調査区にかかっている。掘削当初、SH0966（主に西側）とSH0967（主に東側）と2棟の建物と判断して遺物を取り上げていたが、途中で1棟の建物であることが判明した。以後はSH0966として調査している。また、SH0978=97よりも新しい建物であることも確認できている。

東西6.2 m、南北5.8 mの規模を持ち、4本の主柱穴が明確であった。埋土は検出面から0.1～0.15 mほどある。中央には地床が確認されるときに、南辺中央には箱形の貯蔵穴が認められた。その貯蔵穴からは北方向に排水溝（遺構番号なし）がのび、建物の北東隅を突き抜けてさらに北へのびていく。

出土遺物は床面直上や貯蔵穴等から山中式の高杯や甕、壺等が良好な状態で出土した。これらのことから、弥生時代後期の建物と理解してよい。

SH0973 (Fig.18)

第9次調査区の中央北区から北東区にかけて検出した。SH0960/80よりも古い建物である。南北3.7 mと小規模である。埋土は存在せず、検出面にて周壁溝のみを確認した。東西の詳細は不明であるが、4 m程度だと推定される。小振りながらも4本の主柱穴と南辺中央に貯蔵穴を持つ。また、建物の北西隅から排水溝らしき溝も確認できた。火処は未確認である。

出土遺物はほとんどないため時期不明であるが、SH09

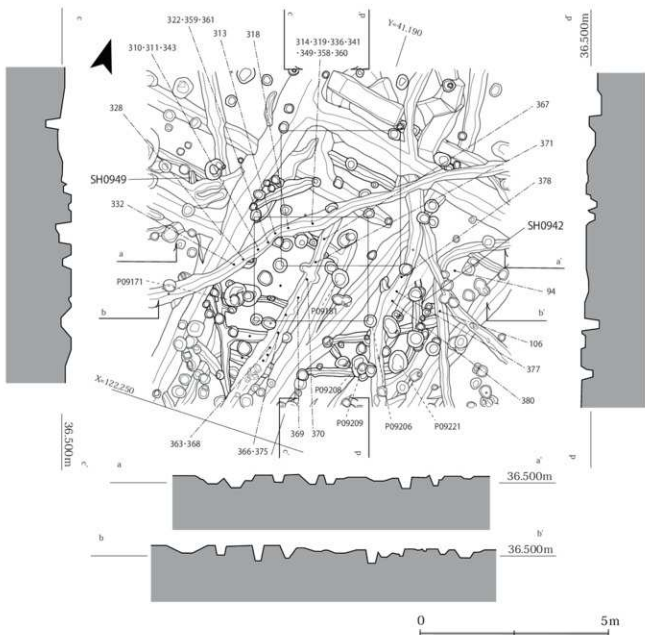


Fig.13 SH0942/49 平面・断面図 (S=1/100)

60/80 よりも古い建物であることから、弥生時代の建物
だと考えられる

SH0974・SH0976 (Fig.19)

第9次調査区の中央北区から、第10次調査区の東区
にかけて検出した。円形のSH0974と小振りのSH0976

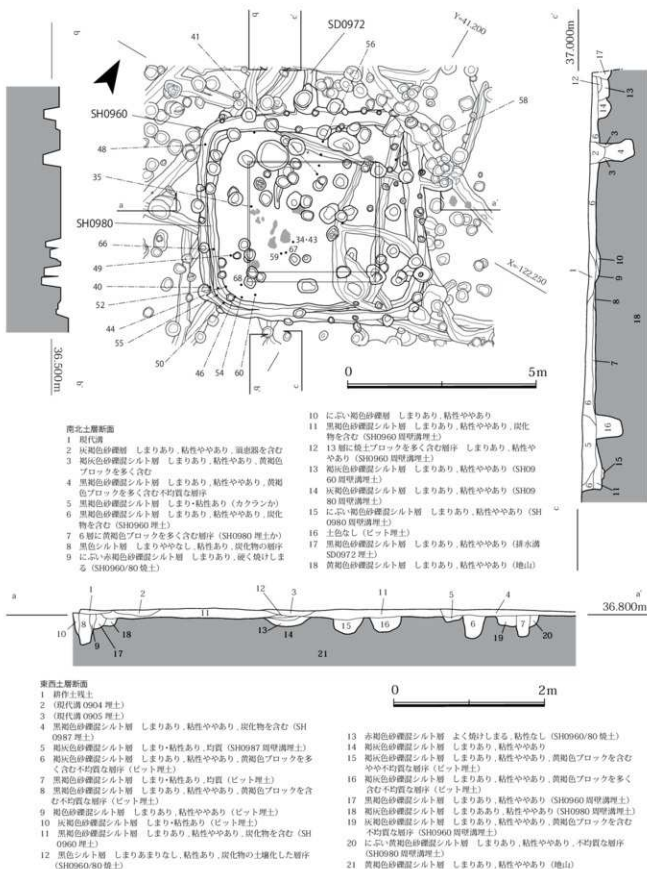


Fig.14 SH09060/80 平面・断面図 (S=1/100・N=1/50)

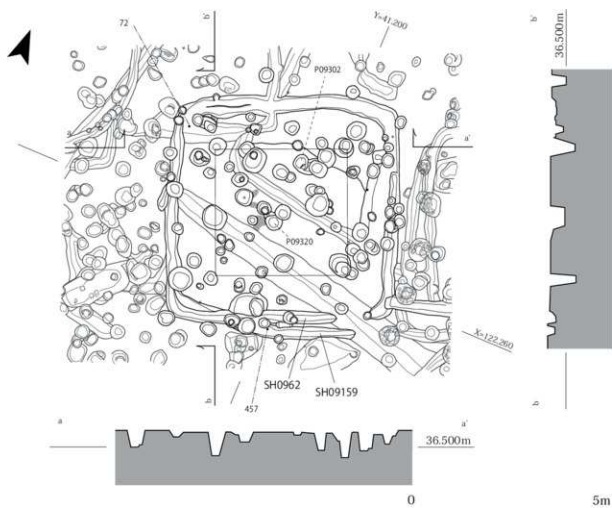


Fig.15 SH0962/159 平面・断面図 (S=1/100)

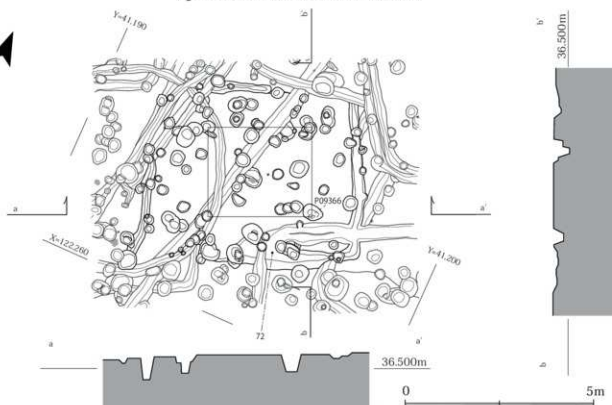


Fig.16 SH0963 平面・断面図 (S=1/100)

が重複している。SH0974 は第 10 次調査では SH1014 として調査した。同じように SH0976 は SH1012 としている。ここでは、調査範囲の広い 9 次調査の番号を代表させておく。

円形の建物 SH0974 は SH0935 や SH0947 等多くの建物と重複するが最も下位で検出し、一番古い建物であることは間違いない。直径は 5.3 ~ 5.7 m 程度である。検出面から床面までの深さは 0.1 m 程度である。5 本の主柱

穴を持つようで、中央に土坑 SK0984 を持つ。その中央土坑からは排水溝 SD0956 がのびる。

SH0976 は小規模で、東西 3.2 m、南北 3.1 m 程度であるが、4 本の主柱穴を持ち、南辺のやや西寄りに貯蔵穴を有する。検出面から床面までの深さは 0.05 m と浅い。

帰属時期を明確にすることは困難だが、SH0974 は他の建物より古いので、弥生時代後期以前に遡ることは間違いない。出土遺物は乏しいものの弥生時代の後期頃の

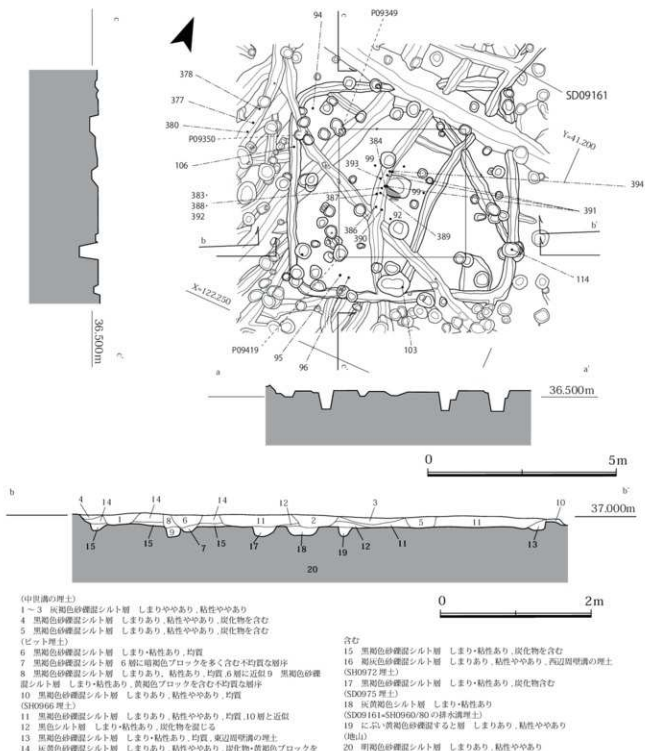


Fig.17 SH0966 平面・断面図 (S=1/100・1/50)

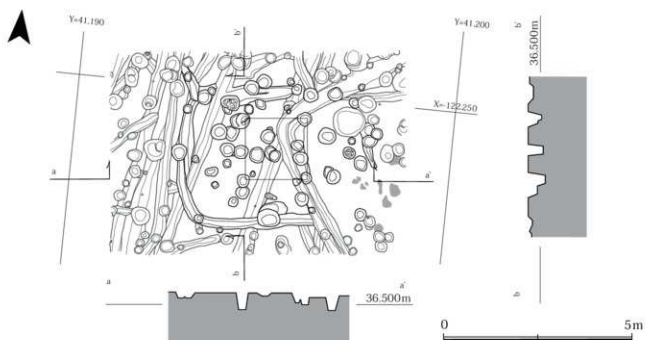


Fig.18 SH0973 平面·断面图 (S=1/100)

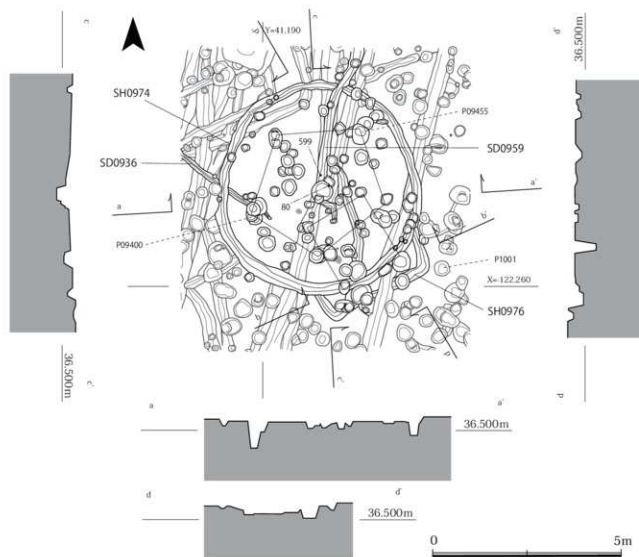


Fig.19 SH0974·SH0976 平面·断面图 (S=1/100)

ものばかりであり、中央土坑からは土玉が出土している。なお、SH0974は出土遺物に乏しく、どこまで新しくなるかは特定できていない。

SH0997 (Fig.20)

第9次調査区の北東区で検出した。当初、西側の溝SD0978と東側の竪穴建物SH0997と認識していたが、掘削SD0978は西辺周壁溝となり1棟の建物と認識し直したものである。埋土は存在せず、周壁溝のみを検出した。

SH0960/80やSH0966と重複するが、いずれよりも古い建物である。残りが浅かったため、南側半分程度の確認にとどまり、北側の様子は不明である。東西は6.2mある。南北も6mほどであろうか。4本の主柱穴を持ち、南辺中央には貯蔵穴を有する。火処は不明である。

SH0978からは6世紀代の須恵器や土師器が出土しているが、北東主柱穴P09394からは、残りのよい弥生時代後期の裏が出土している。遺構の切り合い関係からも弥生時代後期以前だと推定されるので、須恵器や土師器は別の遺構を見落としていたと考えられる。

SH0987・SH0992・SH0993 (Fig.21)

第9次調査の北東区で検出した。重複が著しく、きちんと分らないまま調査してしまっている。西側の建物はSH0981とSH0987と2つの建物と認識して調査したが、1棟であったためSH0987に統合する。また、東側もSH0978とSH0993の2棟として調査したが、同じようにSH0993に統一する。このSH0987とSH0993との重複関係は明らかにできなかった。ただし、SH0987がSH0960/80より古い建物であることは確認できている。

SH0987は東西6.2m、南北6.3m前後をはかる。調査開始の段階では西側をSD0981、東側をSH0987としており、SD0981が竪穴の西辺周壁溝になるのに気付かなかった。掘削が進む内に、SH0987とSD0981が同一遺構だと理解できた。残りのよい南側で0.05cmの埋土が存在する程度で、検出面がほぼ床面であった。4本柱で中央やや西に地床柱を持つ。ただ、このが跡はSH0993のものかもしれない。建物の南東隅から南方向へ排水溝SD09106がのびる。

SH0993は東西、南北とも5.2m程度の規模を持つ。

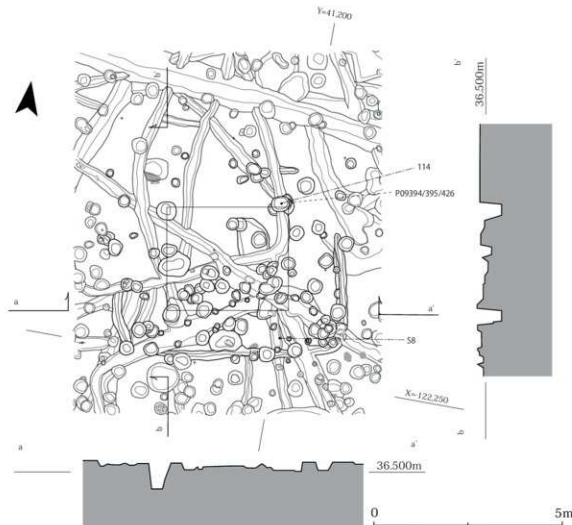


Fig.20 SH0997 平面・断面図 (S=1/100)

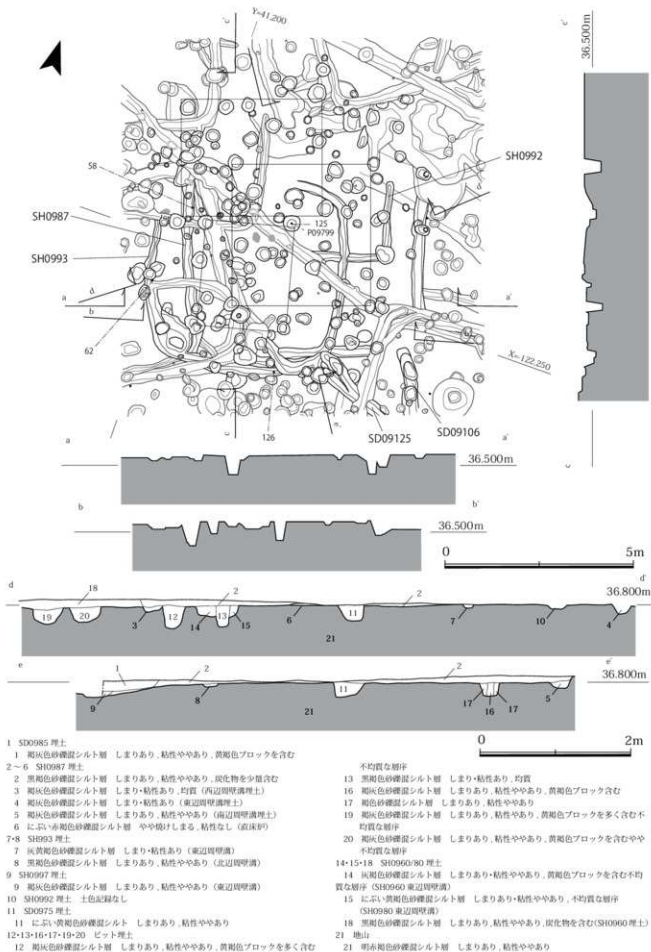


Fig.21 SH0987-SH0992-SH0993 平面・断面図 (S=1/100)

検出面から床面までの深さは残りのよいところで0.1 mあった。4本の主柱穴を持ち、南辺中央に土坑を有する。建物中央やや北にある焼土は、この建物のものかもしれない。また、建物の南東隅から南東方向へ排水溝SD09125がのびる。

SH0992は削平が著しいため不詳であるが、SH0987やSH0993のやや北側に検出した。4本の主柱穴を持つようだが、南東隅の周壁溝の他は不明な点が多い。

SH0987からは、6世紀の須恵器や土師器が出土しているが、切り合いから弥生時代後期のSH0960/80より古いはずである。また、SH0993の出土遺物をみると山中式でも古い段階のものが多く確認できる。

SH0994/95 (Fig.22)

第9次調査区の北東区で検出した。SH09104と重複するが、それより新しい建物である。また、後述するSB09126/127は、これらの堅穴建物の埋土の上面で検出している。SH0994が新しく、SH0995が古い。検出面から床面までの深さは0.05～0.1 mある。

SH0994は概ね5.6 m四方である。4本の主柱穴を持ち、中央やや西寄りに地床が有する。建物の南東隅から南東方向へのびる溝SD09100が排水溝に該当しよう。著しく重複するため、詳細不明である。

SH0995は5.8 m四方をはかり、4本柱で地床を持つ。SD09100はこの建物でも排水溝として機能しているようであった。

出土遺物は乏しいものの、弥生時代後期のもので占められ、該期の建物だと推定できる。

SH09102 (Fig.23)

第9次調査区の南東区で検出した。一部が第3次調査区にかかる (SH0310/93)。東西7.7 m、南北7.0 mと大きく、4本の主柱穴を持つ。検出面から床面までの深さは0.05 mと浅い。中央やや西側と東側に地床が有する。南辺に2条の周壁溝があるので2棟の建て替えがあったようであるが詳細不明である。また、周壁溝の立ち上がりには約1.8～2 mの間隔でピットが巡る。

出土遺物は少ないが、内湾する高杯が出土していることからやや新しく、弥生時代末から古墳時代初頭頃の建物だと判断できる。

SH09104-SH09107/108 (Fig.24～26)

第9次調査の南東区で検出した。SH09107/108が新しく、SH09104が古い。

SH09104は、ちょうど東半分を第4次で調査してい

たものである。今回の調査によって、東西10.9 m、南北9.5 mもの規模があることが判明した。三重県下では、四日市市市荒上遺跡のSH71の14.6 m×9.7 mに次いで、2番目の規模を有する建物である。

検出面からの床面までの深さは0.25 m以上あり、残りが非常に良好であった。他の堅穴建物の床面もここまで深いものはあまりなく、黒色系を呈する古墳時代や山中式の建物の埋土とは一見して異なる黄灰色シルト層を呈していた。主柱穴は4本で、建物規模に比例して大きく深い。南辺の中央に貯蔵穴を有する。床面には地床が6ヶ所確認できる点は注目される。また、建物の北西隅から北西方向に排水溝SD09175がのびる。

なお、第4次調査の際 (東半分) では見落としてしまっていたようであるが、第9次調査区では1.5 m等間でも明らかに壁柱穴が巡ることを確認した。

出土遺物は豊富で、特に中央焼土P09936周辺や主柱穴等で多かった。弥生時代後期前半の土器で占められる。この他に祭祀を示すような遺物は出土しておらず、出土遺物の点から建物の機能を類推させるようなものは確認できなかった。なお、北西主柱穴P09938や南西主柱穴P09923、中央の地床がから採取した炭化物について放射性炭素年代測定を実施した。いずれも紀元前1世紀から1世紀前半の値が示されている (第VI章参照)。

SH09107は大部分が第4次調査区になるが、東西8.0 m、南北も7.5 m前後であることが判明した。検出面にて周壁溝のみを検出した。4本の主柱穴を持ち、中央に地床を持つ。建物の南東隅に排水溝SD0466をもつ。

SH09108もSH09107と同様であるが、概ね7～8 m程度の方角を呈すが、詳細は不明な点が多い。検出面にて周壁溝のみを検出した。ほぼ同一地点でSH09107と重複することから、その建替えだろうと推測するが新旧関係を明らかにすることはできなかった。出土遺物は弥生土器のみであるので、概ね弥生時代後期頃の建物だと判断している。

SH09135/136 (Fig.27)

第9次調査区の南東区で検出した。2棟が重複しており、西側のSH09136が東側のSH09135より新しい。検出面から床面までの深さは0.05 mと浅かった。

SH09135は東西4.5 m、南北4.8 mをはかる。4本の主柱穴を持ち、中央に地床が有する。南辺中央に貯蔵穴があり、そこから北東方向へ排水溝SD09101がのびる。

SH09136は東西、南北とも4.5 m前後であろう。やや不整形であるが4本の主柱穴と地床を持つ。南辺の貯蔵穴と排水溝はSH09135と共通するかもしれない。

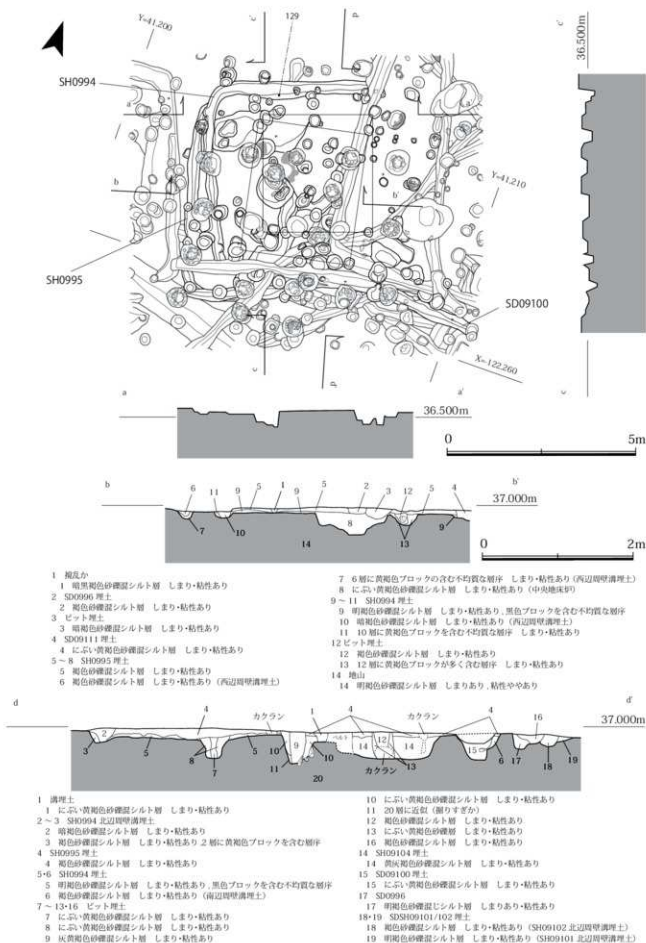


Fig.22 SH0994/95 平面・断面図 (S=1/100)

出土遺物は山中式の古い段階のもので占められるので、弥生時代後期の建物と判断できる。

SH09140 (Fig.28)

第9次調査区の南東区で検出した。東西7.0m、南北6.1mをはかる。検出面から床面までの深さは0.1～0.12mあった。4本柱の主柱穴をもち、中央に地床炉を有する。南辺の中央に土坑があり、そこから北方向へ排水溝SD09111がのびる。なお、SD09111はSH09104の上面で検出されている。

出土遺物には山中式の古い段階のものが出土しているの、弥生時代後期の建物だと判断できる。

SH1011 (Fig.29)

第10次調査区の東区から中区にかけて検出した。東西6.6m、南北5.8mをはかる。埋土は0.05m前後と浅かった。4本の主柱穴をもつもの、火処や貯蔵穴等は確認

できなかった。後述するSH1016/17の排水溝SD1022よりも新しい建物である。

出土遺物は乏しいが弥生土器のみであるので、弥生時代後期頃に建てられた建物であったのであろう。

SH1016/17 (Fig.30)

第10次調査区の東区から中区にかけて検出した。ほぼ同じ位置で2棟が重複する。西側のSH1017が古く、東側のSH0916が新しい。検出面から床面までの深さは0.05m以下と浅かった。

SH0916は東西、南北とも4.5mをはかる。4本柱の主柱穴を持つが、火処や貯蔵穴を確認することはできなかった。建物の北東隅から北方向へ排水溝SD1022がのびる。

SH1017は東西5m前後、南北4.5m程度のやや東西方向に長い長方形を呈する。4本の主柱穴を持つが、他の構造は詳細不明である。

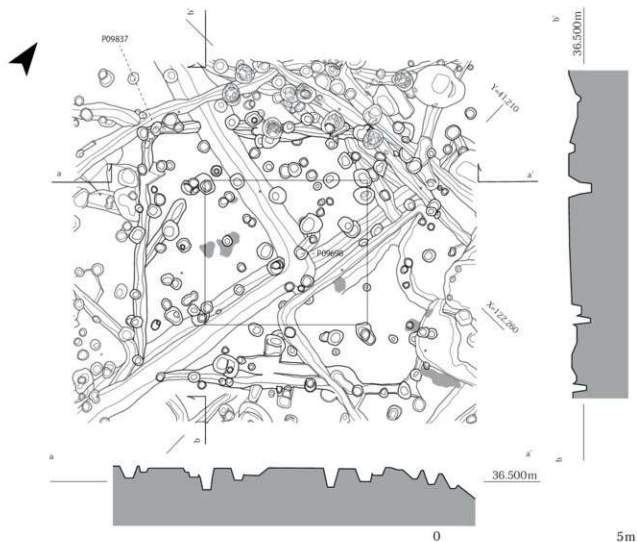


Fig.23 SH09102 平面・断面図 (S=1/100)

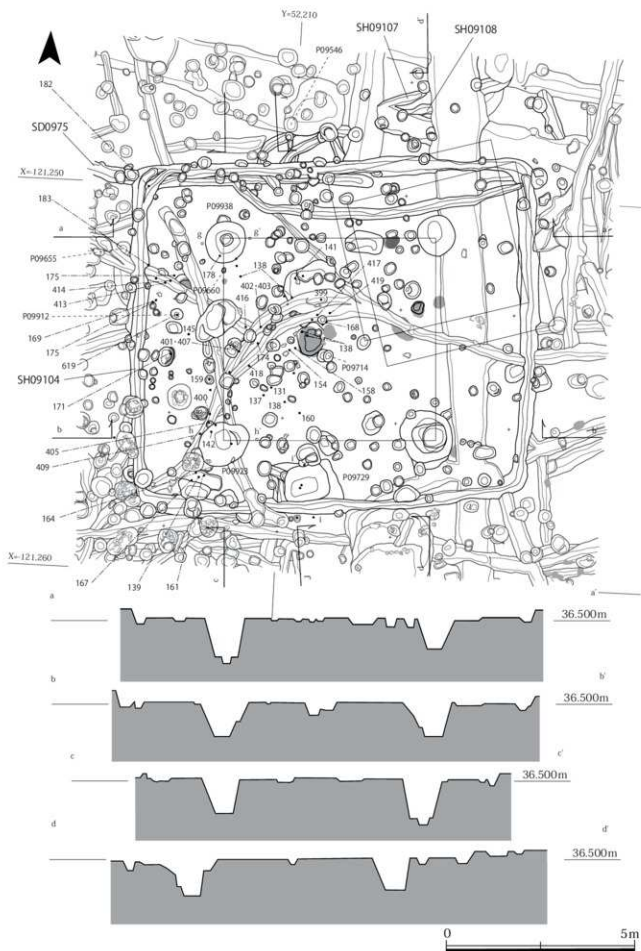
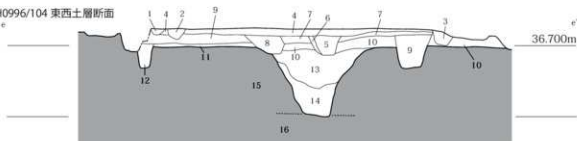


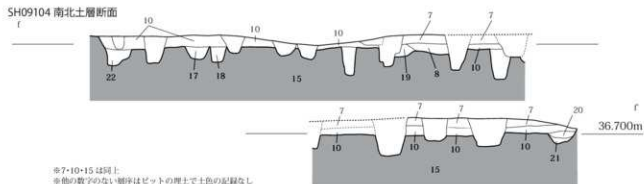
Fig.24 SH09104-SH09107/108 平面·断面图 (S=1/100)

SH0996/104 東西土層断面



- 1～3 ビット埋土 土色記録なし
 4 SH0996 埋土
 5-6 SD09106 埋土
 7 SH0996 粘土
 8 SD09111 埋土
 9 ビット埋土 土色記録なし
 10～12 SH09104 埋土
 11 黒灰色と黄褐色の不均質な層序 しまりあり、粘性ややあり（黒床か）
 12 黄灰色砂礫混シルト層 しまり・粘性あり、均質（西辺岡畔埋土）
 13-14 PO9923 埋土（下記岡畔参照）
 15-16 地山
 17 黒褐色砂礫混シルト層 しまりあり、粘性ややあり
 18 黄灰色砂礫混シルト層 しまりあり、粘性ややあり、土層を多く含む

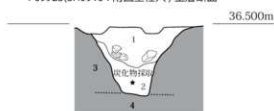
SH09104 南北土層断面



- ※7・10・15は図上
 中他の数字のない層序はビットの埋土で土色の記録なし
 17 SD0953 埋土
 18 SD0950 埋土
 19 SD09126 埋土
 20 8層に近似するが、8層よりも黒味が強い しまり・粘性
 あり、他の埋土と比べるとシルトが多く礫が少ない

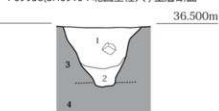
- 20～22 SH09104 岡畔埋土
 20 黒褐色砂礫混シルト層 しまりあり、粘性ややあり、黄褐色ブロックを多く含む不均質な層序（SH09104 南辺岡畔埋土）
 21 黄灰色砂礫混シルト層 しまり・粘性あり、均質、他の埋土に比べ礫の混入が少ない（SH09104 南辺岡畔埋土）

P09923(SH09104 南西主柱穴) 土層断面



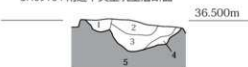
- 1-2 P09923 埋土
 1 黒褐色砂礫混シルト層 しまり・粘性あり、礫を含む
 2 黄灰色粘質土 しまりあまりなし、粘性強い
 3-4 地山
 3 明黄褐色砂礫混シルト層 しまり・粘性あり
 4 黄灰色礫層 しまりあり、粘性なし

P09938(SH09104 北西主柱穴) 土層断面



- 1-2 P09938 埋土
 1 黒褐色砂礫混シルト層 しまり・粘性あり P09923 より礫が少ない
 2 黄灰色粘質土 しまりあまりなし、粘性強い、P09923 より粘性強い
 3-4 地山
 3 明黄褐色砂礫混シルト層 しまり・粘性あり
 4 黄灰色礫層 しまりあり、粘性なし

SH09104 南辺中央土坑土層断面

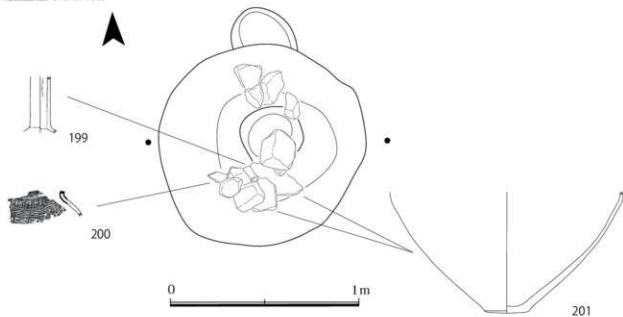


- 1 SH09104 南辺岡畔埋土
 1 黒褐色砂礫混シルト層 しまりあり、粘性ややあり、炭化物を含む
 2-4 南辺中央土坑埋土
 2 黒褐色砂礫混シルト層 しまり・粘性ややあり、黄褐色ブロックを含む不均質な層序
 3 黒褐色砂礫混シルト層 しまりあり、粘性ややあり、1層に近い炭化物が含まれない
 4 黄褐色砂礫混シルト層 しまりややあり、粘性あり、黒褐色ブロックを含む不均質な層序
 5 地山
 5 明黄褐色砂礫混シルト層 しまり・粘性あり

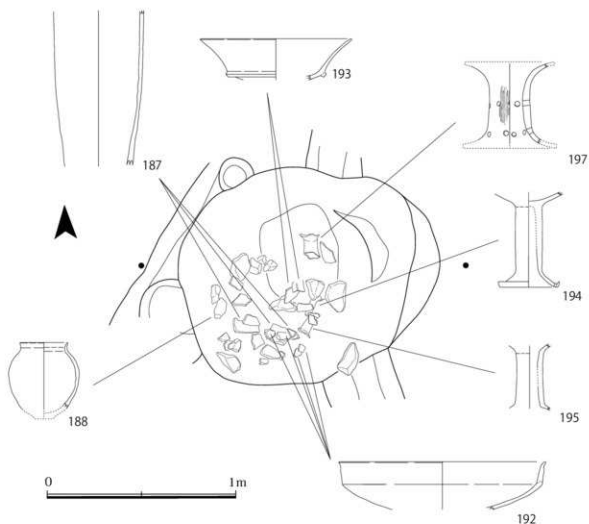
0 2m

Fig.25 SH09104 土層断面図 (S=1/50)

北西主柱穴 (P09938)



南西主柱穴 (P09923)



土器の縮尺は S=1/6

Fig.26 SH09104 主柱穴遺物出土状況 (S=1/20)

ともに出土遺物は乏しい。僅かに須恵器を含むものの多くは弥生土器であり、おそらく弥生時代後期頃の建物だと推測される。

SH1031・SH1040/60 (Fig.31)

第10次調査区の中区から西区にかけて検出した。SH1040とSH1060は切り合い関係にあり、SH1040が新しいことが分かるが、SH0931とは切り合い関係にない。

ただし、3棟とも後述するSH1032-34やSH1051、SH1073よりも新しいことは判明している。

SH1031は東西9.4m、南北9.2mと規模の大きい建物である。埋土は存在せず、検出面で周壁溝を検出したのみであった。4本の主柱穴を持ち、南辺の中央と想定される位置に貯蔵穴を有する。火処はSX1026で壊されているために確認できなかった。なお、建物の北西隅から北西方向にむかって排水溝SD1062が附属する。弥

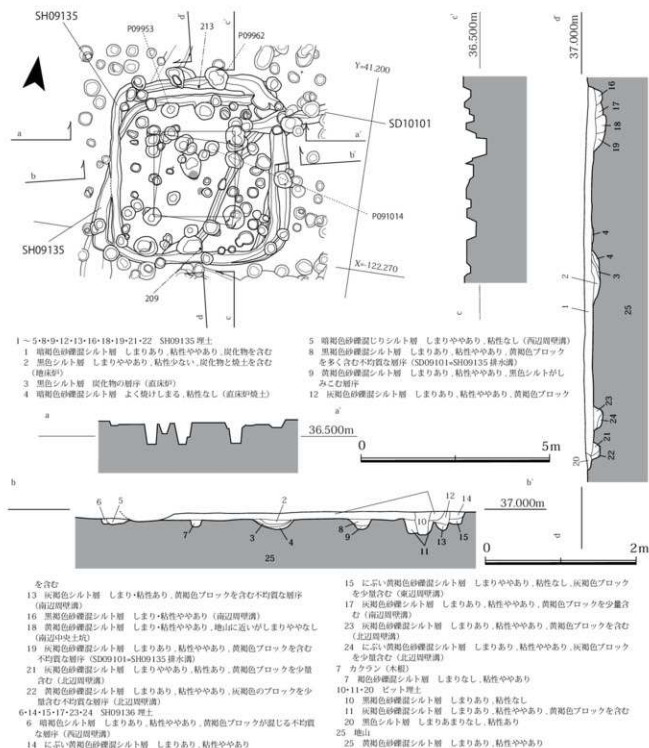


Fig.27 SH09135/136 平面・断面図 (S=1/100・1/50)

SH1040は東西6.4mある。南辺は検出でできなかったので不詳であるが、6.5m前後と推定される。残りが悪く、検出面で周壁溝等を検出したのみである。4本の

SH1060 は SH1040 のやや西にずれた位置で検出した。東西が 6.5 m ある。南北は不明であるが、6 m 程度であっ

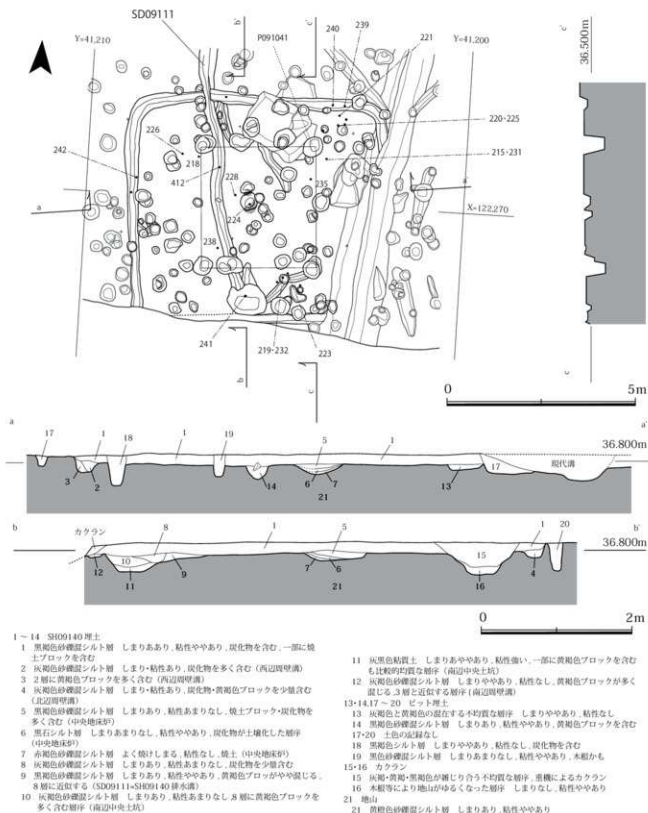


Fig.28 SH09140 平面・断面図 (S=1/100・1/50)

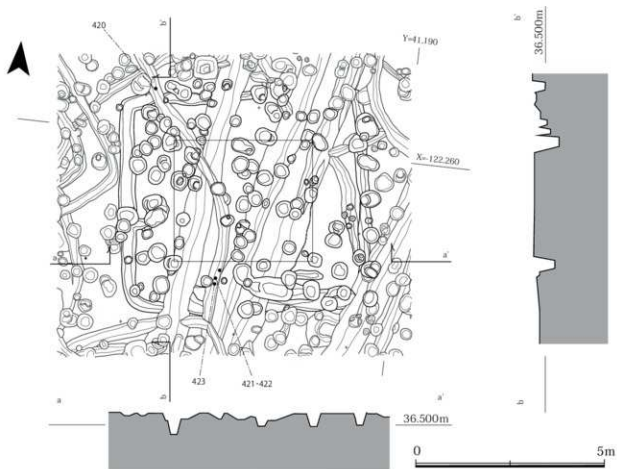


Fig.29 SH1011 平面・断面図 (S=1/100)

たのであろう。埋土はなく、検出面で周壁溝等を確認したのみである。4本の主柱穴を確認した以外は不明確である。なお、SH1040の排水溝SD1045は、SH1060から続けて機能していた可能性が高い。出土遺物は乏しいが、弥生後期頃の建物として問題ないだろう。

SH1032/33/34 (Fig.32)

第10次調査区の中区で検出した。前述したSH1031やSH1040/60と重複するが、これよりも古い建物である。3棟同じ場所で建替えが行われたものであり、SH1033よりSH1034が古いことを確認している。いずれも埋土は存在せず、検出面で周壁溝等を確認したにとどまる。

SH1032は東西4.7m、南北4.3mと小振りである。4本の主柱穴

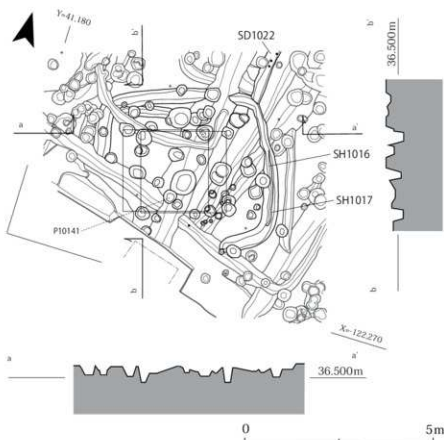


Fig.30 SH1016/17 平面・断面図 (S=1/100)



Fig.31 SH1031-SH1040/60 平面・断面图 (S=1/100)

を持つ。火処、貯蔵穴は確認できていない。西隅から西方向へ排水溝 SD1041 が付随する。

SH1033/34 はほぼ同一場所での建て替えであり、東西 3.8 m、南北 3.3 m と小さい。建物の北隅から北方向への

びる排水溝が SD1037 と SD1039 の 2 本あるが、どちらの溝がどちらの建物に対応するのかはっきりと分からなかった。

SH1033 として取り上げた遺物の中に 1 点のみ古墳時代の土師器高杯があるが、これは本来 SX1026 に伴うものと考えられる。それ以外は弥生土器のみであるので、建物自体は弥生時代後期頃のものと考えてよいだろう。

SH1051 (Fig.33)

第 10 次調査区の西区で検出した。一部は第 1 次調査区にかかる。西辺及び南辺が検出されなかったの、詳細な規模は不明であるが、東西、南北とも約 5 m と想定される。検出面から床面までの深さは 0.07 m 前後あった。北側の 2 ヶ所の主柱穴を確認できているので、おそらく 4 本柱になるであろう。中央やや北側で焼土が僅かに残っていた。

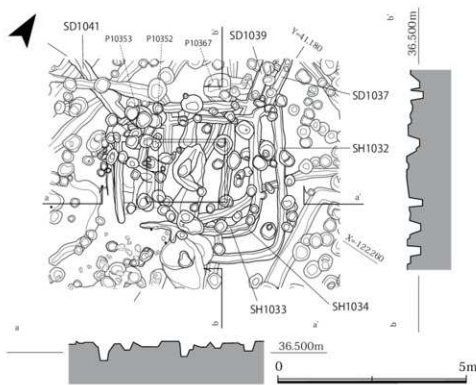


Fig.32 SH1032/33/34 平面・断面図 (S=1/100)

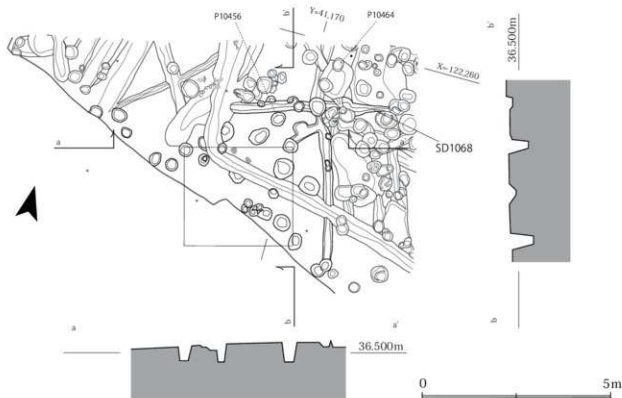


Fig.33 SH1051 平面・断面図 (S=1/100)

出土遺物は弥生土器や須恵器が混じっていたが、切り合い関係から弥生時代後期頃のSH1031より古い建物であることは間違いない。

SH1065 (Fig.34)

第10次調査区の西区から北西区にかけて検出した。SH1073やSD1059 (SH1032排水溝)、SH1070と重複する。切り合い関係からSH1073及びSD1059が古く、SH1065、SH1070の順で新しくなる。

SH1065は東西4.8m、南北4.6m程度のやや小型の建物である。検出面から床面までの深さは、南側の深いところで0.05m、北側では周壁溝を確認した程度であった。4本の主柱穴を持ち、南辺の西側に貯蔵穴を持つ。火焔は確認できなかった。

出土遺物には弥生土器と須恵器が混じるが、弥生時代後期のSH1070よりも古い建物であるので、それ以前の建物であろう。

SH1069/164/165-SH1080 (Fig.35)

第10次調査区の北西区で検出した。SH1069は1棟として調査したが、最終的に南西隅では3条の周壁溝が確認できたので、3棟以上の建て替えがあったものと考えられる。SH1069は東側の建物とし、西側をSH10164、真ん中をSH10165とする。真ん中のSH10165が最も古く、SH10164 (西側)、SH1069の順で新しくなる。また、SH1080はそれらのいずれよりも古い建物である。

SH1069は東西5.3mで、南北は5.5m前後をはかる。検出面から床面までの深さは0.12～0.15mあり、比較的良好に残っていた。調査区外である北西を除く3ヶ所で主柱穴を確認している。また、中央に地床を持ち、南辺中央に貯蔵穴を有する。SH10164、SH10165の規模は不明な点が多いが、概ねSH1069と同じ5.5m前後になろう。同一地点での建替えであり、出土遺物から弥生時代後期の建物であると考えられる。

SH1080は東側の3分の1程度を検出した。南北は6.6mある。検出面からの深さは0.1m以上あり、比較的良好に残っていた。東側の主柱

穴を2ヶ所確認した。周壁溝の肩部には1～1.5mの間隔で壁柱穴が巡る。出土遺物は弥生土器のみで、かつSH1069より古いので、弥生時代後期の建物として問題ない。

SH1070 (Fig.36)

第10次調査区の北西区で検出した。SH1065より新しく、SH1069やSH1086、SH1095よりも古い。

東西5.5m、南北5.2mをはかる。検出面から床面までの深さは0.1mあり、残りがよかった。4本の主柱穴を持ち、南辺中央に貯蔵穴を持つ。中央やや北に地床を有する。建物の南東隅から東方向へ排水溝SD1082がのびる。

貯蔵穴から良好な土器が出土しており、弥生時代後期の建物だと理解できる。

SH1073 (Fig.37)

第10次調査区の西区で検出した。西辺をSD1061として調査したが、最終的にはSH1073の1棟となった。そのためSH1073として報告する。SH1065よりも古い建物であることは確認できた。

東西5.0m、南北4.7mをはかる。埋土は0.05m前後あったが、重複が著しく不明な点が多い。4本の主柱穴

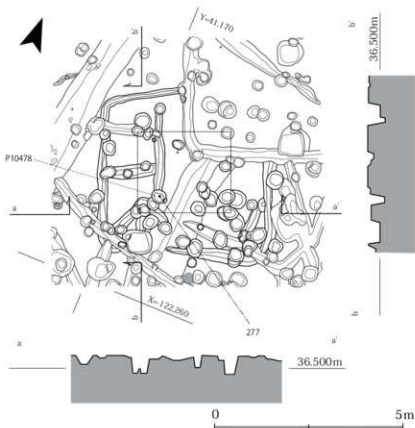


Fig.34 SH1065 平面・断面図 (S=1/100)

を持ち、中央やや北寄りに地床が有する。建物の北東隅から北方向へ排水溝 SD1077 がのびる。

出土遺物はほとんどく時期不明であるが、切り合い関係から弥生時代後期の建物だと理解できる。

SH1086/95 (Fig.38)

第10次調査区の北西区と第9次調査区の北西区にまたがって検出された。北側を SH1095、南側を SH1086 としたが、さらに別の建物が重複している可能性もある。両者ともに SH0922/23/24 等や SH1070 よりも新しい建物である。埋土は存在せず、検出面にて周壁溝等が確認された程度である。重複が著しく調査区がまたがること等から、遺構番号が煩雑なので以下に整理した。

建物① SH0918-SH0916-SH1042-SD1078-SH1086
→ SH1086

建物② SH0919-SD1076-SH1095 → SH1095

建物①の SH1086 は東西 7.0 m、南北 6.6 m をはかる。4 本の主柱穴を持つ。火処や貯蔵穴、排水溝は確認できなかった。建物②の SH1095 は東西 6.0 m、南北 5.6 m をはかる。4 本の主柱穴を持つ。火処や貯蔵穴、排水溝は確認できなかった。

いずれも出土遺物に乏しいが、切り合い関係から弥生時代後期頃の建物として問題ない。

SH1089-SH1096-SH1099 (Fig.39)

第10次調査区の北区で検出した。3 棟が重複しており、西から SH1099、SH1089、SH1096 とする。東側の SH1096 が最も古く、次いで SH1099 となり、真ん中の SH1089 が新しい。ともに埋土は存在せず、検出面で周壁溝等を確認した程度であった。

SH1099 は東半分が不詳であるが、4 m 前後の小型となろう。4 本の主柱穴と南西隅から排水溝 SD1085 を持

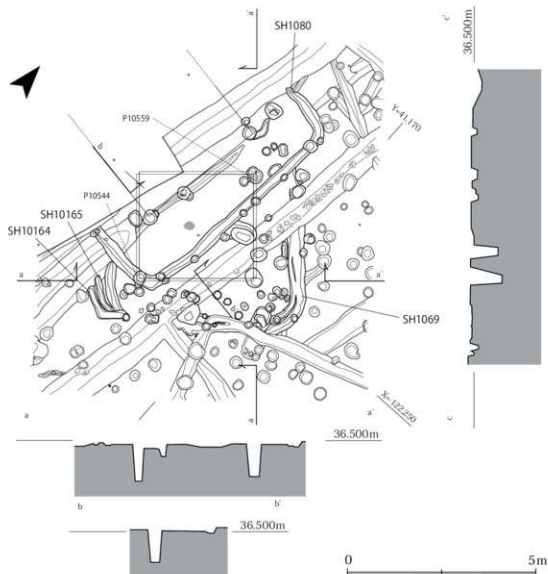


Fig.35 SH1069/164/165-SH1080 平面・断面図 (S=1/100)

つことを確認した。火処や貯蔵穴等は不明である。

SH1089は東西、南北ともに4.5mをはかる。4本の主柱穴を持つ。他の火処や貯蔵穴等は確認できなかった。出土遺物に6世紀代の須恵器を含むことから、古墳時代後期の建物である可能性が高い。

SH1099は東西6.2m、南北5.7mをはかる。4本の主柱穴を持ち、南辺中央に貯蔵穴をもつ。建物の北東隅から北方向へ排水溝SD10103が付随する。出土遺物は弥生土器で占められ、概ね弥生時代後期の建物と想定できる。

SH10101 (Fig.40)

第10次調査区の北区で検出した。西辺をSH10104として調査したが、SH10101と同一遺構であることが判明したため、SH10101として報告する。SH1089/99やSH10111、SH10113/115、SH10106/116等と重複する。

SH10101はSH1099よりも新しいが、他のいずれの建物より古いことを確認している。

東西8.0m、南北7.5mをはかる。埋土は存在せず、検出面で周壁溝等を検出したのみである。4本の主柱穴を持ち、中央に地床柱を有する。周壁溝の肩部に約1.5mの間隔でピットが巡ることから、壁柱穴を持つ構造だと理解できる。

出土遺物には須恵器が混じるが、SH10106/116等からの混入だと判断され、概ね弥生時代後期の建物だと判断できる。

SH10106・SH10111・SH10116・SH10120 (Fig.41)

第10次調査区の北区から北端区にかけて検出した。SH10113/115やSH10101等と重複する。4棟の内、古い建物はSH10111とSH10120であるが、両者の新

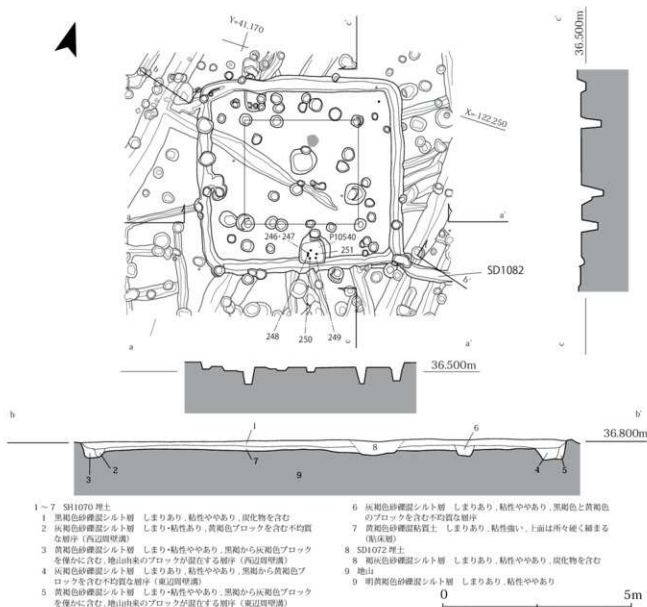


Fig.36 SH1070 平面・断面図 (S=1/100・1/50)

旧関係を確認することができなかった。調査時には、SH10120の西辺が検出できなかったことからSH10120の方が古いことも考えられるが、見落としている可能性も考えられる。なお、SH10106、SH10116の順に更に新しい建物となる。

SH10120の規模は判然としなが、推定で6.5m四方程度である。埋土は存在せず、周壁溝等を検出したのみである。主柱穴は4本だと推定されるが、北西の柱穴は不明確であった。ちょうど攪乱されている部分に重複していたのかもしれない。その他の火処や貯蔵穴、排水溝等は明確でなかった。出土遺物は弥生土器のみであるので、概ね弥生時代後期頃の建物として想定できる。

SH10111は直径6.0mをはかる。検出面からの深さは0.1m前後あり、比較的良好に残っていた。やや角ばった円形であり、円形とするか方形とするか判断に悩む形態をしている。主柱穴は5本確認し、中央に地床炉を持つ。北東から北方向へ排水溝SD10124がのびる。他の方形の建物の主柱穴が4本柱の構造であるのに対し、円形建物が5本柱の構造を持つので、ここでは円形建物として報告する。埋土が褐色砂礫層を呈しており、一見して他の黒色土の埋土である建物とは異なっていた。出土遺物には山中式であるので、弥生時代後期の建物として認識できる。

SH10106は東西、南北とも4.8mと比較的小振りである。埋土は存在せず、周壁溝等を検出したのみである。4本の主柱穴を検出したが、火処や貯蔵穴は確認できなかった。建物の北西隅から北西方向に排水溝SD10109がのびる。出土遺物は弥生土器の小片が多いが、埋土の様子や建物の軸方向からSH10116に建て替えられる直前段階の建物だと理解できるので、古墳時代中～後期頃の建物だと想定できる。

SH10116は、東西4.7m、南北5.0mをはかる。検出面から床面までの深さは、0.05mと比較的浅かった。4本の主柱穴を検出したが、火処や貯蔵穴は確認できなかった。建物の北西隅から北方向に排水溝SD10126がのびる。なお、SD10126はSH10111の排水溝であるSD10124と重複しているが、SD10126の方が新しい溝であることを確認している。周壁溝の出土遺物に須恵器の杯等があることから、古墳中期から後期頃の建物だと理解できる。

SH10113/114/115 (Fig.42)

10次調査区の北区から北端区にかけて検出した。SH10101やSH10111、SH10106/116等と重複する。3棟がほぼ同じ位置で建て替えられているが、SH10114が

古く、SH10113がそれより新しいことしか分らなかった。なお、SH10115は切り合い関係にない。これら3棟はSH10101やSH10111より新しく、古墳時代のSH10106/116よりは古いことが確認できている。埋土は0.02～0.03mと僅かに残っていたが、平面で重複関係を捉えることはできなかった。

SH10113の規模は明確でない。東西、南北とも8m前後あるようで、大型の建物となりそうである。SH10114も同様である。4本の主柱穴を持ち、南辺の中央に貯蔵穴を有する。火処は認められない。

SH10115は東西7.2m、7.0mをはかる。4本の主柱穴を持ち、南辺中央より西側に貯蔵穴を有する。火処は確認で

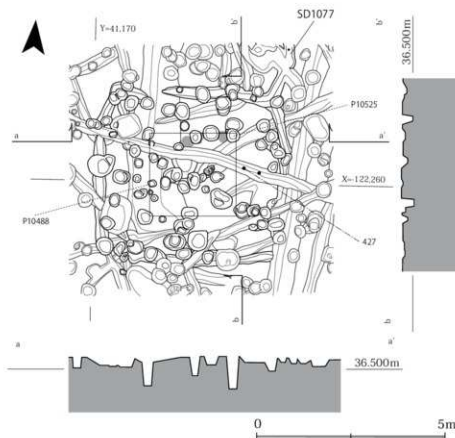


Fig.37 SH1073 平面・断面図 (S=1/100)

きなかった。

3棟とも弥生土器の片しか出土しておらず帰属時期は不明確であるが、概ね弥生時代後期頃の建物として理解できる。

SH10107/118 (Fig.43)

第10次調査区の北端区で検出した。同じ位置で2棟が建て替えられており、西側の古い方をSH10118、東側の新しい方をSH10107とした。また、SH10127よりも新しく、SH10111の排水溝SD10124より古いことは確認できた。検出面から床面までの深さは、残りのよい所で0.15mあった。

SH10107は、東西、南北とも5.3mをはかる。4本の

主柱穴を持ち、中央に地床炉を有する。南辺中央には貯蔵穴があり、そのことから建物の北東隅にむかって排水溝SD10125がのびている。

SH10118は、東西5.6m、南北5.3mをはかる。柱穴はSH10107の西側に隣接した位置に設けられるが、火処や貯蔵穴、排水溝はSH10107のものをそのまま利用しているようである。

出土遺物は弥生土器のみである。山中式のSH10111よりも古いので弥生時代後期の建物として問題ない。

SH10127 (Fig.44)

第10次調査区の北端区で検出した。SH10107/118と重複するが、それらよりも古い建物である。埋土は存

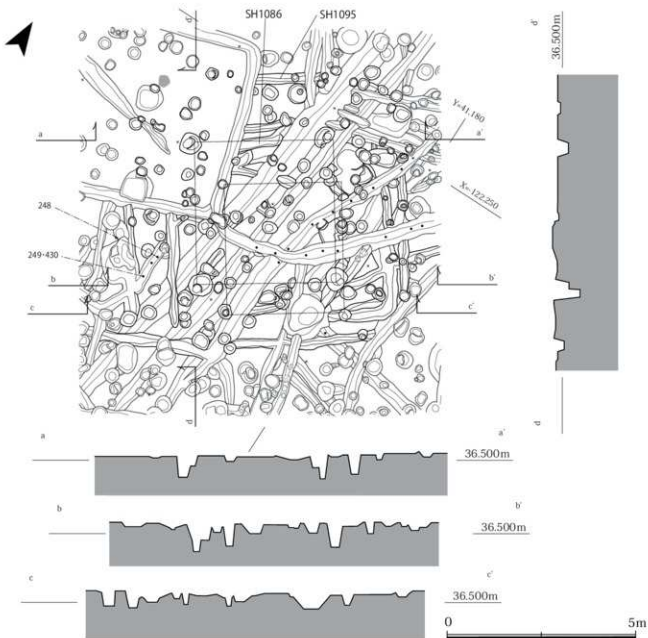


Fig.38 SH1086/95 平面・断面図 (S=1/100)

在せず、検出面にて周壁溝等を確認したのみである。

北側半分は土砂の流失により遺存していないので不明であるが、主柱穴の位置から南北6.5 m前後になると想定される。東西は7.0 mある。削平が著しいため、4本の主柱穴の他、火処や貯蔵穴、排水溝等は一切不明である。

出土遺物には弥生土器と須恵器があるが、切り合い関係から弥生時代後期末で遡る建物だと考えられる。

SH10156/157 (Fig.45)

第10次調査区の北端区で検出した。北側は土砂の流失によって残っておらず、南側の一部を確認したに留まる。2棟が重複しており、南側をSH10156、北側をSH10157とする。ともに埋土は存在せず、検出面にて周壁溝等を確認したのみである。直接切り合い関係がないので、新旧関係は不明である。

SH1056の規模は不詳であるが、東西、南北とも5 m前後だと推定できる。南辺の中央に貯蔵穴を持ち、中央に地床⁶を有する。排水溝等は不明である。

SH10157は東西5.5 m前後、南北不明である。南側の主柱穴2ヶ所と貯蔵穴を確認した以外は不明である。

いずれも出土遺物がほとんどないため、時期を特定することができなかった。

SH10138/144/147/148/149 (Fig.46)

第10次調査区の西扯張区（西2区）で検出した。少なくとも5棟以上が重複していることを確認しているが、大部分が調査区外へと続くため詳細不明な点が多い。SH10138→SH10144とSH10148とがSH10147/149よりも古いことを確認している。SH10147/149は当初1棟の建物として理解していた。掘削後周壁溝が2条あ

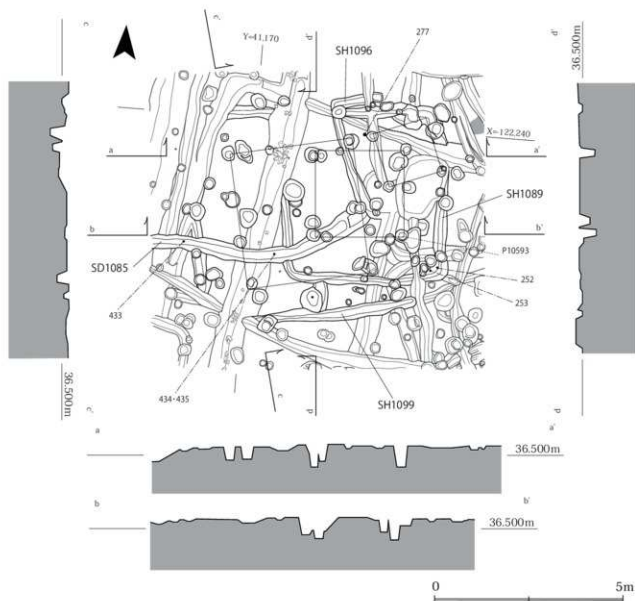


Fig.39 SH1089・SH1096・SH1099 平面・断面図 (S=1/100)

ることから、別の建物と理解し、南側をSH10147、北側をSH10149とした。なお、このSH10147/10149の新旧関係はきちんと把握することができなかった。

SH10138は西側が調査区外のため詳細不明であるが、南北は7 m前後と比較的大きくなりそうである。検出面から床面までの深さは0.1 mあり、比較的深く残っていた。南東の支柱穴を1ヶ所確認したのみで、他の構造は不明である。弥生土器のみが出土しており、概ね弥生時代後期の建物と想定できる。

SH10144も大部分が調査区外のため、詳細不明である。埋土は存在せず、検出面にて周壁溝等を検出したのみである。南北の規模は5～5.5 m程度ありそうである。南東の支柱穴1ヶ所のみ検出した。出土遺物も少ないが、弥生土器のみであることから、概ね弥生時代後期の建物と推定される。

SH10147/149は同一地点における建て替えである。大部分が調査区外になるため、詳細は不明な点が多い。検出面から床面までの深さは、0.1～0.05 m程度である。

南東隅の支柱穴1ヶ所のみを確認しただけで、南北間の規模も分からない。弥生土器のみが出土していることから、概ね弥生時代後期頃の建物だと推定される。

SH10148は、東西4.5 m程度、南北3.8 mと小規模な建物である。当初、南辺をSD10148として調査したが、全体的な構造から竪穴建物として捉え直した。埋土は存在せず、周壁溝等を検出したのみである。支柱穴は北西を除く3ヶ所で確認したが、火処や貯蔵穴は確認できなかった。建物の北東隅から北東方向へ排水溝がのびる。出土遺物は弥生土器のみであるので、概ね弥生時代後期頃の建物と推定している。

2 溝

これまでの調査同様、溝が多数検出されている。特に、竪穴建物北東ないし北西隅や南辺中央土坑から派生し、北東ないし北西方向へのびていく。ちょうど、第9次調査区の北東区周辺が最も標高の高い場所であり、ここから緩やかに低くなっていく北東ないし北西方向へ溝がの

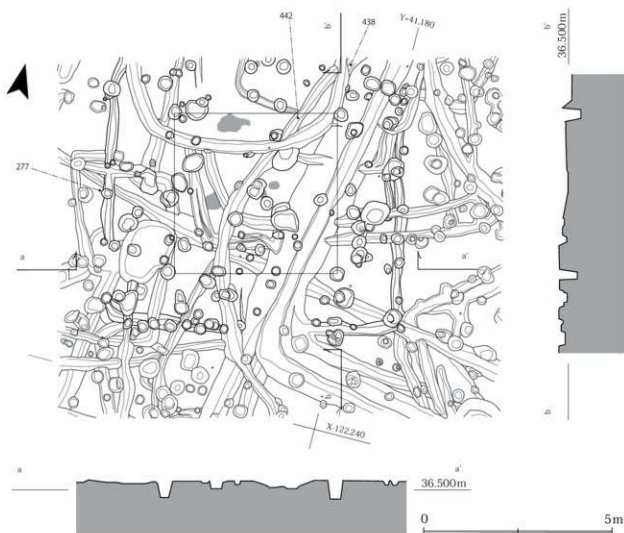
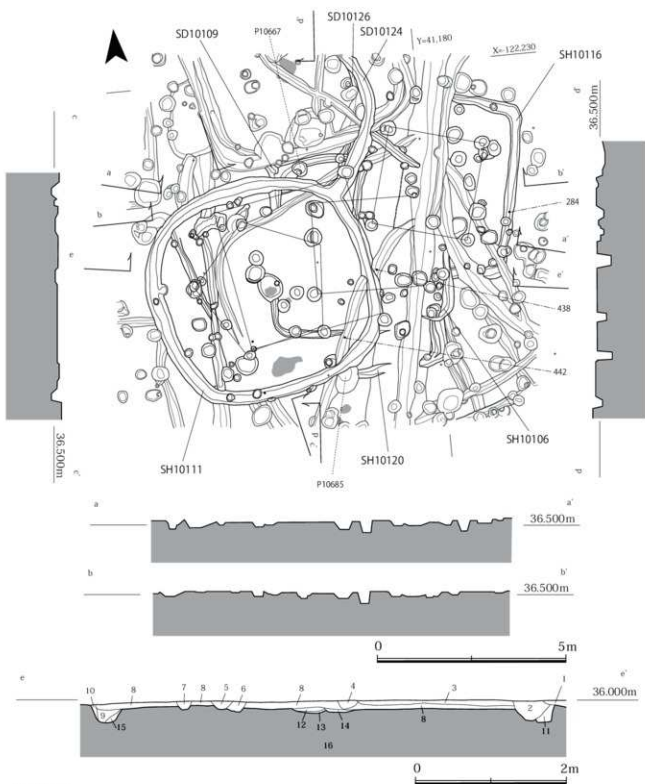


Fig.40 SH10101 平面・断面図 (S=1/100)



- 1 現代堆土
- 2 SD1098 埋土
- 3 黒褐色砂礫混シルト層 しまりあり、粘性ややあり
- 3-4 SH10106 埋土
- 3 黒褐色砂礫混シルト層 しまり・粘性ややあり、炭化物を含む
- 4 暗褐色砂礫混シルト層 しまり・粘性ややあり、炭化物を含む (西辺埋土)
- 5 SD10102 埋土
- 5 黒褐色砂礫混シルト層 しまりややあり、粘性あり
- 6 SH10115 埋土
- 6 黒褐色砂礫混シルト層 しまりあり、粘性ややあり、炭化物を少量含む (西辺埋土)
- 7 SH10113 埋土
- 7 黒褐色砂礫混シルト層 しまりあり、粘性ややあり、炭化物を少量含む (西辺埋土)

- 8-15 SH10111 埋土
- 8 黒褐色砂礫混シルト層 しまりあり、粘性ややあり、比較的均質、炭化物を含む
- 9 黒褐色砂礫混シルト層 しまりあり、粘性ややあり、炭化物を含む (埋土)
- 10 9層に黄褐色ブロックを多く含む層序 しまりあり、粘性やや強い (埋土)
- 11 黒褐色砂礫混シルト層 しまりあり、粘性ややあり、黄褐色ブロックを含む (埋土)
- 12 黒褐色砂礫混シルト層 しまり・粘性ややあり、炭化物を含む (中央地床)
- 13 暗褐色砂礫混シルト層 均けしめる、粘性なし (中央地床)
- 14 暗褐色と黄褐色が混在する不均質な層序 しまりあり、粘性ややあり、炭化物を少量含む
- 15 9層に黄褐色ブロックを多く含む不均質な層序 しまりあり、粘性強い
- 16 地山
- 16 黄褐色砂礫混シルト層 しまりあり、粘性ややあり

Fig.41 SH10106-SH10111-SH10116-SH10120 平面・断面図 (S=1/100・1/50)

びいていく。このため、これらの溝は排水が目的であったと考えられる。なお、従来ははっきりと認識できていなかったが、これらの排水溝には、深くしっかりとした中心的な溝があることが分かってきた。また、その中心的な排水溝にいくつかの排水溝が副次的に接続していることも明らかになってきた。

また、竪穴建物に付随する溝以外にも、中世の道路側溝と推定される溝や地割溝を検出している。いずれも、眼下の沖積にある十宮以西に施工される条理地割であるN-10°・Eの方位に一致しているおり、この方位が現在の筆境まで踏襲されている点は興味深い。

(1) 竪穴建物に付随する溝

SD08217・08218 (Fig.10)

第8次調査区の竪穴建物SH08215/216の排水溝である。建物の北東隅と南辺中央土坑から派生している。

SD08217は浅く、北東隅から4 m程度で消失してしまっている。SD08218は建物の中央を貫通し1 mほどで、SD08219=SD1098/117に接続している。

SD0925・SD0926 (Fig.11)

第9次調査区と第10次調査区の境で検出した、SH0903/10/11等に付随する排水溝である。ともに検出面からの深さは、深い所で0.15～0.2 m程度である。

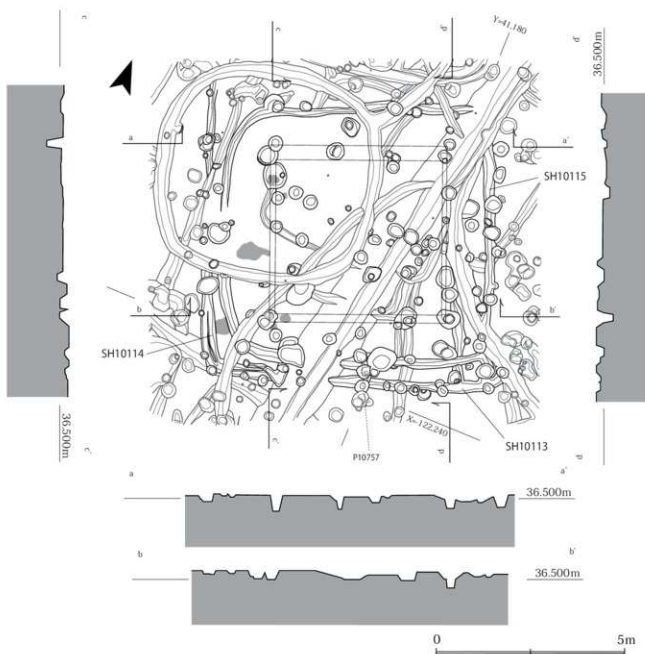


Fig.42 SH10113/114/115 平面・断面図 (S=1/100)

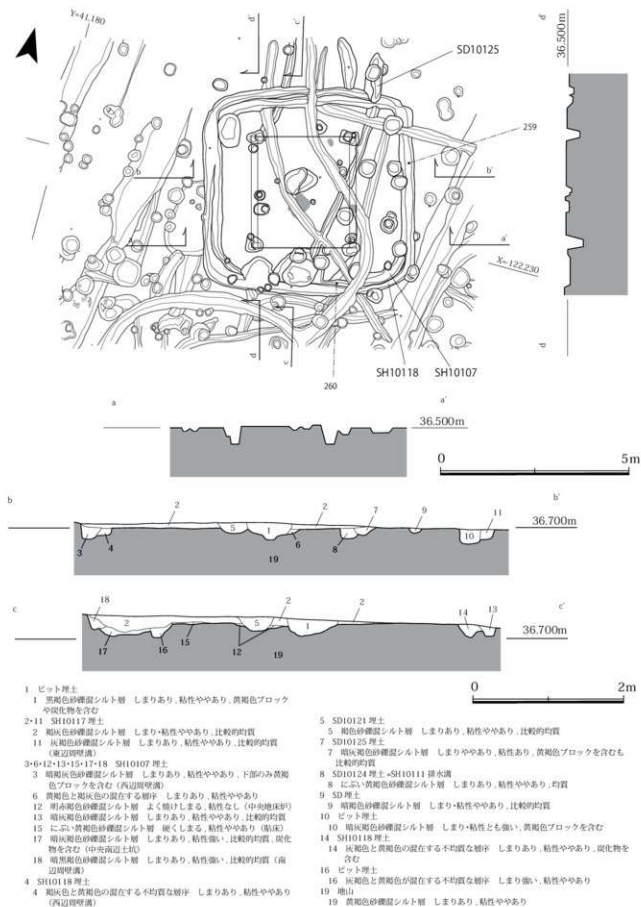


Fig.43 SH10107/118 平面・断面図 (S=1/100・1/50)

SH0924の南東隅から南西方向にのびる排水溝をSD0925とした。建物の南東隅から約2 m南東方向へのびた先で、SD0909に接続している。

SD0926はSH0910/11の南東隅からの排水溝で、同様に南東方向に2 mほどのびてSD0909と接続する。ともに弥生土器のみが出土しており、建物の年代と齟齬がない。

SD1083 (Fig.11)

第9次調査区と10次調査区のちょうど境で検出した。SH0904/24の北西隅から北西方向へのびる排水溝である。中世の道路状遺構によって失われているため接続状況は不明であるが、10 m程度西西北にのびた先でSD1085に接続するのであろう。検出面からの深さは0.2 mと深く、しっかりとした作りである。

年代は定かにできないが、弥生土器ばかりが出土しており、建物の年代と齟齬がない。

SD1097 (Fig.11)

第9次調査区と10次調査区のちょうど境で検出した。SH0903の北西隅から北方向へのびる排水溝である。湾曲しながら北へ6 mのびた先でSD0908=1098に合流している。検出面からの深さは、深い所で0.1 m程度である。弥生土器のみが出土しており、建物の年代を齟齬はない。

SD0908=1098・SD0933 (Fig.12)

第9次調査区のSH0947等の北辺中央やや西から北西方向へのびる排水溝である。一部重複するが、西側のSD0908=SD1098が新しい。中心的な排水溝であるSD0909=1082と交差しており、平面ではそれよりも古い溝であること認識して調査したが、出土遺物の点から逆であった可能性が高い。

建物の縁から北西方向へ、20 m以上湾曲しながらのびてSD1098/117へと接続する。検出面からの深さは0.15 mほどあり、逆台形のしっかりとした溝である。出土遺物は比較的多く、廻間式まで下るものを含んでいる。

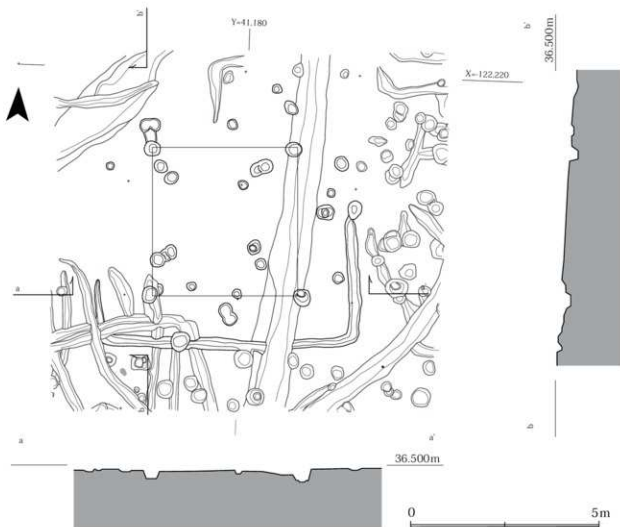


Fig.44 SH10127 平面・断面図 (S=1/100)

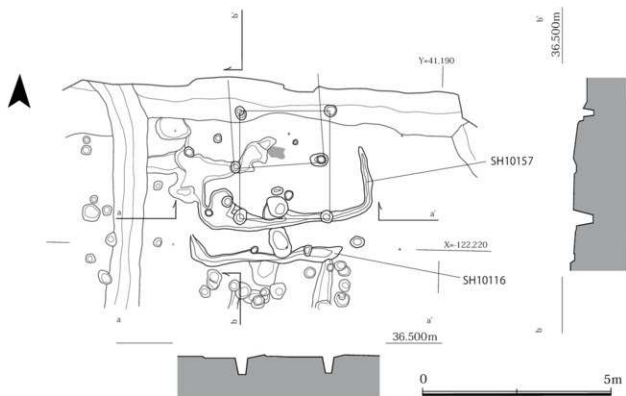


Fig.45 SH10156/157 平面・断面図 (S=1/100)

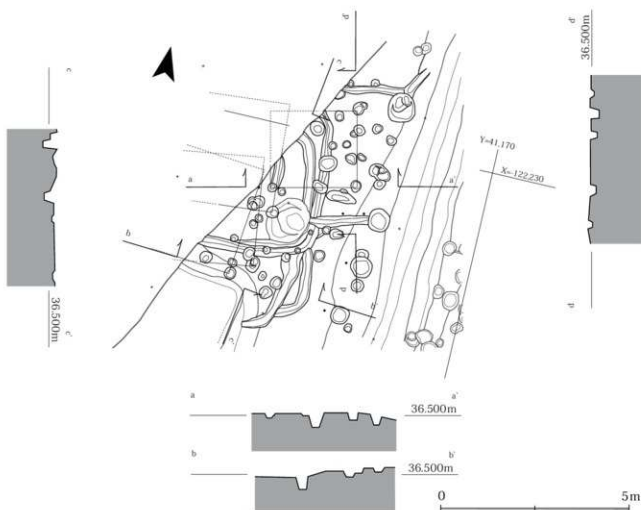


Fig.46 SH10138/144/147/148/149 平面・断面図 (S=1/100)

SD0972 (Fig.14)

第9次調査で検出したSH0960/80の北辺中央から派生する排水溝である。北西から北方向へ湾曲しながら10 mほどのび、北端でSD0909=08221と接続する。深い所で検出面から0.2 mほどある。出土遺物から山中式頃の溝である。

SD09161 (Fig.17)

第9次調査区のSH0966の南辺中央土坑から派生する排水溝である。北北西へ23 m以上のびる。第8次調査区でSD0899とした溝と同一遺構である。検出面からの深さは、深い所で0.2 mほどあるしっかりとしたものである。出土遺物はほとんどなかったが、弥生時代後期の建物に伴う溝である。

SD0936 (Fig.19)

第9次調査区と第10次調査区の境で検出した、SH0976=1012の北西隅からのびる排水溝と推定できる。検出面からの深さは0.2 mと深かったが、断面形状は他の排水溝のような逆台形ではなく、細く深くV字状に切り込んでいた。北西方向に約11 mのびたの先はSD1015と接続している。遺物はほとんど出土しなかった。

SD0964 (Fig.19)

第9次調査区と第10次調査区の境で検出した円形建物SH0974の中央土坑SK0984から北方向へ派生する排水溝である。北方向へのび、第8次調査区のSD08108と更に続き、総延長38 m以上をはかる。深い所で検出面から0.25 mある。出土遺物は弥生土器のみであるが少なく、不明点が多い。

SD09125 (Fig.21)

第9次調査区のSH0982=93の南東隅から派生する排水溝である。南東方向へ5 mほどのびた後、SD09111と接合するようである。検出面からの深さは、深い所で0.25 mと深くしっかりとっている。出土遺物は乏しいが、弥生時代後期の建物に付随する溝である。

SD09106 (Fig.21)

第9次調査のSH0981=87の南東隅からのびる排水溝である。南東隅から9 mほど南南東へびた後、SD09100と合流する。検出面からの深さは、深い所で、0.3 mほどある。出土遺物から弥生時代後期のものが出土している。

SD09100 (Fig.22)

第9次調査区のSH0994/95の南東から派生する排水溝である。建物の南東隅から東へ9 m以上のびている。検出面からの深さは、深い所で0.25 mをはかる。出土遺物は弥生土器の薄片のみと乏しいが、弥生時代の建物に付随する溝である。

SD0975 (Fig.24)

第9次調査区のSH09104の北西隅から派生する排水溝である。第8次調査区でSD08107としていた溝と同一である。SH09104から北西へ15 mほどのびた後、円形建物からの排水溝SD0964と重複する。検出面からの深さは、深い所で0.25 mあり、逆台形の深くしっかりとした形状を呈している。出土遺物はそれほど多くないが、弥生土器でも後期前半に遡る古手のものが出土している。

SD09101 (Fig.27)

第9次調査区のSH09135/136の南辺中央土坑から派生する排水溝である。北東方向へ10 m以上のびた先でSD09111に接続している。検出面からの深さは深い所で0.3 mもあり、非常に深かった。断面逆台形でしっかりとつくりである。出土遺物は乏しいものの、弥生時代の建物に付随する溝である。

SD09111 (Fig.28)

第9次調査区のSH09140の南辺中央土坑からのびる排水溝である。北から北西方向へ湾曲しながら、20 m以上のびていく。第4次調査区へと続きSD0461へ繋がる可能性がある。検出面からの深さは、深い所で0.25 m以上あり、深くしっかりとつくりである。出土遺物から弥生時代後期の溝である。

SD1015=SD1022 (Fig.30)

第10次調査区のSH1016/17の北東隅から派生する排水溝である。北、北西、再度北方向へ蛇行しながら約15 mのびる。その先はSD0909に接続する。検出面からの深さは、深い所で0.15 mをはかる。出土遺物には弥生時代後期のものが多く、建物の年代と齟齬がない。

SD1062 (Fig.31)

第10次調査区のSH1031の北西隅から派生する排水溝と想定される。北西方向へ4 m以上のびるが、以西は中世の道路状遺構によって失われている。出土遺物は弥生土器の薄片のみで詳細は特定できないが、建物の年代と齟齬はない。

SD0902=SD1045 (Fig.31)

第10次調査区のSH1040の北東隅から北方向へ派生する排水溝である。約15mのびた先で、SD0908と合流する。検出面からの深さは、深い所で0.15mほどある。出土遺物から弥生時代の溝と考えられ、建物の年代と齟齬がない。

SD1041=SD1059 (Fig.32)

第10次調査区のSH1032/33/34の北西隅から派生する排水溝である。建物の北西隅から西北西に13m以上続いていく。検出面からの深さは、深い所で0.15m程度である。出土遺物から、弥生時代後期の溝である。

SD1037/1039 (Fig.32)

第10次調査区のSH1033及びSH1034の北東隅から派生する排水溝であるが、どちらの溝がどちらの建物に伴うのか把握できなかった。いずれも北方向へ約5mのびた先でSD0909へ接続する。検出面からの深さは、深い所で0.1mをはかり、弥生時代の溝と想定できる。

SD0909=SD1082 (Fig.36)

第10次調査区のSH1070の南東隅から北東方向へ伸びる排水溝である。様々な排水溝と接続しながら、北東方向へ28mのび、SD0866と更に接続する。検出面からの深さは、深い所で0.25mをはかり、断面逆台形の深くしつかりとした溝である。

大量の土器が含まれており、弥生時代後期の山中式墳の溝だということが分かる。あるいは廻間式まで下る可能性もある。

SD1077 (Fig.37)

第10次調査区で検出したSH1073の北西隅から派生する排水溝である。北北東へ4mのびた先は不明である。検出面からの深さは、深い所で0.1mと浅い。弥生土器の長頸甕が出土しており、弥生時代後期の溝として理解できる。

SD1085 (Fig.39)

第10次調査区のSH1096の南西隅からのびる排水溝である。検出面からの深さは、深い所で0.3mあり、深くてしつかりとした溝である。約8mのびた先は調査区外へと続いていく。

出土遺物は弥生土器と須恵器が混じるが、弥生時代の建物に付随する溝である。

SD0940 (Fig.40)

第9次調査区のSH0930の北東隅から派生する。北東方向へ7mほどのびた後、SD0909=SD1082に接続する。逆台形のしつかりとした溝で、深いところは検出面から0.3mある。出土遺物は多く、山中式の溝として理解できる。

SD10124 (Fig.41)

第10次調査区のSH10111に伴う排水溝である。建物の北東から北東から北方向へ蛇行しながら10mほどのびる。検出面からの深さは、深い所で0.2mある。一部須恵器が混じるものの弥生土器が多く、弥生時代の溝と判断できる。

SD10125 (Fig.43)

第10次調査区のSH10107/118の南辺中央土坑から派生する排水溝である。北側は削平のため失われており、ほとんど残っていない。検出面からの深さは0.1m程度と浅い。遺物はほとんど出土しなかった。

SD1098=SD10117=SD10132 (Fig.47)

第10次調査区で検出した排水溝である。湾曲しながら20m以上を確認し、更に第8次調査区に続いている。検出面からの深さは0.2mある。北端は削平のため消失しているが、弥生時代後期頃の土器のみが出土している。

SD09119

第9次調査区の南東区の南方(第1次調査区)から続く溝である。規模や形状等から、竪穴建物からの排水溝だと想定できるので、ここで報告する。北方向に7m以上伸びた先でSD09101に接続している。検出面からの深さは、深い所で0.15mをはかる。出土遺物が少ないため、時期を特定することは困難である。

SD10121

第10次調査区で検出した。明確に建物に付随するとは言いがたいが、SH10115辺りの建物の排水溝か、もしくはSD10117から派生しているのかもしれない。検出面からの深さは、深い所で0.15mある。出土遺物は弥生土器のみである。

(2) 道路側溝・地割溝

SC1007/08/09/10 (Fig.48・49)

第8次調査区で検出していた道路状遺構の続きを確認した。竪穴建物や溝、多くの柱穴よりも新しい遺構である。



Fig.47 竪穴建物に付随する溝 (S=1/300)

第8次調査区では近接するものの切り合っていないことが、第10次調査において重複し、西側の道路が新しいことが確認できた。また、西側の道路側溝はほぼ同じ位置で側溝が掘り直されていることも確認できた。

これらのことにより、道路状遺構には3時期あることが明らかとなったので、以下に整理する。道路①が最も新しく、道路③が古いことから、徐々に西へ移動していることが分かる。

道路① (SC1007)

西側溝 SD0894=0954=1001,

東側溝 SD0860=0959=1002

道路② (SC1008)

西側溝 SD084=0955=1003,

東側溝 SD0860=0956=1004

道路③ (SC1009)

西側溝 SD0862=09545=1005-W,

東側溝 SD0882=0889=0899=0957=1005-E

最も新しい道路であるSC1007は、溝の芯々の幅が3.6mと約2間ある。直線ではなく、やや蛇行しながらもN-10°Eの方位を持つ。側溝の埋土しか残っていないが、黒褐色砂礫混シルト層の単層である。

SC1008の幅は芯々で3.3m程度あり、SC1007と同じくやや蛇行しながら北へのびる。埋土もSC1007と同様、黒褐色系の砂礫層であった。

いずれも、土師器や須恵器の他に瓦や山茶碗も出土しているが、羽釜が出土していることから中世後半より新しい道路であることが分かる。総延長は50m以上に及ぶ。

SC1009はSC1007やSC1008とは異なり、直線的な側溝である。南西で一部拡張している部分があるが、幅は芯々で2.1mをはかる。

なお、SC1009の南端で西側側溝が西へ90度折れ曲がっている。これをSD1010としているが、道路が西へ曲がっていることが確認できた。SD1010は北側側溝であり、南側側溝は調査区外のため幅は不明であるが、この道路をSC1010とする。

また、SD1010は22m続いた後、再び北へ折り返している。この溝をSD1054として調査した。SD1054は断続的に37m以上を確認している。ここにも道路があったようであり、SD1054と対になる西側側溝はSD1048/49/50のいずれかが該当するのであろう。東側はSD1054のみであった。道路幅は3～4mの範囲におさまる。

SD1005, SD1010, SD1049/50等はほぼ出土遺物がないため、年代を特定することが困難であるが、SD1048

やSD1054からは弥生土器や須恵器に混じり、山茶碗が出土している。また、SD1001・02・03・06からは土師器の羽釜の破片が出土していることから、概ね中世後半頃の溝だと考えられる。

SD0985 (Fig.48)

第9次調査区の北東区で検出した、東西方向の溝である。約10mを確認したが、東側は第4次調査区に続いている。検出面では幅が1.8mほどあったが、深さは0.05mと浅かった。埋土は褐色シルト混砂礫層のしまりがややないもので、中世後半の遺構と同様であった。はっきりとしないが、SD08214やSD10105に繋がり、一連の区画溝になる可能性がある。

出土遺物には弥生土器や須恵器があるが、重複関係や埋土から中世以降の新しい溝だと判断できる。

SD0906 (Fig.48)

第9次調査区の北東区と南東区の境で検出した、東西方向の溝である。検出面での埋土は現代の耕作土と同じ灰褐色砂礫層であったが、下部に他の中世後半頃の褐色シルト混砂礫層があった。SD0914やSD1024と同じ方位を取っているため、ここにも中世後半頃の地割溝があった可能性が高い。東西14m前後を検出し、幅は0.8mで、深さは0.15～0.2mあった。

出土遺物は弥生土器や須恵器が僅かに出土しているが、埋土の様子等から中世後半頃まで遡る溝の可能性が高い。

SD0914 (Fig.48)

第9次調査区の北西区で検出した。東西8mほどを検出したが、幅は0.5m、深さ0.05mと小規模である。約1間(1.8m)幅でSD1024が併行している。また、6mほど間隔をあけてSD1072が同一線上で検出されているので、本来は一続きの溝であった可能性が高い。

出土遺物は弥生土器のみであったが混入だと考えられ、中世以降まで下る溝だと判断している。

SD1024 (Fig.48)

第10次調査区の中区で検出した。約6mほど東西にのびた後、南方向へ折れ曲がっていたようである(これをSD1023として調査した)。幅0.2～0.3mで、深さも0.05mと浅いため、明確に確認することは困難であった。SD0914と1.8m間隔で平行することから、一連のものかもしれない。

出土遺物は弥生土器のみであるが、埋土や軸方向から中世まで下る溝だと判断している。

SD1072 (Fig.48)

第10次調査区の西区で検出した。SD0914の延長上で、東西方向に5mほど確認したが、西端で道路状遺構の東側溝であるSD1054に切られている。また、SD1057とも重複するが、煩雑で明確に捉えることができなかった。

出土遺物は弥生土器のみであったが、中世まで下る溝の可能性が高い。

SD1057=SD135 (Fig.48)

第10次調査区の西区から北区にかけて南北方向にのびる溝である。都合、30m程度を確認したが、検出時には南端が東へ折れることを確認している。ちょうど、道路の東側溝であるSD1054に平行し、折れ曲がってSD1010に平行するようである。埋土は褐色シルト混砂礫層の単層であり、道路に関係する溝だと判断できる。あるいは東側では少なくとも3条の道路が確認できているので、道路状遺構の東側溝のものに該当する可能性も否定できない。いずれにしても検出面からの深さが0.05mほどしかなく、不明な点が多かった。

出土遺物に土師器の羽釜が含まれているので、少なくとも中世後半以降の溝だと理解できる。

SD10105 (Fig.48)

第10次調査区の北西区で検出した。第8次調査区のSD08214から繋がる溝で東西方向に23m以上のび、西端は南側に折れ曲がって5m以上続いていく。切り合い関係から、道路側溝であるSD1054よりも古い溝であることが確認できた。

出土遺物がないため帰属時期は不明であるが、中世頃の溝だと判断している。

SD10139 (Fig.48)

第10次調査区の拡張区(西2区)で検出した。現代の地割溝に切られつつ調査区外となる。南側の状況が不明であるが、南北方向に5mほど確認した。SX10143と重複するはずであるが、平面では重なり方が判断できなかった。北には続かないため、SX10143に関連する溝なのかもしれない。幅は0.8mほどあり、深さも0.2mある。埋土は褐色シルト混砂礫層の単層であった。

出土遺物には弥生土器と須恵器があるが、切り合い関係や埋土の様子から中世まで下る溝だと判断できる。

3 掘立柱建物

第9・10次調査区あわせて、掘立柱建物22棟を確認している(Tab.2)。柱穴の数が夥しく、本来はより多く

の建物があったと想像するが、現地調査時に加え整理作業を通じて判断できたものを記述する。

SB0927 (Fig.50)

第9次調査区の北西区で検出した。2×3間の建物でだと考えられる。桁行きは1.5m等間の4.5mで、梁行きは1.5+1.8mの3.3mとなる。東西方向の側柱建物であり、床面積は14.85㎡ある。軸方向はN-6°-Eである。現地調査の段階で把握できた数少ない掘立柱建物である。柱の平面形はやや角ばった円形であり、残りのよいところで検出面からの深さは0.1~0.3mある。

出土遺物は弥生土器の混入が多いが、P0918に須恵器が含まれることから、明らかに5~6世紀以降の掘立柱建物だと判断できる。

SB09145 (Fig.51)

第9次調査区の北西区で検出した。調査時には、かなり深い柱穴がいくつかあることを認識できたが、掘立柱建物と認識できなかったものである。整理作業を通じて、東西4間、南北2間の側柱建物だと理解できた。桁行きは1.9m等間の7.6mあり、梁行きは2.1m等間の4.2mある。床面積は31.92㎡となる。柱の平面形は0.3~0.5mの円形で、検出面から0.7mと深くしっかりとしている。軸方向はN-12°-Eである。

出土遺物は弥生土器が混入しているが、P09102から須恵器が出土しているため、明らかに5~6世紀以降の建物だということは分かる。また、他の中世の区画溝の方位と一致すること、柱間の距離が2m前後を基準としている点などから、中世の建物であると判断している。

SB09146 (Fig.52)

第9次調査区の北西区で検出した。調査時には全く気付かず、整理作業を通じて認識した2×3間の掘立柱建物である。

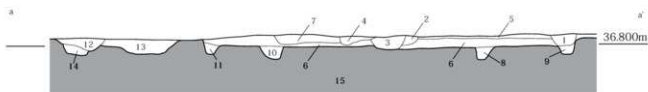
桁行きは1.4m等間の4.2mで、梁行きは1.8m等間の3.6mの南北棟である。床面積は15.12㎡ある。柱の平面形は不整形ながらもほぼ円形を呈する。深さは0.3~0.4mほどある。軸方向はN-8°-Eである。

堅穴建物の上面で柱穴を検出したが、弥生土器しか出土しておらず、建物の時期は不明である。

SB09147 (Fig.53)

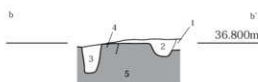
第9次調査区の北西区で検出した。調査時には気付かず、整理作業を通じて認識した2×2間の掘立柱建物である。

SC1007/1008/1009 土層断面



- 1-2-5 SC1009 埋土
 1 灰褐色砂礫混シルト層 しまりややあり、粘性あまりなし（東側溝）
 2 灰褐色砂礫混シルト層 しまり・粘性あまりなし（西側溝）
 5 灰褐色砂礫混シルト層 しまり・粘性ややあり（路盤）
 3-12 SC1008 埋土
 3 黒褐色砂礫混シルト層 しまりあまりなし、粘性ややあり（東側溝）
 12 黒褐色砂礫混シルト層 しまりあまりなし、粘性ややあり（西側溝）
 4-13 SC1007 埋土
 13 黒褐色砂礫混シルト層 しまり・粘性ややあり（東側溝）
 14 黒褐色砂礫混シルト層 しまりあまりなし、粘性ややあり（西側溝）
 6-9-11 SH0974 埋土
 6 黒褐色と黄褐色ブロックが混じる不均質な層序
 9 赤い・灰褐色シルト層 しまりあり、粘性ややあり、炭化物を含む
 11 赤い・黄褐色砂礫混シルト層 しまりあり、粘性ややあり
 7 SH0976 埋土
 7 黒褐色シルト層 しまりあり、粘性ややあり
 8 SD10
 8 灰褐色と黄褐色の混する不均質な層序
 10-14 ビット埋土
 10 土色記録なし
 14 黒褐色砂礫混シルト層 しまりあり、粘性ややあり
 15 SD10
 15 黄褐色砂礫混シルト層 しまりあり、粘性ややあり

SD1010 土層断面



- 1 SK1026 埋土
 1 黒褐色砂礫混シルト層 しまり・粘性ややあり、炭化物を含む、比較的均質
 2 SD1010 埋土
 2 黄褐色砂礫混シルト層 しまりややなし、粘性ややあり、比較的均質
 3-4 ビット埋土
 3 土色記録なし
 4 黒褐色砂礫混シルト層 しまりあり、粘性ややあり、黄褐色ブロックを含む不均質な層序
 5 地山
 5 黄褐色砂礫混シルト層 しまりあり、粘性ややあり

SD1046/48/49/50/54 土層断面

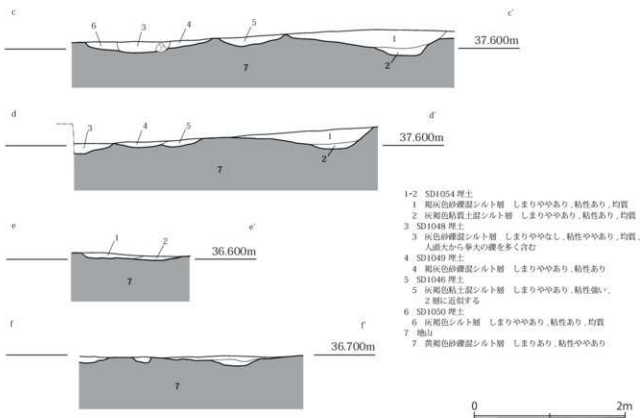


Fig.49 中世の道路状遺構の土層断面図 (S=1/50)

いずれも柱間の距離は1.7m等間、一辺が3.4mある。床面積は11.56㎡ある。柱の平面形はほぼ円形を呈する。深さは0.4～0.5mと深い。軸方向はN-28°-Eと、他の建物と大きく異なる。

出土遺物には弥生土器の混入が多いが、P0976やP0995からは須恵器が、P0953からは土師器が出土しており、古墳時代以降の建物であることは間違いない。

SB09148 (Fig.54)

第9次調査区の北西区から中央北区で検出した。調査時には気付かず、整理作業を通じて認識した2×4間の側柱建物である。

桁行きは1.3m等間の4.6mで、梁行きは1.8m等間の3.6mある。床面積は16.56㎡となる。軸方向はN-8°-Wである。柱の平面形は円形で、直径0.3m程度の小型のものが多い。検出面からの深さは0.1～0.2mと浅い。

出土遺物は弥生土器のみであるが、いずれも混入品と思われる。建物自体は古墳時代以降のものになる。

SB09149 (Fig.55)

第9次調査区の北西区から中央北区で検出した。調査時には気付かず、整理作業を通じて認識した。西辺を現代溝によって削平されてしまっているが、3×4間の側柱建物になると推測される。

桁行きは1.35m等間の5.4mで、梁行きは1.3m等間の3.9mある。床面積は21.06㎡となり、軸方向はN-9°-Eである。柱の平面形はやや隅丸の形で、直径0.4m程度ある。検出面からの深さは0.3mあり、箱型である。

出土遺物はP09234から出土した土師器の台付甕(宇田型甕)等がある。これらの特徴から、古墳時代以降の建物だと判断される。

SB09150 (Fig.56)

第8次調査区から第9次調査区の北東区にかけて検出した。2×2間の総柱建物である。第8次調査の際にはSB08133としていた建物であるが、南辺1列を確認した。

南北は1.7+1.3mの3.0mで、東西は1.4m等間の2.8mある。床面積は8.4㎡となる。軸方向はN-1°-Eとほぼ正方位である。柱の平面形は円形で、直径0.3～0.4m程度ある。検出面からの深さは0.3mある。

出土遺物は弥生土器のみであるが、いずれも混入品と思われる。建物自体は古墳時代以降のものになる。

SB09126/127 (Fig.57～59)

第9次調査区の北東区で検出した。2×3間の総柱建

物が2棟重複している。現地調査の段階から、弥生時代の竪穴建物の上面で把握できた数少ない掘立柱建物の一つである。西側のSB09126が古く、東側のSB09127が新しいことを確認した。いずれも柱穴も上面から中ほどにかけて、柱の周りを拳大の礫で補強する根巻石を確認した。

SB09126の桁行きは1.2m等間の3.6mで、梁行きは1.65m等間の3.3mとなる。床面積は11.88㎡ある。軸方向はN-5°-Wである。現柱の平面形はやや角ばった円形であり、検出面からの深さは0.6～0.7mある。

SB09127は、90度向きをかけて東西方向に建て替えられている。桁行きは1.3m等間の3.8mで、梁行きは1.8m等間の3.6mとなる。床面積は14.04㎡ある。軸方向はN-16°-Wである。柱穴の平面形はやや角ばった円形であり、検出面からの深さは0.6～0.7mある。

出土遺物にはP09631から出土した須恵器杯等がある。これは根巻石の下部の埋土から出土したものである。建物自体はそれよりも新しい年代が考えられる。出土した須恵器は6世紀代の特徴を持っているので、6世紀から7世紀にかけての建物だと想定できる。

SB09128 (Fig.60)

第9次調査区の北東区から南東区にかけて検出した。1×2間の掘立柱建物である。直径が0.6～0.7mと大型で、他の掘立柱建物とはやや異質であったので調査の段階で容易に認識できた。SH0962よりも新しいことを確認している。

桁行きは1.9m等間の3.8mあり、梁行きは2.2mある。床面積は8.36㎡と小さい。柱の平面形はほぼ円形で、検出面から0.3mをはかる。軸方向はN-10°-Eである。

出土遺物は弥生土器が混入しているが、P09820から須恵器が出土している。明らかに5～6世紀以降の建物だということは分かる。軸方向から中世まで下る可能性を考えておきたい。

SB09156 (Fig.61)

第9次調査区の南東区から第10次調査区の東区にかけて検出した。2×5間の側柱建物である。

桁行きは1.15m等間と狭いながらも5.8mあり、梁行きは1.9m等間の3.8mある。床面積は22.04㎡となる。柱の平面形はほぼ円形で、検出面から0.3～0.4mをはかる。軸方向はN-37°-Eである。

出土遺物は弥生土器が混入しているのみである。SH09135/136よりも新しい建物だと確認はしているが、明確な帰属時期を比定することはできなかった。

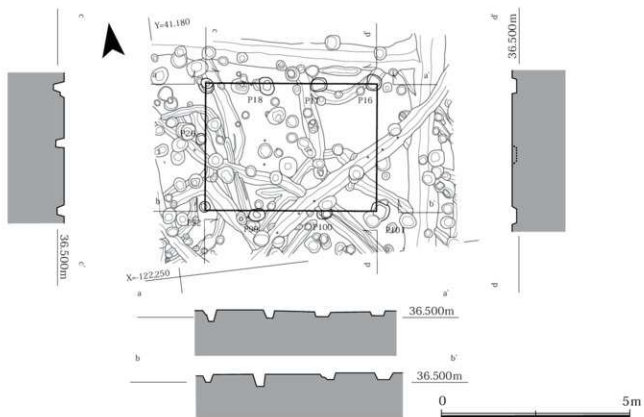


Fig.50 S80927 平面・断面図 (S=1/100)

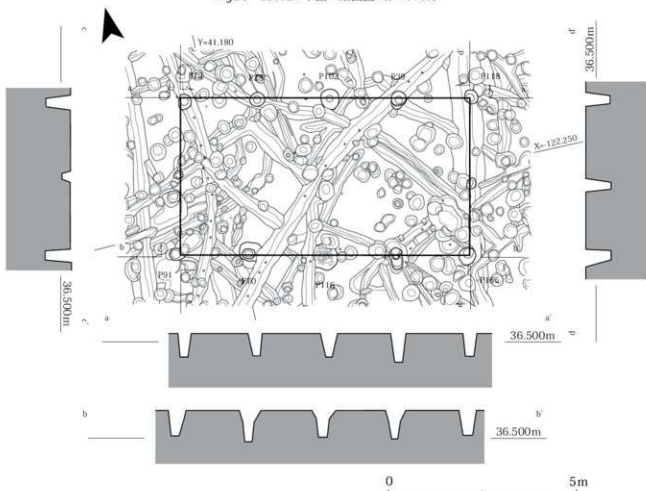


Fig.51 S809145 平面・断面図 (S=1/100)

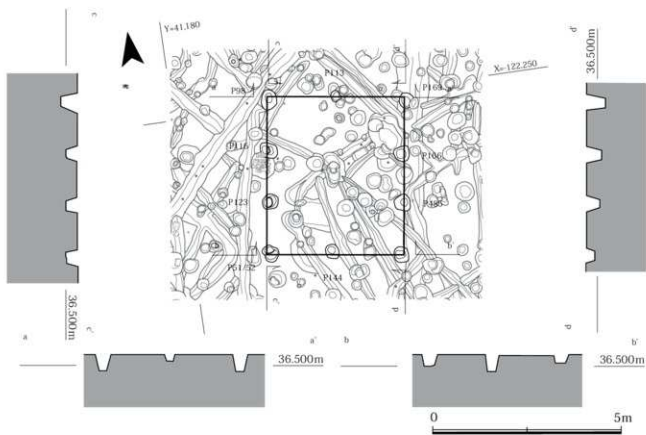


Fig.52 SB09146 平面·断面图 (S=1/100)

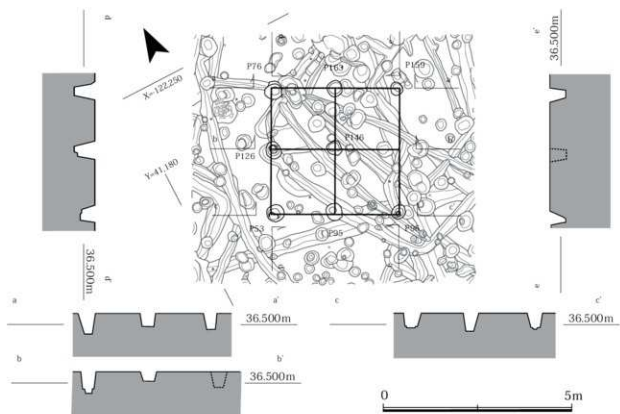


Fig.53 SB09147 平面·断面图 (S=1/100)

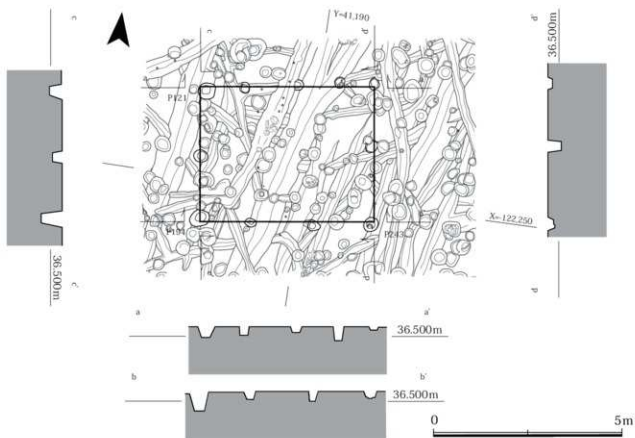


Fig.54 SB09148 平面・断面図 (S=1/100)

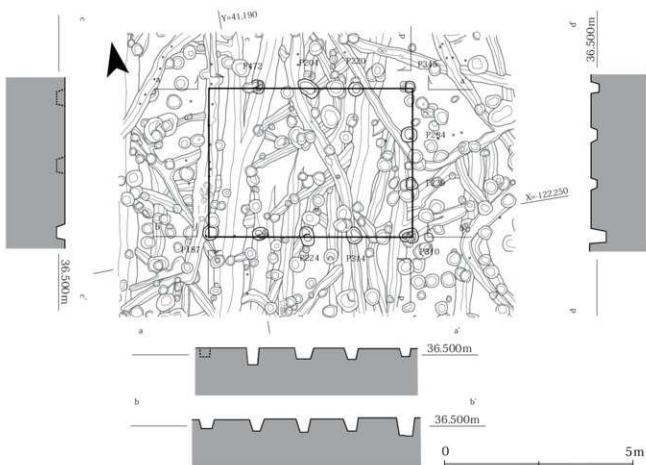


Fig.55 SB09149 平面・断面図 (S=1/100)

SB09157 (Fig.62)

第9次調査区の南東区で検出した、 2×3 間の側柱建物である。桁行きは1.3m等間の4.2mあり、梁行きは1.9m等間の3.8mある。床面積は15.96㎡となる。柱の平面形はほぼ円形で、検出面から0.3mをはかる。軸方向はN-14°-Eである。

出土遺物は弥生土器が混入しているのみで、明確な帰属時期を比定することはできなかった。

SB09158 (Fig.63)

第9次調査区の南東区から第10次調査区の東区にかけて検出した、 2×3 間の側柱建物である。

桁行きは1.4+1.7+1.7mとやや不揃いであるが4.9mほどあり、梁行きは1.7m等間の3.4mある。床面積は16.66㎡となる。柱の平面形はほぼ円形で、検出面から0.3~0.4mをはかる。軸方向はN-12°-Eである。

出土遺物は弥生土器が混入しているのみで、明確な帰属時期を比定することはできなかった。

SB10158 (Fig.64)

第9次調査区の南東区から10次調査区の東区にかけて検出した。調査時にははっきりと認識できず、整理作業を通じて 2×3 間の側柱建物だと判断した。桁行きは1.3m等間の3.9mであり、梁行きは1.5m等間の3.0mある。床面積は11.7㎡となる。柱の平面形は0.3m前後の円形と小さく、検出面からの深さは0.3~0.4mある。軸方向はN-14°-Eである。

出土遺物は弥生土器が混入しているのみで、明確な帰属時期を比定することはできなかった。

SB10159 (Fig.65)

第10次調査区の東区で検出した。調査時には認識で

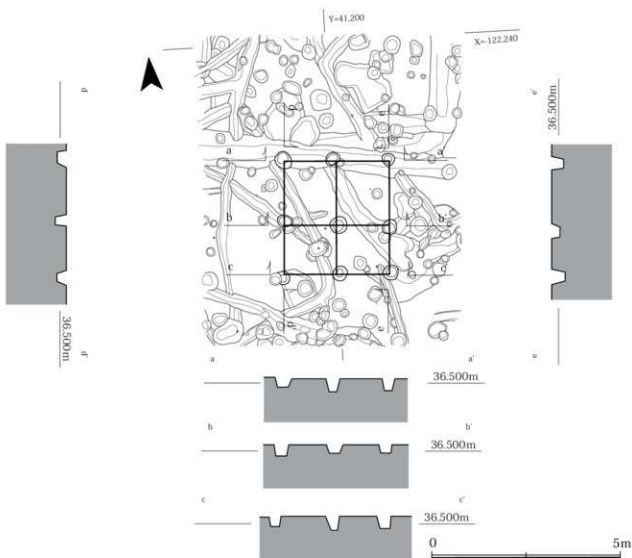


Fig.56 SB09150 平面・断面図 (S=1/100)

きず、整理作業を通じて認識した建物である。南側の柱穴は確認できなかったが、南側に隣接する第1次調査区では確認できていない。よって、 2×3 間の側柱建物になると想定される。桁行きは1.6m等間の4.8mあり、梁行きは2.0m等間の4.0mになると想定できる。この場合の床面積は19.2㎡となる。柱の平面形は0.3～0.4m前後の円形である。検出面からの深さは0.4～0.7mと深い。軸方向はN-5°-Eである。

出土遺物は弥生土器が混入しているのみで、明確な帰属時期を比定することはできなかった。

SB10160 (Fig.66)

第10次調査区の東区で検出した。調査時には認識できず整理作業を通じて判断した、 2×2 間の総柱建物となる。いずれも1.4m等間の2.8mあり、床面積は7.84㎡である。柱の平面形は0.5m前後のやや角ばった円形

で、他と比して比較的大きい。検出面からの深さは0.2～0.5mとばらつきがある。軸方向はN-16°-Wとなる。

出土遺物は弥生土器が混入しているのみで、明確な帰属時期を比定することはできなかった。

SB10161 (Fig.67)

第10次調査区の東区で検出した。調査時には認識できず、整理作業を通じて判断した。 2×2 間の総柱建物となる。東西1.5m等間の3.0mあり、南北が1.3m等間の2.6mある。床面積は7.8㎡となる。柱の平面形は0.4m前後のやや角ばった円形で、比較的大き目である。検出面からの深さは0.2～0.3m前後である。軸方向はN-17°-Wとなる。

出土遺物は弥生土器が混入しているのみで、明確な帰属時期を比定することはできなかった。

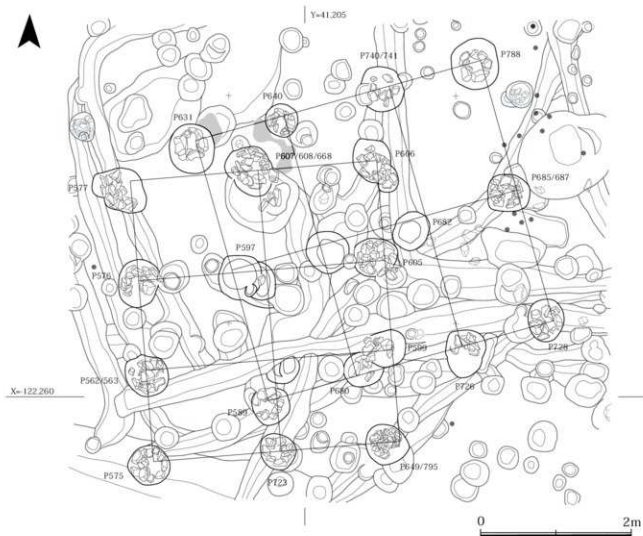


Fig.57 SB09126/127 平面図 (S=1/50)

SB10162 (Fig.68)

第10次調査区の東区で検出した。調査時には形の整った柱が筋を描えることを認識できた。その際は明確に掘立柱建物と理解できなかったものであるが、整理作業を通じて2×5間の側柱建物だと判断した。

南北に長く、桁行きは1.05m等間の5.2mあり、梁行きは1.6m等間の3.2mある。床面積は16.64㎡となる。柱の平面形は0.3～0.5m前後のやや角ばった円形で、検出面からの深さは0.3～0.5mとややばらつきがある。軸方向はN-8°-Wである。

出土遺物は弥生土器が混入しているのみで、明確な帰属時期を比定することはできなかった。

SB10163 (Fig.69)

第10次調査区の東区で検出した。調査時には形の整った柱が筋を描えることを認識できたが、明確に掘立柱建物と認識するに至らなかったものである。梁行きの柱間がはっきりとしないが、SB10162と同様に2×5間の側柱建物だと理解した。

南北に長く、桁行きは1.0m等間の5.0mあり、梁行き

は3.4mあることから、1.7m等間であったものと推測できる。床面積は17.0㎡となる。柱の平面形は0.4～0.5m前後のやや角ばった円形で、検出面からの深さは0.3mある。軸方向はN-8°-Wである。SB10162とほぼ同じ場所で軸を揃えていることから、建て替えられたものと推測できるが、切り合い関係がないので先後関係は不明である。

出土遺物は弥生土器が混入しているのみで、明確な帰属時期を比定することはできなかった。

SB10123 (Fig.70)

第10次調査区の北区で検出した。調査段階で掘立柱建物と認識できたものである。SH10107/118の上位で検出した。南北方向に長い2×3間の総柱建物である。

桁行きは1.4m等間の4.2mあり、梁行きは1.75m等間の3.5mある。床面積は14.7㎡となる。柱の平面形は0.3～0.5m前後のやや角ばった円形で、検出面からの深さは0.2～0.25mある。軸方向はN-13°-Eである。

出土遺物は弥生土器が混入しているのみで、明確な帰属時期を比定することはできなかった。

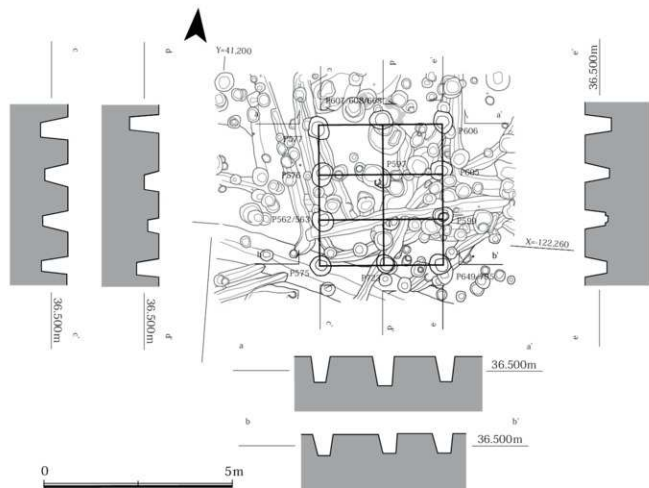


Fig.58 SB09126 平面・断面図 (S=1/100)

SB10136 (Fig.71)

第10次調査区の北区から拡張区(西2区)にかけて検出した。調査段階から掘立柱建物と認識できたものである。一部、現在溝によって削平されてしまっているが、南北方向に長い3×3間の総柱建物だと推定される。

桁行きは1.4m等間の4.2mあり、梁行きは1.3m等間の3.9mある。床面積は16.38㎡となる。柱の平面形は0.4～0.6m前後のやや角ばった円形で、検出面からの深さは0.3mある。軸方向はN-6°-Eである。

出土遺物は弥生土器が混入しているのみで、明確な帰属時期を比定することはできなかった。

SB10155 (Fig.72)

第10次調査区の北端区から第8-2次調査区にかけて検出した。第8-2次調査段階に掘立柱建物SB08222としていた建物の延長である。第8-2次調査の報告で3×3間の総柱建物と推定したが、今回の調査によって間違

いなく3×3間の総柱建物になることが確定できた。

やや東西方向に長い建物で、桁行きは1.3+1.7+1.3mの4.2mとなり、梁行きは1.3m等間の3.9mとなる。床面積は16.38㎡となる。柱の平面形は0.4～0.6m前後のやや角ばりながらも円形を呈し、検出面からの深さは0.3mある。軸方向はN-19°-Eである。

出土遺物は弥生土器が混入しているのみで、明確な帰属時期を比定することはできなかった。

4 櫓

第9・10次調査区あわせて、櫓列7条を確認している。これらは当初、掘立柱建物になるのではないかと考えたが、対となる柱列が確認できなかったため、櫓として扱うことにする。なお、本来はより多くの櫓があったと想像できるが、柱穴の数が夥しいため不明な点が多かった。以下では、整理作業を通じて櫓と判断したものを記述する。

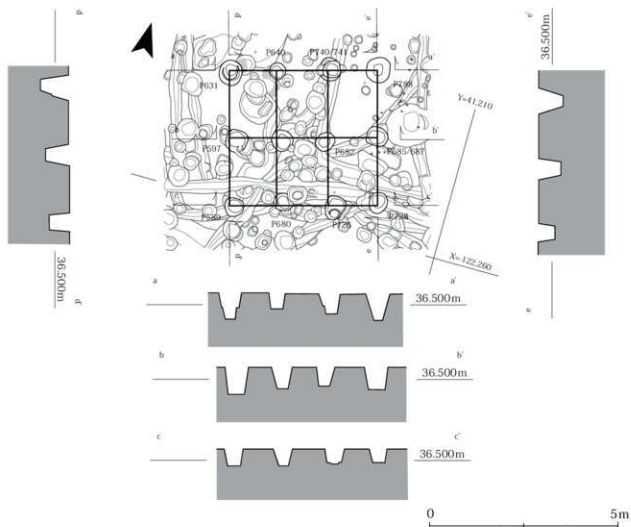


Fig.59 SB09127 平面・断面図 (S=1/100)

SA0928 (Fig.73)

第9次調査区の北西区から第10次調査区の北西区にかけて検出した。第9次調査時から認識していた柱列であり、掘立柱建物が西（第10次調査区）に広がるのだろうと考えていたが、第10次調査区では検出されなかったため、柵として理解した。

柱穴は平面形は0.3～0.4mのほぼ円形で、4間分を確認した。南北方向にのび、軸はN-20°-Eである。柱間の距離は1.5～1.7mとややばらつくが、のべ6.0mを確認した。検出面からの深さは0.3～0.5mあり、深くしっかりとしている。

出土遺物は弥生土器が混入しているのみで、明確な帰属時期を比定することはできなかった。

SA09151/152/153/154 (Fig.74)

第9次調査区の北区から北東区にかけて検出した。東西方向に並ぶ柱列が幾条もあることから掘立柱建物が建つだろうと考えたが、明確に捉えることができず、柵として理解した。

SA09151の柱穴は平面形は0.3～0.5mのほぼ円形で、4間分を確認した。東西方向にのび、軸はN-6°-Eである。柱間の距離は1.4～1.8mとややばらつくが、のべ6.8mを確認した。検出面からの深さは0.3mある。

出土遺物は弥生土器が混入しているのみで、明確な帰属時期を比定することはできなかった。

SA09152の柱穴は平面形は0.3mの円形で、4間分を確認した。東西方向にのび、軸はN-1°-Eとほぼ正方位

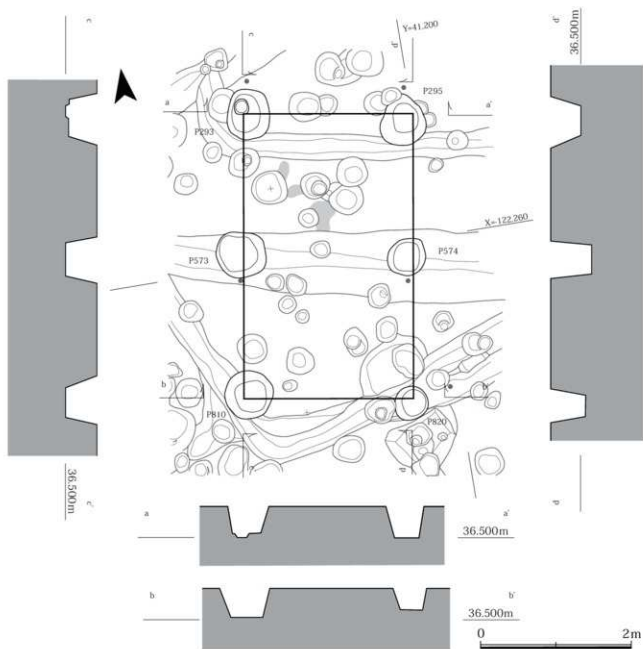


Fig.60 SB09128 平面・断面図 (S=1/50)

をとる。柱間の距離は1.8～2.0 mにまとまり、のべ7.3 mを確認した。検出面からの深さは0.3 mある。

出土遺物は弥生土器が混入しているものが多いものの、P09428において須恵器が出土していることから、古墳時代以降まで下ることが明らかである。ただし、詳細な時期は特定できない。

SA09153の柱穴は平面形は0.3～0.4 mの円形で、4間分を確認した。東西方向にのび、軸はN-3°-Eとなる。柱間の距離は1.6 m前後であり、のべ6.3 mを確認した。検出面からの深さは0.3～0.5 mと深い。

出土遺物は弥生土器が混入しているものが多いものの、P09415において須恵器が出土していることから、古墳時代以降まで下ることが明らかである。ただし、詳細な時期は特定できない。

SA09154の柱穴は平面形は0.3 mと比較的小型の円形で、3間分を確認した。東西方向にのび、軸はN-6°-Eとなる。柱間の距離は1.7～2.1 mとばらつくが、のべ5.6

mを確認した。検出面からの深さは0.4～0.6 mと深い。

出土遺物は弥生土器が混入しているのみで、明確な帰属時期を比定することはできなかった。

SA09155 (Fig.75)

第9次調査区の南東区で検出した。柱穴は平面形は0.3 m程度の円形で、3間分を確認した。北西-南東方向にのび、軸はN°-29-Wとなる。柱間の距離は1.2～1.4 m前後であり、のべ3.6 mを確認した。検出面からの深さは0.3～0.4 mとしっかりしている。

出土遺物は弥生土器が混入しているのみで、明確な帰属時期を比定することはできなかった。

SA10164 (Fig.76)

第9次調査区の北西区から第10次調査区の東区にかけて検出した。南北方向に並ぶ柱列があることから掘立柱建物になろうと考えたが、明確に捉えることができない

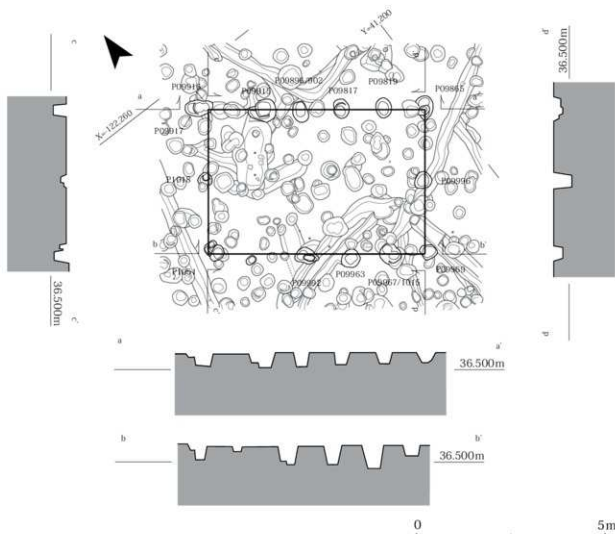


Fig.61 SB09156 平面・断面図 (S=1/100)

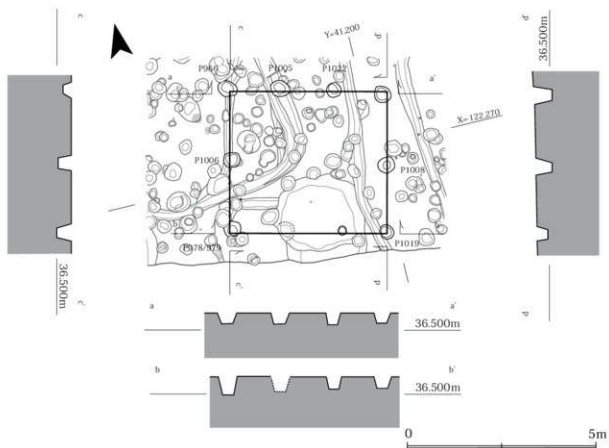


Fig.62 SB09157 平面·断面图 (S=1/100)

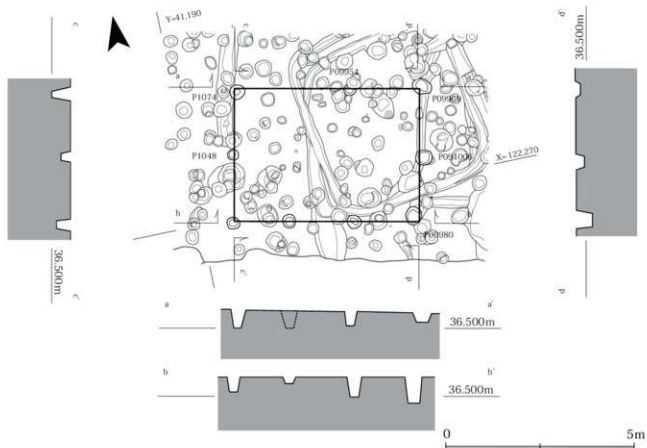


Fig.63 SB09158 平面·断面图 (S=1/100)

かったので欄として理解した。

柱穴は平面形は0.3～0.5 mのやや角ばった円形で、3間分を確認したにとどまる。南北方向にのび、軸はN-9°-Wである。柱間の距離は1.2 mにまとり、やや間隔が狭い。のべ3.5 mを確認した。検出面からの深さは0.5から0.6 mと深い。

出土遺物は弥生土器が混入しているのみで、明確な属属時期を比定することはできなかった。

5 土坑

磐城山遺跡では数多くの竪穴建物と掘立柱建物が確認されているが、土坑はほとんど見つからない。これま

で、中世の土壌暮らしき礫を含むものや6～7世紀の不整形の土坑がいくつか確認されている程度で、竪穴建物の量と比べると明かに貧弱である。

今回の調査区では、珍しく井戸らしき大型土坑と中世後半のいわゆる方形竪穴が1基ずつ確認された。また、礫を含む土壌墓と想定されるもの2基も確認できた。ただし、これらの土坑の性格を十分に特定することはできなかったので、全てを土坑の項目に一括して報告することにしたい。

SK0901 (Fig.77)

第9次調査区の北西区で検出した。周囲の竪穴建物よ

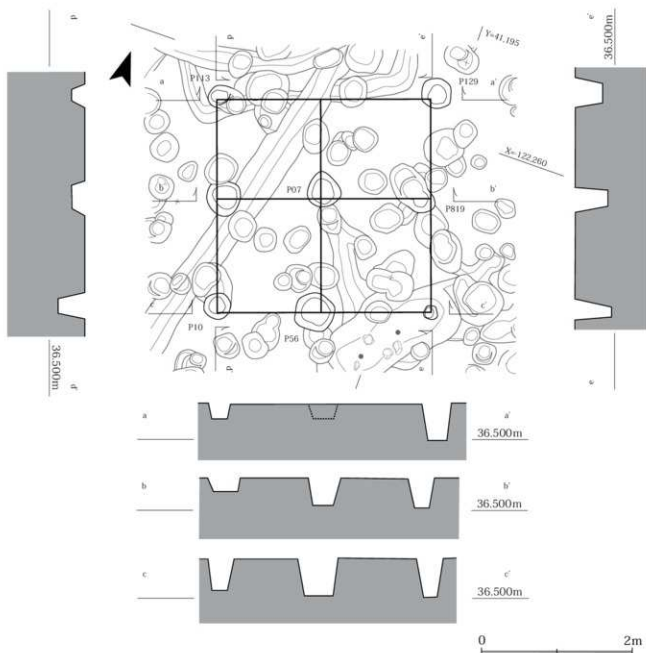


Fig.66 SB10160 平面・断面図 (S=1/50)

りも新しい土坑である。

平面形は直径 1.3 m の円形をしており、検出面からの深さは 1.0 m と深い。ほぼ垂直に落ち込んでいき、基底面は平坦となる。埋土は主に 5 層から構成され、4・5 層目以降は特に粘土質が強くなり、水分を多く含んでいた。降水後にはよく滞水したので、井戸の可能性を考えたが、井戸枠の痕跡は確認できなかった。また、令和元年度調査区で 5m を越えるような井戸が確認されており、それとは明らかに異なっていた。また、石組や木枠の痕跡はなく、礫はほぼ含まれていなかった。そのため、ここでは土坑として報告しておく。

出土遺物には弥生土器の他、3 層目から須恵器が出土した。その他に特に年代を決められる遺物は出土しておらず、正確な年代を特定することはできない。

SK0938/52 (Fig.78)

第 9 次調査区の北西区で検出した。検出時には北側を SK0938、南側を SK0952 としていたが、掘削が進めるにつれて明確な土質の差がないまま一つの土坑になってしまったため、本来は一つの土坑であった可能性が高い。SH0932 等の排水溝である SD0908/33 よりも古い土坑であることは確認できた。

平面形は不整形であり、検出面からの深さは 0.4 m ある。基底面も平坦でなく凸凹しており、木根等の攪乱の可能性はある。埋土は黒褐色シルト混砂礫層であり、しまりが強かった。

出土遺物には弥生土器が出土しているので、弥生時代後期頃の土坑だと判断できる。

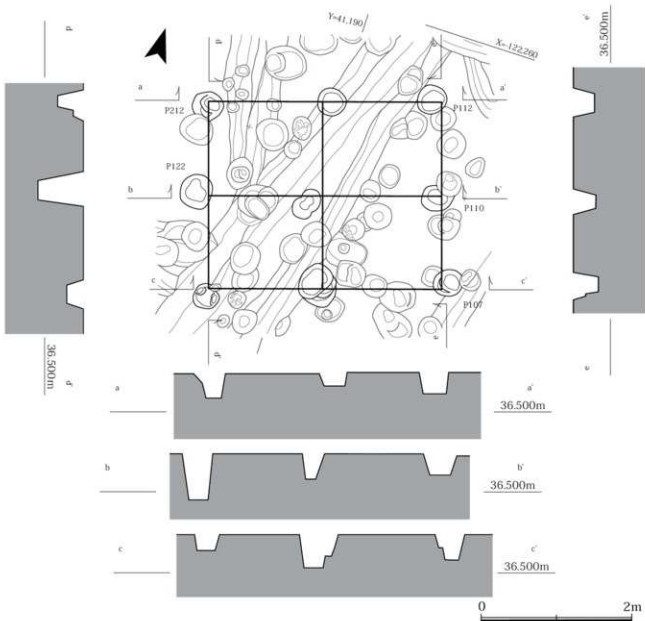


Fig.76 SB10161 平面・断面図 (S=1/50)

SK0939 (Fig.79)

第9次調査区の北西区で検出した。検出段階で表面に拳大の礫が露出していた。掘り下げたところ多数の礫が含まれていたが、炭化物は顕著でなく、遺物もほとんど出土しなかった。平面形は0.6～0.7 mの円形を呈し、検出面からの深さは0.2 m程である。

この礫を取り除いた下部で、中世の建物だと考えられるSB09145のP09116を検出したので、少なくとも中世以降の土坑だと判断できる。

SK0943 (Fig.80)

第9次調査区の北西区で検出した。SK0939と同様、検出段階で表面に拳大の礫が露出していた。炭化物はほとんどみられなかった。平面形は0.5～0.6 mの円形を呈し、検出面からの深さは0.2 mほどである。

また、この礫を取り除いた下部で、中世の建物だと考えられるSB09145の柱穴を検出したので、少なくとも中世後半以降の土坑だと判断できる。

SX0905 (Fig.81)

第9次調査区の北西区で検出した。平面形は南北約1.3 m、東西1.1 mのやや楕円形で、検出面からの深さは0.45 mある。溝や柱穴等と著しく重複するが最も上位で検出した土坑である。

埋土はややしまりのない褐色シルト混砂礫層の単層であり、埋土中には人頭大から拳大程度の礫が多く充填されていた。上位から図化して取り外しいき、3段目で礫が確認できた。これらの特徴から、土壙墓の可能性も考えられる。

出土遺物には弥生土器や須恵器多数の他に、山茶碗や白磁の碗等が礫に混じった状態で出土した。これらの出土遺物は鎌倉時代頃の特徴を有するので、概ねこの時期の土坑だと考えられる。ただし、埋土の色調等からは他の中世後半のものと差異がないので、出土遺物はそれ以前のものが混入した可能性もあり、土坑自体の年代は中世後半まで下ってもおかしくない。

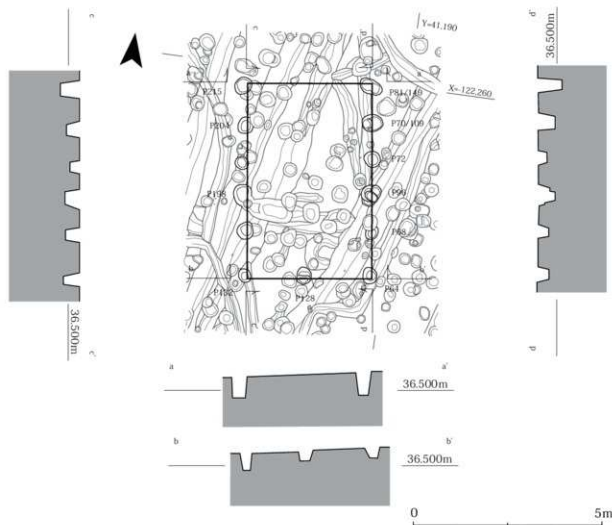


Fig.68 SB10162 平面・断面図 (S=1/100)

SX0958 (Fig.82 ~ 84)

第9次調査区の中央北区で検出した。平面形は東西1.6 m、南北1.9 mの隅丸方形で、検出面からの深さは0.75 mある。断面は箱型で、深くしっかりとしている。溝や柱穴等と重複するが最も上位で検出した。

埋土はややしまりのない褐色シルト混砂礫層が主で、下部はどシルトが強く粘性が強い土質であった。埋土中には人頭大から拳大程度の礫が大量に充填されており、5段目まで図化しながら撤去した。SX0905と同様、土壌墓の可能性が考えられる。

出土遺物には弥生土器や須恵器多数の他に、古瀬戸焼や常滑焼の捏鉢が含まれていた。これらの遺物は15～16世紀の年代が考えられ、かつ埋土の色調・土質の特徴が他の中世後半のものと同じであること、道路状遺構SC1008に切られていること等から、室町時代頃の土坑だと考えられる。

SK0977 (Fig.85)

第9次調査区の中央北区で確認したSH0960/80の床面まで掘り下げた段階で検出した。埋土は黒色シルト層であり、他の柱穴や溝等の埋土と全く異なった埋土があり、異質であった。

平面形は東西0.85 m、南北0.8 mの円形で、SH0960/80の床面からの深さは0.2 mある。本来の掘り込み面はもっと高い位置であることは明らかである。断面形はすり鉢状で丸みを持っていた。

埋土は他の遺構の埋土と一見して異なり、黒色シルト層の単層であった。しまりがややあり、粘質が強く、所々に炭化物を含んでいた。

出土遺物には縄文土器の無文土器が多かったが、一部縄目のついたものがあつた。その特徴から縄文時代中期末から後期頃だと推定される。なお、炭化物の放射性炭素年代測定を実施したところ、その結果は3,895 ± 20yrBPと縄文時代後期初頭の値が示されている(第Ⅵ章参照)。

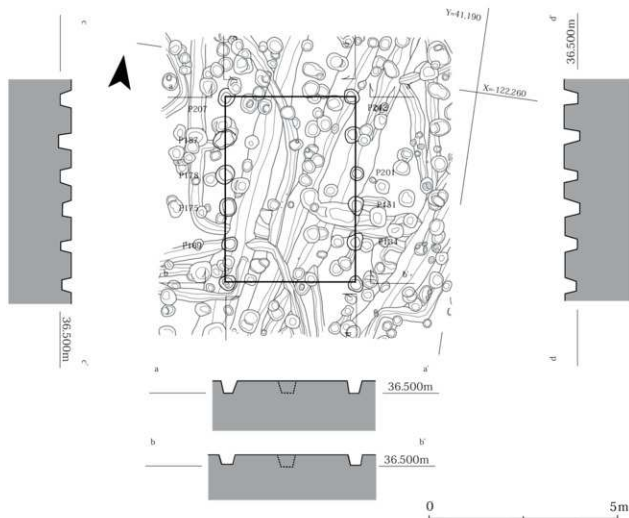


Fig.69 SB10163 平面・断面図 (S=1/100)

SX09110 (Fig.86)

第9次調査区の東区で検出したSH09104の上面で検出した。埋土は黒褐色シルト混砂礫層であり、明らかにSH09104とは異なった埋土であったので、容易に識別できた。長軸1.4 m、短軸0.8 mの不整形な長楕円形で、検出面からの深さは0.6 mと深い。断面は2段に落ち込み、底面は平坦にならず、凸凹していた。別の土坑が複数重複している可能性も考えたが、埋土に変化はなく、一つの土坑と理解した。ただし、掘りあがった形状からは、木の根等の擾乱を想定した方がよい。

出土遺物は弥生土器のみで占められるので、概ね弥生時代後期頃のものだと考えられる

SX09115/116 (Fig.87)

第9次調査区の南東区で検出した。ともに黒褐色砂礫混シルト層の単層であるが、SX09115がSX09116よりも新しいことを確認した。

SX09115の長軸は2.0 m、短軸は0.7 mの隅丸方形で、検出面からの深さは0.3 mある。基底面は平坦で箱形の形状を呈す。形状からは土壇墓であってもおかしくない。

SX09116は長軸1.7 m、短軸は0.5 mの隅丸方形である。SX09115よりも一回り小さい。検出面からの深さは0.1 mと浅い。基底面は平坦で箱型の形状を呈し、SX09115と同様に土壇墓であってもおかしくない。

いずれも出土遺物は弥生土器のみであるが、SX09115

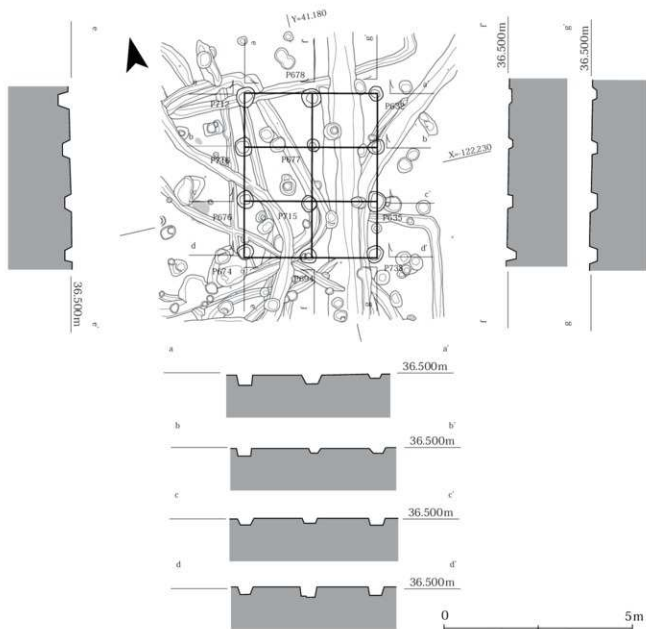


Fig.70 SB10123 平面・断面図 (S=1/100)

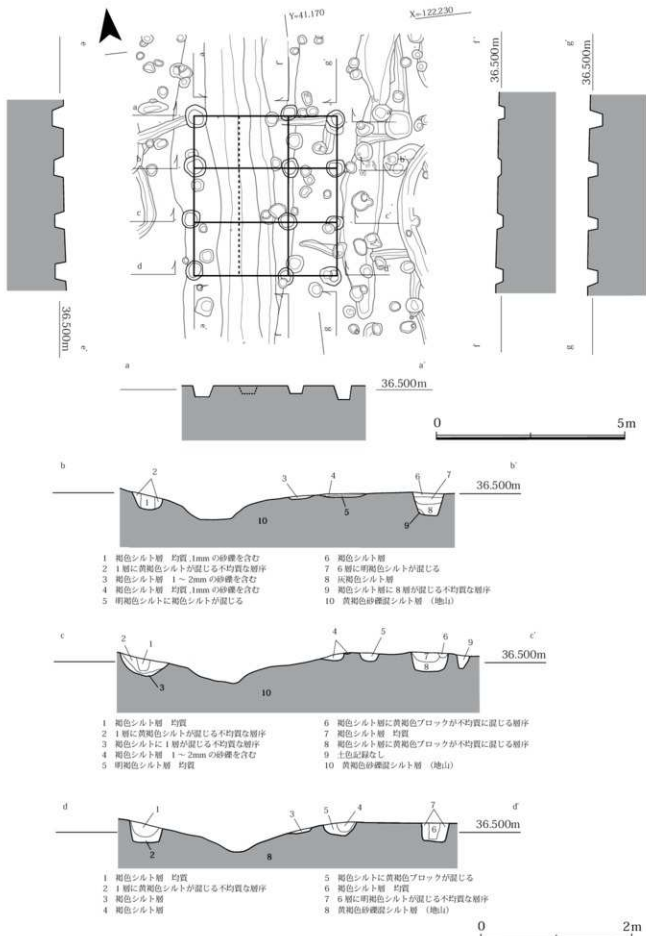


Fig.71 S810136 平面・断面図 (S=1/50・1/100)

から山中式の高杯等が出土している。このことから、概ね弥生時代後期頃の土坑だと考えられる。

SX1026 (Fig.88)

第10次調査区の中区で検出した。黒褐色砂礫混シルト層の単層であり、周囲の竪穴建物等よりも上位で検出した土坑である。

東西約7m、南北約3.5m前後の不整形で、検出面からの深さは0.1～0.2mある。基底面も平坦でなく凸凹しており、木の根等によって擾乱されている可能性があ

る。埋土のしまりも強く、古い遺構だと判断できた。当初は竪穴建物の重複と理解して掘り進めたが、調査の結果、不整形な土坑と理解するに至った。

比較的、出土遺物は多く、弥生土器の他に、須恵器や土師器が出土した。それらの特徴から6世紀前後の土坑だと判断できる。

SX1029 (Fig.89)

第10次調査区の西区で検出した。長軸2.1m、短軸1.0m前後の不整形を呈する。検出面からの深さは0.1mと

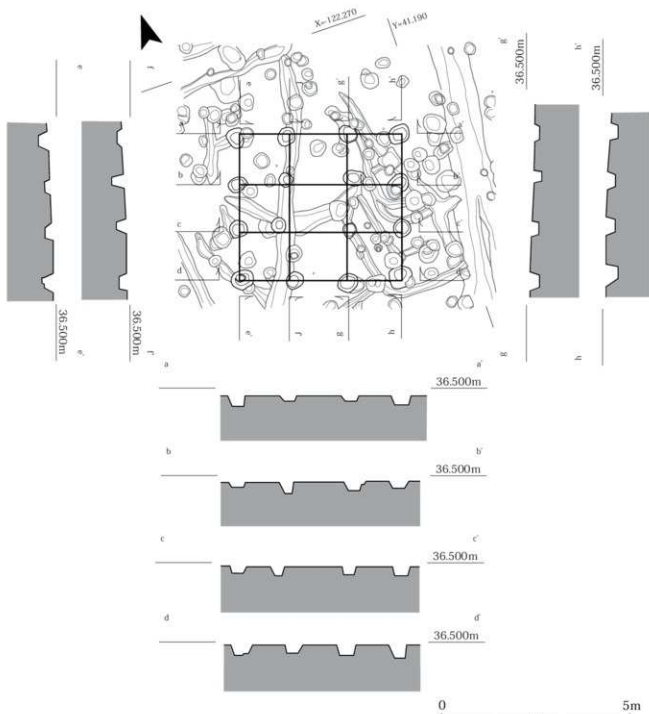


Fig.72 SB10155 平面・断面図 (S=1/100)

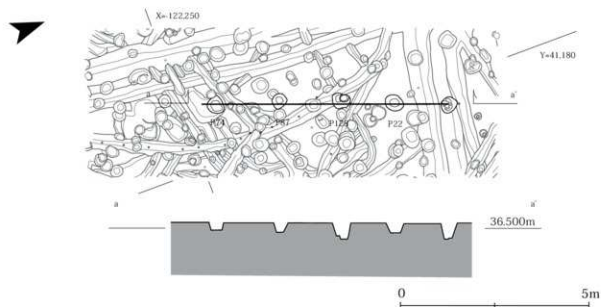


Fig.73 SA0928 平面・断面図 (S=1/100)

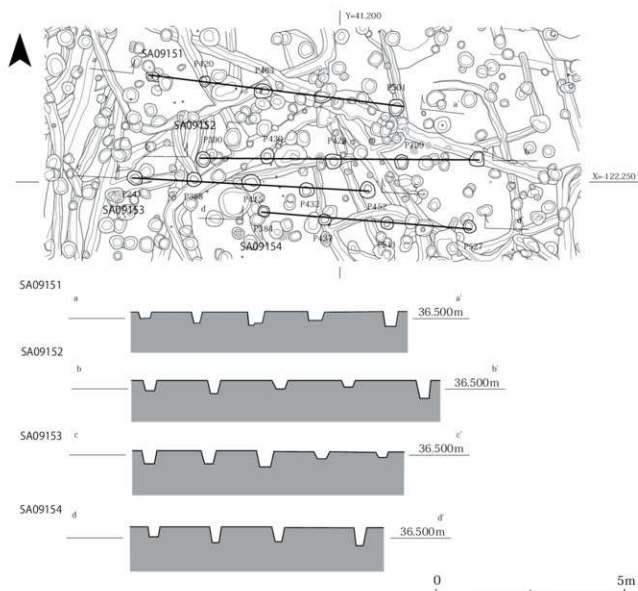


Fig.74 SA09151/152/153/154 平面・断面図 (S=1/100)

浅く、基底面は平坦である。埋土は黒褐色砂礫混シルト層で、しまりも強かった。

出土遺物はほとんどなく、年代を比定することはできなかった。ただし、埋土の様子は他の弥生時代後期頃のものと同じで、同時期の遺構として違和感がなかった。

SK1058 (Fig.90)

第10次調査区の西区で検出した。東西0.8m、南北1.0mで、検出面からの深さは0.2mある。平面形はやや角ばった楕円形を呈し、基底面は平坦であった。埋土は黒褐色シルト混砂礫層の単層で、しまりは比較的強かった。

出土遺物は弥生土器が混入しているのみで、明確な婦

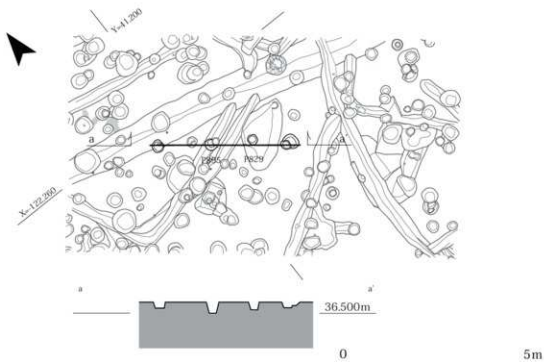


Fig.75 SA09155 平面・断面図 (S=1/100)

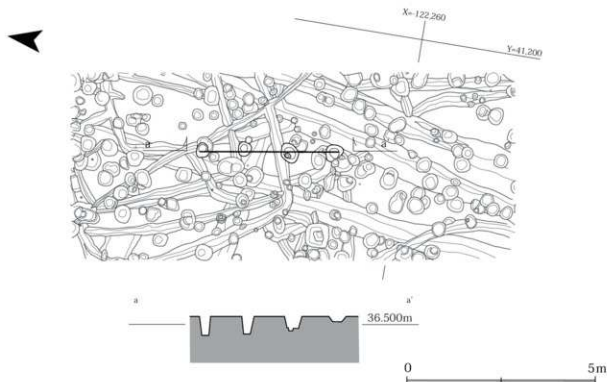


Fig.76 SA10164 平面・断面図 (S=1/100)

属時期を比定することはできなかった。

SX1067

第10次調査区の西区で検出した。東西1.0 m、南北0.4 mで、検出面からの深さは0.1 mと浅い。平面形はやや角ばった楕円形を呈し、基底面は平坦であった。埋土は黒褐色砂礫混シルト層の単層であった。

出土遺物は弥生土器が混入しているのみで、明確な帰属時期を比定することはできなかった。

SK1084 (Fig.91)

第10次調査区の北西区で検出した。東西、南北とも0.8 m前後の円形を呈する。検出面からの深さは0.3 mある。

基底面はすり鉢状に丸味をもつ。埋土は1層目が黒褐色砂礫混シルト層でしまり・粘性ともややあり、2層目は黒褐色砂礫混シルト層でしまり強く、粘性はややあった。周囲の竪穴建物よりは新しい土坑であることを確認している。

出土遺物は混入したと考えられる弥生土器のみであり、詳細な時期を比定することはできなかった。埋土の様子からは中世後半の土坑である可能性が高い。

SK1081 (Fig.92)

第10次調査区の北西区で検出した。東西1.7 m、南北1.6 m前後のほぼ円形を呈する。検出面からの深さは0.1 mと浅く、基底面は平坦である。埋土は暗黒褐色砂

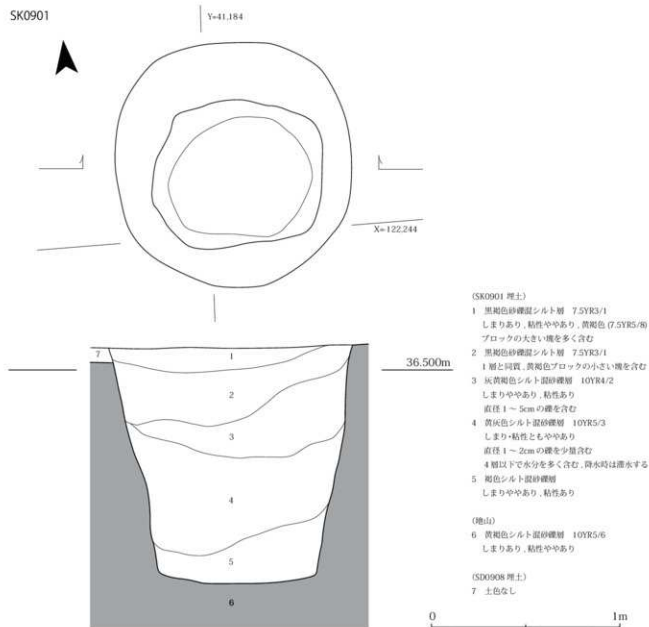


Fig.77 SK0901 平面・断面図 (S=1/20)

SK0938/52

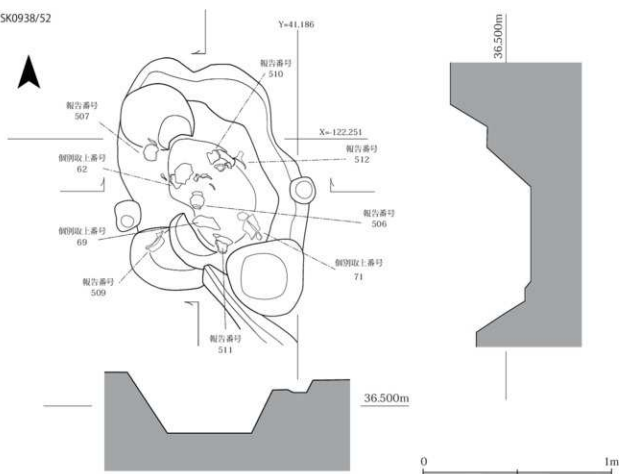


Fig.78 SK0938/52 平面・断面図 (S=1/20)

SK0939

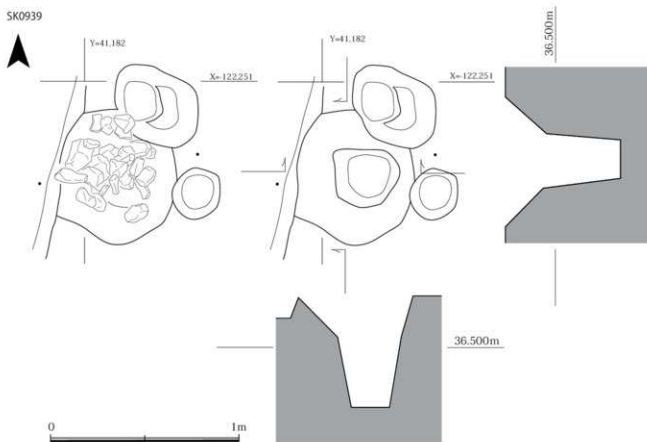


Fig.79 SK0939 平面・断面図 (S=1/20)

礫混シルト層でしまり・粘性ともあり、焼土ブロックを含む不均質な層序であった。他の遺構埋土とは明らかに異なっていた。周囲の竪穴建物よりも新しい土坑であることを確認している。

出土遺物は弥生土器と軽石等が少量出土したのみであり、詳細な時期を比定することはできなかった。

SK10100 (Fig.93)

第10次調査区の北区で検出した。東西1.3 m、南北1.6 mの楕円形を呈する。検出面からの深さは0.1 mと浅い。基底面は平坦となる。埋土は褐色砂礫混シルト層の均質で、しまりはあまりなく、粘性はややあった。周囲の竪穴建物よりは新しい土坑であることを確認している。

出土遺物は弥生土器が混入しているが、土師器の羽釜の体部片を含んでいた。埋土の様子からも、中世後半の土坑だと考えられる。形状からは土壌墓であってもおかしくない。

SK10119 (Fig.94)

第10次調査区の北区で検出した。東西0.6 m、南北1.0 mの楕円形を呈する。検出面からの深さは0.2 mである。埋土は黒褐色砂礫混シルト層で、周囲の竪穴建物SH10107/118より新しい土坑であることを確認している。

出土遺物は混入したと考えられる弥生土器のみであり、詳細な時期を比定することはできなかった。

SK10102 (Fig.95)

第10次調査区の北区で検出した。東西1.4 m、南北2.0 mの楕円形を呈する。検出面からの深さは0.1 mと浅く、基底面は平坦となる。埋土は灰褐色砂礫混シルト層の均質で、しまりはあまりなく、粘性はややあった。周囲の竪穴建物よりは新しい土坑であることを確認している。

出土遺物は混入したと考えられる弥生土器のみであり、詳細な時期を比定することはできなかった。埋土の様子からは中世後半の土坑である可能性が高い。形状からは土壌墓であってもおかしくない。

SK10143 (Fig.96)

第10次調査区の拡張区(西2区)で検出した。一部が調査区外のため、詳細な報告は次回に譲るが、確認できた範囲では東西2.5 m以上、南北4.5 mの方形を呈する。

検出面からの深さは0.6 mと深く、2段に落ち込む。基底面は約3 m四方の平坦であり、直径0.2～0.3 mの柱穴らしきものが2ヶ所確認されたが、掘削は次年度とした。

埋土は4層で構成されている。最上層の灰褐色砂礫混

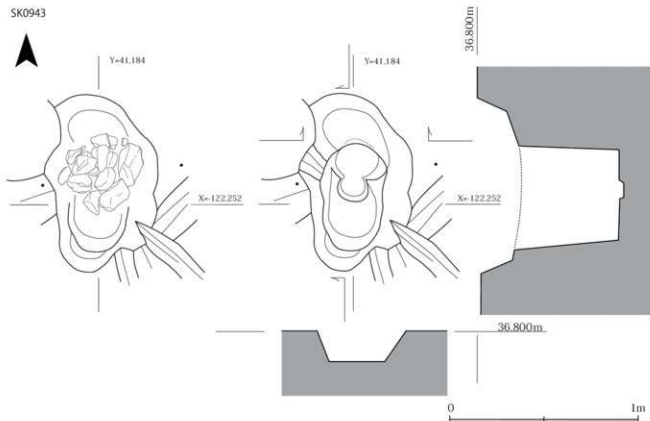


Fig.80 SK0943 平面・断面図 (S=1/20)

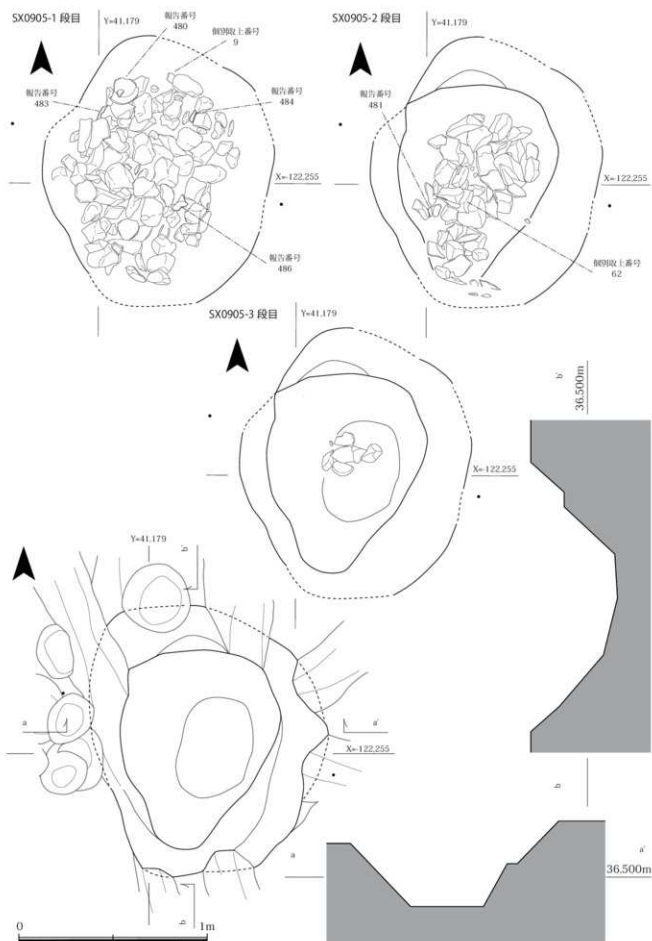
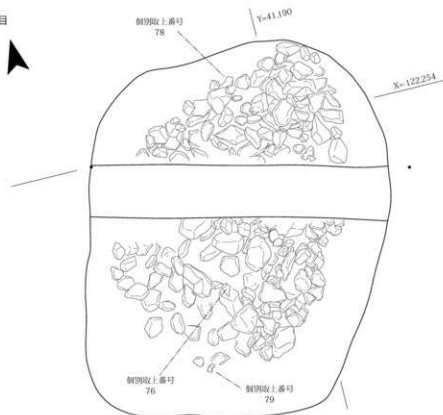
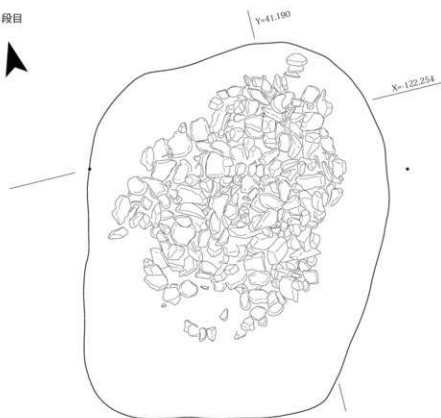


Fig.81 SX0905 平面・断面図 (S=1/20)

SX0958-1 段目



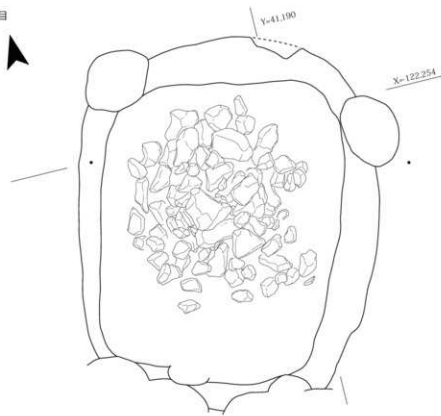
SX0958-2 段目



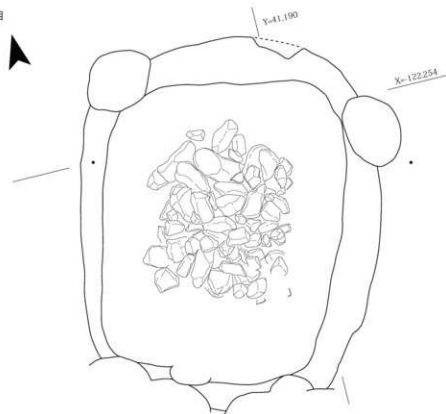
0 1m

Fig.82 SX0958 平面図① (S=1/20)

SX0958-3 段目



SX0958-4 段目



0 1m

Fig.83 SX0958 平面図② (S=1/20)

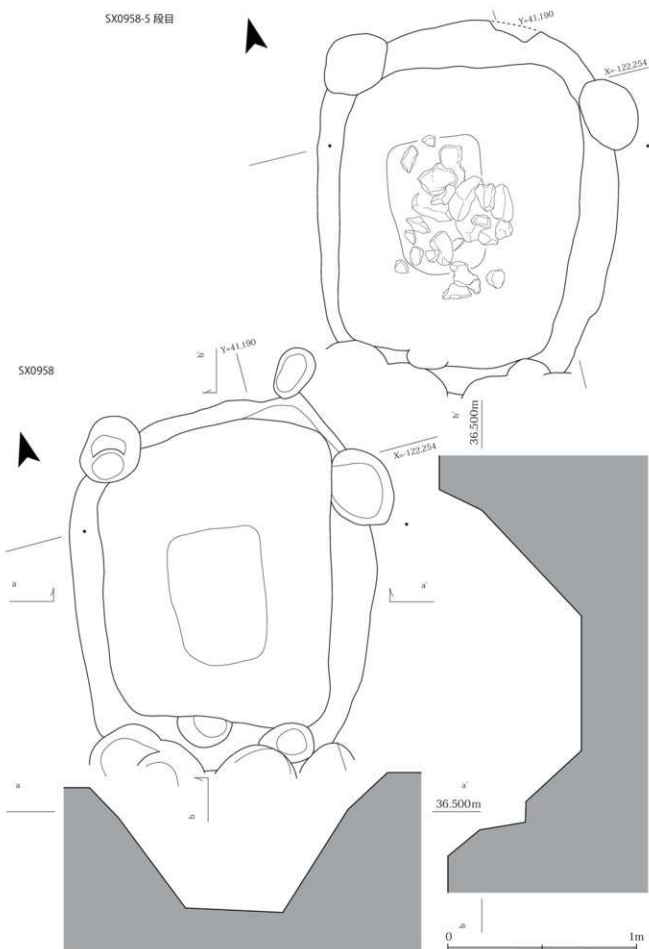


Fig.84 SX0958 平面图③・断面图 (S=1/20)

SK0977

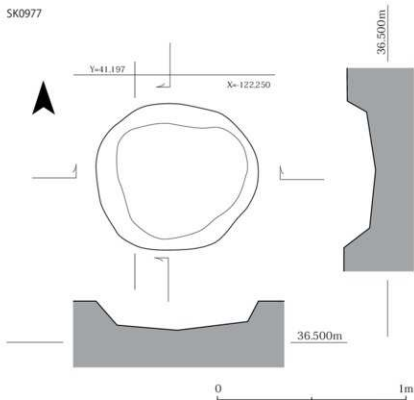


Fig.85 SK0977 平面・断面図 (S=1/20)

シルト層から、灰黄色砂礫混シルト層、灰黄色砂礫混シルト層に黄褐色ブロックを含む層序、褐灰色砂礫混シルト層となる。なお、切り合い関係から、周囲の竪穴建物よりは新しい土坑であることを確認しているが、東側に隣接するSD10139の埋土とSX10143の最上層の埋土は平面では識別できなかった。

出土遺物は混入したと考えられる弥生土器や須恵器の他に土師器の皿や羽釜の破片が出土している。埋土の様子とあわせて、中世後半の土坑だと考えられる。

なお、最下層である5層から出土した炭化物2点の放射性炭素年代測定を実施したところ、15～16世紀頃の年代が示されている(詳細は第VI章を参照)。発掘時の所見とも齟齬はない。

SK09110

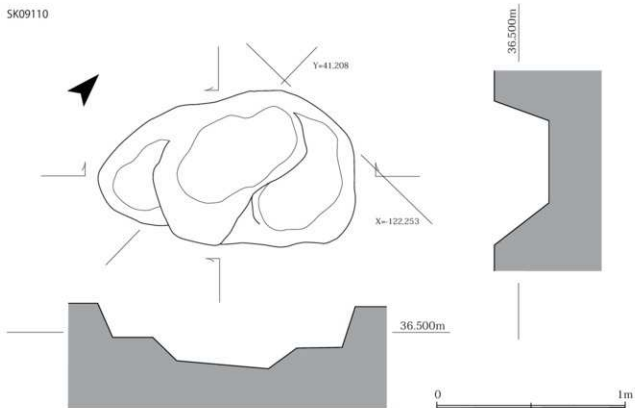


Fig.86 SK09110 平面・断面図 (S=1/20)

SX09115·SX09116

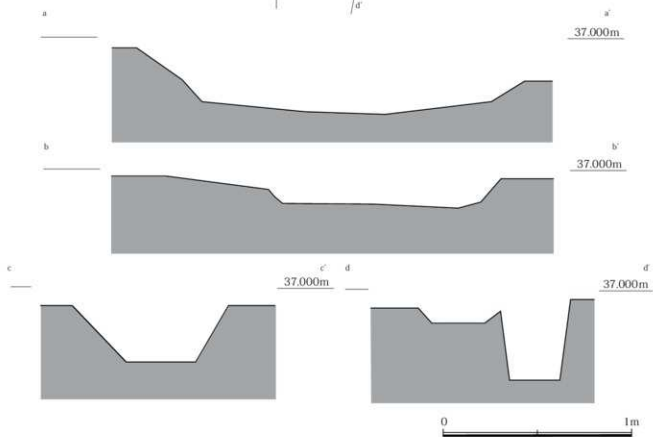
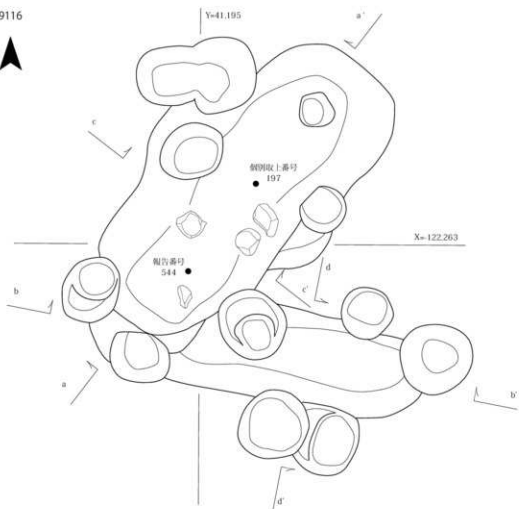
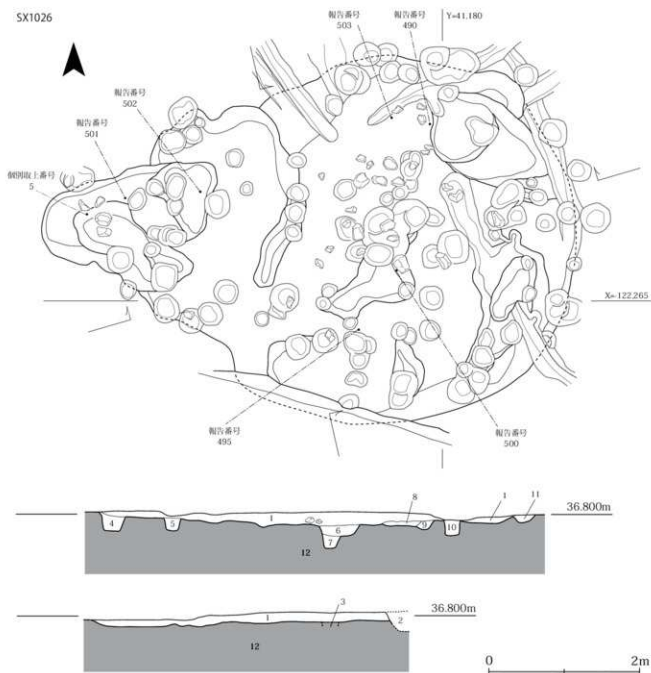


Fig.87 SX09115·SX09116 平面・断面図 (S=1/20)

SX1026



(SX1026 埋土)

1 黒褐色砂礫混シルト層 しまり・粘性ややあり、比較的均質、炭化物・土溜片を含む、所々に傘大から人頭大の礫を含む

(SD1010 埋土)

2 黄灰色砂礫層 しまりややなし、粘性ややあり、比較的均質

(ビット埋土)

3 黒褐色砂礫混シルト層 しまりややあり、粘性あり、人頭大の礫を含む

4 黒褐色砂礫混シルト層 しまりあり、粘性強い、黄褐色ブロックを多く含む不均質な層序

5 暗褐色砂礫混シルト層 しまりあり、粘性強い、地山に近いやや黒味がかった埋土

6 黒褐色砂礫混シルト層 しまりややあり、粘性あり、土溜片を含む

7 暗褐色シルト層 しまりあり、粘性強い、均質

10 黒褐色砂礫混シルト層 しまりややあり、粘性あり、人頭大の礫を多く含む、比較的均質

(SH1040 埋土)

8 黒褐色砂礫混シルト層 しまりややあり、粘性あり、赤褐色の焼土ブロックを含む不均質な層序

9 黒褐色砂礫混シルト層 しまりややあり、粘性あり、赤褐色の焼土ブロックを含む不均質な層序、8層に近似的な焼土ブロックの量が多い

(SH1031 埋土)

11 黒褐色砂礫混シルト層 しまりあり、粘性ややあり、赤褐色の焼土・炭化物をブロックを多く含む

(地山)

12 明黄褐色砂礫混シルト層 しまり・粘性あり、均質

Fig.88 SX1026 平面・断面図 (S=1/50)

SK1029

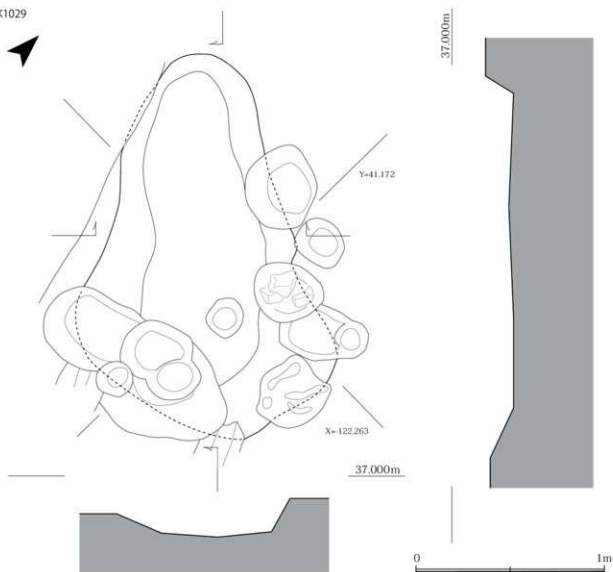


Fig.89 SK1029 平面・断面図 (S=1/20)

SK1058

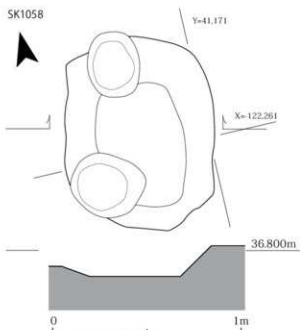


Fig.90 SK1058 平面・断面図 (S=1/20)

SK1084

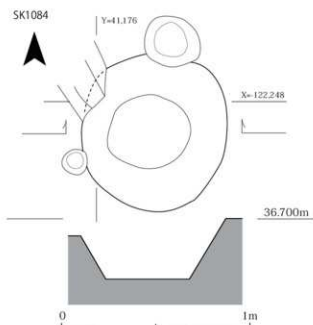


Fig.91 SK1084 平面・断面図 (S=1/20)

6 小結

以上のように、磐城山遺跡では多くの遺構が重複して検出された。ここに報告したもの以外にも、竪穴建物や掘立柱建物などがあった可能性は高いが認識することができなかった。

なお、第9次調査区では、はじめて縄文時代の土坑が確認された。これまでは、有茎尖頭器や石鏃等が出土していたが、まともに縄文時代の遺構が確認されたのは所見である。土坑の形状等から、竪穴建物に伴う炉跡の可能性を考えて周囲を検出したが、他の遺構の重複が著しいことから明確に捉えることはできなかった。

また、中世後半と想定される道路状遺構がはっきりと

としてきた。これまでは素掘りの溝で区切られた区画を想定してきたが、通路などを備えた地割があるようで、内部に配置された建物跡や井戸等の生活の痕跡まで窺えるようになってきた。道路と想定した SC1007/08/09 等は SC1010 に折れ曲がり、さらに北上するようである。

磐城山遺跡の西側には、中世城館の木田城跡が隣接している。年代的にみて、木田城跡の前後の遺構だと考えられるので、西側に進むにつれてより濃密な遺構が検出されることが想定される。磐城山遺跡の主要な遺構である弥生時代の竪穴建物の埋土上で確認すべき遺構であるので、今後は深く注意して調査を進めなくてはならないであろう。

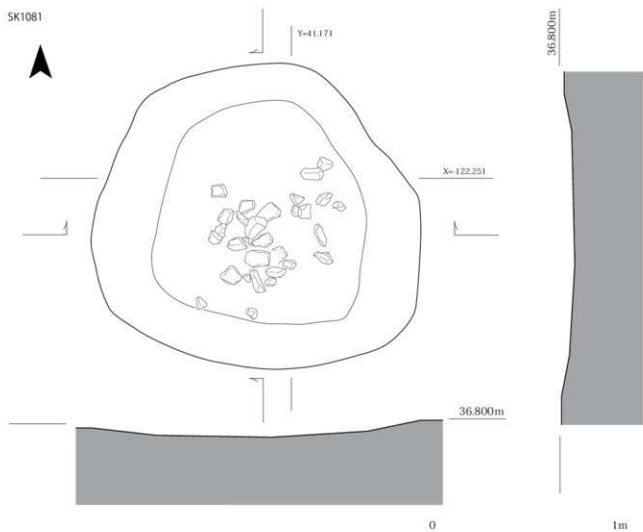


Fig.92 SK1081 平面・断面図 (S=1/20)

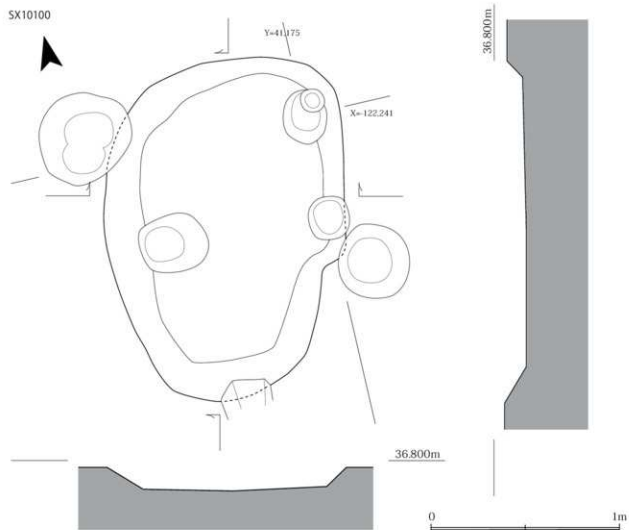


Fig.93 SX10100 平面・断面図 (S=1/20)

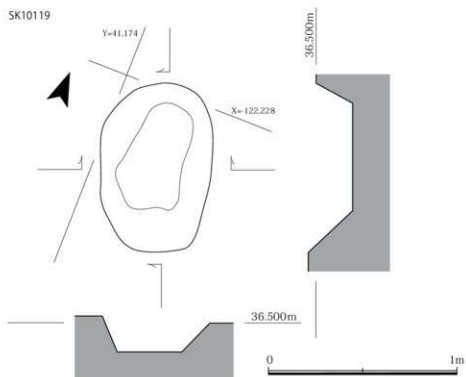
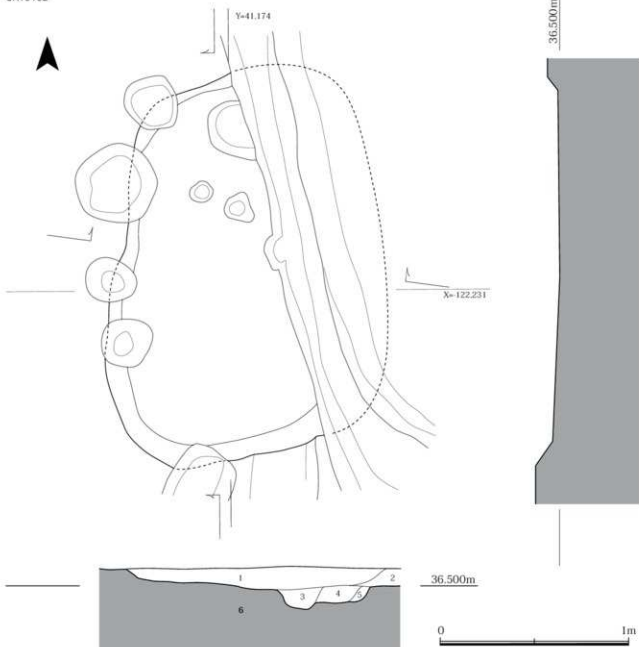


Fig.94 SK10119 平面・断面図 (S=1/20)

SX10102



(SX10102 埋土)

1 灰褐色砂礫混シルト層 しまりあまりなし、粘性ややあり、均質、炭化物を含む

(SH10107 埋土)

2 灰褐色砂礫混シルト層 しまり・粘性ややあり、比較的均質

3 黒褐色砂礫混シルト層 しまりあり、粘性ややあり、灰褐色ブロックを含む、炭化物を少量含む、SH10107 西辺埋埋埋土 (SH10118 埋土)

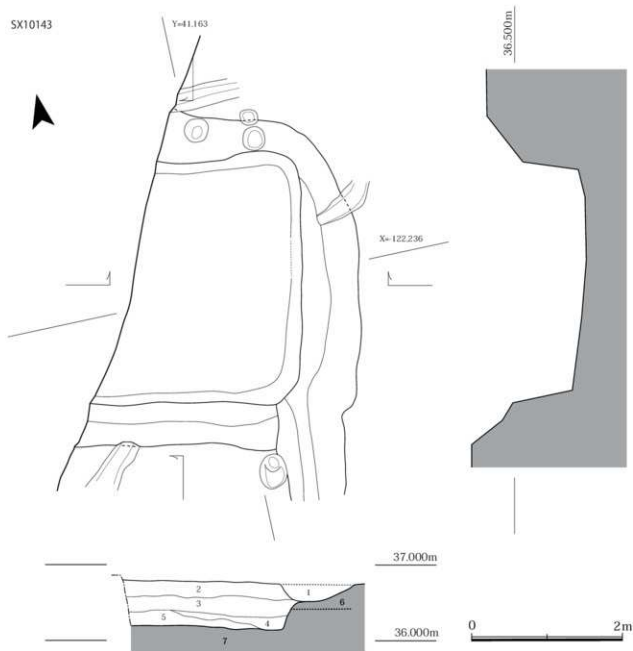
4 黒褐色砂礫混シルト層 しまりあり、粘性ややあり、黄褐色ブロックを含む、炭化物を少量含む、SH10118 西辺埋埋埋土

5 黄褐色砂礫混シルト層 しまりあり、粘性ややあり、灰褐色ブロックを含む、SH10118 西辺埋埋埋土 (地山)

6 明黄褐色砂礫混シルト層 しまりあり、粘性ややあり、花崗岩礫を含む

Fig.95 SX10102 平面・断面図 (S=1/20)

SX10143



(SD10139 埋土)

1 灰褐色砂礫混シルト層 しまりあまりなし、粘性ややあり

(SX10143 埋土)

2 黒褐色砂礫混シルト層 2.5Y3/2 しまりあまりなし、粘性ややあり、焼土・炭化物を含まない、軟質

3 灰黄褐色砂礫混シルト層 10YR4/1 しまり・粘性ややあり、焼土・炭化物は含まない

4 3層に黄褐色ブロックを混じる不均質な層序 10YR5/6

5 褐灰色砂礫混シルト層 10YR4/1 しまりややあり、粘性あり、炭化物を床面直上で少量含む、焼土なし、粘質が強い(地山)

6 明褐色砂礫混シルト層 7.5YR5/8 しまりあり、粘性ややあり

7 黄褐色砂礫混シルト層 10YR3/6 しまりあり、粘性ややあり、直径5～10cmの礫を多く含む層序

Fig.96 SX10143 平面・断面図 (S=1/50)

Tab.2 掘立柱建物の一覧表 (※ 第9・10次調査のみ)

遺構番号	向き	形態	長軸 方向	規模 (間数)	面積 (㎡)	梁行 (m)	桁行 (m)	1間の距離 : 梁行 (m)	1間の距離 : 桁行 (m)	出土遺物/備考
SB0927	N-6°-E	側柱	東西	2×3間	14.85	3.3	4.5	1.5+1.8	1.5	弥生土器、須恵器、 5～6世紀以降
SB09126	N-5°-W	総柱	南北	2×3間	11.88	3.3	3.6	1.65	1.2	弥生土器、須恵器、 6世紀以降、根巻石
SB09127	N-16°-W	総柱	東西	2×3間	14.04	3.6	3.8	1.8	1.3	弥生土器、須恵器、 SB09126以降
SB09128	N-10°-E	側柱	南北	1×2間	8.36	2.2	3.8	2.2	1.9	弥生土器、須恵器、 中世
SB09145	N-12°-E	側柱	東西	2×4間	31.92	4.2	7.6	2.1	1.9	弥生土器、須恵器 中世
SB09146	N-8°-E	側柱	南北	2×3間	15.12	3.6	4.2	1.8	1.4	弥生土器のみ、竪穴埋土 より上位で検出
SB09147	N-28°-E	総柱	東西	2×2間	11.56	3.4	3.4	1.7	1.7	弥生土器、須恵器、土師 器
SB09148	N-8°-W	側柱	東西	2×4間	16.56	3.6	4.6	1.8	1.3	弥生土器のみ
SB09149	N-9°-E	側柱	東西	3×4間	21.06	3.9	5.4	1.3	1.35	弥生土器、土師器
SB09150	N-1°-E	総柱	南北	2×2間	8.4	2.8	3.0	1.4	1.7+1.3	弥生土器のみ
SB09156	N-37°-E	側柱	東西	2×5間	16.64	3.2	5.2	1.6	1.05	弥生土器のみ
SB09157	N-14°-E	側柱	東西	2×3間	15.96	3.8	4.2	1.9	1.3	弥生土器のみ
SB09158	N-12°-E	側柱	東西	2×3間	16.66	3.4	4.9	1.7	1.4+1.7+1.7	弥生土器のみ
SB10123	N-13°-W	総柱	南北	2×3間	14.70	3.5	4.2	1.75	1.4	弥生土器のみ
SB10136	N-6°-W	総柱	南北	3×3間	16.38	3.9	4.2	1.3	1.4	弥生土器のみ
SB10155	N-19°-E	総柱	東西	3×3間	16.38	3.9	4.2	1.3	1.3+1.7+1.3	弥生土器のみ
SB10158	N-14°-E	側柱	東西	2×3間	11.70	3.0	3.9	1.5	1.3	弥生土器のみ
SB10159	N-5°-E	側柱	東西	2×3間?	19.20	4.0	4.8	2.0	1.6	弥生土器のみ
SB10160	N-16°-W	総柱	南北	2×2間	7.84	2.8	1.4	2.8	1.4	弥生土器のみ
SB10161	N-17°-W	総柱	東西	2×2間	7.80	2.6	3.0	1.3	1.5	弥生土器のみ
SB10162	N-8°-W	側柱	南北	2×5間	16.64	3.2	5.2	1.6	1.05	弥生土器のみ
SB10163	N-8°-W	側柱	南北	2×5間	17.0	3.4	5.0	1.7	1.0	弥生土器のみ

第V章 出土遺物

磐城山遺跡から出土する遺物は、遺構密度の割りに少ないのが現状である。第9次調査では、遺物整理箱（55×33×10cm）に69箱、第10次調査では70箱が出土した。多くは弥生土器の破片であり、復原あるいは図化できるものは限られている。その中でも、SH09104やSH0960/80、SH0966、SH09140等から出土した遺物はよくまとまっており、良好な一括資料と評価できる。また、SK0977からは、磐城山遺跡で初めて縄文土器がまとまって出土した。

以下、出土遺構のまとまりごとに解説する。これは、遺構の重複が著しいため、明確に区分して取り上げることができなかったことによる。そのため、各遺構とも、若干の混在が認められることを明記しておきたい。

なお、いずれの出土遺物も磨滅が激しく、調整等が不鮮明であるものが多い。市内の台地上の遺跡には通有のあり方であるが、器壁が1mm近く剥落しているものも存在し、遺存状況は決して良好といえない。

1 竪穴建物

SH0903・SH0910・SH1090/91/92/93 (Fig.97)

1～13はSH0903/0910やSH1090-93の一連の竪穴

建物から出土した。4と5の須恵器は5～6世紀のものが混在したと思われるが、他は概ね弥生時代後期のものである。

1と2は弥生土器の壺で、3はミニチュア土器である。3は内外面ともユビオサエの痕跡が残り、外面はその後ナデ消している。4・5は須恵器杯蓋である。4は口径11.0cmと小型で、端部に鋭さを残している。天井部は回転ヘラ削りが幅広く施される。5は口径12.0cmとやや大きく、稜の鋭さは大分失われている。6は弥生土器の壺である。

7と8はSH0922/23/24の南東主柱穴（P0978）から出土した。ともに弥生土器の高杯の脚部である。7は杯部と脚部の接合部に2段以上の直線文が描かれ、3ヶ所の円形透かしがあげられている。杯部の中心には、焼成前に直径約1～2mmの穿孔があげられている。8の外面には縦方向のヘラミガキが密に施される。円形透かしは1ヶ所確認できたのみである。

9はSH0903の北東主柱穴（P0925）から出土した。砂岩製の砥石の破片で、少なくとも2面が使用されている（図の網掛け部分）。よく磨滅しているが、擦痕等は認められない。

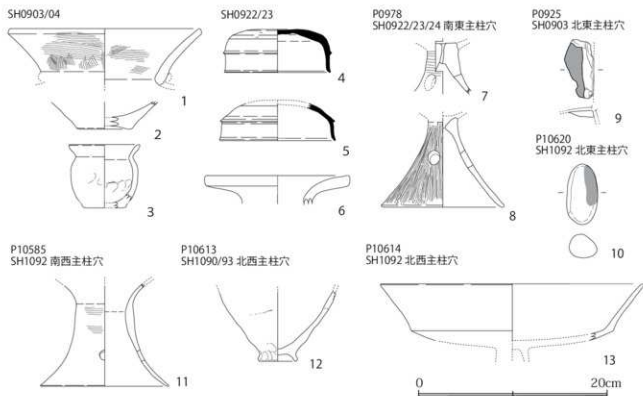


Fig.97 SH0903・SH0910・SH1090/91/92/93 出土遺物 (S=1/4)

10 は SH1092 北東主柱穴 (P10620) から出土した磨石である。石材不明であるが、完形品である。長軸に対して斜位に磨減し、面が形成されている。

11 は SH1092 南西主柱穴 (P10858) から出土した器台である。外面のくびれ部を中心に直線文が施されるが、磨減のため不明瞭である。脚部には直径約 1cm の円孔が 2ヶ所確認され、復原すると 4ヶ所にあったものと想定される。

12 は SH1090/93 の北西主柱穴 (P10613) から出土した壺でない鉢の底部である。底部外面にはユビオサエが顕著で、高台状になっている。破損分は擬口縁が残り、粘土紐の巻上げによって成形されていることが分かる。

13 は SH1092 北西主柱穴 (P10614) から出土した高杯である。口径 27.7cm と大きく、口縁は直線的に開く。その器形等の特徴から、山中式であることが分かる。

SH0930/31/32・SH0947 (Fig.98)

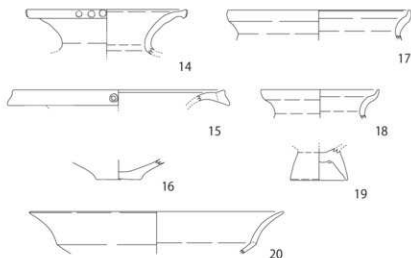
14 ~ 20 は SH0930/31/32/47 の埋土掘削中に出土した。22 ~ 27 は各主柱穴の出土で、21・28 は SH0930 や SH0947 の周壁溝のものである。29 と 30 は埋土掘削中に出土した山茶碗と古代瓦であり、上層の溝等の遺物が混入したものと考えられる。他は概ね弥生時代後期のものであるが、SH0947 からは廻間式まで下る。

14 ~ 16 は弥生土器の壺である。14 の口縁端部には 1 単位 3 個の円形浮文が、おそらく 4ヶ所貼り付けられている。15 も円形浮文が貼り付けられるが、単位や個数は不明である。浮文上には竹管状工具による刺突が施されている。

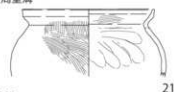
17 ~ 19 が弥生土器の甕である。17 と 18 はともに受口状の口縁となり、19 がそれらの底部となる。

20 は弥生土器の高杯である。口縁は大きく外反して開

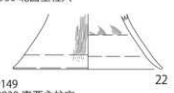
SH0930/31/32/47



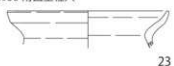
SH0930
南辺周壁溝



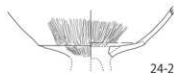
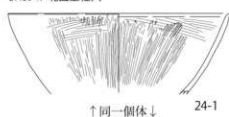
P09145
SH0930 北西主柱穴



P09149
SH0930 南西主柱穴



P09157
SH0947 北西主柱穴



25

P09481
SH0947 南東主柱穴



P09468
SH0947 北東主柱穴



29

SH0947
南辺周壁溝



30

0 20cm

Fig.98 SH0930/31/32・SH0947 出土遺物 (S=1/4)

き、山中式の特徴を持つ。

21はSH0930の南辺周壁溝から出土した弥生土器の甕である。受口状口縁を呈し、口縁内面には横方向のハケを残す。体部内面は比較的丁寧にナデで仕上げる。体部外面には斜方向のハケが密に施され、最大径付近より下部には煤が付着している。

22はSH0930北西主柱穴(P09145)から出土した高杯である。磨滅のため不鮮明であるが、外面には縦方向のミガキが施され、内面はハケ後ナデ消している。

23はSH0930南西主柱穴(P09149)から出土した甕である。受口状口縁を呈する。

24-1～25はSH0947北西主柱穴から出土した。24-1と24-2は接合しないものの同一個体の高杯である。24-1は緩やかに内湾する口縁部の破片で、内外面とも密にミガキを施している。24-2は脚部との接合部分の破片

である。杯部との屈曲部分は明確に段を持つ。25は台付甕の底部である。内外面ともハケが残る。

26はSH0947南東主柱穴(P09481)から出土した高



Fig.99 SH0942/49 出土遺物 (S=1/4)

SH0960/80

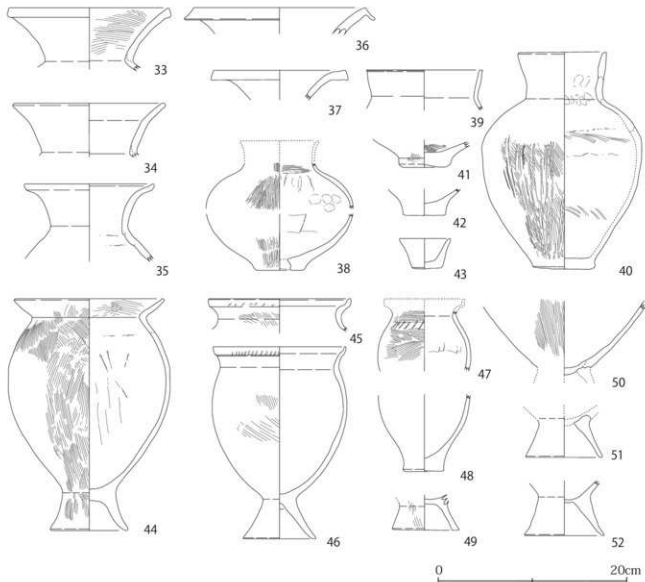


Fig.100 SH0960/80 出土遺物① (S=1/4)

杯である。内面は磨滅のため不詳であるが、外面には縦方向のミガキが施される。内湾する口縁をもつ。

27はSH0947 北東主柱穴（P09468）から出土した壺の底部である。

28はSH0947 南辺周壁溝から出土した。凝灰岩製の砥石である。長さ6.6cmと小型であるが、完形である。4面とも使用され、長軸方向に沿った擦痕が認められる。いずれの面もよく使い込まれている。

29は山茶碗の底部破片である。内外ともロクロナデされ、外底面は糸切り痕が認められる。30は平瓦の破片である。側縁は丁寧に面取りされ、凹面に布目が残る。凸面には平行縄目のタタキ痕が明瞭に残される。ともに混入品と推測される。

SH0942/49 (Fig.99)

31・32はSH0942の南東主柱穴（P09206）から出土した。31は弥生土器の甕である。内外とも不鮮明ながらナデによって仕上げられている。32は壺で、底部には穿孔がかけられる。外面にはハケが残る。ともに弥生時代後期頃のものとして問題ない。

SH0960/80 (Fig.100・101)

33～69はSH0960/80から出土した。埋土の南西隅を中心に床面直上でまとまっており、出土状況は良好であった。いずれも弥生時代後期の山中式のものである。

33～42は壺である。33～37は広口の壺で、頸部から口縁にかけて大きく開く。36の口縁は垂下する。39と40は直立した口縁を持つ壺である。おそらく38も同様であろう。38は接合しないが、同一個体と判断して図化した。38・40の外面にはミガキが施され、40のミガキの下にはハケが残されている。なお、40の体部は約2.5cm幅の粘土紐を積み上げて成形している。

43は鉢である。その形状から台付甕とも考えられるが、明確な接合痕や剥落の痕跡が認められなかったため、小型の鉢として扱っている。

44～52は甕である。48が平底と分かる以外は全て台付甕となるようである。44の口縁はく字に広がり、外面にはハケ、内面はケズリの痕跡が残されている。他は受口状口縁を呈し、口縁外面に刺突列を持つ。48はナデ消されて仕上げられているが、ナデの前には内面ケズリ、外面にはハケがあるように観察できる。48は47の底部になるかもしれない。また、50と51は同一個体の可能性が高い。

53～69は高杯である。53・54の杯部は口径に比して比較的浅いが、55・56はやや深くなっている。脚部は4

段程度の直線文が施され、脚部端部から1/3程度の高さに円形透かしを3ヶ所あけるものが多い。66・68はその上部にも1ヶ所のみ穿孔していることが確認できる。69は内湾しており、若干新しい要素を含んでいる。

SH0963 (Fig.102)

70～74はSH0963から出土した。72の砥石以外、全て弥生土器である。限定は難しいが、概ね弥生時代後期頃のものとして問題ない。

70の壺は口縁内面に羽状刺突があるようだが、磨滅のため不鮮明である。71は甕の体部破片である。ハケ調整の後、肩部に直線文とその下に刺突を1列施す。体部最大径辺りに波状文は認められない。最大径以下には煤が付着する。

72は粘板岩系の石材を用いた砥石である。両面の中央部分は磨滅により凹んでおり、よく使い込まれている。

73は南辺中央土坑から出土した器台である。口縁を欠くが、比較的残りはよい。内外面ともミガキが密に施される。脚部内面にはシボリと横方向のハケが残り、円形透かしが3ヶ所あけられている。

74はSH0963 南東主柱穴（P09366）から出土した。壺の底部破片である。内外とも磨滅のため不詳であるが、上げ底となっている。

SH0974 (Fig.103)

75～82はSH0974の出土遺物である。時期を特定する特徴に乏しいが、弥生時代後期頃のものである。

75は壺の底部破片で、内外面とも部分的にハケが残る。76・77は受口状口縁の甕となる。

78～80は中央の跡のSK0984から出土したものである。78が広口壺で、口縁端部はそれほど肥厚しない。79・80は土玉である。図示した2点のみが出土した。直径3cm程度の球体で、焼成前に穿孔される。

81・82はSH0974 主柱穴（P09455）から出土した。81は受口の甕で、82は高杯の脚部である。82の高杯の脚部は直線的に開く。

SH0966 (Fig.104)

83～110はSH0966から出土した。83～102の多くが、床面直上で出土しており、その特徴から弥生時代後期の山中式だと判断できる。

83～88は壺であるが、出土したものは広口壺ばかりであった。86の端部は肥厚するが、他はそれほど顕著でない。

89～95は甕である。94・95はともにく字甕であり、

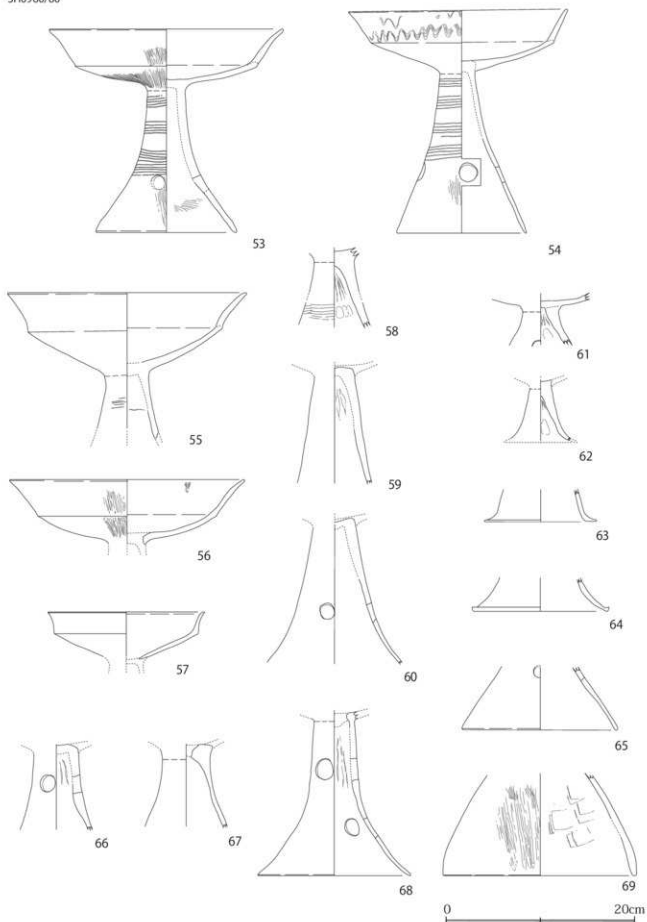


Fig.101 SH0960/80 出土遺物② (S=1/4)

受口状口縁はほとんど見られなかった。94の口縁端部には刻みが施されているかもしれないが、磨滅のため不鮮明であった。また、底部は台付裏が主体である。

96は鉢とした。口径22.0cmあり、口縁は短く外方へ開く。器壁が比較的厚手で、外面には焼成時の黒斑が見られる。

97～102は高杯である。97・98ともに薄手で、口縁は強く外反する。99は椀形の高杯になる。口縁端部はやや肥厚し、やや角ばった面を持つ。椀形高杯の出土は少なく、貴重な資料である。

103～105はSH0966/67南辺中央土坑から出土した。103の高杯はよく外反しており、山中式の特徴を有する。脚部は細長く、5段の直線文が施される。97の杯部と同一個体の可能性もある。104は2段の直線文の間に竹管状工具による円形刺突が施される。このモチーフはあまり類例が認められないものである。

106はSH0966西辺周壁溝から出土した高杯である。口縁は他の高杯ほど外反せず、比較的直線的に開く。

107はSH0966北西主柱穴（P09349）から出土した裏の体部破片である。肩部に刺突が施されている。

108～110はSH0966南西主柱穴（P09419）から出土した裏である。いずれも、く字裏である。108・109は口径13cmの中型裏で、110は口径17.6cmの大型裏になる。

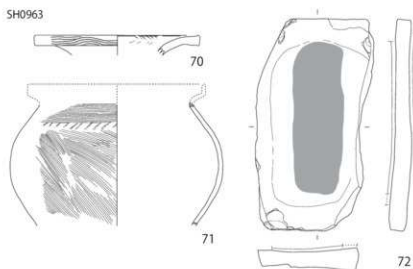
SH0997 (Fig.105)

111～114はSH0997から出土したものである。111は6世紀代の須恵器で、112・113も同時期であってかわらない。114は弥生土器である。

111は杯身で、端部の鋭さは失われている。口縁端部の内傾など6世紀以降の須恵器だと判断できる。

112・113はともに土師器の裏である。典型的なもので

SH0963



SH0963 南辺中央土坑

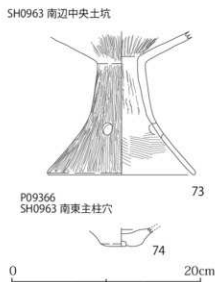
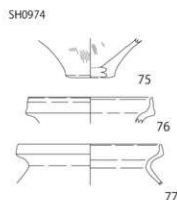
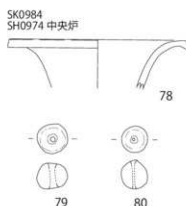


Fig.102 SH0963 出土遺物 (S=1/4)

SH0974



SK0984
SH0974 中央炉



P09455
SH0974 主柱穴

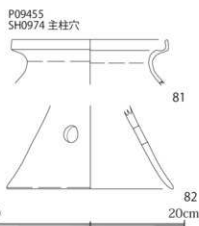


Fig.103 SH0974 出土遺物 (S=1/4)

SH0966

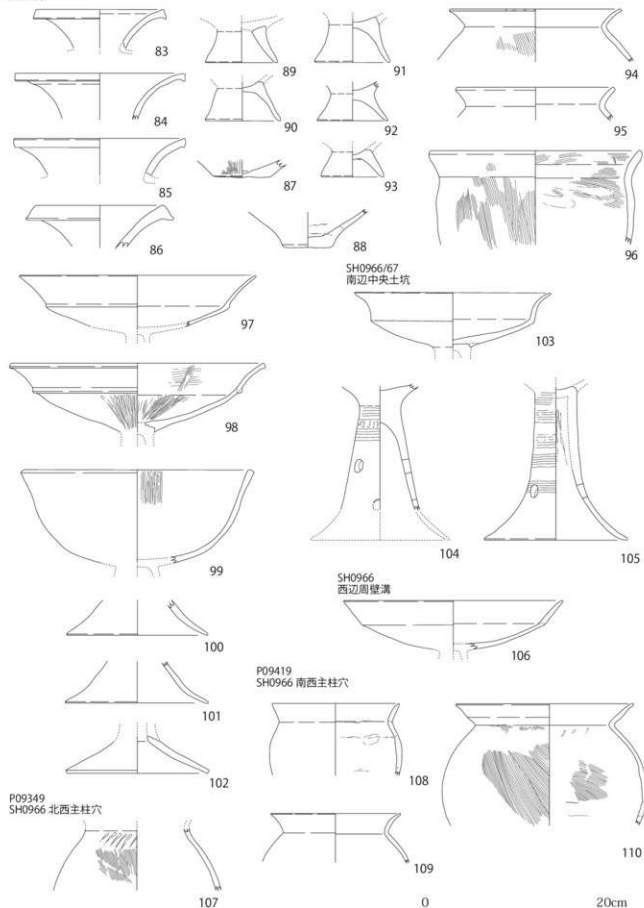


Fig.104 SH0966 出土遺物 (S=1/4)

はないが、宇田型甕のなれの果てのような口縁部形状をしている。6世紀代のものと理解してよいだろう。

114は弥生土器の小型甕だと思われる。口縁は丁寧にヨコナデし、短く外反させる。内面はユビによるナデが不整方向に顕著に認められ、平底の外底部には太めのミガキが施されている。粘土紐の単位も認められ、1.5cm前後であることが分かる。

SH0987・SH0993 (Fig.106)

115～119はSH0987から出土したものである。115・116は甕である。115の内外面ともミガキが施されているようだが、磨滅のため不鮮明である。117は土師器のく字甕で、口縁はヨコナデされる。118は須恵器の杯

蓋で、口径15.0cmと大きい。端部の鋭さもなくなり、6世紀代のもと考えられる。119は弥生土器の高杯で、SH0987南辺周壁溝から出土している。本来の建物の時期を示す遺物であろう。117と118は6世紀頃のものであり、本来は上部のSH0997の出土遺物であったであろう。他は弥生時代後期頃のもと考えられる。

120～126はSH0993から出土したものである。120～123はSH0993西辺周壁溝から出土した高杯で、口縁は短く直立気味に立ち上がる。124・125はともにSH0993の北東主柱穴(P09799)から出土した高杯である。124は碗形で口縁端部を僅かに欠損する。外面には粘土紐の接合痕が比較的明瞭に残る。125は脚部であるが、下方に円形透かしが3ヶ所あけられる。直線的にのびた後、端部を短く屈曲させる。これらの特徴はいずれも山中式でも古い段階のもであり、遺構の重複状態からもSH0993が一番古い建物であることと矛盾しない。

なお、126はSH0993南辺周壁溝から出土した凝灰岩製と推測される砥石である。長さ19.3cmと長く、完形品である。4面とも擦痕が認められ、よく使い込まれている。断面は浅く凹む。石材分割時の痕跡かと考えられるものも認められる。

SH094/95 (Fig.107)

127～129はSH0994/95から出土したものである。いずれも弥生時代後期頃のものとして問題ない。

127は弥生土器の甕で受口状口縁を呈する。口縁端部

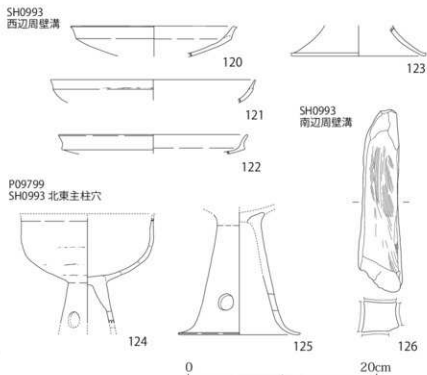
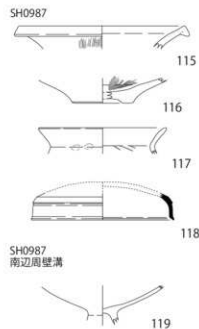
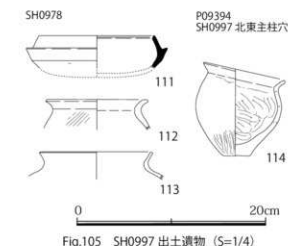


Fig.106 SH0987・SH0993 出土遺物 (S=1/4)

はやや内傾する面を持ち、口縁外面には刺突が刻まれる。
128は小型の壺の底部で、小型丸底壺になる可能性も考
えられる。内面はオサエの痕跡が認められる。

129はSH0994 東辺周壁溝から出土した、弥生土器の
壺である。口縁端部には2条の凹線が認められる。

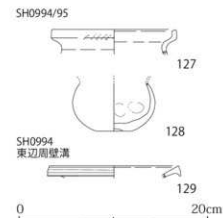


Fig.107 SH0994/95 出土遺物 (S=1/4)

SH09102 (Fig.108)

130はSH09101/102から出土した高杯である。杯部
は深く、やや内湾しながら立ち上がる。内面にはミガキ
が見られるが、磨滅がひどく不鮮明である。1点のみの
出土であるが、これらの特徴は廻間式まで下る可能性が
高い。

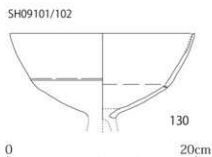


Fig.108 SH09102 出土遺物 (S=1/4)

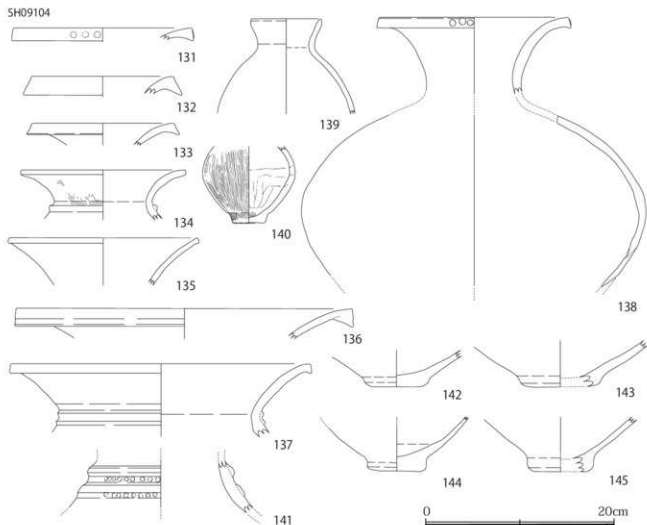


Fig.109 SH09104 出土遺物① (S=1/4)

SH09104 (Fig.109 ~ 112)

131 ~ 201はSH09104から出土したものである。131 ~ 181は埋土から出土したものであるが、床面直上から出土したものが一定量あり、内容的にもまとまっている。

131 ~ 145は壺である。広口壺が多いが、口縁端部を肥厚する131・132・133・136と肥厚しない134・135・138とがある。131と138の口縁端部には、1単位3個の円形浮文が貼り付けられる。138の内面下半には水垢の痕跡が認められる。また、134と137の頸部には、1 ~ 2段の突帯が貼り付けられている。141は広口の加飾壺の頸部の破片だと考えらる。少なくとも2段の突帯を貼り付け、突帯の下に円形刺突を施す。全体に厚手である。142 ~ 145がこれらの壺の底部にならう。なお、139の口径は小さく、口縁も短く直線的にのびる。140は小型壺の底部で、外面を非常に丁寧にミガキを施す。内面は

ナデ上げているが、粘土紐の接合痕が残る。

146 ~ 165は甕である。146 ~ 151の受口甕と152 ~ 160のく字甕が拮抗する。受口甕は口縁端部の外面に刺突をするのが本来のようだが、他は磨滅によって不明となっている。肩部には直線文を入れその下に刺突列を巡らす。く字甕の口縁端部は面をもつ153 ~ 156と丸味をおびる152・157 ~ 160の2者がある。体部の最大径は中位あるいは中位のやや下であり、全体的に薄く仕上げられている印象を持つ。159の内面にはケズリの痕跡が残る。最終的にはハケ調整されるのであろうが、160を除き磨滅のため不明となっている。160の底部は上げ底となっているが、他は全て平底であり、台付甕は一切認められない。

166 ~ 176は高杯である。杯部はいずれも浅く、口縁端部は上方へ短く直立する169から、端部をやや引き出

SH09104

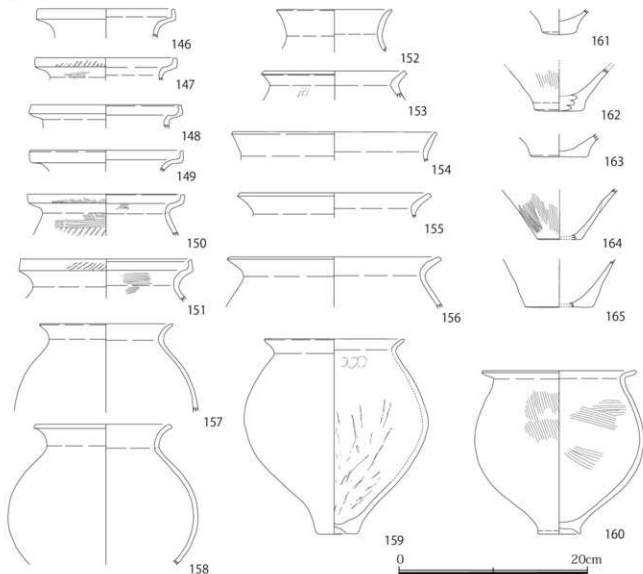


Fig.110 SH09104 出土遺物② (S=1/4)

ような 166 ~ 168, やや開く 170 等がある。脚部は円錐状に開き脚端部を短く屈曲させるもので占められる。171・172・174 等が 166 ~ 170 の脚部に相当すると考えられるが、それよりも幾分小さい 173・175・177 等の脚部も多く出土している。前者の脚部には円形透かしが一切ない 171・172 の他、上下 2 段に透かしをもつ 174 とがある。174 の上下 2 段の穿孔は、互い違いにそれぞれ 4 ヶ所ずつあけられている。小型高杯の脚部には穿孔はない。なお、179 の脚部と 176 の脚端部は、胎土の様子から同一個体になってもよいが、径も異なり接合もしなかった。176 には円形透かしがあげられているが、何ヶ所であったか不明である。穿孔下位に刺突列のような痕跡が認められるが、不鮮明である。175 には内面の中央と脚部内面には白色の粘土を塗布したかのような痕跡が残っている。

180・181 は大型の器台になると思われる。ともに脚部と考えられる。180 の底径は 34.0cm と大型で、脚端部に近い位置に角ばった突帯を貼り付けている。突帯に隣接して円形の刺突を巡らす。円形透かしは少なくとも上下 2 段にわたって施されている。破片のため詳細は数是不詳だが、等間隔であけられると仮定した場合、下段で 12 ヶ所あけられていたことになる。上部の透かしはややずれた位置に残されているが、下段と同じ 12 ヶ所だったと想定される。181 は詳細不明点が多いが、径が 38.4cm と大きく、180 のように端部付近に突帯を貼り付けるように肥厚させていることから、器台と考えた。

182 は SH09104 周壁溝の北西隅から出土したく字襷である。口径 21.2cm とやや大きめである。

183 は SH09104 西辺周壁溝から出土した碗形の高杯で、他とは形状が異なる。杯部の内外面はともに磨滅の

SH09104

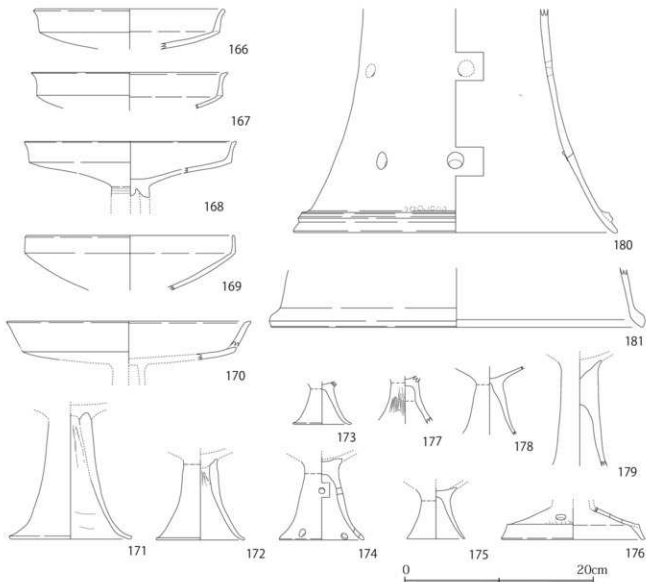


Fig.111 SH09104 出土遺物③ (S=1/4)

ため不鮮明であるが、分割したミガキが施されているようである。

184はSH09104北辺周壁溝から出土した。器台と考えられる。下位に方形透かしがあげられ、その上位には凹線が7条施される。180の器台の胎土と近似する。

185・186はSH09104南辺中央土坑から出土した。185は高杯の脚部で、下方に8ヶ所の円形透かしがあげられる。186は小型の鉢とした。内外面ともナデによって仕上げられている。口縁端部付近に直径3mmと小さな穿孔が、2ヶ所を一对としてあげられている。

187～197はSH09104南西主柱穴(P09923)から出土したものである。187は長頸壺の破片と考えられる。破片のため径は正確でないが、概ね14cm前後となる。天地も不明であるが、下位ほど厚手になる向きで図示した。188は壺で、短く直立した口縁を持つ。189・190はく字甕である。ともに小型で、口径は10～13cm程度である。191は小型の鉢とした。丸味を帯び、内湾した口縁を呈する。192～196は高杯である。192は比較的浅い杯部を持ち、口縁は直立気味に立ち上がり、端部をつまみ出す。193は杯部に角ばった突帯を貼りつけている。口縁は大きく外反しながら開く。194は筒状の脚部に大きく八字状に開く端部を持つ。端部には直径3mm程度の穿孔があげられるが、破片のため数は不明である。195・196の脚部も194と同じ形状であるが、196は八字状に開いた上に1ヶ所のみ穿孔している。197は器台である。上下両端を欠くが、上下2段の円形透かしがあげられている。ともに8ヶ所一周するが、穿孔する位置が少しずつ右上がりにずれていっている。なお、195は器台になる可能性もあるが、細身であるので高杯と考える方が妥当であろう。

198～201はSH09104北西主柱穴(P09938)から出土したものである。198・199は高杯で、浅い杯部に筒状の脚部をもつ。200は壺の体部破片である。肩部に直線文が描かれ、その上位に刺突列を巡らす。直線文の下位には波状文が施される。201は大型壺の下半分である。底から19cmあがった位置が最大径となり、かなり大型であることが分かる。

これらの弥生土器は、浅い盤状の杯部に筒状の脚部や円錐形の脚部を持つ高杯であったり、台付甕を全く含んでいない点など、他の甕穴建物出土の遺物とは様式的に異なっており、八王子宮古式併行まで遡る可能性が高い。なお、大型器台をはじめとして、このSH09104出土の土器は白色系を呈するものが多く存在する。胎土あるいは焼成方法が異なっている可能性もある。

SH09135/136 (Fig.113)

202～214はSH09135/136から出土したものである。208の須恵器を除くと弥生時代後期のものである。

202・203は広口壺の口縁部で、ともに肥厚し垂下する。204～207は高杯である。204の杯部は浅いが、口縁は短いながらも外反する。205の脚部は、円形透かしと直線文の間に爪形の刺突を施して加飾している。直線文は9条が1単位で2段に及ぶ。直線文も爪形文も同じ貝殻状の工具で施文される。206は1単位4条の直線文が3段にわたって描かれる。

209～213は甕である。209・210とも全体的にハケ調整されるが、209は肩部に刺突が巡る。2点とも口径と胴部最大径が同じくらいの大きさで、縦長の形状を呈している。底部は極めて小さく、平坦ではなくやや膨らんでいる。

214は鉢である。やや肥厚した口縁が開き、体部は丸味をおびているようである。

これらの特徴はいずれも山中式の範疇であるが、その中でも古い要素をもっており、山中Ⅰ式と判断される。

SH09140 (Fig.114)

215～243はSH09140から出土したものである。比較的多くの遺物が出土し、磐城山遺跡で珍しく切り合いのない建物であるので、一括資料として貴重である。

215～225は壺である。215は緩やかに外反する口縁を持ち、端部は肥厚させながらつまみ出す。216は小型の直口壺であろう。217の口縁端部には円形浮文が貼り付けられた痕跡が残るが、剥落してしまっている。浮文上には円形の竹管文が施されていたのは分かる。218は長頸壺である。磐城山遺跡では珍しく口縁から体部まで形状が分かる資料である。算盤球のように張り出した体部に、緩やかに外反した長い口縁を持つ。底部は平底となる。219～222は頸部から胴部の破片である。220の肩部には刺突が施され、222には直線文の上に波状文が認められる。223～225が底部であるが、219と223及び220と225は胎土の様子等からそれぞれ同一個体である可能性がある。

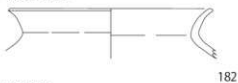
226～230は甕である。226・227の受口甕と228・229のく字甕との両者がある。

231～237は高杯である。いずれも浅い杯部を呈す。口縁も短く、直立しながら先端を外反させる。

238は砂岩製の台石である。完形であり、片面のみが使用面となっている。

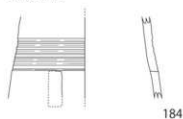
239・240はSH09140の北辺周壁溝から出土した甕である。239はく字甕で、断面には粘土紐の接合痕が認め

SH09104
周壁溝北西隅



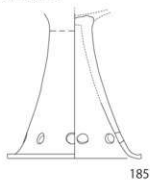
182

SH09104
北边周壁溝



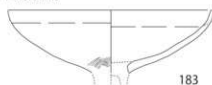
184

SH09104
南边中央土坑



185

SH09104
西边周壁溝

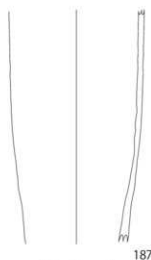


183

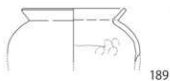


186

SH09104
P09923(南西主柱穴)



187



189



192



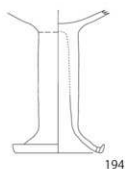
190



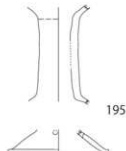
193



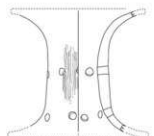
191



194



195



197

SH09104
P09938(北西主柱穴)



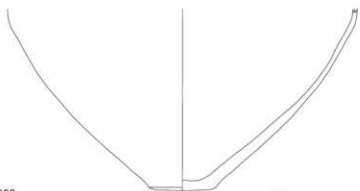
198



199



200



201

0 20cm

Fig.112 SH09104 出土遺物④ (S=1/4)

られるが、内外面とも丁寧にナデ消している。240は甕の底部で、やや上げ底気味である。

241は南辺中央土坑から出土した高杯である。脚部は広がり、端部を強く屈曲させる。また、その屈曲した先には円形透かしを施す。透かしは2個で1対の穿孔が3ヶ所に分かれてあけられている。

242はSH09140の西辺周壁溝から出土した壺の底部である。やや肉厚で、底部の端が外方へ張り出している。

243はSH09140の北東主柱穴(P091041)から出土した高杯である。端部は強く屈曲している。

これらの特徴は山中式でも古い要素が多く、山中Ⅰ式だと判断できる。

SH1070 (Fig.115)

244～251はSH1070から出土した。244の台付甕の底部が北辺周壁溝から出土した他は、全て南辺中央土坑(P10540)から出土した。概ね弥生時代後期頃のものである。

245は広口壺の口縁部である。大きく外反し、やや肥厚する端部をもつ。

246は台付甕の底部である。247・248は高杯で、247は長く直線的に開く脚部を持つ。円形透かしがあげられるが、おそらく1ヶ所のみと推測される。248は脚付壺などの脚部になるかもしれない。

249・250はミニチュア土器である。249は甕形の底部片で、内部にはハケらしき痕跡が認められるが不明瞭である。250は鉢形である。丸底気味だが、底部にやや面を有する。口縁端部を僅かに欠損するが、ほぼ完形品である。

251は石質の強い石材(チャートか)を用いた台石である。1面のみが使用面とされ、明確に凹んでいる。

SH1089 (Fig.116)

252～255はSH1089から出土したものである。いずれも須恵器で6世紀代のものである。

252はSH1089周壁溝の出土として取り上げており、周壁溝のどの位置か不明である。須恵器の杯蓋で、端部の鋭さは失われつつある。口径は12.7cmあり、天井部には回転ヘラ削りが施される。

253はSH1089周壁溝の南東隅から出土した。須恵器の杯身で、口縁端部は内傾している。全体に扁平であり、6世紀末まで下るかもしれない。

254・255はSH1089の北辺周壁溝から出土した。254は須恵器の杯蓋で252の作りに近い。255は杯身で、口縁端部は直立気味に立ち上がり、内傾する面をもつ。須恵器のみの出土で、それに伴う土師器で図化できるようなものは出土しなかった。

SH09135/136

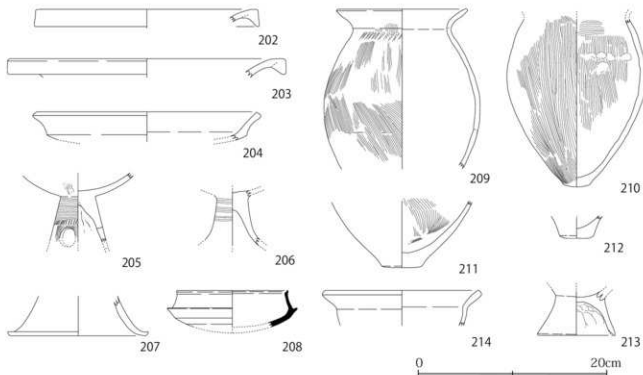
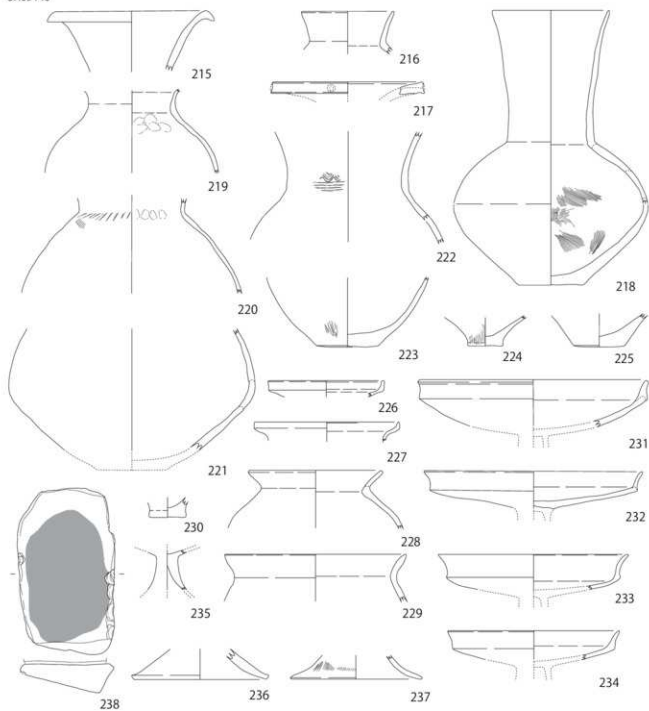
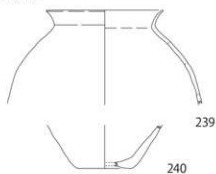


Fig.113 SH09135/136 出土遺物 (S=1/4)

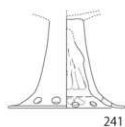
SH09140



SH09140
北辺周壁溝



SH09140
南辺中央土坑



SH09140
西辺周壁溝



P091041
SH09140 北東主柱穴



Fig.114 SH09140 出土遺物 (S=1/4)

SH10107 (Fig.117)

256～260はSH10107から出土したものである。時期を特定できる資料に乏しいが、概ね弥生時代後期頃のものである。

256・257は甕である。256はく字甕の口縁部で、外面にはハケがあるようだが磨滅のため不鮮明である。258は高杯の脚部で、直線的に開いている。

259・260はミニチュア土器である。259はSH10107の東辺周壁溝から出土しており、260は同南辺中央土坑から出土した。259は平底の鉢形をしており、口縁は受

口状となっている。肩部には直線文が施され、その下位には刺突列が巡る。弥生時代後期の受口状口縁の甕を模している260は口縁端部を僅かに欠くが、ほぼ完形である。丸底の鉢形をしている。

その他の竪穴建物の出土遺物

以下では、図示できた出土遺物が数点しかなかったものをまとめてFig.118として図版を組んだ。

SH0988 (Fig.118-261～264)

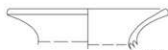
261～264はSH0988から出土したものである。い

SH1070
北辺周壁溝



244

P10540
(SH1070 南辺中央土坑)



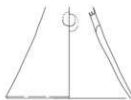
245



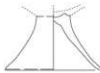
246



249



247



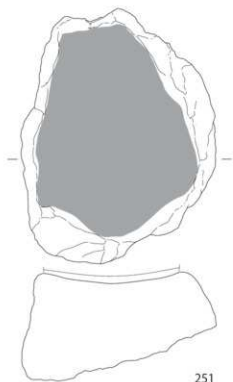
248



250

0 20cm

Fig.115 SH1070 出土遺物 (S=1/4)



251

SH1089
周壁溝



252

SH1089
北辺周壁溝



254

SH1089
周壁溝南東隅



253



255

0 20cm

Fig.116 SH1089 出土遺物 (S=1/4)

SH10107



256



257



258

SH10107
東辺周壁溝



259

SH10107
南辺中央土坑

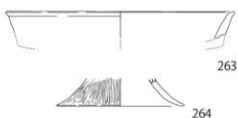
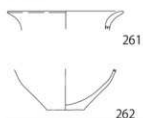
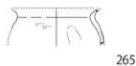
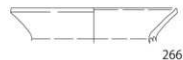
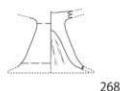
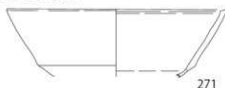


260

0 20cm

Fig.117 SH10107 出土遺物 (S=1/4)

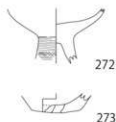
SH0988

SH09109
周壁溝SH1011
P10850SH1033
西辺周壁溝P10544
(SH069 南西主柱穴)

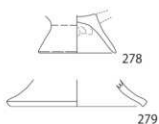
SH1031

P10352
SH1033 北西主柱穴P10559
(SH069 北東主柱穴)

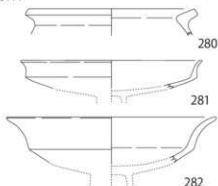
SH1051

P10593
SH1089 南東主柱穴P10757
SH10113 南辺中央土坑

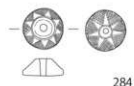
SH10106



SH10111



SH1099

SH10116
東辺周壁溝SH10115
南辺周壁溝

SH10147



0 20cm

Fig.118 その他の竪穴建物の出土遺物 (S=1/4)

ずれも弥生土器で、概ね弥生時代後期頃のものだと考えられる。

261 はく字裏の口縁部で、口径が 12.0cm と小さい。262 は壺の底部である。比較的小型の壺になるようである。263・264 は高杯である。263 は直線的に短く立ち上がる形状で、山中式の古相ない八王子古宮式に併行する時期のものであろう。264 の脚端部には、密にミガキが施されている。

SH09109 (Fig.118-265)

265 は SH09109 の周壁溝から出土したミニチュア土器である。口縁端部を僅かに欠損する。口縁はヨコナデし、体部外面にはハケ、内面はナデを施す。このミニチュア土器のみしかなく、時期不詳である。

SH1011 (Fig.118-266)

266 は SH1011 の柱穴 (P10850) からの出土として取り上げているが、実際はビットでなく貼床から出土していたものである。く字裏の口縁部で端部は上方につまみ出す。

SH1031 (Fig.118-267)

267 は SH1031 から出土した高杯の脚部である。直線文が多段に接して施されている。

SH1033 (Fig.118-268 ~ 270)

268 ~ 270 は SH1033 から出土したものである。268 は SH1033 の西辺周壁溝から出土し、269・270 は SH1033 の北西主柱穴 (P10352) から出土した。

268 は土師器の高杯の脚部で、脚端部を屈曲させている。その特徴から、5 世紀代のものと考えられる。269・270 は弥生土器である。269 は高杯の脚部、270 は台付裏の底部である。口縁もやや内湾しており、弥生時代後期頃のものであろう。

SH1069 (Fig.118-271)

271 は SH1069 の南西主柱穴 (P10544) から出土した高杯である。深い杯部を有し、端部にはやや内傾する面を持つ。廻間式まで下るものであろう。

SH1051 (Fig.118-272・273)

272・273 は SH1051 から出土したものである。272 は高杯ないし脚付壺の脚部と考えられる。直線文が 2 段以上施され、その間には格子状文が描かれる。273 は裏の底部であろうが、穿孔されている。ともに弥生時代後期頃のものとしてよいだろう。

SH1089 (Fig.118-274)

274 は SH1089 の南東主柱穴 (P10593) から出土した。接合しないが、須恵器の高杯になろう。杯部はやや鋭さを失っているが、口縁端部には内傾する面を持つ。脚部は 1 段の方形透かしが 3 ヶ所に施される。5 ~ 6 世紀前後のものであろう。

SH1069 (Fig.118-275)

275 は SH1069 の北東主柱穴 (P10559) から出土した台石である。石英質の石材を用いた完形品である。使用面は 1 面に限定され、中央がやや磨滅している。時期は不明である。

SH10113 (Fig.118-276)

276 は SH10113 の南辺中央土坑 (P10757) から出土している。弥生土器の台付裏の底部であるが、中央は穿孔されているようである。あるいは剥落しただけかもしれない。概ね弥生時代後期のものであろう。

SH1099 (Fig.118-277)

277 は SH1099 から出土した壺である。天地が逆転して高杯になる可能性も否定できない。弥生時代後期頃のものであろう。

SH10106 (Fig.118-278・279)

278・279 は SH10106 から出土したものである。278 は台付裏の底部で、内面にユビオサエの痕跡が観察される。279 は高杯の脚端部になると推測される。いずれも弥生時代後期頃のものであろう。

SH10111 (Fig.118-280 ~ 282)

280 ~ 282 は、円形建物である SH10111 から出土したものである。280 はく字裏の口縁部で、やや厚手であるが、短く強く屈曲している。281・282 は高杯である。281 は比較的浅い杯部で、口縁も短く外反する。282 はやや深い杯部を持ち、大きく外反する口縁をもつ。山中 I 式まで遡る可能性がある。

SH10115 (Fig.118-283)

283 は SH10115 の南辺周壁溝から出土した高杯の脚部である。緩やかに外反しており、山中式の高杯だと考えられる。

SH10116 (Fig.118-284)

284 は SH10116 の東辺周壁溝から出土した、緑色凝

灰岩製の紡錘車である。直径は4.3cmで、重さは41.3gある。表裏両面とも鋸歯文が線刻される。表面には8単位、裏面は7単位ある。おそらく古墳時代になってからのものであろう。

SH10147 (Fig.118-285)

285はSH10147から出土した弥生土器の甕の底部である。底部の中央は意図的な穿孔かもしれないが、小片のため判別できなかった。弥生時代後期のものであろう。

2 溝

SD0902 (Fig.119)

286～302はSD0902から出土したものである。内湾する高杯が多く、壺の胴部最大径も下がってきており、廻間式まで下ると考えられるものが多い。

286～291は壺である。288は内湾する口縁を持つ。289は口縁端部の外面から内面にかけて赤彩される（網掛けの範囲）。胴部の外面にも彩色されていそうだが、磨滅のため細部は不明である。口縁外面には羽状の刺突が観察できる。290は壺の頸部であるが、低い突帯が1条

SD0902

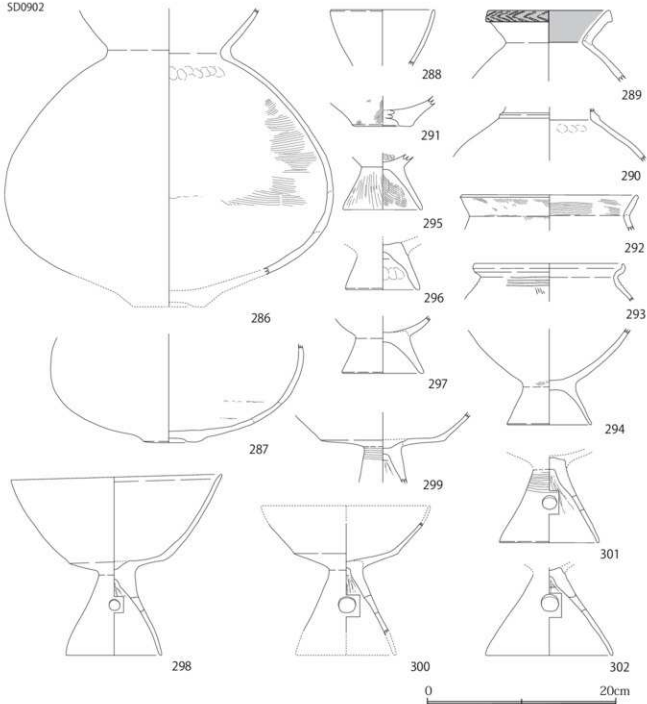


Fig.119 SD0902 出土遺物 (S=1/4)

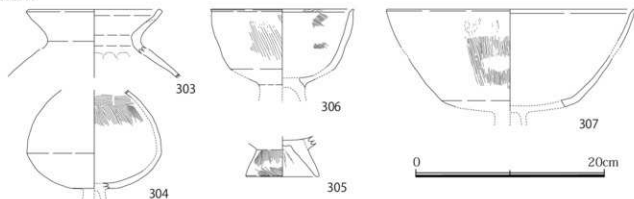


Fig.120 SD0908 出土遺物 (S=1/4)

形成されている。286・287の胴部最大径は中央よりも下位にあり、全体的に下膨れ状である。なお、ともに内面に接合痕が認められ粘土の積み上げ等によって成形されていることは分かるが、単位等の詳細は不明である。

292～297は甕である。292は口径18.4cmと大型のく字甕になる。口縁は内外面ともハケ調整されている。293は受口甕で、ハケ調整の上に直線文が施される。図示できた甕の底部片は全て台付甕であった。

298～302は高杯である。298は全形を窺い知れるもので、内湾する脚部に深い杯部を有する。脚部の穿孔は、中央よりやや上位に3ヶ所あけられる。300・302とも同じような作りで、いずれも穿孔は3ヶ所に認められる。300の杯部の段は明瞭である。299と301には杯部との接合付近に直線文が施される。

SD0908 (Fig.120)

303～307はSD0908から出土したものである。高杯の内湾が目立ち、細間式まで下るものである。

303は壺であろう。口縁は大きく開くが、途中でやや内側に湾曲している。高杯同様、内湾を志向したものであろうか。304は脚付壺の胴部である。最大径はやや下位にある。

305は台付甕の底部で、内面にはシボリの痕跡が認められる。

306・307は高杯である。306は口径が15.0cmと小型で、深い杯部をもつ。外面にはやや粗いハケが残され、内面にも細かなハケが見られる。やや異質な形態をしている。307は内湾する口縁に内傾する面を持つ。杯部も深く、外面にはミガキが施されている。

SD0909 (Fig.121・122)

308～362はSD0909から出土したものである。高

杯は杯部から大きく外反しながら開く形状を呈し、いずれも山中式として理解できる。

308～320は壺である。308～313は広口壺で、308・311・313の口縁を肥厚させない形状と、肥厚させる310や312の両者がある。308の口縁端部には8ヶ所に単独の円形浮文を貼り付け、313は2個1対の円形浮文を4ヶ所に貼り付けている。310の口縁内面には羽状刺突がありそうだが、磨滅のため不鮮明である。314は脚付壺となる。脚部は高杯と同様のつくりで、5条1単位の直線文を2段に施し、円形透かしを3ヶ所あけている。

321～339は甕である。321・323はく字甕で、322・324は受口甕になる。324は肩部とその下の2段に分けて直線文を施し、その間を刺突列を施す。その下にはハケ調整の痕跡が残る。口縁端部の刺突は磨滅のため不明である。

340は鉢形をしたミニチュア土器である。341は土製支脚になるだろうか。全形は不明であるが、内径6cmを測る。あまり被熱はしていない。

342・343は鉢である。342はほぼ完形で、口径14.2cm、底部径4.2cm、器高12.1cmをはかる。外面にはハケ後にミガキが施されている。胴部の最大径はちょうど中位にある。343は甕に把手が付く形状のもので、鉢に分類した。頸部から把手が貼り付けられていることは分かるが、形状等は不明である。

344は土玉で、直径はちょうど3cmである。完形品。

345～360が高杯である。杯部はやや深みを持ち、口縁は大きく外反して開く。端部に面を形成する346や347もある。いずれの脚部も長く直線的にのびており、おそらく大きく外反する脚端部になると思われる。脚部に上下2段の円形透かしをもつのは354のみで、上位は1ヶ所のみ、下位の個数は不明である。352はやや上位に透かしをもつが、3ヶ所あけられている。破片資料の

ため不明確であるが、他の透かしの数も3ヶ所であったと想定される。

361の形状は特異である。ひょっとすると土製支脚等の可能性もあるが、外面にミガキを施していることから、高杯ないし器台の脚部と考えた方が妥当であろう。

362は器台である。上下両端を欠くが大きく湾曲している。円形透かしは中央やや下位に3ヶ所あけられる。

SD0940 (Fig.123)

363～375はSD0940から出土したものである。高杯など山中式頃のものである。

363～369は壺である。ほぼ広口壺で364の内面には羽状刺突が施される。366の口縁は肥厚し、やや垂下する。367は口径14.7cm、底部径5.8cm、器高24.7cmある。内面の粘土紐の接合部にはユビオサエが認められる。

SD0909

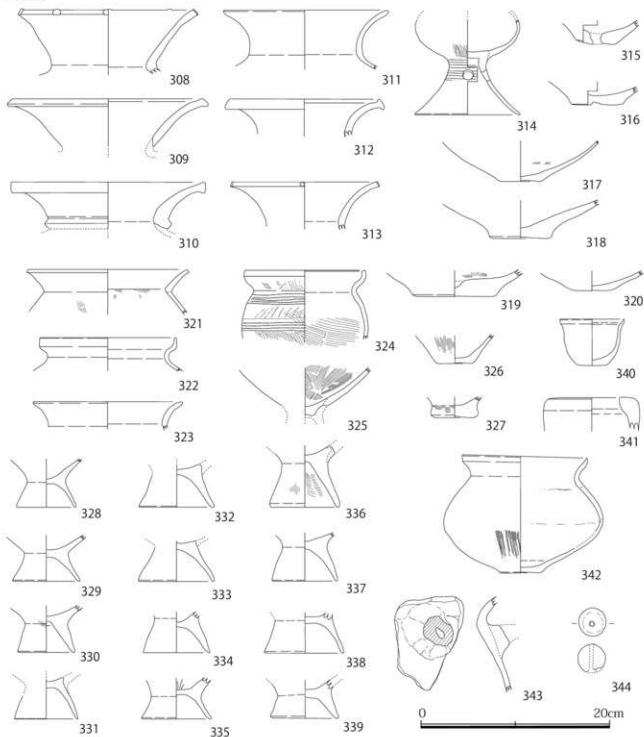


Fig.121 SD0909 出土遺物① (S=1/4)

370～372は甕である。370・371はく字甕で、口径18cm前後と比較的大型である。372は台付甕の底部で、穿孔されている。受口甕で図化できるものはなかった。

373～375は高杯である。373の杯部はやや浅めであるが、口縁は大きく外反して開く。374は細長い脚部で外反して開く。磨滅のため不鮮明であるが、直線文は少なくとも3段ある。やや疎らなミガキが施され、一部赤彩されているようである。円形透かしは3ヶ所である。375は上部から開きはじめる、内湾を指向しだしているの、廻間式に近い様相を呈する。

SD0964 (Fig.124)

376～381はSD0964から出土したものである。あまり時期を特定できる遺物が出土していないが、概ね弥生時代後期頃として問題ない。

376～380は壺である。376の口径は7.4cmと小さく、

内面には接合痕とユビオサエが顕著である。377の内面にもユビオサエが認められる。379の外底面は使用によりよく磨滅している。380の外面にはケズリが顕著に残る。内面はハケの後ナデ消す。

381は砂岩製の台石である。平坦な面を使用しており、両面ともよく磨滅している。また、側縁も用いられている。

SD0972 (Fig.125)

382～394はSD0972から出土したものである。高杯の形状などから、山中式であることが分かる。

382～387は壺である。382の広口壺の口縁は肥厚し、垂下しはじめる。383は上方やや外側に直線的に立ち上がり、球形の体部をもつ。384は脚付壺になるうか。体部は角ばった面が多数あるので、タタキによる成形かもしれない。385は口縁が受口を呈する。386・387は壺の底部であるが、386は小型壺になる。

SD0909

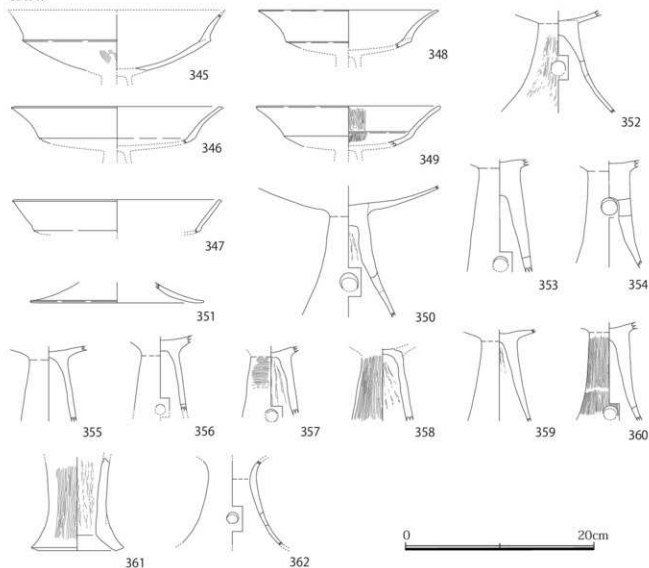


Fig.122 SD0909 出土遺物② (S=1/4)

388～390 はく字襷である。388 と 389 は同一個体かもしれない。390 は口縁端部を上方向へつまみ出すようだが、僅かに欠損するため不詳である。口径が 16 ～ 17cm 前後に復原される大型品だろうが、器壁は 3mm

前後と薄い。

391 ～ 394 は高杯である。392 の杯部はそれほど深くないが、391・393 はやや深くなり始める。内外面ともミガキを施すが磨滅する。391 の脚部には直線文が多

SD0940

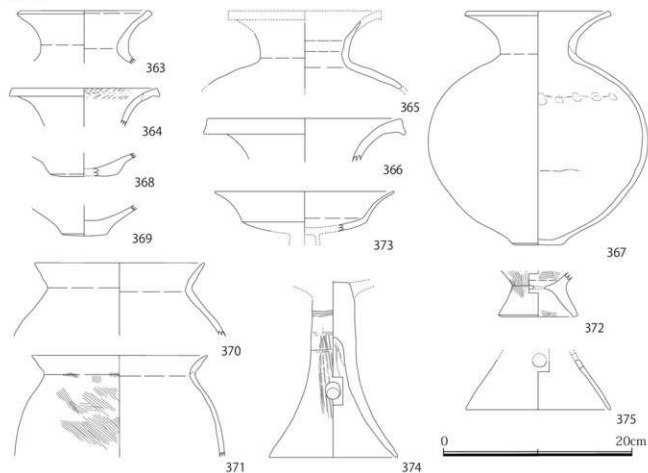


Fig.123 SD0940 出土遺物 (S=1/4)

SD0964

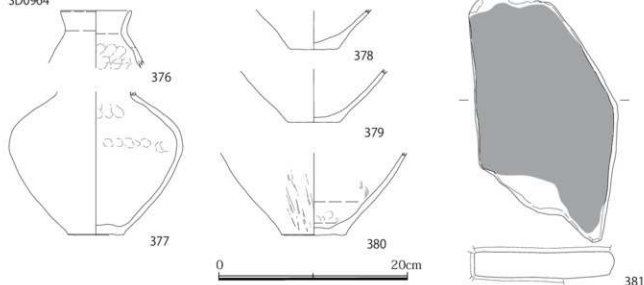


Fig.124 SD0964 出土遺物 (S=1/4)

段にわたって施されるが、磨滅のため詳細は分からない。円形透かしが3ヶ所あけられる。394 も同じように透かしが3ヶ所あけられている。

る。いずれも弥生時代後期前後のものと考えられる。

399～404 はいずれも広口壺である。399 は口縁端部が肥厚する。401 は外反しながらそのまま丸める。400

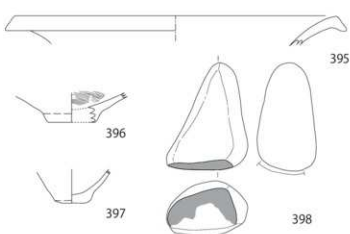
SD0975 (Fig.126)

395～398はSD0975から出土したものである。時期を特定する遺物が乏しいが、弥生時代後期頃のものと考えられる。

395は広口壺である。口径が大きいが、小片のため誤差が大きい。396は壺の底部で、397は甕であろう。

398はL字状の石杵である。砂岩製の完形品であり、底面には赤色顔料が付着していた(網掛け部分)。蛍光X線分析を実施したところ、水銀朱であった(第VI章を参照)。

SD0975



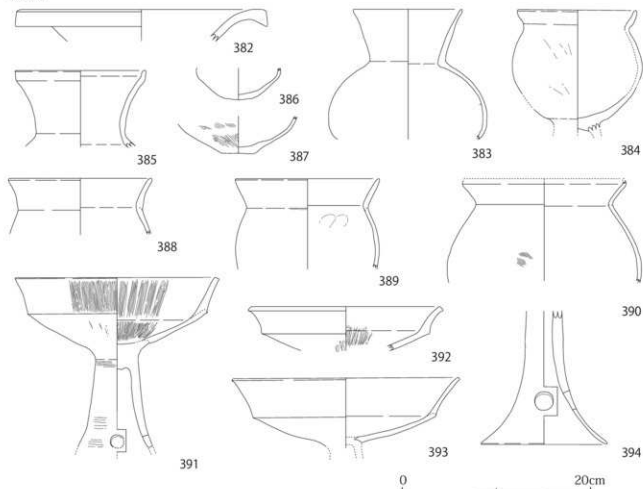
0 20cm

Fig.126 SD0975 出土遺物 (S=1/4)

SD09111 (Fig.127)

399～412はSD09111から出土したものであ

SD0972



0 20cm

Fig.125 SD0972 出土遺物 (S=1/4)

は受口状口縁を呈する。口縁外面と頸部に刺突を施す。内面には接合痕が顕著に残る。403の底部は分厚く、外方へはみ出している。404は壺の胴部で、最大径はやや下位に下がり、下膨れ状の形態である。肩部には1単位2個の円形浮文を5ヶ所に貼り付けている。

405は壺か甕か不明である。口縁外面には3条の凹線が巡り、体部にはタタキの痕跡が認められる。タタキは上半しか図示していないが、下半は磨滅しているため、本来は底部まで残っていたのであろう。底部は直径6.0cmの平底となる。

406～409は甕である。407・409はく字甕であるが、口縁は短いものが多い。407は端部がやや肥厚し、面をもつ。409も肥厚するが、端部はやや角ばっている。409の胴部も下膨れ状の形態を呈する。

410は高杯である。細長い脚部で円形透かしが2ヶ所

あけられる。

411・412は器台である。411は径が最も小さい部分に断面三角形の突帯を貼り付けている。その下はミガキが施される。不明確であるが、円形透かしがありそうである。412は口径14.4cm、底部径11.2cm、器高14.0cmの完形品である。口縁端部は外反しながら肥厚する。脚部はそのま丸めておさめている。

SD09125 (Fig.128)

413～416はSD09125から出土したものである。いずれも弥生時代後期頃のものとして理解できる。

413は壺の胴部である。やや外方へはみ出す厚手の底部をもつ。胴部は丸く、最大径は胴部の中位辺りになりそうである。内外面とも接合痕が観察できる。

414～416は高杯である。414は杯部と脚部の接合部

SD09111

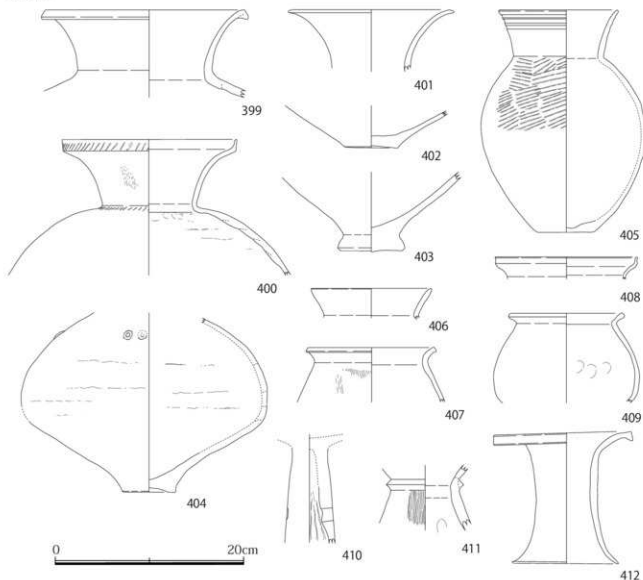


Fig.127 SD09111 出土遺物 (S=1/4)

SD09125

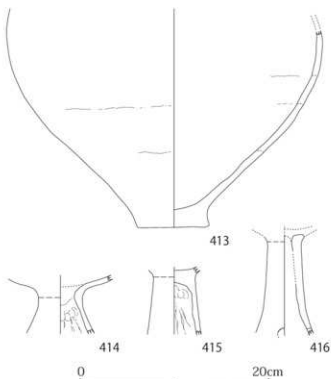


Fig.128 SD09125 出土遺物 (S=1/4)

SD09126

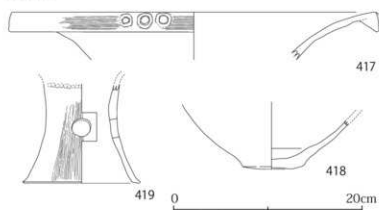


Fig.129 SD09126 出土遺物 (S=1/4)

SD1022

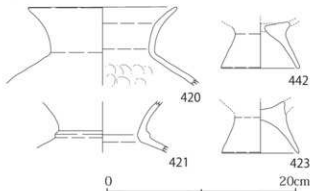


Fig.130 SD1022 出土遺物 (S=1/4)

が剥落している。415とともに、脚部内面にはシボリとユビオサエが観察される。416は細長く、下位に円形透かしがつけられる。

SD09126 (Fig.129)

417～419はSD09126から出土したものである。いずれも、弥生時代後期のものとしてよい。

417・418は壺である。417は大型の広口壺で、口縁端部は凹線が6条程度認められ、その上に1単位3個の円形浮文が8等分の位置に貼り付けられる。浮文上には円形刺突が施される。

419は器台である。上半を欠損するが、脚部は緩やかに湾曲している。脚端部には平坦面が形成される。中位やや下に円形透かしがつけられ、縦方向のミガキが密に施される。なお、中位やや上には竹管状工具による円形刺突が巡らされている。

SD1022 (Fig.130)

420～423はSD1022から出土したものである。概ね弥生時代後期のものである。

420・421は広口壺である。420の口縁は素直に立ち上がり、端部は丸くおさめる。体部の内面はオサエの痕跡が多く認められる。421は頸部に断面三角形の突帯をもつ。

422・423は台付甕の底部である。

SD1059 (Fig.131)

424～427はSD1059から出土したものである。概ね弥生時代後期のものと考えてよい。

424～426は甕である。424は口径10.2cmの小型のく字甕で、比較的薄手である。425・426は台付甕の底部である。

427は高杯で細長い形状である。内外面とも一部にハケが残る。円形透かしは3ヶ所あけられている。

SD1077 (Fig.132)

428～431はSD1077から出土したものである。概ね弥生時代後期のものと考えてよい。

428・429は壺である。428はやや厚手で、緩やかに外反しながら立ち上がる。429は長頸壺である。口縁端部を欠損する。頸部には、断面が角ばった突帯を1条貼り

付ける。内面には粘土紐の接合痕とともにユビオサエの痕跡が顕著に認められる。

430・431は甕である。430は受口甕の口縁部、431は平底の底部になる。

SD1085 (Fig.133)

432～435はSD1085から出土したものである。433の甕や435の高杯はやや新しい要素を含む、廻間式まで下るものである。

432～434は甕である。433は広口甕で口縁端部はそれほど肥厚しない。口縁の内側は上を向く面をなすが、磨滅のため刺突の有無を含め不明である。頸部には低い突帯が認められる。貼り付けは不明である。肩部には直線文が少なくとも2段施され、その間には波状文が認められる。434は頸部破片である。全体に厚手で、胎土がやや粗い。低い2条突帯を作り出し、その間の最も凹んだ部分に円形刺突を巡らす。

435は高杯である。杯部は浅くなり、段もそれほど明確でない。磨滅のため不鮮明だが、ミガキが施されているようである。脚部は短めで接合部から八字状に大きく開く。脚部には円形透かしが3ヶ所あけられる。

SD1098/117 (Fig.134)

436～443はSD1098/117から出土したものである。443はSD10117として掘削した範囲から出土しているが、他は全てSD1098の出土である。436や442の内湾具合から、廻間式まで下るものだと考えられる。

436～439は甕である。437は比較的短く外反する口縁をもつ。口径13.8cmであり、大型になりそうな胴部をもつ割りに小さい。438・439とも甕の底部で、大きく開いている。

440・441は甕である。440は受口甕の口縁部、441は台付甕の底部となる。

442は高杯である。杯部は深く、口縁は内湾する。

443は甕の下半分である。やや上げ底の底部を持ち、最大径は胴部の中位辺りとなりそうである。

その他の溝の出土遺物

以下では、図示できた出土遺物が数点しかなかったものをまとめてFig.135として図版を組んだ。

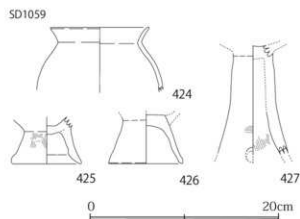


Fig.131 SD1059 出土遺物 (S=1/4)

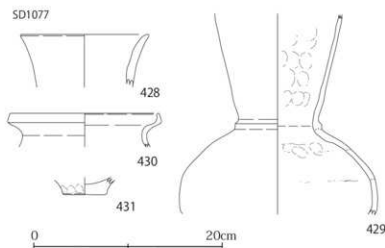


Fig.132 SD1077 出土遺物 (S=1/4)

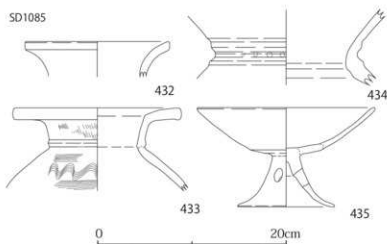


Fig.133 SD1085 出土遺物 (S=1/4)

SD0907 (Fig.135-444)

444 は SD0907 から出土した山茶碗である。内外は口ケロナデで成形され、内面には降灰痕が認められる。12～13 世紀頃のものである。

SD0915 (Fig.135-445)

445 は SD0915 から出土した、弥生土器の甕である。弥生時代後期頃のものであろう。

SD0917 (Fig.135-446)

446 は SD0917 から出土した、弥生土器の台付甕の底部である。外面にはハケ後ナデが施される。弥生時代後期頃のものであろう。

SD0921 (Fig.135-447)

447 は SD0921 から出土した高杯である。口縁は大きく外反し、端部は外傾する面をもつ。外面にはミガキが施される。山中式である。

SD0945 (Fig.135-448)

448 は SD0945 から出土した、土師器の皿である。器高 1.2cm と扁平で、口径 9.6cm と小さい。外底面にはユビオサエが認められる。16 世紀以降のものであろう。

SD0961 (Fig.135-449)

449 は SD0961 から出土した須恵器の杯蓋である。端部や稜の鋭さは失われ、凹線状の凹みとして残るだけで

ある。6 世紀頃の須恵器である。

SD0979 (Fig.135-450)

450 は SD0979 から出土した、弥生土器の高杯である。細長い脚部の上方に円形透かしと直線文が多段にわたって施される。山中式であろう。

SD0981 (Fig.135-451)

451 は SD0981 から出土した、凝灰岩製と思われる砥石である。目の細かい石材を選択している。4 面とも使用され、よく使い込まれて磨り減っている。時期不詳。

SD09100 (Fig.135-452～454)

452～454 は SD19100 から出土したものである。弥生時代後期頃のものであろう。

452 は高杯で、口縁は丸みを帯びている。椀形になるであろう。453・454 は台付甕の底部である。453 は扁平で、内面にはユビによるナデの痕跡が顕著に残る。

SD09101 (Fig.135-455・456)

455・456 は SD09101 から出土した弥生土器の甕である。455 は口縁端部の上下両端をつまみ出している。内外面ともミガキが施される。456 の内面にはハケが螺旋状に施される。弥生時代後期頃のものである。

SD09103 (Fig.135-457)

457 は SD09103 から出土した弥生土器の広口甕であ

SD1098

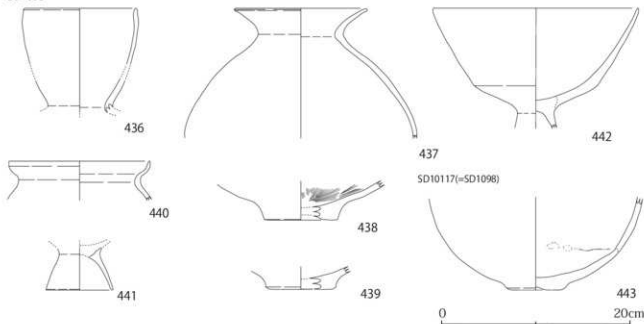


Fig.134 SD1098/117 出土遺物 (S=1/4)

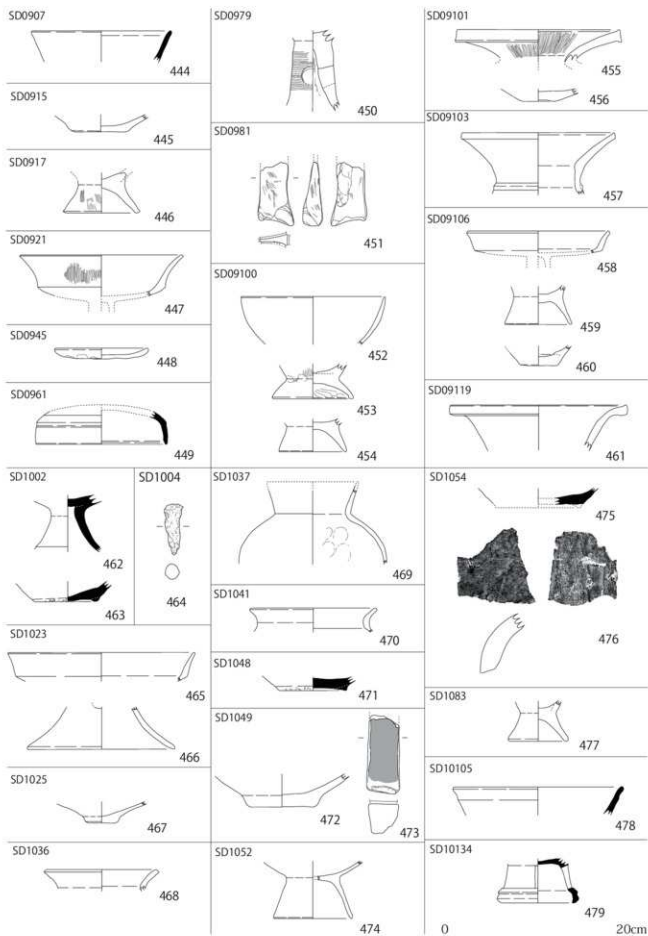


Fig.135 その他の溝の出土遺物 (S=1/4)

る。口縁内面には段をもち、頸部に低い突帯を貼り付ける。弥生時代後期頃のものである。

SD09106 (Fig.135-458～460)

458～460はSD09106から出土したものである。弥生時代後期頃のものである。

458は高杯で、短く立ち上がり、山中式の高杯を呈す。459は台付甕、460は平底の底部である。

SD09119 (Fig.135-461)

461はSD09119から出土した弥生土器の壺である。口縁端部をやや肥しながら、上方へつまみ出すように形成する。概ね、弥生時代後期頃のものである。

SD1002 (Fig.135-462・463)

462・463はSD1002から出土したものである。

462は須恵器の高杯で、脚部の下に凹線が1条ある。5～6世紀頃のものであろう。

463は山茶碗の底部である。内外面ともロクロナデされる。高台は貼り付けられており、粗殺痕が認められる。12～13世紀頃のものである。

SD1004 (Fig.135-464)

464はSD1004から出土した。釘などの細長い鉄器だと推定できるが、詳細は不明である。

SD1023 (Fig.135-465・466)

465・466はSD1023から出土した高杯である。465の杯部は浅く、直線的に短く立ち上がる。466は外反する脚部に円形の透かしがあげられる。ともに弥生時代後期頃のものである。

SD1025 (Fig.135-467)

467はSD1025から出土した弥生土器の壺である。弥生時代後期頃のものであろう。

SD1036 (Fig.135-468)

468はSD1036から出土した弥生土器の甕である。口径11.5cmと小型である。弥生時代後期頃のものであろう。

SD1037 (Fig.135-469)

469はSD1037から出土した弥生土器の壺である。口縁を僅かに欠くが、直立した口縁を持つ。胴部は丸く、内面にオサエが多く認められる。弥生時代後期頃のものであろう。

SD1041 (Fig.135-470)

470はSD1041から出土した弥生土器の甕である。口径13.0cmと小型である。弥生時代後期頃のものであろう。

SD1048 (Fig.135-471)

471は山茶碗の底部である。内外面ともロクロナデされ、内面は使用によりよく磨滅している。高台は貼り付けられており、粗殺痕が認められる。12～13世紀頃のものである。

SD1049 (Fig.135-472・473)

472・473はSD1049から出土したものである。砥石自体の年代は不明であるが、一緒に出土している壺から弥生時代後期頃のものとしてよいだろう。

472は弥生土器の壺の底部である。比較的大型となる。

473はチャート製の砥石である。1面のみ利用されている。

SD1052 (Fig.135-474)

474はSD1052から出土した台付甕の底部である。全体的に薄手で、S字甕の底部に似る。弥生時代後期頃のものであろう。

SD1054 (Fig.135-475・476)

475・476はSD1054から出土したものである。475は山茶碗の底部である。内外面ともロクロナデされ、内面には不整方向のナデが施される。高台は貼り付けられていたが剥落している。12～13世紀頃のものである。

476は丸瓦で、良好に焼成されている。凸面は縄目タタキが認められ、凸面には短軸方向に板ナデないしケズリの痕跡が残される。奈良時代前後のものであろう。

SD1083 (Fig.135-477)

477はSD1083から出土した台付甕の底部である。弥生時代後期頃のものとして問題ない。

SD10105 (Fig.135-478)

478はSD10105から出土した山茶碗である。口縁端部はロクロナデにより凹みが見られる。12～13世紀頃のものである。

SD10134 (Fig.135-479)

479はSD10134から出土した須恵器の高杯である。1段の方形透かしが3ヶ所あけられている。5～6世紀のものである。

3 土坑

SX0905 (Fig.136)

480～486はSX0905から出土したものである。いずれも12世紀～13世紀にかけてのものである。

480～485は山茶碗である。480は口径16.8cm、底部径7.8cm、器高5.3cmを測る。口縁は内湾しながら立ち上がり、端部を外反させている。481の口縁は外反はしないが、丸みを持って立ち上がる。ともに内面に降灰痕が認められる。484・485の底部は糸切り後に高台を貼り付けるが、480・481・483はナデ消されているのか糸切りの痕跡が認められない。高台には刷痕が残るものが多いが、484は観察されない。

486は白磁の碗である。口縁を欠損するが、やや丸みを持った形状である。内外面に施釉され、内底面には圈線がみられる。低い削り出し高台をもつ。

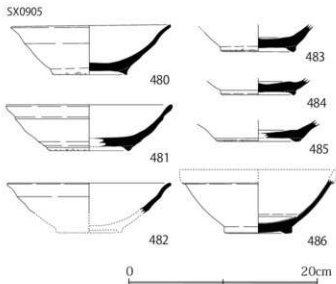


Fig.136 SX0905 出土遺物 (S=1/4)

SX0958 (Fig.137)

487・488はSX0958から出土した。ともに常滑焼の器鉢で、14～16世紀頃のものである。

487は口縁端部を内外に引き出すように拡張し、端部は凹線気味になる。488の端部はやや肥厚し、角形となる。内面は使用によってよく磨滅している。

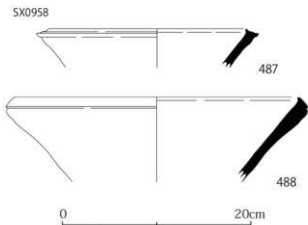


Fig.137 SX0958 出土遺物 (S=1/4)

SX1026 (Fig.138)

489～505はSX1026から出土したものである。須恵器が豊富に出土しており、土師器が少量伴う。5世紀末から6世紀のものが混在している。

489・490は須恵器の杯身である。489の口縁の立ち上がりは2cmと長い。端部は丸くおさめている。490は口径12.2cm、器高3.6cmと扁平である。口縁の立ち上がりは内傾し、0.8cmほどしかない。7世紀まで下る可能性もある。

491～494は須恵器の杯蓋である。491は口径が11.0cmと小さく、稜線もやや鋭さをとめている。5世紀末まで遡るかもしれない。492は天井部が丸く高い。口縁内面には内傾する面がある。493は器高4cm前後と扁平である。天井部から口縁外面にかけて重ね焼きの痕跡が認められる。494の稜は退化し凹線気味に残る程度である。

495・496は須恵器の高杯の蓋である。495は稜線は退化している。口縁端部は丸くおさめ、天井部にはつまみがつくようである。496は口縁部と天井部の境に稜線を残している。天井部は2条沈線の間列点文が施され、その下にはカキ目が入る。

497・498は高杯の脚部である。498は直径5mmの穿孔があげられる。外面には降灰痕が認められる。

499は須恵器の甕である。口径20.6cmと大型で、胴部の内面には同心円文、外面には平行タタキが施される。

500は須恵器のハソウになると考えられる。やや厚手で、頸部は細い。胴部には沈線下にカキ目を施す。破片のため穿孔部分は残っていなかった。

501・502は須恵器の壺である。501は球形の胴部に、外面にはタタキが認められ、内面には同心円のタタキ痕が残る。502は直口壺になろう。口縁端部はやや尖り気味で、底部には回転ヘラケズリが施される。内底面には不整方向のナデが施される。

503は土師器の高杯である。脚部裾を屈曲させる。5世紀に遡るものであろう。

504・505は土師器の甕である。504はく字甕の口縁部で、505は丸底の底部である。

SK0952 (Fig.139)

506～514 は SK0952 から出土したものである。概ね弥生時代後期頃のものである。

506～508 は壺である。506 は小型壺としたが、ミニチュア土器なのかもしれない。直立する口縁をもち、端部は丸くおさめる。肩部には、直径 1mm に満たない円形刺突を縦位に 3 個密接させて全周させる。508 は大型壺の底部で、内面には幅広のハケが明瞭に残るが、外面は磨減のため、ミガキが底部に僅かに残る程度となっている。

509・510 は甕である。509 は受口甕で、肩部に直線文らしき痕跡が見られる。

511～513 は高杯である。511 の杯部は浅く、口径 27.4cm と大きい。口縁は大きく外反する。512 は外反しながら大きく開く脚部である。円形透かしは 3 ケ所あけられる。513 の脚部は広く開いており、脚付壺等になるかもしれない。円形透かしは 4 ケ所あけられる。

514 は鉢である。底部を欠損するが、内外面ともミガキが密に施されている。

SX10126

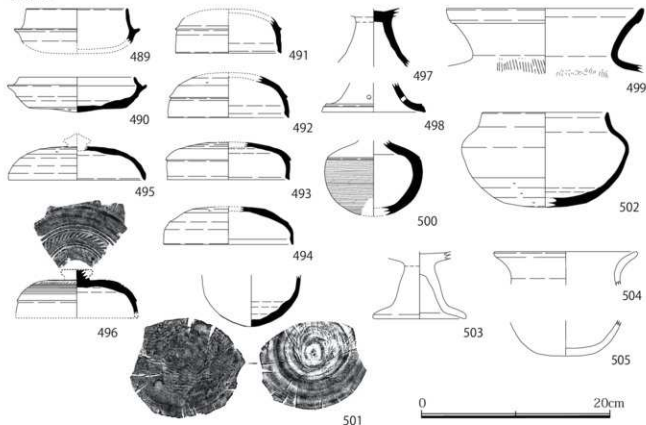


Fig.138 SX10126 出土遺物 (S=1/4)

SK0952

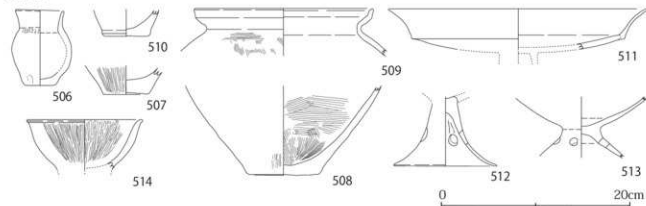


Fig.139 SK0952 出土遺物 (S=1/4)

SK09110

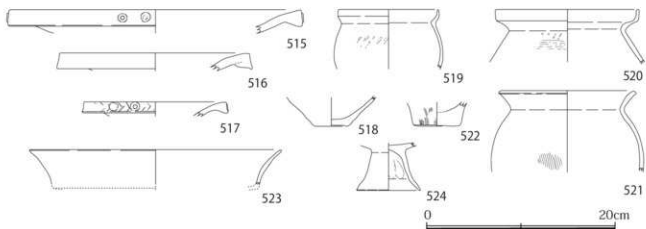


Fig.140 SK09110 出土遺物 (S=1/4)

SK0977

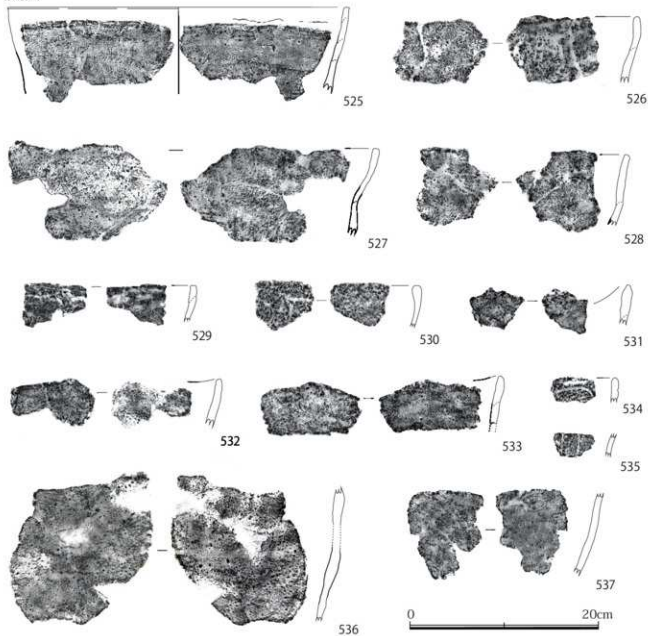


Fig.141 SK0977 出土遺物 (S=1/4)

SK09110 (Fig.140)

515～524はSK09110から出土したものである。弥生時代後期頃のもので占められる。

515～518はいずれも広口壺である。515は口径30.6cmと大型で、517は15.0cmと小さい。515は1単位2個の円形浮文を貼りつけ、周囲を赤彩するようだが詳細は不明である。517も円形浮文を貼り付ける。その下には刺突が施されている。

519～522は甕である。519・520は受口甕である。やや形態が異なるが、肩部には刺突が巡る。521はく字甕の口縁部で、522は平底の底部である。

523・524は高杯である。523は外反する口縁を持ち、口径26.6cmとやや大型である。524は高杯の脚部としたが低いため、脚付甕であるかもしれない。

SK0977 (Fig.141)

525～537はSK0977から出土したものである。無文の縄文土器が多いが、534・535は有文土器である。その特徴から縄文時代中期末から後期初頭頃のものである。

525～534は口縁部破片で、他は胴部破片である。525・529の口縁端部は面取りするが、他はそのままおさめる。525・529・537の3点は同一個体の可能性になり

そうである。直径1～2mmの石英や長石を含んでいる。なお、526は口縁部としたが、覆口縁である可能性もある。基本的に水平口縁のものが多く、531のような波状口縁もある。僅かであるが、532・533も緩やかに波打つ。

有文土器は534と535の2点のみであった。ともに沈線に区画された内部に縄文が転がされる。

その他の土坑の出土遺物

以下では、図示できた出土遺物が数点しかなかったものをまとめてFig.142として図版を組んだ。

SX09105 (Fig.142・538・539)

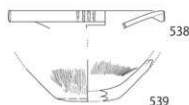
538・539はSX09105から出土したものである。ともに弥生時代後期頃のものであろう。

538・539は甕である。538は広口壺の口縁部で、端部は肥厚して垂下させる。端部には1単位4個の棒状浮文が、おそらく4ヶ所に貼り付けられる。539は丸みをもった底部で、内面ハケ、外面ミガキが施される。

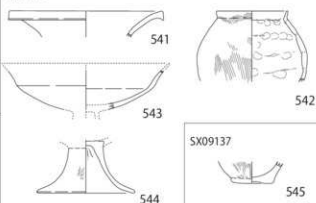
SX09113 (Fig.142・540)

540はSX09113から出土した広口壺である。口縁端部は著しく肥厚して垂下する。口径31.6cmと大きい。

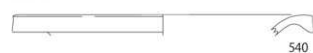
SX09105



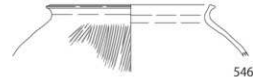
SX09115



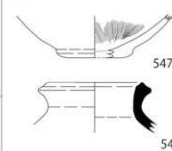
SX09113



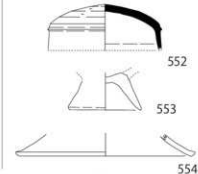
SX1028



SX1047



SX10143



SK1081



0 20cm

Fig.142 その他の土坑の出土遺物 (S=1/4)

弥生時代後期のものである。

SX09115 (Fig.142-541 ~ 544)

541 ~ 544 は SX09115 から出土したものである。弥生時代後期の山中式のものである。

541 は広口壺である。542 は甕になる。口縁部は短い。あるいは擬口縁で、もう1段上があるのかもしれない。内面には粘土組の接合痕とユビオサエが顕著に残される。543・544 は高杯である。543 は口縁が欠損するが、外反している。544 の脚部の外面には、不鮮明ながらミガキがありそうである。脚部は短く透かしもないので、脚付

の壺になるかもしれない。

SX09137 (Fig.142-545)

545 は弥生土器の壺の底部である。やや上げ底で、小型である。弥生時代後期頃のもので問題ない。

SX1028 (Fig.142-546)

546 は SX1028 から出土した土師器の宇田型甕である。口縁をヨコナデし、外面には斜位のハケを施す。5 ~ 6 世紀頃のものである。

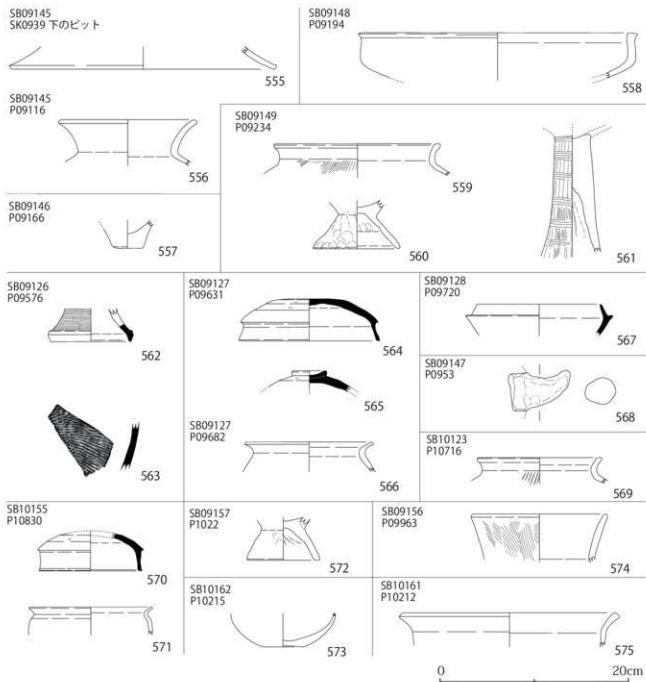


Fig.143 掘立柱建物の出土遺物 (S=1/4)

SX1047 (Fig.142-547・548)

547・548はSX1047から出土したものである。547は弥生時代後期頃の壺で、大型品になりそうである。

548は陶器の壺である。ロクロナデで成形するが、口縁から外面にかけて自然釉がかかる。中世のものであるが、詳細な時期等は不明である。

SK1081 (Fig.142-549～551)

549～551はSK1081から出土したものである。いずれも底部破片のため時期比定し難いが、概ね弥生時代後期ものとして問題ない。549は壺で、550・551は甕になる。

SX10143 (Fig.142-552～554)

552～554はSX10143から出土したものである。6世紀の須恵器と弥生土器が混在している。

552は須恵器の杯蓋である。口縁と天井部の境の稜は、鋭さを失いながらも残る。553は台付甕の底部で。554は高杯の脚部になる。

4 掘立柱建物

SB09145 (Fig.143-555・556)

555・556はSB09145から出土したものである。ともに建物の時期を示すものではなく、周囲の竪穴建物等からの混入品だと考えられる。

555はSK0939の下部で検出した柱穴から出土したものである。弥生土器の高杯の脚部と考えられるが、径が27.8cmと大きい。

556はP09116から出土した弥生土器の壺である。

SB09146 (Fig.143-557)

557はSB09146のP09166から出土した。弥生土器の甕の底部である。混入品であろう。

SB09148 (Fig.143-558)

558はSB09148のP09194から出土した。弥生土器の高杯である。口縁は垂直に立ち上がり、口縁端部に面をもつ。弥生時代後期初頭のものであろう。混入だと想定され、建物の時期を示すものではないだろう。

SB09149 (Fig.143-559～561)

559～561はSB09149のP09234から出土したものである。559・560は5～6世紀頃で、建物の年代を示す可能性がある。561の山中式の高杯は混入であろう。

559は宇田型甕の範疇で、外面にハケを施している。

560は台付甕の底部で、宇田型甕の頃のものとしてよい。外面にはユビオサエとナデが認められる。561は山中式の高杯の脚部で、ケズリのため細かな面を有する。1単位4条の直線文が6段以上に施される。

SB09126 (Fig.143-562・563)

562・563はSB09126から出土したものである。ともに須恵器で5～6世紀のものであろう。

562・563はP09576から出土した。562は須恵器の高杯の脚部である。方形すかしが1段あけられる。他はカキ目が施される。563は須恵器の甕の胴部破片である。外面にタタキが施され、内面はナデにより平滑に仕上げられている。

SB09127 (Fig.143-564～566)

564～566はSB09127から出土したものである。須恵器と土師器が出土しており、6世紀代のものである。建物の年代を示す可能性が高い。

564・565はP09631から出土した。564は須恵器の杯蓋で、口縁は開き、端部に面をもつ。根巻石の下位で出土しており、掘立柱建物の年代の下限を示す遺物である。565は高杯の蓋である。丸みを持った天井部につまみが貼り付けられる。

566はP09682から出土した。宇田型甕の範疇である。

SB09128 (Fig.143-567)

567はSB09128のP09720から出土した。須恵器の杯身で、口縁の立ち上がりは1cmと低く内傾する。6世紀後半頃であろう。

SB09147 (Fig.143-568)

568はSB09147のP0953から出土した。土師器の銅の把手である。詳細な時期は不明だが、6世紀前後のものであろうか。

SB10123 (Fig.143-569)

569はSB10123のP10716から出土した。宇田型甕で、外面にはハケが施される。

SB10155 (Fig.143-570・571)

570・571はSB10155のP10830から出土したものである。570は須恵器の杯蓋であり、口径が10.6cmと小さい。5世紀まで遡る可能性がある。571は土師器の小型鉢であり、5～6世紀頃のものである。

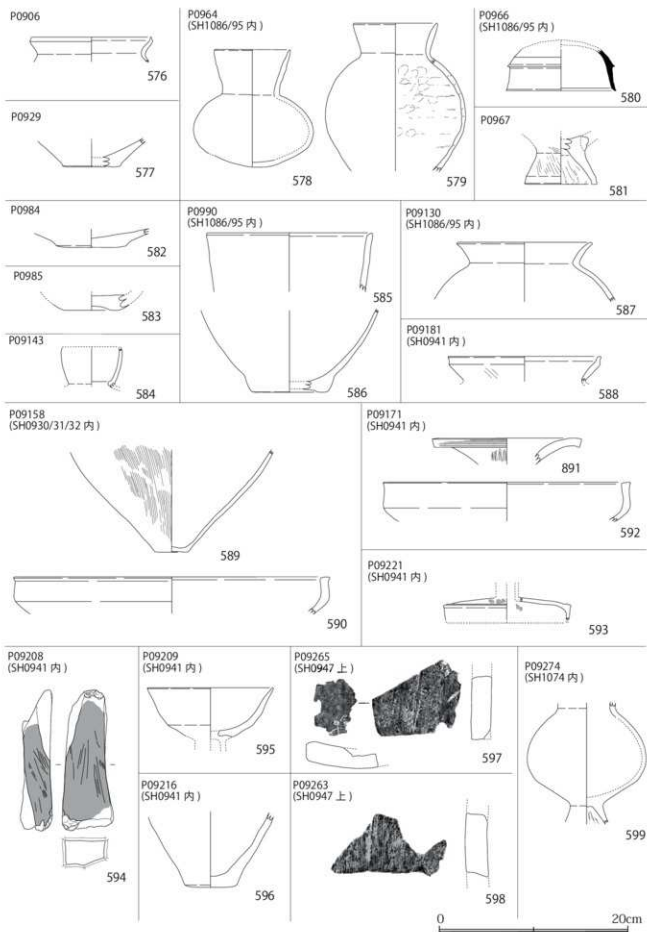


Fig.144 柱穴の出土遺物① (S=1/4)

SB10157 (Fig.143-572)

572はSB10157のP1022から出土したものである。
弥生土器の台付甕が混入したものであろう。

SB10162 (Fig.143-573)

573はSB10162のP10215から出土したものである。
弥生土器の壺の底部である。やはり、混入品であろう。

SB09156 (Fig.143-574)

574はSB09156のP09963から出土したものである。
土師器の直口壺になろう。外面にはハケが残る。

SB10161 (Fig.143-575)

575はSB10161のP10212から出土したものである。
弥生土器の鉢であろう。混入品と考えられる。

5 柱穴

柱穴（ピット）から出土した遺物は、図示できたものが数点しかなかったので、Fig.144～146としてまとめて図版を組んだ。

P0906 (Fig.144-576)

576はP0906から出土した受口甕である。

P0929 (Fig.144-577)

577はP0929から出土した弥生土器の壺の底部である。

P0964 (Fig.144-578-579)

578-579はP0964（SH1086/95内）から出土した弥生土器の直口壺である。578は完形で、扁平な胴部に直立した口縁をもつ。579の胴部は縦長で、口縁部は直立する。ともに弥生時代後期のものであろう。

P0966 (Fig.144-580)

580はP0966から出土した須恵器の杯蓋である。底部はやや鋭さを失うが、丸みをもった天井部となりそうである。5世紀まで遡るかもしれない。

P0967 (Fig.144-581)

581はP0967から出土した弥生土器の台付甕の底部である。内面にはナデが残り、外面はハケ調整される。

P0984 (Fig.144-582)

582はP0984から出土した弥生土器の底部である。

P0985 (Fig.144-583)

583はP0985から出土した弥生土器の底部である。

P09143 (Fig.144-584)

584はP09143から出土した弥生土器の壺である。内湾する口縁をもち、瓢壺になるかもしれない。

P0990 (Fig.144-585-586)

585・586はP0990（SH1086/95内）から出土したものである。585は土師器の甕の口縁部である。586は弥生土器の壺の底部になろう。

P09130 (Fig.144-587)

587はP09130（SH1086/95内）から出土した甕である。弥生土器か土師器かさえも不明である。

P09181 (Fig.144-588)

588はP09181（SH0941内）から出土した弥生土器の甕である。

P09158 (Fig.144-589-590)

589・590はP09158（SH0930/31/32内）から出土したものである。589は壺の底部で、大型の割りに薄手である。外面はハケ調整される。590は高杯で口縁部は短く直立する。八王子古宮式併行まで遡る可能性がある。

P09171 (Fig.144-591-592)

591・592はP09171（SH0941内）から出土したものである。591は壺の口縁で端部に4条以上の凹線が施される。592は高杯で口縁部は短く直立する。八王子古宮式併行まで遡る可能性がある。

P09221 (Fig.144-593)

593はP09221（SH0941内）から出土した高杯脚部だと考えられる。脚端部は赤彩されているが、不鮮明である。弥生時代後期のものであろうか。

P09208 (Fig.144-594)

594はP09208（SH0941内）から出土した凝灰岩製の砥石である。全面を利用し、擦痕が顕著に残る。完形品。

P09209 (Fig.144-595)

595はP09209（SH0941内）から出土した土師器の高杯である。口縁端部はつまみ出すように先細る。5世紀頃のものであろう。

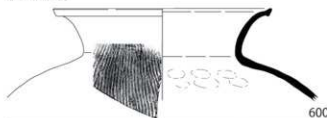
P09216 (Fig.144-596)

596 は P09216 (SH0941 内) から出土した弥生土器の壺である。

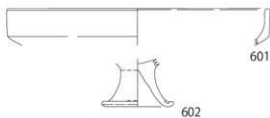
P09265 (Fig.144-597)

597 は P09265 (SH0947 上面) から出土した平瓦である。凸面は縄目のタタキ痕が残り、凹面には布目が残る。

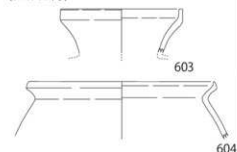
P09302
(SH0962 内)



P09313



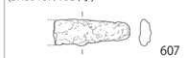
P09320
(SH0962 内)



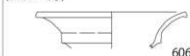
P09350
(SH0966 内)



P09546
(SH09107/108 内)



P09400
(SH0974 内)



P09422
(SH09104 上)



P09655



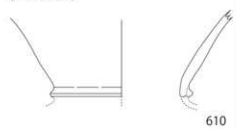
P09698
(SH09102 内)



P09762
(SX09113 内)



P09660
(SH09104 上)



P09714



P09768
(SH09104 上)



P09729
(SH09104 南辺中央土坑)



P09813



P09849



P09953
(SH09135/136 内)



P09837
(SH09102 内)



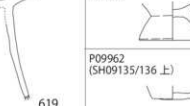
P09999



P09912



P09912



P09982



P091014
(SH09135/136 内)



P09962
(SH09135/136 上)



0 20cm

Fig.145 柱穴の出土遺物② (S=1/4)

P09263 (Fig.144-598)

598 は P09263 (SH0947 上面) から出土した平瓦である。凸面は縄目のタタキ痕が残る。凹面は磨滅のため不明である。

P09274 (Fig.144-599)

599 は P09274 (SH0974 内) から出土した弥生土器の脚付甕である。内部に残っていた炭化物を放射性炭素年代測定した所、較正前の年代で $2,095 \pm 20^{14}\text{CBP}$ という結果であった(第Ⅵ章参照)。土器自体は弥生時代後期のものであると想定され、年代はやや古い値が示されている。

P09302 (Fig.145-600)

600 は P09302 (SH0962 内) から出土した須恵器の甕である。内面にはオサエ、外面にはタタキが施される。6世紀前後のものであろう。

P09313 (Fig.145-601-602)

601・602 は P09313 から出土した弥生土器である。601 は高杯で直立する口縁をもつので、八王子古宮式まで遡りそうである。602 は高杯の脚部で、小型である。裾部に貫通しない孔(直径 5mm)が刺突される。1 単位 2 個の刺突が 4 ヶ所あるようである。八王子古宮式併行で問題ないだろう。

P09320 (Fig.145-603-604)

603・604 は P09320 (SH0962 内) から出土した弥生時代後期頃の土器である。603 は受口状口縁を持ち、604 のく字裏は端部をつまみ上げている。

P09350 (Fig.145-605)

605 は P09350 (SH0966 内) から出土した弥生土器の甕である。天地逆転し、高杯の脚部になる可能性も否定できない。

P09400 (Fig.145-606)

606 は P09400 (SH0974 内) から出土した弥生土器の二重口縁甕ないし高杯である。厚みがあまりないので高杯の可能性が高いと判断している。

P09546 (Fig.145-607)

607 は P09546 (SH09107/108 内) から出土した金属製品である。鉄器だと考えらるが、器種などは不明である。扁平な形状を呈する。

P09422 (Fig.145-608)

608 は P09422 (SH09104 上面) から出土した土師器の鉢の把手の破片である。

P09655 (Fig.145-609)

609 は P09655 から出土した弥生土器の高杯である。口縁が短く外反するため、山中式の古相だと思われる。

P09660 (Fig.145-610)

610 は P09660 (SH0104 上面) から出土した弥生土器の甕である。頸部に 1 条の突帯を貼り付ける。

P09698 (Fig.145-611)

611 は P09698 (SH09102 内) から出土した弥生土器の台付甕である。

P09714 (Fig.145-612)

612 は P09714 から出土した。口縁が 22.8cm と大きく、弥生土器の鉢になろう。

P09729 (Fig.145-613)

613 は P09729 (SH09104 内) から出土した弥生土器の甕である。SH09104 の南辺中央土坑からの出土として取り上げているが、他の遺物が混入した可能性があり竪穴建物の図版と別に図示した。

P09762 (Fig.145-614)

614 は P09762 (SX09113 内) から出土した弥生土器の甕である。

P09768 (Fig.145-615)

615 は P09768 (SH09104 上面) から出土した弥生土器の甕である。

P09813 (Fig.145-616)

616 は P09813 から出土した弥生土器の甕である。口縁端部に刺突を施す。

P09849 (Fig.145-617)

617 は P09849 から出土した弥生土器の甕である。口縁端部には、1 単位 2 個ないし 3 個の円形浮文を貼り付け、その上に円形刺突を施す。

P09912 (Fig.145-618-619)

618・619 は P09912 (SH09104 上面) から出土した

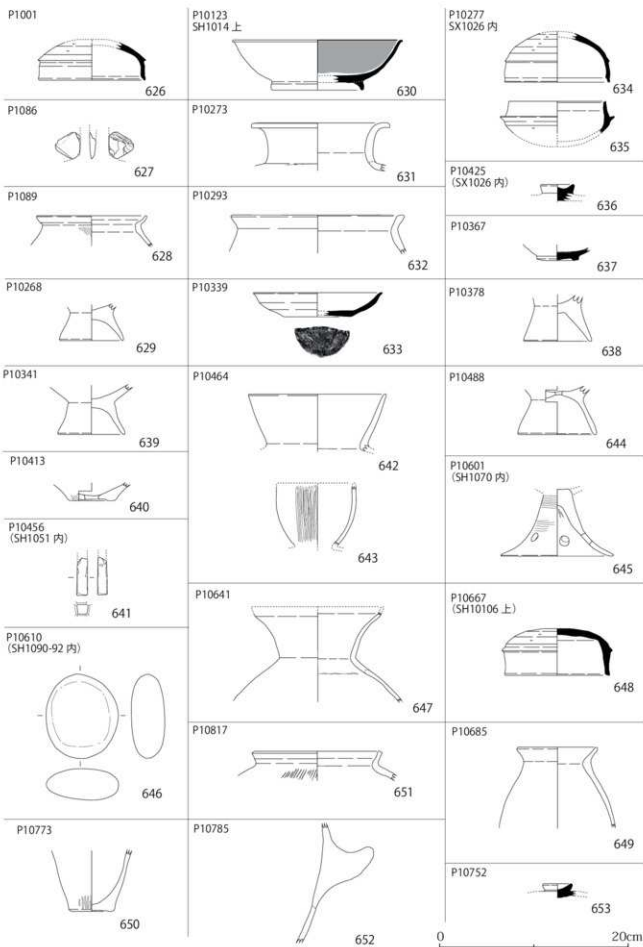


Fig.146 柱穴の出土遺物③ (S=1/4)

弥生土器の高杯である。618 には円形透かしが 3 ヶ所あけられている。

P09953 (Fig.145-620)

620 は P09953 から出土した弥生土器の壺である。

P09837 (Fig.145-621)

621 は P09837 (SH09102 内) から出土した土師器のく字甕である。

P09982 (Fig.145-622)

622 は P09982 から出土した弥生土器の台付甕である。

P09962 (Fig.145-623)

623 は P09962 (SH09135/136 上面) から出土した弥生土器の甕の底部である。

P09999 (Fig.145-624)

624 は P09999 から出土した弥生土器の高杯である。

P091014 (Fig.145-625)

625 は P091014 (SH09135/136 内) から出土した弥生土器の高杯である。

P1001 (Fig.146-626)

626 は P1001 から出土した須恵器の杯蓋である。口径 11.2cm と小型で、天井部は丸みをもつ。口縁外面は黒色に変色しており、重ね焼きされたことが分かる。5 世紀まで遡るかもしれない。

P1086 (Fig.146-627)

627 は P1086 から出土した石斧の刃部付近の破片である。緑色凝灰岩製と思われる。

P1089 (Fig.146-628)

628 は P1089 から出土した弥生土器の受口甕である。

P10268 (Fig.146-629)

628 は P10268 から出土した弥生土器の台付甕である。

P10123 (Fig.146-630)

630 は P10123 (SH1014 上面) から出土した灰釉陶器の椀である。口縁は外反し、内湾しながら端部を丸める。内面全面に釉がかかるが、外面は不明瞭である。高台は比較的高く三日月形を呈する。Q53 型式だと思われ、10

世紀のものであろう。

P10273 (Fig.146-631)

631 は P10273 から出土した弥生土器の壺である。口縁端部を強く外反させる。

P10293 (Fig.146-632)

632 は P10293 から出土した土師器の甕である。宇田型甕になろうか。

P10339 (Fig.146-633)

633 は P10339 から出土した回転台土師器皿である。口縁は 2 段のロクロナデにより、緩やかに外反する。外底面は糸切りされる。

P10277 (Fig.146-634・635)

634・635 は P10277 から出土した須恵器である。634 は丸みが強く、口径が 10.8cm と小さい。635 の口径も 10.2cm と小さい。ともに 5 世紀末から 6 世紀にかけてのものである。

P10425 (Fig.146-636)

636 は P10425 (SX1026 内) から出土した須恵器である。高杯の蓋のつまみ部のみの破片である。

P10367 (Fig.146-637)

637 は P10367 から出土した白磁である。皿のような径の小さい器種となる。内面は軸翳ぎされる。12 ～ 13 世紀頃のものであろう。

P10378 (Fig.146-638)

638 は P10378 から出土した弥生土器の台付甕である。

P10341 (Fig.146-639)

639 は P10341 から出土した弥生土器の台付甕である。

P10413 (Fig.146-640)

640 は P10413 から出土した弥生土器の壺である。底部に穿孔があるようで、上げ底である。

P10456 (Fig.146-641)

641 は P10456 (SH1051 内) から出土した砥石である。片岩系の石材のようで、小型品である。4 面とも利用され、よく磨滅している。

P10464 (Fig.146-642-643)

642-643はP10464から出土した弥生土器の壺である。642の口径はやや大きく直線的に開く。643は内湾し、瓢壺かもしれない。廻間式まで下る可能性もある。

P10488 (Fig.146-644)

644はP10488から出土した弥生土器の台付甕である。底部に穿孔をもつ。

P10601 (Fig.146-645)

645はP10601 (SH1070 内) から出土した弥生土器の高杯である。脚部は大きく外反しながら開く。1単位8条以上の直線文が2段施される。円形透かしは脚部のやや下位に5ヶ所あけられる。弥生時代後期頃のものである。

P10610 (Fig.146-646)

646はP10610から出土した磨石である。砂岩製で完形品である。全体的に磨滅しており、扁平な楕円形を呈する。

P10641 (Fig.146-647)

647はP10641から出土した弥生土器の壺である。口縁を欠くが、受口状を呈するようである。内面には接合痕が残る。

P10667 (Fig.146-648)

648はP10667 (SH10106 上面) から出土した須恵器の杯蓋である。やや厚手であるが、6世紀代のものであろう。

P10685 (Fig.146-649)

649はP10685から出土した弥生土器の壺である。口径は8.2cmと小さく、縦長を指向する胴部となりそうである。

P10773 (Fig.146-650)

650はP10773から出土した弥生土器の甕の底部である。底部外面にミガキがある。

P10817 (Fig.146-651)

651はP10817から出土した土師器の甕である。口縁をヨコナデするが、S字甕のD類になるのか。

P10785 (Fig.146-652)

652はP10785から出土した土師器の鉢である。把手部分の胴部破片である。

P10752 (Fig.146-653)

653はP10752から出土した須恵器の高杯の蓋である。つまみ部分のみの残存である。

Tab.3 遺物観察表1

報告 番号	実測 番号	調査 回数	登録 番号	地区	遺構/層位	種類	器形	口径	底径	器高	技法・調整の特徴	胎土 の大きさ (mm)	焼成	色調	残存率	備考	
1	201	9	19	CI48/49	SH0903/04	弥生土器	壺	200			内:ハケ、ヨコナデ 外:ハケ 胴部・突帯	密	2	良	淡灰褐色	口縁にて 1/8	
2	202	9	19	CI48/49	SH0903/04	弥生土器	壺		6.0		内外:磨滅	密	3	良	内:灰褐色 外:黄褐色	底部にて 1/2	
3	203	9	19	CI48/49	SH0903/04	ミニチュ ア土器	甕形	7.4			口縁:ヨコナデ 内外: ナデ, ユビオサエ	密	1	良	黄褐色	1/6	
4	204	9	70	CH49	SH0922/23 南辺中央土坑 上面	須恵器	杯蓋	11.0		4.6	内~口縁:ロクロナデ 大井:回転ヘラ削り(反 時計回り)	密	3	良好	灰青色	1/2	
5	205	9	70	CH49	SH0922/23 南辺中央土坑 上面	須恵器	杯蓋	12.0			内~口縁:ロクロナデ 大井:回転ヘラ削り(方 向不明)	密	2	良好	灰青色	口縁にて 1/8	
6	206	9	70	CH49	SH0922/23 南辺中央土坑 上面	弥生土器	壺	15.0			内外:磨滅 内:ミガキ	密	2	良	褐色	口縁にて 1/6	
7	275	9	144	CI49	P0978 SH0922/23/24 南東土柱穴	弥生土器	高杯				内:磨滅 外:直線文(2段以上) 透かし(3ヶ所)	密	2-3	良	淡黄褐色	胴部にて 底部を 欠く	
8	276	9	144	CI49	P0978 SH0922/23/24 南東土柱穴	弥生土器	高杯	12.4			内:磨滅 外:ミガキ 透かし	密	2	良好	内:淡灰褐色 外:黒褐色	胴部にて 1/3	
9	274	9	87	CI48	P0925 SH0903 北東土柱穴	石器	砥石				長さ6.2×幅3.1×厚 さ0.7cm, 重量12.7g					破片	砂岩製
10	863	10	876	CH47	P10620 SH1092 北東土柱穴	石器	磨石				長さ6.4×幅3.3× 厚2.5cm, 重量78.4g					完形	石材不明,長軸 に斜交するよう に磨面を持つ
11	857	10	819	CH49	P10585 SH1092 南西土柱穴	弥生土器	器台	13.2			内外:磨滅 外:直線文(2段以上)	密	1-2	良	灰褐色	口縁を 欠く	
12	861	10	861	CG48	P10613 SH1090/93 北西土柱穴	弥生土器	鉢/甕	4.0			内外:ナデ 底部:ユビオサエ	やや 密	1-3	良好	灰褐色	底部にて 完形	胴口縁あり

Tab.3 遺物観察表 2

報告番号	実測番号	調査回数	図録番号	地区	遺構/層位	種類	形状	口径	底径	高さ	技法・調整の特徴	粘土	移動の大きさ(mm)	焼成	色調	残存率	備考
13	862	10	862	CG48	P10614 SH0932 北西土柱六	赤生土器	高杯	27.7			内外・磨滅	やや密	1-3	やや軟	黄白色	杯部にて1/8	
14	243	9	860	CJ50	SJH0930/31 北西壁溝	赤生土器	甕	16.8			内外・磨滅 口縁:円形浮文(1単位3個を4ヶ所か)	密	2-4	良	淡赤褐色	口縁にて1/2	
15	247	9	316	CK50	SH0930/31/32 北東埋土	赤生土器	甕	22.2			内外・磨滅 口縁:円形磨滅	密	3-4	良	淡黄褐色	口縁にて1/8	
16	241	9	202	CK51	SH0930/31/32 埋土	赤生土器	甕		4.6		内外・磨滅	密	2-3	良	淡黄褐色	底部にて完形	
17	242	9	220	CJ51	SH0932埋土	赤生土器	甕	18.2			内外・磨滅	やや密	2-3	良	褐色	口縁にて1/8	
18	246	9	316	CK50	SH0930/31/32 北東埋土	赤生土器	甕	12.4			内外・磨滅	やや密	1-3	良	褐色	口縁にて1/8	
19	239	9	221	CK51	SH0932埋土	赤生土器	付付甕		5.8		内外・ナデ 外:磨滅	密	2-4	良	褐色	脚台部に1/3	
20	240	9	221	CK51	SH0932埋土	赤生土器	高杯	26.6			内外・磨滅	密	3-4	良	内:淡黄褐色 外:淡黄褐色	杯部にて1/6	外面下平に覆付
21	248	9	259	CK52	SH0930 南辺埋土溝	赤生土器	甕	13.8			内外・ハケ、ナデ 外:ハケ	密	2-3	良好	淡黄褐色	口縁にて1/8	外面下平に覆付
22	277	9	291	CJ51	P09145 SH0930 北西土柱六	赤生土器	高杯		15.6		内外・ハケ、ヨコナデ 外:ミガキ	密	ほとんど含まない	良好	淡黄褐色	脚台部に1/4	
23	278	9	295	CJ51	P09149 SH0930 南西土柱六	赤生土器	甕	17.0			内外・磨滅	密	1-3	良	灰白色	口縁にて1/12	
24	276 2	9	304	CK51	P09157 SH0947 北西土柱六	赤生土器	高杯	23.4			内外・ハケ、ミガキ	密	2	良好	淡褐色	杯部にて1/4	接合しないが24.1と24.2は同一個体
25	279	9	304	CK51	P09157 SH0947 北西土柱六	赤生土器	付付甕		6.2		内外・ハケ	やや密	2-4	良	淡褐色	脚台部に完形	
26	277 2	9	789	CL51	P09481 SH0947 南東土柱六	赤生土器	高杯	23.2			内外・磨滅 外:ミガキ	密	2-3	良	淡褐色	杯部にて1/12	
27	278 2	9	776	CL50	P09468 SH0947 北東土柱六	赤生土器	甕	4.7			内外・磨滅	密	2	良	淡赤褐色	底部にて完形	
28	249	9	414	CK52	SH0947 南辺埋土溝	石器	砥石				長さ6.6×幅2.4×厚さ1.8cm、重量44.4g					完形	割欠岩製、磨面あり
29	244	9	413	CL52	SH0935 下部埋土	山岳燧石	碗	7.0			内外・コナデナ 外縁:糸切り	密	ほとんど含まない	良好	灰色	底部にて1/3	
30	245	9	413	CL52	SH0935 下部埋土	瓦	平瓦				凹:糸目 凸:隅目タタキ	密	ほとんど含まない	良好	暗青灰色	一部の	割縁は面取りされる
31	274 2	9	432	CL48	P09206 SH0942 南東土柱六	赤生土器	甕	3.6			内外・ナデ	密	ほとんど含まない	良	淡褐色	底部にて1/2	
32	275 2	9	432	CL48	P09206 SH0942 南東土柱六	赤生土器	甕	5.6			内外・磨滅 外:ハケ	密	2-3	良	淡黄褐色	底部にて1/3	底部穿孔
33	351	9	382	CN50	SH0960 北西	赤生土器	甕	16.8			内外・ハケ 外:磨滅	密	1-2	良	内:淡黄褐色 外:淡黄褐色	口縁にて1/3	
34	352	9	860	CO50	SH0960 埋土 ベルト敷去	赤生土器	甕	15.6			内外・磨滅	密	1-3	良好	黄褐色	口縁にて1/2	
35	353	9	860	CN50	SH0960 北西 床面直上	赤生土器	甕	13.6			内外・接合面 外:磨滅	やや粗	1-3	良	黄褐色	上下部に完形	
36	357	9	382	CN50	SH0960 北西	赤生土器	甕	18.0			内外・磨滅	密	ほとんど含まない	良	黄褐色	口縁にて1/6	
37	345	9	417	CN/CO51	SH0960 南西 床面直上	赤生土器	高杯	13.8			内外・磨滅	密	1-3	良好	黄褐色	脚台部に1/6	
38	355, 356	9	382, 419	CN50, CO/CP50	SH0960 北西、 南東埋土	赤生土器	甕	5.0			内外・ミガキ、シボリ ユビオサセ、板ナデ	密	ほとんど含まない	良好	暗褐色	底部にて1/3、底部にて1/3	
39	358	9	420	CN/CO51	SH0960 南西 床面直上	赤生土器	甕	12.0			内外・磨滅	密	ほとんど含まない	良好	黄褐色	口縁にて1/6	
40	360	9	860 115	CN51	SH0960 南西 床面直上	赤生土器	甕	11.0	6.5	22.8	口縁:ヨコナデ 内:ユビオサセ、ハケ、 接合面 外:ハケ板ミガキ	密	1-2.8	良好	黄褐色	ほぼ完形	2.5cmくらいの粘土層の積み上げ
41	354	9	860 83	CO50	SH0960 北東 埋土	赤生土器	甕	4.5			内外・ハケ	密	1	良好	内:黒灰色 外:淡褐色	底部にて完形	
42	359	9	419	-	SH0960 南東 埋土	赤生土器	甕	4.5			内外・磨滅	密	1	良	赤褐色	底部にて完形	
43	367	9	860 135	CO50	SH0960 埋土 ベルト敷去	赤生土器	鉢	7.2	3.2	3.2	内外・磨滅	密	1-2	良	淡黄灰～ 黄褐色	完形	脚台部の可能性 あるが接合・剥 落はない
44	361	9	860 117	CO51	SH0960 南西 床面直上	赤生土器	付付甕	15.6	7.9	24.4	内:ケズリ 外:ハケ 口縁:ハケ	密	1-2	良好	淡黄灰色	1/2	
45	363	9	383	CO/CN51	SH0960 南西	赤生土器	甕	14.8			口縁:割突 内:磨滅 外:ハケ	密	1	良	淡黄褐色	口縁にて1/6	
46	362	9	860 119	CO51	SH0960 南西 床面直上	赤生土器	付付甕	14.0	7.6	20.3	口縁:研突 内:ケズリ 外:ハケ	密	1-5	良	淡赤褐色～ 赤褐色	ほぼ完形	

Tab.3 遺物観察表 3

報告 番号	実測 番号	調査 回数	図録 番号	地区	遺構 / 層位	種類	器形	口径	底径	高さ	技法・調整の特徴	胎土 の 大きさ (mm)	焼成	色調	残存率	備考	
47	364	9	383	CO/CN51	SH0960 南西	弥生土器	甕				内:板ナデか 外:直刷文・刺突・ハケ	密	1	良好	灰褐色	胴部にて 1/4	
48	365	9	観測 124	CN50	SH0960 北西 西辺埋土	弥生土器	甕		4.0		内:タヌ子後ナデか 外:ハケ後ナデか	密	1	良好	灰褐色	底部にて 完形	外底面は無調整 か
49	366	9	観測 91	CN51	SH0960 南西 埋土	弥生土器	付付甕		7.0		内:ナデ 外:ハケ	密	1-2	良好	灰褐色	底部にて 完形	
50	368	9	観測 118	CO51	SH0960 南西 床面直上	弥生土器	付付甕				内:磨滅 外:ハケ	密	1-3	良	灰褐色	底部にて 胴部を欠く	51と同一胴体 か
51	369	9	770	CN51	SH0960/30 南辺埋土	弥生土器	付付甕		8.0		内外:磨滅	密	1-3	良	灰褐色	胴部にて ほぼ完形	50と同一胴体 か
52	370	9	観測 114	CN451	SH0960 南西 床面直上	弥生土器	付付甕		8.2		内外:磨滅	密	1-3	良	褐色	胴部にて 1/3	
53	339	9	1373	CN50	SH0960 埋土 東西ベルト西側 掘土	弥生土器	高杯	14.3	14.6	21.5	内:ミガナか 外:ミガナ 内:シ ボリ・ハケ 外:直 刷文(4段)・ミガナ 透かし(3ヶ所)か	密	1-3	良	淡黄褐色	ほぼ完形	
54	350	9	観測 120	CO51	SH0960 南西 床面直上	弥生土器	高杯	23.1	13.6	23.6	内:磨滅 外:波状文 内:シボリ 外:直 刷文(4段)・ミガナ 透かし(3ヶ所)	密	1-2	良	黄褐色～ 淡黄褐色	ほぼ完形	波状文は2段に わたる
55	333	9	観測 116	CN51	SH0960 南西 床面直上	弥生土器	高杯	25.2			内:磨滅 外:直刷文	密	ほとんど 含まない	良	明赤褐色	杯部にて 完形	
56	336	9	観測 86	CO49	SH0960 北東 埋土	弥生土器	高杯	24.8			内外:ミガナ	密	2-5	良	淡黄灰色	杯部にて 1/3	
57	334	9	734	CO49	SH0960 東辺埋土	弥生土器	高杯	16.6			内外:磨滅	やや密	1-2	良	淡黄灰色	杯部にて 1/6	
58	346	9	観測 87	CO49	SH0960 北東 埋土	弥生土器	高杯				内:シボリ・ユビオサ エ 外:直刷文	やや粗	2-6	やや軟	明赤褐色	胴部にて 端部を欠く	
59	341	9	観測 92	CO51	SH0960 南西 埋土	弥生土器	高杯				内:シボリ 外:磨滅	やや粗	1-3	良	淡黄灰色	胴部にて 端部を欠く	
60	337	9	観測 122	CO51	SH0960 南西 埋土	弥生土器	高杯				内:シボリ 外:磨滅 透かし(3ヶ所)	密	ほとんど 含まない	良	明褐色	胴部にて 端部を欠く	
61	343	9	873	CP50	SH0960 東辺埋土	弥生土器	高杯				内:シボリ 外:磨滅 透かし	やや粗	1-2	良	灰褐色	胴部にて 端部を欠く	
62	344	9	観測 82	CO/CP50	SH0960 南東	弥生土器	高杯				内:シボリ・ユビオサ エ 外:磨滅	密	1-3	良	淡褐色	胴部にて 端部を欠く	
63	349	9	1384	CN51	SH0960 西辺埋土	弥生土器	高杯		11.6		内外:磨滅	密	1	良	灰褐色	胴部にて 1/6	
64	335	9	1333	CO50	SH0960 埋土 東西ベルト東側	弥生土器	高杯		14.0		内外:磨滅	密	2	良	灰黄色	胴部にて 1/4	
65	347	9	1375	CN51/ CO50	SH0980 埋土 東西ベルト掘土	弥生土器	高杯		16.2		内外:磨滅 透かし(1ヶ所)	密	ほとんど 含まない	良	淡黄灰色	胴部にて 1/3	
66	342	9	観測 90	CN51	SH0960 南西 埋土	弥生土器	高杯				内:シボリ 外:磨滅 透かし(1ヶ所)	密	1-3	良	淡褐色	胴部にて 端部を欠く	
67	348	9	観測 93	CO51	SH0960 南西 埋土	弥生土器	高杯				内外:磨滅	密	ほとんど 含まない	良	淡灰褐色	胴部にて 端部を欠く	
68	340	9	観測 121 + 417	CO51	SH0960 南西 床面直上	弥生土器	高杯		16.0		内:シボリ 外:磨滅 透かし(2段:1-3ヶ所)	密	1-3	やや軟	黄褐色～ 淡黄灰色	胴部にて ほぼ完形	
69	338	9	382 + 1373	CN50	SH0960 北西 埋土	弥生土器	高杯		20.2		内:板ナデ 外:ハケ後ミガナ	密	ほとんど 含まない	良好	淡褐色	胴部にて 1/3	
70	208	9	384	CM/CN52	SH0963 埋土	弥生土器	甕	17.6			内:羽状刺突か 外:磨滅	密	2-4	良好	黄褐色	口縁にて 1/6	
71	207	9	384	CM/CN52	SH0963 埋土	弥生土器	甕				内:磨滅 外:直刷文・刺突・ハケ	密	ほとんど 含まない	良好	淡黄褐色	胴部にて 1/4	
72	209	9	観測 125	CN52	SH0962/63	石器	砥石				長さ22.4×幅12.6× 厚さ2.4cm、 重量910g					完形	粘板行底。 表裏2面を使用
73	210	9	観測 126	CM52	P09939 南辺中央土坑 SH0963	弥生土器	甕		15.4		内:ミガナ・シボリ・ハケ 外:ミガナ 透かし(3ヶ所)	密	ほとんど 含まない	良好	淡黄褐色	1/2	
74	284	9	618	CN52	P09366 SH0963 南東土柱穴	弥生土器	甕		3.4		内外:磨滅	密	3	良	灰褐色	底部にて 完形	
75	234	9	733	CM52	SH0974 埋土	弥生土器	甕		5.2		内:ハケか 外:ハケ	密	2-3	良	内:黒灰色 外:淡褐色	底部にて 1/3	
76	235	9	696	CM51/52	SH0974 埋土	弥生土器	甕	13.0			内外:磨滅	密	2-3	良好	赤褐色	口縁にて 1/12	
77	236	9	744	CL52	SK0984 SH0974 中央部	弥生土器	甕	15.0			内外:磨滅	密	2	良	淡灰褐色	口縁にて 1/6	
78	233	9	744	CL52	SK0984 SH0974 山崎部	弥生土器	甕	18.8			内外:磨滅	密	3	良	淡黄灰色	口縁にて 1/4	

Tab.3 遺物観察表 4

報告 番号	実測 番号	調査 回数	図録 番号	地区	遺構/層位	種類	器形	口径	底径	高さ	技法・調整の特徴	胎土	胎粒の 大きさ (mm)	焼成	色調	残存率	備考
79	237	9	744	CL52	SK0984 SH0974 中央部	土製品	土玉				長さ3.2×幅3.3×厚 さ2.7cm, 重量22.4g	密	ほとんど 含ま ない	良	淡黄灰色	完形	
80	238	9	890	CL52	SK0984 上面検出	土製品	土玉				長さ2.7×幅2.7×厚 さ3.0cm,重量18.4g	密	ほとん ど含 ま ない	良好	淡黄灰色	完形	
81	285	9	756	CM52	P09455 SH0974 主柱穴	赤生土器	甕	16.4			内外・磨滅	やや 密	2-3	良	灰褐色	口縁にて 1/4	
82	286	9	756	CM52	P09455 SH0974 主柱穴	赤生土器	高杯		17.4		内外・磨滅 透かし	密	2-4	良	淡黄灰色	脚端部に て1/6	
83	251	9	407	CM48	SH0966 北平	赤生土器	甕	13.4			内外・磨滅	密	1-2	良	淡黄褐色	口縁にて 1/8	
84	250	9	402	CN/CO48	SH0967 北平 SD0957 (北東)	赤生土器	甕	17.8			内外・磨滅	密	2-3	良	黄褐色	口縁にて 1/6	
85	252	9	513	CO48/49	SH0967 埋土	赤生土器	甕	18.0			内外・磨滅	密	ほとん ど含 ま ない	良	淡黄褐色	口縁にて 1/8	
86	253	9	423	CN48	SH0967 北平	赤生土器	甕	13.0			内外・磨滅	密	ほとん ど含 ま ない	良	淡黄灰色	口縁にて 1/8	
87	255	9	500	CN49	SH0967 埋土	赤生土器	甕		6.0		内・磨滅 外：ハケ、ミガキ	密	2	良	内：淡灰褐色 外：淡灰褐色	底部にて 完形	
88	254	9	890 94	CO48	SH0967 床面直上	赤生土器	甕		5.0		内外・磨滅	密	4-10	良	淡灰褐色	底部にて 完形	
89	259	9	423	CN48	SH0967 北平	赤生土器	台付甕		7.4		内外・磨滅	やや 密	2-3	良	灰褐色	脚部にて 1/2	
90	260	9	423	CN48	SH0967 北平	赤生土器	台付甕		7.8		内外・磨滅	やや 密	2-6	良	褐色	脚部にて 完形	
91	261	9	513	CO48/49	SH0967 埋土	赤生土器	台付甕		7.4		内外・磨滅	やや 密	2-3	良	淡黄灰色	脚部にて 完形	
92	262	9	890 100	CN48	SH0967 床面直上	赤生土器	台付甕		7.4		内外・磨滅	密	2.5	良	淡赤褐色	脚部にて ほぼ完 形	
93	263	9	500	CN49	SH0967 南西 埋土	赤生土器	台付甕		6.5		内外・磨滅	密	2-4	良	淡赤褐色	脚部にて 完形	
94	256	9	103	CM48	SH0966 床面直上	赤生土器	甕	18.0			内・磨滅 外：ハケ	密	3-8	良	淡黄褐色	口縁にて 1/2	
95	258	9	423	CN48	SH0967 北平	赤生土器	甕	16.4			内外・磨滅	密	1-4	良	淡黄灰色	口縁にて 1/6	
96	257	9	423	CN48	SH0967 北平	赤生土器	鉢	22.0			内外：ハケ 口縁：ヨコナデ	密	ほとん ど含 ま ない	良好	淡黄灰色	口縁にて 1/4	外面に黒染あり
97	266	9	423	CN48	SH0967 北平	赤生土器	高杯	25.0			内外・磨滅	密	3	良	淡赤灰色	杯部にて 1/8	105と接合しな いが、同一個体 の可能性あり
98	267	9	500	CN49	SH0967 南西 埋土	赤生土器	高杯	26.6			内：ハケ、ミガキ 外：ミガキ	密	2	良好	明褐色	杯部にて 1/8	
99	264	9	890 99 + 890 102 + 423	CN48	SH0967+ SH0967 北平 床面直上	赤生土器	高杯	23.8			内：ミガキ 外：磨滅	密	2-4	良	内：赤褐色 外：淡黄褐色 黒褐色	杯部にて 1/3	
100	271	9	1340	CN48	SH0967 埋土 ベルト掘き	赤生土器	高杯		14.8		内外・磨滅	密	ほとん ど含 ま ない	良	内：黒褐色 外：淡黄褐色	脚端部に て1/6	
101	272	9	500	CN49	SH0967 南西 埋土	赤生土器	高杯		15.0		内外・磨滅	密	2-4	良	灰褐色	脚端部に て1/6	
102	273	9	423	CN48	SH0967 北平	赤生土器	高杯		14.8		内外・磨滅	やや 密	3-4	良	淡黄灰色	脚端部に て1/6	
103	265	9	890 132	CN49	SH0966/67 南辺中央土坑	赤生土器	高杯	20.8			内外・磨滅	やや 密	2-5	良	淡黄褐色	杯部にて ほぼ完形	
104	270	9	890 95	CN49	SH0966 南辺中央土坑	赤生土器	高杯				内：シボリ 外：直線文(5段) 透かし(3ヶ所)	密	ほとん ど含 ま ない	良	淡赤灰色	脚部にて 完形	97と接合しな いが、同一個体 の可能性あり
105	269	9	890 96	CN49	SH0966 南辺中央土坑	赤生土器	高杯				内・磨滅 外：直線文、 円形刺突、透かし(2段)	密	2-5	良	淡黄褐色	脚部にて ほぼ完形	
106	268	9	890 123	CN48	SH0966 西辺埋土溝	赤生土器	高杯	23.2			内外・磨滅	密	ほとん ど含 ま ない	やや 軟	淡赤褐色	杯部にて 1/2	
107	280	9	589	CM48	P09349 SH0966 北西主柱穴	赤生土器	甕				内・磨滅 外：ハケ、刺突	密	2-3	良	内：淡黄褐色 外：淡褐色	底部にて 1/6	
108	283	9	680	CN49	P09419 SH0966 南西主柱穴	赤生土器	甕	13.4			内：接合痕、エビオサ 文、磨滅	密	2-5	良	内：淡黄褐色 外：淡灰褐色	上半部にて 1/4	
109	282	9	680	CN49	P09419 SH0966 南西主柱穴	赤生土器	甕	13.6			内外・磨滅	密	2-3	良	淡灰褐色	口縁にて 1/4	
110	281	9	890 133	CN49	P09419 SH0966 南西主柱穴	赤生土器	甕	17.6			口縁：ヨコナデ 内外：ハケ	密	3-5	良好	褐色	上半部にて 1/4	
111	211	9	703	CN49	SH0978	土師器	杯身	12.0			内～口縁：クロコナデ 外底：回転ハケ削り(反 時計回り)	密	ほとん ど含 ま ない	良好	暗青灰色	口縁にて 1/8	
112	212	9	703	CN49	SH0978	土師器	甕	10.4			内・磨滅 外：ハケ	やや 密	2	良	淡黄灰色	口縁にて 1/6	
113	213	9	703	CN49	SH0978	土師器	甕	11.6			内外・磨滅	密	1	良	淡黄褐色	口縁にて 1/6	字印型

Tab.3 遺物観察表 5

報告 番号	実測 番号	調査 回数	図録 番号	地区	遺構・層位	種類	器形	口径	底径	器高	技法・調整の特徴	胎土 の大きさ (mm)	焼成	色調	残存率	備考	
114	289	9	図録 131	C048	P00394 SH0997 北東主柱穴	弥生土器	甕	8.8	2.8	9.9	口縁:ヨコナデ 内:接合部、ナデ 外:ミガナシ	密	ほとんど 含ま ない	良好	黒灰色	ほぼ完形	
115	218	9	815	C049/50	SH0987 南東土器	弥生土器	甕	17.6			内:ミガナシ 外:ミガナシ 口縁:ヨコナデ	密	ほとんど 含ま ない	良好	淡黄灰色	口縁にて 1/6	
116	219	9	815	C049/50	SH0987 南東 土器	弥生土器	甕		6.6		内:ハケ 外:磨滅	密	ほとんど 含ま ない	良好	内:黒灰色 外:淡黄褐色	底部にて 1/4	
117	222	9	809	CP50	SH0987 南西 土器	弥生土器	甕	13.4			口縁:ヨコナデ 内:敷ナデ 外:ユビオサエ	密	ほとんど 含ま ない	良好	淡褐色	口縁にて 1/8	
118	223	9	809	CP50	SH0987 南西 土器	甕	杯蓋	15.0			内へ口縁:口縁ナデ 天井:同様に傾り (方向不明)	密	ほとんど 含ま ない	良好	灰青色	口縁にて 1/6	
119	221	9	1376	CQ50	SH0987 南辺回等溝	弥生土器	高杯				内外:磨滅	密	2	良好	淡灰白色	接合部付 定にて 1/6	
120	217	9	738	C049/50	SD0980 → SH0993 西辺回 等溝に相当	弥生土器	高杯	17.4			内:磨滅 外:ミガナシ	密	3-4	良好	黒黒褐色	杯蓋にて 1/8	
121	215	9	1349	C050	SD0980 → SH0993 西辺回 等溝に相当	弥生土器	高杯	21.6			内外:磨滅	密	2-3	良好	淡灰褐色	口縁にて 1/8	
122	216	9	738	C049/50	SD0980 → SH0993 西辺回 等溝に相当	弥生土器	高杯	19.8			内外:磨滅	密	ほとんど 含ま ない	良好	淡黄褐色	杯蓋にて 1/12	
123	214	9	1349	C050	SD0980 → SH0993 西辺回 等溝に相当	弥生土器	高杯		14.0		内外:磨滅	密	2	良好	淡黄白色	脚部にて 1/6	
124	288	9	図録 138	CP49	P09799 SH0993 北東主柱穴	弥生土器	高杯				内外:磨滅 透かし(3ヶ所)	密	3	良好	淡黄白色	杯蓋にて 1/8	輪形高杯、口径 は14cmくらいに 復原できる
125	287	9	図録 138	CP49	P09799 SH0993 北東主柱穴	弥生土器	高杯		12.6		内外:磨滅 透かし(3ヶ所)	密	ほとんど 含ま ない	良好	淡灰褐色	脚部にて ほぼ完形	
126	220	9	図録 142	CP50	SH0993 南辺回等溝	石器	砥石				長さ19.3×幅4.7× 厚さ3.4cm、 重さ470g					完形	層位割裂、分割 の跡の痕跡が
127	228	9	1119	CR52	SH0994 北辺回等溝	弥生土器	甕	13.6			内外:磨滅 口縁:凹線	密	4	良好	白褐色	口縁にて 1/6	
128	230	9	1346	CQ52/53	SH0994/95 土器	弥生土器	甕	13.0			内外:磨滅 口縁:凹線	密	2	良好	黒灰色	口縁にて 1/8	
129	229	9	図録 134	CP51	SH0994/95 土器	弥生土器	小型丸 底甕	3.6			内:ユビオサエ 外:磨滅	密	2-3	良好	淡黄褐色	底部にて 1/3	
130	231	9	962	CQ53	SH09101/102 西辺回等溝	弥生土器	高杯	19.4			内:ミガナシ 外:磨滅	やや 密	2-3	良好	内:黒褐色 外:淡黄褐色 →淡黄褐色	杯蓋にて 1/8	
131	408	9	図録 166 +1283	CR51	SH09104 土器	弥生土器	甕	18.8			内外:磨滅 口縁:凹形浮文(1単位 3個)	密	1-3	良好	灰白色	口縁にて 1/3	
132	410	9	1293	CR52	SH09104 土器	弥生土器	甕	14.8			内外:磨滅	密	1-2	良好	褐色	口縁にて 1/12	
133	409	9	1247	CR52	SH09104 土器	弥生土器	甕	12.8			内外:磨滅	密	1-3	良好	淡黄白色	口縁にて 1/8	
134	413	9	987	C549/50	SH09104 上面検出	弥生土器	甕	17.2			内外:磨滅 外:ハケ、突部	密	1-2	良好	淡灰褐色	口縁にて 1/4	
135	411	9	1317	CR51	SH09104 土器	弥生土器	甕	19.8			内外:磨滅	密	1-2	良好	黄白色	口縁にて 1/6	
136	404	9	図録 199	CR50	SH09104 床面直上 南北ベルト土器	弥生土器	甕	35.4			内外:磨滅 底部:凹線	密	1-3	良好	灰白色	口縁にて 1/8	
137	407	9	図録 164	CR51	SH09104 土器	弥生土器	甕	31.4			内:羽状刺突 外:突部	密	1-4	良好	淡褐色	口縁にて ほぼ完形	
138	406	9	図録 173 + 図録 183 + 図録 167	CS50 →CS51、 CR50	SH09104 床面直上 →土器	弥生土器	甕	19.8			内外:磨滅 口縁:凹形浮文(1単位 3個)	やや 密	1-5	良好	淡黄褐色	口縁にて 1/3、脚部 観察できる にて1/4	下部に水痕が
139	414	9	図録 190	CR52	SH09104 土器	弥生土器	甕	7.3			内外:磨滅	密	1-3	良好	内:黒灰色 外:灰白色	口縁にて 1/4	
140	420	9	1447	CQ/CR52	SH09104 土器	弥生土器	甕		3.4		内:接合部、ナデ、ハケ 外:ハケ後ミガナシ	密	1-2	良好	黒灰色	下部にて 完形	
141	405	9	図録 171	CS50	SH09104 床面直上	弥生土器	甕				内外:磨滅 外:突部、凹形刺突	密	1-4	良好	灰白色	底部にて 完形	
142	416	9	図録 187	CR52	SH09104 床面直上	弥生土器	甕		6.8		内外:磨滅	密	1-3	やや 軟	淡黄褐色	底部にて 完形	
143	418	9	1317	CR51	SH09104 土器	弥生土器	甕		8.4		内外:磨滅	密	1-4	良好	内:灰褐色 外:淡灰褐色	口縁にて 1/4	
144	415	9	図録 190	CR52	SH09104 土器	弥生土器	甕		6.2		内外:磨滅	密	1-4	良好	灰褐色	底部にて 完形	
145	417	9	図録 160	CR51	SH09104 床面直上 土器	弥生土器	甕		6.8		内外:磨滅	やや 密	1-2	良好	黒灰色	底部にて 1/3	
146	433	9	1282	CR49/50	SH09104 土器	弥生土器	甕	14.4			内外:磨滅	密	1-2	良好	灰褐色	口縁にて 1/6	
147	431	9	図録 190	CR52	SH09104 土器	弥生土器	甕	14.8			内:磨滅 外:ハケ 口縁:ヨコナデ、刺突	密	1	良好	黒灰色	口縁にて 1/4	

Tab.3 遺物観察表 6

報告 番号	実測 番号	調査 回数	図録 番号	地区	遺構/層位	種類	形状	口径	底径	高さ	技法・調整の特徴	粘土 の 大きさ (mm)	焼成	色調	残存率	備考	
148	432	9	1317	CR51	SH09104 埋土上層	赤生土器	甕	15.8			内外・磨滅	密	1-2	良	黒灰色	口縁にて 1/6	
149	428	9	前測 181	CS51	SH09104 床面直上 (中央部上面)	赤生土器	甕	16.0			内外・磨滅	密	1	良	にぶい・褐色	口縁にて 1/4	
150	430	9	1247	CR52	SH09104 埋土上層	赤生土器	甕	16.4			内：磨滅 外：ハケ、直線文、刺突 口縁：ヨコナデ、ハケ	密	1-2	良好	黒灰色	口縁にて 1/4	
151	429	9	1289	CR49/50	SH09104 埋土上層	赤生土器	甕	18.0			内：ハケ 外：磨滅 口縁：ヨコナデ、刺突	密	1-2	良好	黒灰色	口縁にて 1/8	
152	412	9	1290	CR51	SH09104 埋土上層	赤生土器	甕	12.0			内外・磨滅	密	1-3	良	淡黄白色	口縁にて 1/2	
153	437	9	1290	CR51	SH09104 埋土上層	赤生土器	甕	15.0			内：磨滅 外：刺突か	密	ほとんど 含まない	良好	淡黄灰色	口縁にて 1/4	
154	427	9	前測 181	CS51	SH09104 床面直上 (中央部上面)	赤生土器	甕	21.4			内外・磨滅	密	1-2	良	黄白色	口縁にて 1/6	
155	436	9	1247	CR52	SH09104 埋土上層	赤生土器	甕	20.0			内外・磨滅	密	1-3	良	淡黄褐色	口縁にて 1/8	
156	425	9	1290	CR51	SH09104 埋土上層	赤生土器	甕	22.0			内外・磨滅	密	1-3	良	淡黄褐色	口縁にて 1/4	
157	423	9	1290	CR51	SH09104 埋土上層	赤生土器	甕	13.9			内外・磨滅	密	1-3	やや 軟	黒灰色	1/3	
158	424	9	前測 180	CS51	SH09104 床面直上 (中央部上面)	赤生土器	甕	13.6			内外・磨滅	密	1-2	良	灰黄色	1/4	
159	426	9	前測 163	CR51	SH09104 床面直上	赤生土器	甕	14.6	4.1	20.6	内：ケズリ、オサエ 外：磨滅	密	1-3	良	内：黒褐色 外：にぶい黄 褐色～黒褐色	ほぼ完形	
160	422	9	前測 184・ 1448	CS51 →CS52	SH09104 埋土3層 東西ベルト層去	赤生土器	甕	16.0	6.4	17.3	内外・ハケ 口縁：磨滅	やや 密	1.5	良	灰褐色	ほぼ完形	内面に僅かに焦 げの跡が残る
161	439	9	前測 191	CR52	SH09104 床面直上	赤生土器	甕	3.6			内外・磨滅	密	1-4	良	灰白色	底部にて 完形	
162	301	9	1503	CS51	SH09104 中央土坑 2層目	赤生土器	甕	5.2			内：磨滅 外：ハケ	やや 密	3-6	良	淡灰褐色	底部にて 1/3	外面に煤が付着 する
163	434	9	1247	CR52	SH09104 埋土上層	赤生土器	甕	5.6			内外・磨滅	密	1-2	良	内：黒灰色 外：灰褐色	底部にて 1/2	SH09118 の 出 たかも
164	440	9	前測 189	CR52	SH09104 埋土	赤生土器	甕	4.6			内：磨滅 外：ハケ	密	1-2	良	褐色	底部にて 1/3	粘土層の接合部 顕著
165	435	9	1291	CQ52	SH09104 埋土上層	赤生土器	甕	7.0			内外・磨滅	密	1-3	良	黒灰色	底部にて 1/3	
166	387	9	1290	CR51	SH09104 埋土上層	赤生土器	高杯	20.2			内外・磨滅	密	1-3	良	灰白色	杯底にて 1/6	
167	388	9	前測 192	CR52	SH09104 床面直上	赤生土器	高杯	20.6			内外・磨滅	密	1	良	淡黄褐色	杯底にて 1/3	
168	390	9	前測 174	CS51	SH09104 床面直上	赤生土器	高杯	22.2			内：磨滅 外：直線文	密	1	良	淡褐色	杯底にて 1/6	
169	386	9	前測 158	CQ51	SH09104 床面直上	赤生土器	高杯	22.0			内外・磨滅	密	1-2	良	灰白色	杯底にて 1/12	磨耗が強い
170	400	9	1293	CR542	SH09104 埋土下層	赤生土器	高杯	25.6			内外・磨滅	密	1-2.5	良	褐色	杯底にて 1/12	
171	391	9	前測 161・ 1288	CQ51	SH09104 床面直上 (1層目)	赤生土器	高杯	12.6			内：シボリ、ナデ 外：磨滅 透かしなし	密	1-2	良	灰褐色	脚座にて ほぼ完形	
172	397	9	1317	CR51	SH09104 埋土上層	赤生土器	高杯	9.2			内：シボリ 外：磨滅 透かしなし	密	1-2	良好	黒灰色	脚座にて ほぼ完形	
173	401	9	前測 159	CQ51	SH09104 床面直上	赤生土器	高杯	6.0			内外・磨滅	密	1-3	良	灰白色	脚座にて ほぼ完形	
174	395	9	前測 165	CR51	SH09104 埋土	赤生土器	高杯	8.8			内外・磨滅 透かし(2段各4ヶ所)	密	1-2	良	淡灰褐色	脚座にて ほぼ完形	
175	394	9	前測 157	CQ50	SH09104 埋土	赤生土器	高杯	5.9			内外・磨滅 内外の中央部分に白色 粘土層布か	密	1-3	良	淡褐色	脚座にて 1/2	脚付の脚座か も
176	399	9	1291	CQ52	SH09104 埋土上層	赤生土器	高杯	15.0			内外・磨滅 透かし	密	1-3	良	白黄色	脚座部にて 1/6	179 と同一個体 か
177	393	9	1451	CR50	SH09104 埋土 南北ベルト層去	赤生土器	高杯				内：シボリ 外：ミガキ	密	ほとんど 含まない	良好	にぶい 灰褐色	脚座にて 底部を欠く	
178	396	9	前測 170	CR50	SH09104 床面直上(北西 土柱穴上面)	赤生土器	高杯				内：シボリ 外：磨滅 透かしなし	やや 密	1-3	良	白黄色	脚座にて 底部を欠く	
179	398	9	1291	CQ52	SH09104 埋土上層	赤生土器	高杯				内：磨滅 外：直線文(5段か)	密	1-3	良	内：淡灰青色 外：黄白色	脚座にて 底部を欠く	176 と同一個体 か
180	403	9	前測 177・ 前測 178・ 1283	CS51	SH09104 床面直上 (中央部上面)	赤生土器	股付	34.0			内：磨滅 外：安部、円形刺突 円形透かし(2段、 各12ヶ所か)	密	13.6-7	良	白黄色	脚座部にて 1/4	
181	421	9	1247	CR52	SH09104 埋土上層	赤生土器	股付	38.4			内外・磨滅	密	2-3	良	黄褐色	脚座部にて 1/6	SH09118 の 出 たかも
182	438	9	前測 155	CQ50	SH09104 西野溝北内側	赤生土器	甕	21.2			内外・磨滅	密	1-3	良	灰褐色	口縁にて 1/6	
183	389	9	前測 156・ 1281	CQ50	SH09104 西野溝南溝	赤生土器	高杯	21.6			内外：ミガキか	密	1-3	良好	淡黄褐色	杯底にて 1/2	他と粘土が明ら かに異なる

Tab.3 遺物観察表 7

報告 番号	実測 番号	調査 回数	図録 番号	地区	遺構/層位	種類	器形	口径 (mm)	底径 (mm)	高さ (mm)	技法・調整の特徴	胎土	移動の 大きさ (mm)	焼成	色調	残存率	備考
184	402	9	1459	CS49	SH09104 北辺岡町溝	赤生土器	器台				内：赤褐色 外：白濁、方形透かし	密	1-4	良	黄白色	胴部破片	
185	392	9	観測 224+ 1502	CS51	SH09104 高田中央土坑 2層目	赤生土器	高杯	142			内外：赤褐色 透かし(8ヶ所)	密	1-3	良	灰白色	胴部にて 完形	
186	419	9	観測 225	CS51	SH09104 高田中央土坑 2層目	赤生土器	鉢	51	4.0	4.9	内外：ナデ 穿孔あり	密	ほとんど 含まない	良好	内：灰褐色 外：淡褐色	完形	口縁に直径3mm の穿孔が1単位 2ヶ所あり
187	383	9	観測 200 + 観測 205 + 観測 206 + 観測 207+ 1505	CR52	P09923 SH09104 南西土柱穴	赤生土器	長頸壺				内外：赤褐色	密	1-6	良	黄白色	胴部にて 1/2	大地不明
188	380	9	観測 214	CR52	P09923 SH09104 南西土柱穴	赤生土器	壺	74			内外：赤褐色	密	1	良	内：灰褐色 外：灰褐色	1/6	
189	381	9	1506	CR52	P09923 北平 SH09104 南西土柱穴 40 - 60cm	赤生土器	壺	106			口縁：ヨコナデ 内：ユビオサエ 外：ナデか	密	1	良好	灰褐色	口縁にて 1/4	
190	382	9	1479	CR52	P09923 南平 SH09104 南西土柱穴 20 - 40cm	赤生土器	壺	132			内外：赤褐色	やや 粗	2-4	良	黒褐色	口縁にて 1/6	
191	383	9	1506	CR52	P09923 北平 SH09104 南西土柱穴 40 - 60cm	赤生土器	鉢	82			内外：赤褐色	密	1	良	内：黒色 外：黄灰色	口縁にて 1/4	
192	379	9	観測 208+ 観測 211+ 観測 215+ 1478	CR53	P09923 SH09104 南西土柱穴	赤生土器	高杯	326			内外：赤褐色	密	1-3	良	褐色	杯部にて 1/8	
193	377	9	観測 211	CR52	P09923 SH09104 南西土柱穴	赤生土器	高杯	240			内外：赤褐色 突部磨り付け	密	1-3	良	淡褐色	杯部にて 1/6	
194	376	9	観測 216	CR52	P09923 SH09104 南西土柱穴	赤生土器	高杯	108			内外：赤褐色 胴部部に穿孔あり	密	2-3	良	灰白色	胴部にて ほぼ完形	
195	375	9	観測 209	CR52	P09923 SH09104 南西土柱穴	赤生土器	高杯				内外：赤褐色	密	1-2	良	灰白色	胴部にて 端部を欠く	器台かも
196	384	9	1505	CR52	P09923 北平 SH09104 南西土柱穴 0 - 20cm	赤生土器	高杯	104			口縁：ヨコナデ 内外：赤褐色 穿孔(1ヶ 所)	密	ほとんど 含まない	良好	淡黄褐色	胴部部にて 1/6	
197	378	9	観測 217	CR52	P09923 SH09104 南西土柱穴	赤生土器	器台				内外：赤褐色 外：ミガキ 透かし(2段、各8ヶ所)	密	1-3	良好	灰褐色	口縁と胴 部部を欠く	
198	371	9	1509	CR50	P09938 SH09104 北西土柱穴	赤生土器	高杯	240			内外：赤褐色	密	2-3	良	灰褐色	杯部にて 1/12	小片のため口径 の誤差大
199	372	9	観測 219	CR50	P09938 SH09104 北西土柱穴	赤生土器	高杯				内：シボリ 外：赤褐色	密	1-2	良	内：黒灰色 外：淡赤褐色	胴部にて 端部を欠く	
200	373	9	観測 223	CR50	P09938 SH09104 北西土柱穴	赤生土器	壺				内：赤褐色 外：黄褐色、波状 文、刺突、直線文、波状 文	密	2	良好	褐色	胴部破片	
201	374	9	観測 220 + 222	CR50	P09938 SH09104 北西土柱穴	赤生土器	壺	7.0			内外：赤褐色	密	1-3	良	内：黒褐色 外：黄褐色	底部にて 完形	
202	292	9	1548	CM55	SH09135/136 北西土柱穴	赤生土器	壺	234			内外：赤褐色	やや 粗	2-5	良	明褐色	口縁にて 1/6	
203	293	9	1549	CM55	SH09135/136 北西土柱穴	赤生土器	壺	292			内外：赤褐色	やや 粗	2-4	良	明褐色	口縁にて 1/6	
204	296	9	1557	CM56	SH09135/136 北西土柱穴	赤生土器	高杯	233			内外：赤褐色	密	2-5	良	淡黄褐色	杯部にて 1/8	
205	298	9	1657	CM56	SH09135/136 南ベルト土柱穴	赤生土器	高杯				内：シボリ 外：直線文(2段)、点 刺突、ミガキ 透かし	密	ほとんど 含まない	良好	淡黄褐色	胴部にて 端部を欠く	直線文と点刺突 は同一工具の負 荷か
206	297	9	1654	CM55	SH09135/136 北西土柱穴	赤生土器	高杯				内外：赤褐色 外：直線文(3段)	密	1-2	良	内：淡黄褐色 外：淡黄褐色	胴部にて 端部を欠く	
207	295	9	1549	CM55	SH09135/136 北西土柱穴	赤生土器	高杯	144			内外：赤褐色	密	3-6	良	淡黄褐色	胴部部にて 1/6	
208	291	9	1550	CM/CN56	SH09135/136 北西土柱穴	赤生土器	杯身	11.7			内外：ロクロナデ 外：直線ハナナリ (角状不明)	密	ほとんど 含まない	良好	灰褐色	口縁にて 1/12	
209	304	9	観測 227	CM56	SH09135 高田中央土坑	赤生土器	壺	136			内外：赤褐色 外：ハナナリ、刺突	密	2-4	良	灰褐色	口縁にて 2/3	下半分に腐が付 着する
210	303	9	1554 +1607 +1679	CM56	SH09135 高田岡町溝	赤生土器	壺	3.0			内：ハナナリ、オサ工 外：ハナナリ	密	1-2	良好	淡黄褐色	1/3	

Tab.3 遺物観察表 8

報告 番号	実測 番号	調査 回数	登録 番号	地区	遺構 / 層位	種類	器形	口径	底部 径	高さ	技法・調整の特徴	粘土 の 大きさ (mm)	焼成	色調	残存率	備考	
211	302	9	個別 226	CN55	SH09135 北辺四草溝	赤生土器	甕		4.4		内:ハケ 外:磨滅	密	ほとんど 含ま ない	良	内:淡黄灰色 外:淡黄褐色	底部にて 完形	
212	300	9	1605	CM55	SH09135 北辺四草溝	赤生土器	甕		3.9		内外:磨滅	密	2	良	灰褐色	底部にて 1/2	
213	299	9	個別 226	CN55	SH09135 北辺四草溝	赤生土器	付付甕		8.0		内:ナデ, オサエ 外:磨滅	密	2-3	良	淡黄褐色	脚内部にて 完形	
214	294	9	1548	CN55	SH09135/136 北東土坑	赤生土器	鉢	16.1			内外:磨滅	密	2	良	内:淡灰褐色 外:淡黄褐色	口縁にて 1/2	
215	319	9	個別 238	CQ56	SH09140 北東 床面直上	赤生土器	甕	16.0			内外:磨滅	やや 密	1	良	灰褐色	口縁にて 1/6	
216	328	9	1658	CQ57	SH09140 埋土	赤生土器	甕	9.6			内外:磨滅	密	1-2	良	内:灰褐色 外:黄褐色	口縁にて 1/6	
217	308	9	1633	CP55/56	SH09140 北西埋土	赤生土器	甕	15.8			内:ミガキか 外:磨滅 口縁:円形浮文割落	密	ほとんど 含ま ない	良好	淡黄褐色	口縁にて 1/6	
218	316	9	個別 229	CP56	SH09140 床面直上 (砂土上)	赤生土器	長頸甕	12.2	6.7	25.0	内:ハケ 外:磨滅 口縁:磨滅	密	2-4	良	内:黒灰色 外:灰褐色	口縁にて ほぼ 完形 底部 にて 1/2	
219	317	9	個別 234	CQ57	SH09140 南東 床面直上	赤生土器	甕				内:ユビオサエ 外:磨滅	密	1-3	良	内:黒灰色 外:灰褐色	底部にて 1/3	
220	332-1	9	個別 231	CQ55	SH09140 北東 埋土	赤生土器	甕				内:ユビオサエ 外:ハケ, 剥落	密	1.8	良	灰褐色	底部にて 1/6	
221	321	9	個別 137	CQ55	SH09140 埋土	赤生土器	甕				内外:磨滅	密	2-4	良	黄褐色 → 淡黄褐色	底部にて 1/3	
222	320	9	1658	CQ57	SH09140 北東 埋土	赤生土器	甕				内外:磨滅 外:直線文, 波状文	密	2-4	良	内:暗黄褐色 外:褐色	底部にて 1/3	
223	318	9	個別 235 +1658	CQ57	SH09140 南東 床面直上 + 埋土	赤生土器	甕	6.4			内外:磨滅 外:ミガキか	密	1-4	良	内:黒灰色 外:灰褐色	底部にて 完形	
224	324	9	個別 246	CQ56	SH09140 中央埋土	赤生土器	甕	3.9			内外:磨滅 外:ハケ	やや 密	2-5	良	内:黄褐色 外:褐色	底部にて 完形	
225	332-2	9	個別 231	CQ55	SH09140 北東 埋土	赤生土器	甕	5.4			内外:磨滅	密	1	良	灰褐色	底部にて 1/2	
226	327	9	個別 228	CP56	SH09140 床面 直上 (砂土上)	赤生土器	甕	12.2			内外:磨滅	やや 密	2	良	灰褐色	口縁にて 1/6	
227	326	9	1652	CQ56	SH09140 北東 埋土	赤生土器	甕	15.0			内外:磨滅	やや 密	1-2	良	黄灰色	口縁にて 1/6	
228	323	9	個別 245	CQ56	SH09140 埋土	赤生土器	甕	14.0			内外:磨滅	密	1-3	良	褐色	口縁にて 1/2	
229	329	9	1652	CQ56	SH09140 北東 埋土	赤生土器	甕	19.0			内外:磨滅	密	1-5	良	灰褐色	口縁にて 1/4	
230	330	9	1638	CP56	SH09140 北西 埋土	赤生土器	甕	3.8			内外:磨滅	密	1-2	良	淡黄褐色	底部にて 完形	
231	312	9	個別 238	CQ56	SH09140 北東 床面直上	赤生土器	高杯	24.2			内:ミガキか 外:磨滅	やや 密	2-5	良	内:黒灰色 外:淡灰褐色	杯部にて ほぼ完形	
232	310	9	個別 234+ 1658	CQ57	SH09140 埋土 + 床面直上	赤生土器	高杯	22.9			内外:磨滅	密	ほとんど 含ま ない	やや 軟	灰褐色	杯部にて ほぼ完形	
233	313	9	1638	CP56	SH09140 北西 埋土	赤生土器	高杯	20.0			内外:磨滅	密	2-6	良	淡黄褐色	杯部にて 1/3	
234	311	9	1633	CP55/56	SH09140 北西 埋土	赤生土器	高杯	17.9			内外:磨滅	密	5	良	淡黄褐色	杯部にて 1/8	
235	309	9	個別 232	CQ56	SH09140 北東 床面直上	赤生土器	高杯				内外:磨滅	密	ほとんど 含ま ない	良	黄白色	脚部にて 底部を欠 く	
236	307	9	1658	CQ57	SH09140 埋土	赤生土器	高杯	14.0			内外:磨滅	密	3	良	淡黄褐色	脚部にて 1/6	
237	315	9	1658	CQ57	SH09140 埋土	赤生土器	高杯	13.1			内外:磨滅 外:ハケ	密	1-2	良	灰褐色	脚部にて 1/4	
238	305	9	個別 237	CP57	SH09140 南西 埋土	石器	台石				長さ 17.6 × 幅 10.4 × 厚さ 3.1cm, 重量 750 g					完形	砂岩製
239	322	9	個別 141	CQ55	SH09140 北辺四草溝	赤生土器	甕	12.2			内外:磨滅	やや 密	2-5	良	淡灰褐色	上平部にて 完形	薄手
240	325	9	個別 140	CQ55	SH09140 北辺四草溝	赤生土器	甕	5.6			内外:磨滅	密	2-3	良	内:灰褐色 外:灰褐色	底部にて 完形	
241	314	9	個別 244	CQ57	SH09140 南辺 中央土坑 基底部	赤生土器	高杯	12.2			内:シボリ, ユビオサエ 外:磨滅 透かし 2 割 1 対が 3 ヶ所	やや 密	1-2	良	淡黄褐色	脚部にて 底部を欠 く	
242	331	9	個別 240	CP56	SH09140 北辺四草溝	赤生土器	甕	5.0			内外:磨滅	密	1-2	良	灰褐色	底部にて ほぼ完形	底部外周には砂 粒が多い
243	306	9	1667	CQ56	P091041 SH09140 北東土柱穴	赤生土器	高杯	13.6			内外:磨滅	密	ほとんど 含ま ない	良	灰褐色	脚部にて 1/2	
244	805	10	793	CE/CF50	SH1070 北辺四草溝	赤生土器	付付甕	7.0			内外:磨滅	密	1-3	良	赤褐色	脚内部にて 完形	
245	854	10	728	CE/CG51	P10540 上層 SH1070 南辺中央土坑	赤生土器	甕	16.7			内外:磨滅	密	1-3	良	灰褐色	口縁にて 1/3	
246	806	10	個別 28	CG51	P10540 (南辺中央土坑) SH1070	赤生土器	付付甕	6.6			内外:磨滅	密	1-3	良	内:黒灰色 外:灰褐色 赤褐色	脚内部にて 完形	
247	807	10	個別 28	CG51	P10540 (南辺中央土坑) SH1070	赤生土器	高杯	13.0			内外:磨滅 透かし (おそろく 3 ヶ 所)	密	ほとんど 含ま ない	良	明黄褐色	脚部にて 1/6	

Tab.3 遺物観察表 9

報告 番号	実測 番号	調査 回数	図録 次数	地区	遺構 / 層位	種類	器形	口径	底径	高さ	技法・調整の特徴	胎土 の大きさ (mm)	焼成	色調	残存率	備考	
248	808	10	個別 27	CG51	P10540 (南辺中央土坑) SH1070	赤生土器	高杯		10.0		内:シボリ 内外:磨滅	密	1	良	明褐色	脚部に 底部を欠 くのみ	胎土に白灰色の 鉛線が入る
249	809	10	個別 25	CG51	P10540 (南辺中央土坑) SH1070	ミニチュ ア土器	甕形		3.2		内:ハケカ 内外:磨滅	やや 密	1-2	良	内:灰褐色 外:黒灰～ 灰褐色	底部にて 定形	小型の甕かも
250	810	10	個別 26	CG51	P10540 (南辺中央土坑) SH1070	ミニチュ ア土器	鉢形	5.0		4.2	内外:磨滅	やや 密	1-3	良	灰褐色	ほぼ定形	黒線あり
251	811	10	個別 24	CG51	P10540 (南辺中央土坑) SH1070		石器	台石			長さ 26.9 × 幅 20.6 × 厚さ 11.3cm, 重量 8.7kg				白乳色	定形	チャート製
252	815	10	個別 14	CG47	SH1089 周壁溝	直造器	杯蓋	12.7		5.0	内:口縁:ロクロナデ 天井:回転ヘラ削り(時 計回り)	密	1	良好	灰青色	1/2	
253	812	10	個別 15	CG47	SH1089 周壁溝南東側	直造器	杯身	9.3		4.0	内:口縁:ロクロナデ 外底:回転ヘラ削り(時 計回り)	密	1	良好	暗青灰色	定形	
254	814	10	907	CF/CG46	SH1089 北辺周壁溝	直造器	杯蓋	11.0			内:口縁:ロクロナデ 天井:回転ヘラ削り (方向不明)	密	1-2	良	灰白色	口縁部にて 1/8	
255	813	10	907	CF/CG46	SH1089 北辺周壁溝	直造器	杯身	10.4			内:口縁:ロクロナデ	密	1-2	良好	灰青色	杯蓋にて 1/6	
256	820	10	938	CG43	SH10107 南西 埋土	赤生土器	甕	20.4			内:ハケカ 外:磨滅	密	1-3	良	黄褐色	口縁部にて 1/3	
257	819	10	965	CH43	SH10107 南東 埋土	赤生土器	甕		5.0		内外:磨滅	密	1-4	良好	黄褐色～ 灰褐色	底部にて 定形	
258	821	10	965	CH43	SH10107 南東 埋土	赤生土器	高杯		12.4		内外:磨滅	密	1-3	良	灰褐色	脚部部にて 1/6	
259	822	10	個別 18	CH42	SH10107 南辺周壁溝	ミニチュ ア土器	甕形	4.9	3.0	5.0	内:ナデ 外:直線文(5条)下に 斜交文、ハケ	密	1-5	良	明赤褐色	ほぼ定形	黒線あり、外底 部がよく磨滅す る
260	823	10	個別 19	CH43	P10540 (南辺中央土坑) SH10107	ミニチュ ア土器	鉢形				内外:磨滅	やや 密	1-3	良	灰褐色	ほぼ定形	黒線部も
261	224	9	817	CR50	SH0988	赤生土器	甕	12.0			内外:磨滅	密	ほとんど 含まない	良	灰褐色	口縁にて 1/8	
262	226	9	817	CR50	SH0988	赤生土器	甕		4.0		内外:磨滅	密	2-3	良	淡灰褐色	底部にて 1/2	
263	227	9	816	CG50	SH0988	赤生土器	高杯	24.2			内外:磨滅	やや 密	2	良	褐色	口縁にて 1/12	
264	225	9	817	CR50	SH0988	赤生土器	高杯		13.4		内:磨滅 外:ミナギ ナ	密	3	良	黄褐色	脚部部にて 1/8	
265	232	9	1085	CR49/50	SH09109 周壁溝	ミニチュ ア土器	甕形				内:ナデ 外:ハケカ 口縁:ヨコナデ	密	ほとんど 含まない	良	淡黄褐色	口縁にて 1/4	
266	873	10	1298	CH45	P10850 → SH10111 取込	赤生土器	甕	17.4			内外:磨滅	やや 密	1-3	良	淡褐色	口縁部にて 1/12	pitとして掘削 した結果の一部 であった
267	801	10	493	CH52	SH1031 北東 埋土	赤生土器	高杯				内:シボリ 外:直線文	密	1-3	良好	灰褐色	脚部にて 底部を欠 くのみ	直線文は若 く、段数は不明
268	802	10	377	CH53/54	SH1033 西辺周壁溝	土師器	高杯				内:シボリ 外:磨滅	密	ほとんど 含まない	良	明赤褐色	脚部にて 底部を欠 くのみ	
269	844	10	437	CH53	P10352 SH1033 北西土柱穴	赤生土器	高杯				内:シボリ 外:磨滅	やや 密	1	良	灰褐色	脚部にて 底部を欠 く	
270	845	10	437	CH53	P10352 SH1033 北西土柱穴	赤生土器	付付甕		7.8		内外:磨滅	密	1	良	淡赤褐色	脚部部にて 定形	
271	855	10	737	CD50	P10544 SH1069 南西土柱穴	赤生土器	高杯	23.0			内外:磨滅	密	1-3	良	灰黄色	杯蓋にて 1/8	
272	803	10	569	CE54	SH1051 埋土 (SD1010 以北)	赤生土器	高杯				内:磨滅 外:直線文(2段)の間 に格子文	密	ほとんど 含まない	良好	にぶい 黄褐色	境合部のみ	脚付直かも
273	804	10	548	CE/CF 54/55	SH1051 埋土 (SD1010 以南)	赤生土器	甕		5.2		内外:磨滅、底部に直 径 1cm の穿孔あり	密	1-2	良	内:淡灰褐色 外:灰褐色	底部にて 定形	
274	858	10	827	CG47	P10593 SH1089 南東土柱穴	直造器	高杯	11.0	9.4	9.0	杯部内:ロクロナデ 杯部外:回転ヘラ削り (時計回り) 脚部:ロク ロナデ、方形部なし	密	1-2	良好	暗青灰色	1/3	杯部と脚部は接 合しないが同一 個体と考えられ る
275	856	10	1257	CE49	P10559 SH1069 北東土柱穴	石器	台石				長さ 21.1 × 幅 14.7 × 厚 さ 10.5cm, 重量 4.7kg					定形	石高質、使用面 は 1 面のみ
276	869	10	1138	CH/CH46	P10757 SH10113 南辺中央土坑	赤生土器	付付甕		7.6		内外:磨滅 底部:穿孔あり(割落 かも)	やや 密	1-3	良	淡赤褐色	脚部部にて 定形	
277	816	10	個別 8	CF46	SH1099 埋土	赤生土器	甕	15.4			内外:磨滅	やや 密	1-2	良	灰白色	口縁部にて 1/6	天地泥となり高 杯かも
278	817	10	964	CH44/45	SH10106 埋土 (現代遺文(灰))	赤生土器	付付甕		8.1		内:ユビオサエ 内外:磨滅	密	1-4	やや 軟	淡赤褐色	脚部部にて 定形	
279	818	10	983	CH44	SH10106 埋土	土師器	高杯		14.0		内外:磨滅	密	ほとんど 含まない	良	黄褐色	脚部部にて 1/8	
280	824	10	939	CF45	SH10111 埋土	赤生土器	甕	17.4			内外:磨滅	密	1-3	良	灰褐色	口縁部にて 1/8	口縁は強く外反 する

Tab.3 遺物観察表 10

報告 番号	実測 番号	調査 回数	図録 番号	地区	遺構 / 層位	種類	器形	口径	底径	高さ	技法・調整の特徴	胎土 の 大きさ (mm)	焼成	色調	残存率	備考		
281	825	10	1021	CE/CG45	SH10111 南西 垣根遺構	赤生土器	高杯	19.0			内外:磨滅	やや 密	1-4	やや 軟	灰黒色	杯部にて 1/12		
282	826	10	1290	CG45	SH10111 上層 東西へる土	赤生土器	高杯	22.0			内外:磨滅	密	1-3	良好	暗褐色	杯部にて 1/6		
283	827	10	1093	CH46	SH10115 南辺垣根遺構	赤生土器	高杯		16.4		内外:磨滅	密		良	灰白色	脚端部にて 1/8		
284	828	10	新測 20	CH44	SH10116 東辺垣根遺構	石製品	釣鐘車				長さ 4.3 × 幅 4.3 × 厚 さ 1.8cm, 重量 41.3 g						完形	緑色燐灰質製か
285	829	10	1201	CC/CD43	SH10147 埋土	赤生土器	甕		4.0		内外:磨滅	密	1-4	良	暗灰褐色	底部にて 完形	底部穿孔かも	
286	519	9	新測 11	CH49	SD0902	赤生土器	甕				内:オサエ、ハケ 外:磨滅	密	1-6	良	内:灰褐色 外:淡褐色	胴部にて 1/3	粘土紐の縺み上 げが顕著	
287	517	9	新測 20	CH50	SD0902	赤生土器	甕		6.0		内外:磨滅	密	1-4	良	内:淡灰褐色 外:淡灰褐色	底部にて 完形	外面に黒炭あり	
288	524	9	新測 13	CH49	SD0902	赤生土器	甕	10.8			内外:磨滅	密	1-2	良	灰白色	口縁にて 1/4		
289	528	9	新測 16	CH49	SD0902	赤生土器	甕	12.7			内外:磨滅 口縁:割突	密	1-4	良好	赤褐色	口縁にて 完形	赤筋あり	
290	525	9	8	CH48/49	SD0902	赤生土器	甕				内:オサエ 外:磨滅	密	2-5	良	内:灰褐色 外:淡褐色	杯部にて 1/4		
291	522	9	新測 11	CH49	SD0902	赤生土器	甕		6.2		内外:磨滅 外:ハケ	密	1-2	良好	内:灰褐色 外:黒褐色	底部にて 1/4		
292	526	9	51	CH50	SD0902	赤生土器	甕	18.4			内外:ハケ	密	1-3	良	灰褐色	口縁にて 1/6		
293	520	9	新測 11	CH49	SD0902	赤生土器	甕	15.8			内:磨滅 外:直線文、ハケ	密	1-3	良	内:灰褐色 外:黄褐色	口縁にて 1/4		
294	527	9	新測 12	CH49	SD0902	赤生土器	付付甕		8.6		内:磨滅 外:ハケか	密	1-5	良	内:灰褐色 外:灰褐色	脚部にて ほぼ完形		
295	523	9	新測 18	CH50	SD0902	赤生土器	付付甕		8.4		内外:ハケ	密	1-2	良好	灰褐色	脚部にて ほぼ完形		
296	521	9	新測 11	CH49	SD0902	赤生土器	付付甕		7.6		内:ユビオサエ 外:磨滅	密	1-2	良	暗褐色	脚部にて 1/3		
297	530	9	新測 21	CH50	SD0902	赤生土器	付付甕		8.2		内外:磨滅	密	2-3.7	良	灰黄色	脚部にて 完形		
298	518	9	新測 13・ 新測 14	CH49	SD0902	赤生土器	高杯	22.0	10.0	19.2	内:シボリ 外:磨滅 透かし(3ヶ所)	密	1-3	やや 軟	淡黄褐色	完形	内湾気味	
299	533	9	新測 22	CH50	SD0902	赤生土器	高杯				内:ミガキカ、シボリ 外:直線文(2段) 透かし(3ヶ所)	密	1-3	良	内:赤褐色 外:黄褐色	杯部にて 口縁端部 を欠く		
300	529	9	新測 18	CH50	SD0902	赤生土器	高杯				内:シボリ 外:磨滅 透かし(3ヶ所)	密	1-2	やや 軟	淡黄褐色	口縁と脚 端部を欠く		
301	532	9	新測 20・ 新測 21	CH50	SD0902	赤生土器	高杯		10.3		内:シボリ 外:直線文(2段) 透かし(3ヶ所)	密	1-3	良	暗赤褐色	脚部にて 完形		
302	531	9	新測 21	CH50	SD0902	赤生土器	高杯		13.4		内:シボリ 外:磨滅 透かし(3ヶ所)	密	1-2	良	淡褐色	脚部にて 1/2	内湾気味	
303	514	9	23	CH48	SD0908 SH0903/04 上面検出	赤生土器	甕	13.7			内:オサエ 外:磨滅	密	1-3	良	内:灰褐色 外:淡黄褐色	口縁にて 1/4		
304	515	9	新測 1	CH48	SD0908	赤生土器	脚付甕				内:ハケ 外:ミガキカ	密	1-3	良好	暗褐色	胴部にて ほぼ完形		
305	513	9	152	CH50	SD0908	赤生土器	付付甕		7.5		内:シボリ、ナデ、オサエ 外:ハケ	密	1	良好	黒〜黒褐色	脚部にて 完形		
306	512	9	152	CH50	SD0908	赤生土器	高杯	15.0			内外:ハケ	やや 密	1-5	良	淡黄褐色	杯部にて 1/3	輪形高杯	
307	516	9	152	CH50	SD0908	赤生土器	高杯	26.2			内外:磨滅 外:ミガキ	密	1-3	良好	淡灰褐色	杯部にて 1/4		
308	547	9	新測 35	CH49	SD0909	赤生土器	甕	18.0			内外:磨滅 口縁:浮文(雲ヶ所)	密	1-7	良	淡黄褐色	口縁にて ほぼ完形		
309	548	9	新測 50	CH47	SD0909	赤生土器	甕	20.0			内外:磨滅	密	2-4	良好	淡褐色	口縁にて 1/2		
310	551	9	新測 43	CH48	SD0909	赤生土器	甕	20.2			内:羽状割突か 外:磨滅 部:突帯	密	1-6	良	淡灰褐色	口縁にて 1/6		
311	550	9	新測 43	CH48	SD0909	赤生土器	甕	17.0			内外:磨滅	密	1-3	良	灰白色	口縁にて 1/8		
312	552	9	新測 7	CH50	SD0909	赤生土器	甕	15.8			内外:磨滅	密	1-4	良	黄褐色	口縁にて 1/4		
313	549	9	新測 45	CH48	SD0909	赤生土器	甕	15.0			内外:磨滅 口縁:浮文(1単位2割 を4ヶ所)	密	1-4	良	黄褐色	口縁にて 完形		
314	596	9	新測 47	CH48	SD0909	赤生土器	脚付甕		11.0		内:磨滅 外:直線文 (1単位5条を2段)、 ミガキカ 透かし(3ヶ所)	やや 密	1-3	やや 軟	淡黄褐色	上半部を 欠く		
315	558	9	新測 29	CH50	SD0909	赤生土器	甕		4.1		内外:磨滅	密	1-2	良	内:灰褐色 外:黒褐色	底部にて 完形	焼成後の穿孔あり	
316	556	9	新測 37	CH49	SD0909	赤生土器	甕		5.5		内外:磨滅	密	1-3	良	内:灰褐色 外:淡灰褐色	杯部にて 完形		
317	553	9	新測 30	CH50	SD0909	赤生土器	甕		4.0		内:ハケか 外:磨滅	密	4	良	灰白色	底部にて 完形		

Tab.3 遺物観察表 11

報告番号	実測番号	調査回数	図録番号	地区	遺構/層位	種類	器形	口径	底径	高さ	技法・調整の特徴	粘土	胎釉の大きさ(mm)	焼成	色調	現存率	備考
318	554	9	個別46	CK48	SD0909	弥生土器	甕		6.5		内外・磨滅	密	1-3	良好	内：黒灰色 外：黒褐色	底部にて 完形	外面に一部保が 付着する
319	555	9	個別47	CL48	SD0909	弥生土器	甕		8.8		内：ハケ 外：磨滅	密	1-5	良好	黒褐色 黒褐色	底部にて 1/3	地表面はよく磨 れて磨滅する
320	557	9	個別39	CJ49	SD0909	弥生土器	甕		4.0		内外・磨滅	やや密	1-3	良好	黄色	底部にて 完形	
321	574	9	54	CI50	SD0909	弥生土器	甕	16.8			内：ハケ後ヨコナデか 外：磨滅	密	1-2	良好	暗褐色	口縁にて 1/4	
322	575	9	個別44	CK48	SD0909	弥生土器	甕	14.3			内外・磨滅	密	1-3	やや軟	灰黄色	口縁にて 1/8	
323	590	9	27	CI50	SD0909	弥生土器	甕	15.6			内外・磨滅	密	1-3	やや軟	灰褐色	口縁にて 2/3	
324	576	9	個別39	CJ49	SD0909	弥生土器	甕	12.6			内：ハケ 外：ハケ 後 直線文・割突 口縁：ヨコナデ	密	1-2	良好	暗褐色	口縁にて 1/6	
325	573	9	個別37	CJ49	SD0909	弥生土器	付付甕				内：ハケ 外：磨滅	密	1-3	良好	内：黒褐色 外：淡褐色	胴部破片	
326	560	9	27	CI50	SD0909	弥生土器	甕		4.0		内外・磨滅 外：ハケ	密	1-2	良好	灰褐色	底部にて 完形	非常に細かいハ ケが特徴的
327	559	9	25	CH51	SD0909	弥生土器	甕		5.0		内：磨滅 外：ハケ	密	1-2	良好	内：黒褐色 外：淡赤褐色	底部にて 完形	
328	562	9	個別42	CK48	SD0909	弥生土器	付付甕		6.2		内外・磨滅	やや粗	1-3	良好	内：淡黄褐色 外：灰褐色 淡赤褐色	胴部にて ほぼ完形	
329	563	9	個別38	CJ49	SD0909	弥生土器	付付甕		7.0		内外・磨滅	密	1-3	良好	灰褐色 灰褐色	胴部にて 1/2	
330	564	9	53	CI49	SD0909	弥生土器	付付甕		5.6		内：磨滅 外：ハケか	密	1-3	良好	内：黒褐色 外：褐色	胴部にて ほぼ完形	
331	561	9	個別51	CL47	SD0909	弥生土器	付付甕		6.6		内外・磨滅	密	1-2	良好	黄褐色	胴部にて ほぼ完形	
332	566	9	個別41	CK48	SD0909	弥生土器	付付甕		7.8		内外・磨滅	密	1-3	良好	淡赤褐色	胴部にて 完形	
333	567	9	個別51	CL47	SD0909	弥生土器	付付甕		7.8		内外・磨滅	密	1-4	良好	内：黄褐色 外：淡赤褐色	胴部にて 1/3	
334	568	9	個別48	CL47	SD0909	弥生土器	付付甕		6.8		内外・磨滅	密	1-4	良好	内：灰褐色 外：淡赤褐色	胴部にて 1/4	
335	565	9	個別52	CI47	SD0909	弥生土器	付付甕		7.2		内：板ナデ 外：磨滅	密	1-3	良好	内：黒色 外：赤褐色	胴部にて 2/3	
336	569	9	個別47	CL48	SD0909	弥生土器	付付甕		7.1		内外・ハケ	密	1-3	良好	淡赤褐色	胴部にて 完形	
337	570	9	個別26	CH51	SD0909	弥生土器	付付甕		6.7		内外・磨滅	やや密	1-3	良好	黄褐色	胴部にて ほぼ完形	
338	572	9	個別29	CH50	SD0909	弥生土器	付付甕		8.2		内外・磨滅	密	1-3	やや軟	内：灰褐色 外：淡黄褐色	胴部にて ほぼ完形	
339	571	9	個別34	CI49	SD0909	弥生土器	付付甕		6.8		内外・磨滅	密	1-3	良好	黄白色	胴部にて 完形	
340	598	9	個別51	CL47	SD0909	弥生土器	鉢	6.7	3.0	4.8	内外・磨滅	密	1-2.8	良好	灰褐色	口縁にて 1/2	
341	600	9	個別47	CL48	SD0909	土製品	支脚	6.0			内外・磨滅	密	ほとんど含ま ない	良好	黄褐色	口縁にて 1/6	
342	601	9	個別48	CL47	SD0909	弥生土器	鉢	14.2	4.2	12.1	内：鋸合板 外：ハケ後ミガキか 外底：ケズリ	密	1-3	良好	赤褐色	ほぼ完形	
343	597	9	個別43	CK48	SD0909	弥生土器	鉢				内外・磨滅 肥手を貼り付け	密	1-4	良好	灰褐色	胴部破片	
344	599	9	個別49	CL47	SD0909	土製品	土玉				長さ3.0×幅2.9×厚 さ3.0cm、重量18.8g	密	ほとんど含ま ない	良好	灰褐色	ほぼ完形	
345	591	9	個別32	CI50	SD0909	弥生土器	高杯	23.0			内：磨滅 外：ハケ後ミガキか	密	1-4	良好	黄褐色	杯部にて 1/4	
346	587	9	27	CI50	SD0909	弥生土器	高杯	21.6			内外・磨滅	密	ほとんど含ま ない	良好	黄褐色	杯部にて 1/8	
347	589	9	27	CI50	SD0909	弥生土器	高杯	21.6			内外・磨滅	密	1	良好	灰褐色	杯部にて 1/8	
348	586	9	53	CI49	SD0909	弥生土器	高杯	18.8			内外・磨滅	密	1-3	良好	灰褐色	杯部にて 1/12	口縁の痕跡大き い
349	588	9	個別47	CL48	SD0909	弥生土器	高杯				内：ミガキ 外：磨滅	密	1-3	良好	内：黄色 外：黄褐色	杯部にて 1/12	
350	592	9	個別30	CH50	SD0909	弥生土器	高杯				内：シボリ 外：磨滅 透かし(3ヶ所)	やや密	1-3	良好	淡黄褐色	胴部にて 端部を欠く	
351	577	9	12	CL47	SD0909	弥生土器	高杯		18.4		内外・磨滅	密	1	良好	淡黄褐色	胴部にて 1/6	
352	585	9	個別28	CH51	SD0909	弥生土器	高杯				内：ナデ 外：ミガキ 透かし(3ヶ所)	密	1-3	良好	灰褐色	胴部にて 端部を欠く	
353	583	9	個別30	CH50	SD0909	弥生土器	高杯				内外・磨滅 透かし	密	1-2	良好	淡黄褐色	胴部にて 端部を欠く	
354	582	9	個別49	CL47	SD0909	弥生土器	高杯				内外・磨滅 透かし(1ヶ所)	やや粗	1-5	良好	淡赤褐色	胴部にて 端部を欠く	

Tab.3 遺物観察表 12

報告 番号	実測 番号	調査 回数	記録 番号	地区	遺構/層位	種類	器形	口径	底面 径	高さ	技法・調整の特徴	胎土 の 大きさ (mm)	焼成	色調	残存率	備考
355	580	9	個別 39	CJ49	SD0909	弥生土器	高杯				内外・磨滅	密	1	やや 軟	黄白色	脚部に 端部を欠 く
356	578	9	個別 36	CJ49	SD0909	弥生土器	高杯				内外・磨滅 透かし	密	1-3	良	黄白色	脚部にて 端部を欠 く
357	581	9	個別 31	CL50	SD0909	弥生土器	高杯				内：シボリ 外：直線文 透かし	密	1-3	良	暗褐色	脚部にて 端部を欠 く
358	579	9	個別 47	CL48	SD0909	弥生土器	高杯				内：シボリ 外：ミガキ	密	1-3	良好	暗褐色	脚部にて 端部を欠 く
359	593	9	個別 44	CK48	SD0909	弥生土器	高杯				内：シボリ 外：磨滅	密	1-3	良	淡褐色	脚部にて 端部を欠 く
360	584	9	個別 47	CL48	SD0909	弥生土器	高杯				内：磨滅 外：ミガキ 透かし	密	ほとんど 含ま ない	良好	黄褐色	脚部にて 端部を欠 く
361	594	9	個別 44	CK48	SD0909	弥生土器	高杯	8.2			内：シボリ、ハケ後ナ デカ 外：ミガキ	密	ほとんど 含ま ない	良好	淡褐色	口縁を欠 く
362	595	9	個別 50	CL47	SD0909	弥生土器	腹付				内外・磨滅 透かし(3ヶ所)	密	1-3	良	淡褐色	口縁と脚 部を欠 く
363	536	9	個別 58+ 個別 200	CL49	SD0940	弥生土器	甕	13.4			内外・磨滅	やや 密	2-6	良	黄褐色	口縁にて 2/3
364	537	9	個別 200	CL49	SD0940	弥生土器	甕	15.2			内：羽状刺突 外：磨滅	密	ほとんど 含ま ない	良	淡黄白色	口縁にて 1/4
365	542	9	197	CL48	SD0940	弥生土器	甕	17.8			内外・磨滅	やや 密	1-6	良	灰褐色	口縁にて 1/4
366	539	9	個別 57	CL48	SD0940	弥生土器	甕	20.4			内外・磨滅	密	1-4	良	灰白色	口縁にて 1/8
367	546	9	個別 53	CL48	SD0940	弥生土器	甕	14.7	5.8	24.7	内：接合痕、オサエ 外：磨滅	密	1-6	良	内：灰褐色 外：灰褐色	1/2
368	538	9	個別 58	CL49	SD0940	弥生土器	甕	7.0			内外・磨滅	密	1-3	良	内：黄白色 外：黄褐色	底部にて 1/2
369	541	9	個別 56	CL48	SD0940	弥生土器	甕	4.4			内外・磨滅	密	2-3	良	黄白色	底部にて 完形
370	543	9	個別 55+ 197	CL48	SD0940	弥生土器	甕				内外・磨滅	密	1-4	良	内：黒灰色 外：灰褐色	底部にて 1/3
371	544	9	個別 54	CL48	SD0940	弥生土器	甕	18.4			内：磨滅 外：ハケ	密	1-3	良	淡黄褐色	口縁にて 1/6
372	545	9	197	CL48	SD0940	弥生土器	台付甕	7.5			内：ハケ、ナデ 外：ハケ	密	1-3	良	黄褐色	脚内部にて 完形
373	534	9	個別 200	CL49	SD0940	弥生土器	高杯	18.8			内外・磨滅	密	2-4	良	淡黄褐色	底部にて 1/8
374	535	9	個別 200	CL49	SD0940	弥生土器	高杯	13.6			内：シボリ 外：直線 文(3段か)、ミガキ 透かし(3ヶ所)	密	1-3	良好	暗褐色	脚部にて ほぼ完形
375	540	9	個別 57	CL48	SD0940	弥生土器	高杯	15.2			内外・磨滅 透かし(3ヶ所か)	密	1-4	やや 軟	内：淡黄褐色 外：灰褐色	脚部にて 1/3
376	618	9	409	CL49	SD0964	弥生土器	甕	7.4			内：ユビオサエ 外：磨滅	密	1-2	良	内：灰白色 外：灰褐色	口縁にて 1/6
377	619	9	個別 105	CL48	SD0964	弥生土器	甕	5.9			内：ユビオサエ 外：磨滅	密	1-2.5	良好	灰白色	1/2
378	617	9	個別 104	CL48	SD0964	弥生土器	甕	4.9			内外・磨滅	やや 密	1-4	良	灰白色	底部にて 完形
379	616	9	387 +399	CL48	SD0964	弥生土器	甕	5.2			内：ハケか 外：磨滅	密	1-2	良好	明褐色	底部にて 完形
380	615	9	個別 106	CL48	SD0964	弥生土器	甕	6.8			内：ハケ後ナデ 外：ケズリ	密	1-3	良	内：黒灰色 外：黒灰～ 灰褐色	底部に 完形
381	620	9	個別 201	CM49	SD0964	石器	台石				長さ26.3×幅15.9× 厚さ2.8cm、 重量2.080g					砂岩製、表面肉 面と側縁を使用 する
382	610	9	651	CM49	SD0972	弥生土器	甕	26.2			内外・磨滅	密	1-2	良	暗赤褐色	口縁にて 1/12
383	604	9	個別 128	CM48	SD0972	弥生土器	甕	11.3			内外・磨滅	密	1	良	淡褐色	底部を欠 く
384	614	9	個別 110+ 423	CM48	SD0972	弥生土器	台付甕	10.5			内：磨滅 外：タタキないしケ ズリ(面をもつ)	密	1-3	良好	内：黄褐色 外：灰褐色 暗褐色	脚内部にて 欠くのみ
385	608	9	個別 129	CM48	SD0972	弥生土器	甕	13.6			内外・磨滅	密	ほとんど 含ま ない	良	暗褐色	口縁にて 1/4
386	609	9	個別 112	CM48	SD0972	弥生土器	甕	2.7			内外・磨滅	やや 粗	1-3	良	灰褐色	底部にて 完形
387	613	9	個別 111	CM48	SD0972	弥生土器	甕	3.6			内：磨滅 外：ハケ	密	1-2.5	良好	内：灰褐色 外：灰褐色	底部にて 完形
388	607	9	個別 128	CM48	SD0972	弥生土器	甕	15.0			内外・磨滅	やや 粗	1-3	良	灰褐色	口縁にて 1/6

Tab.3 遺物観察表 13

報告 番号	実測 番号	調査 回数	図号	地区	遺構/層位	種類	器形	口径	底径	高さ	技法・調整の特徴	粘土	胎土 の 大きさ (mm)	焼成	色調	残存率	備考
389	611	9	図例 127+ 554	CN48	SD0972	弥生土器	甕	150			内:オサエ 外:磨滅	密	1-2	良	内:黄灰色 外:黄褐色	上半部にて 1/4	388と同一個体 か
390	612	9	図例 113	CN48	SD0972	弥生土器	甕	166			内:磨滅 外:ハケカ	やや 密	1-4	良好	褐色	上半部にて 1/3	薄手
391	602	9	図例 108+ 図例 130	CN48	SD0972	弥生土器	高杯	209			内:ミガキ 外:ケズリ後ミガキ → 波文 透かし(3ヶ所)	やや 密	1-3	良	褐～ 淡黄褐色	胴部を 欠くのみ	
392	606	9	図例 128	CN48	SD0972	弥生土器	高杯	200			内外:磨滅	密	1	良好	内:褐色 外:黄褐色	杯部にて 1/12	
393	605	9	図例 109	CN48	SD0972	弥生土器	高杯	238			内外:ミガキ	密	1	良	黄褐色	杯部にて 完形	
394	603	9	図例 107	CN48	SD0972	弥生土器	高杯		13.0		内:シボリ 外:磨滅 透かし(3ヶ所)	密	1-2	やや 軟	淡黄褐色	胴部にて ほぼ完形	
395	498	9	768	CO49	SD0975	弥生土器	甕	-			内外:磨滅	密	1-2	良	黄白色	口縁にて 1/6	口縁の断面大
396	497	9	768	CO49	SD0975	弥生土器	甕	5.0			内:ハケ 外:磨滅	密	1-3	良	黒灰色	底部にて ほぼ完形	
397	496	9	768	CO49	SD0975	弥生土器	甕	3.8			内外:磨滅	密	1-2	良	内:灰黒色 外:灰褐色	底部にて 完形	
398	499	9	図例 202	CM48	SD0975	石器	し字状 石杵				長さ11.3×幅8.6× 厚さ6.2cm 重量600g足					完形	砂岩製、使用部 に赤色顔料(水 銀朱)付着
399	628	9	図例 147	CS50	SD09111 SH09104 上面焼出	弥生土器	甕	200			内外:磨滅	密	1-3	良	淡褐色	口縁にて ほぼ完形	
400	630	9	図例 153	CR52	SD09111 SH09104 上面焼出	弥生土器	甕	18.5			内:接合痕、オサエ 外:割突 口縁:割突	密	1-2	良	内:灰白～ 淡黒色 外:灰白色	上半部にて 1/3	
401	621	9	図例 150	CR51	SD09111 SH09104 上面焼出	弥生土器	甕	17.2			内外:磨滅	密	1-4	良	黄白色	口縁にて 1/6	
402	629	9	図例 149	CR51	SD09111 SH09104 上面焼出	弥生土器	甕	5.7			内外:磨滅	密	1-3	良	内:灰褐色 外:黒灰色	底部にて 完形	
403	633	9	図例 149	CR51	SD09111 SH09104 上面焼出	弥生土器	甕	6.9			内外:磨滅	やや 粗	1-3	良	暗褐色	底部にて 完形	
404	634	9	図例 152	CR51	SD09111 SH09104 上面焼出	弥生土器	甕	5.7			内:接合痕 外:接合痕、円形浮文 (1単位2個を5ヶ所)	密	1-4	良	淡黄褐色	下半部にて 完形	外面に黒痕あ り、胴部に打ち 欠きによる穿孔 あるかも
405	632	9	図例 154	CR52	SD09111 SH09104 上面焼出	弥生土器	甕	12.4	6.0	23.5	内:ナデカ 外:タタキ 口縁:凹陥(3条)	密	1-3, 5	良	淡黄褐色	完形	
406	627	9	1487	CR52	SD09111	弥生土器	甕	12.6			内外:磨滅	密	2-4	良	暗褐色	口縁にて 1/6	
407	623	9	図例 150	CR51	SD09111 SH09104 上面焼出	弥生土器	甕	13.2			内:磨滅 外:ハケ 口縁:ヨコナデ	密	ほとんど 含ま ない	良好	灰褐色	口縁にて 1/4	
408	624	9	1430	CR52	SD09111 SH09104 上面焼出 東内ベルト以南	弥生土器	甕	15.0			内外:磨滅	密	1-3	やや 軟	灰褐色	口縁にて 1/6	
409	631	9	図例 193	CR52	SD09111 SH09104 上面焼出	弥生土器	甕	11.7			内:オサエ 外:磨滅	密	1-3	良	内:黒灰色 外:褐色～ 黄褐色	1/4	鉢かも
410	625	9	1279	CP54/55	SD09111	弥生土器	高杯				内:シボリ 外:磨滅 透かし(2ヶ所)	密	1-4	良	灰褐色	胴部にて 端部を欠く	
411	622	9	1420	CR51	SD09111 SH09104 上面焼出	弥生土器	甕				内:ヨコナデ、オサエ 外:ミガキ	密	ほとんど 含ま ない	良好	暗褐色	胴部にて 1/4	貼り付け変遷を とつ、内形透かし がありそう
412	626	9	図例 242	CP56	SD09111	弥生土器	甕	14.4	11.2	14.0	内外:磨滅	密	1-5	良	灰褐色	ほぼ完形	
413	635	9	図例 144	CQ50	SD09125 SH09104 上面焼出	弥生土器	甕	6.1			内外:接合痕	密	1-3	良	灰白色	下半部にて 完形	
414	636	9	図例 194	CQ50	SD09125 SH09104 上面焼出	弥生土器	高杯				内:シボリ、オサエ 外:磨滅	密	1-2	良	暗褐色	胴部にて 端部を欠く	
415	637	9	図例 144	CQ50	SD09125 SH09104 上面焼出	弥生土器	高杯				内:シボリ、オサエ 外:磨滅	密	1-3	良	淡褐色	胴部にて 端部を欠く	
416	638	9	図例 145	CR51	SD09125 SH09104 上面焼出	弥生土器	高杯				内外:磨滅 透かし	密	1-3	良	灰白色	胴部にて 端部を欠く	
417	639	9	図例 195	CR51	SD09126 SH09104 上面焼出	弥生土器	甕	38.4			内外:磨滅 口縁:凹陥、円形浮文(1 単位3個を8ヶ所)	密	1-5	良	灰白色	口縁にて 1/4	
418	641	9	図例 151	CR51	SD09126 SH09104 上面焼出	弥生土器	甕	6.3			内外:磨滅	密	3	良	内:灰黄色 外:灰褐色	底部にて 完形	
419	640	9	図例 196	CR51	SD09126 SH09104 上面焼出	弥生土器	甕	12.0			内:磨滅 外:ミガキ、円形割突 透かし	密	1-2	良好	灰黄色	下半部にて 1/4	
420	879	10	図例 37	CJ52	SD1022	弥生土器	甕	15.6			内:オサエ 外:磨滅	密	1-2	良	淡黄褐色	口縁部にて 1/3	

Tab.3 遺物観察表 14

報告 番号	実測 番号	調査 回数	図録 番号	地区	遺構 / 層位	種類	器形	口径	底径 (mm)	高さ	技法・調整の特徴	胎土 の 大きさ (mm)	焼成	色調	残存率	備考	
421	881	10	個別 42	CJ54	SD1022	弥生土器	甕				内外・磨滅	密	1-3	良	内：黄灰色 外：淡黄褐色	胴部にて 1/4	
422	882	10	個別 42	CJ54	SD1022	弥生土器	付付置			8.0	内外・磨滅	密	1-2	良	内：黄褐色 外：黄褐色	胴部にて 1/3	
423	880	10	個別 41	CJ54	SD1022	弥生土器	付付置			8.0	内外・磨滅	やや 密	1-5	良	黄灰色	胴部にて 1/2	
424	895	10	667	CF/CG53	SD1059	弥生土器	甕	10.2			内外・磨滅	密	1	良	内：灰黒色 外：黄褐色	口縁部にて 1/6	
425	896	10	667	CF/CG53	SD1059	弥生土器	付付置			7.0	内：磨滅 外：ハケ	密	1-2	良	淡黄褐色	胴部にて 完全形	
426	897	10	679	CE52	SD1059 遺物集中部	弥生土器	付付置			7.6	内外・磨滅	やや 密	1-4	良	明褐色	胴部にて 完全形	
427	898	10	個別 34	CG53	SD1059	弥生土器	高杯				内：ハケ 外：磨滅	密	1-3	良	褐色	胴部にて 底部を欠 くのみ	
428	900	10	個別 33	CG51	SD1077	弥生土器	甕	13.2			内外・磨滅	密	3	良	黄白色	口縁にて 1/6	
429	902	10	個別 30	CG52	SD1077	弥生土器	段頸甕				内：ユビオサエ 外：磨滅	密	1-3	良	淡黄褐色	上半部にて 1/6	
430	901	10	個別 34	CG52	SD1077	弥生土器	甕	15.6			内外・磨滅	やや 密	1-2	良	黄褐色	口縁にて 1/4	
431	899	10	707	CG52	SD1077	弥生土器	甕			4.4	内：磨滅 外：ユビオサエ 外底：不調整	密	ほとんど 含まない	良好	黄灰色	底部にて 1/2	
432	904	10	767	CE47	SD1085	弥生土器	甕	15.0			内外・磨滅	密	2	良	淡黄褐色	口縁にて 1/6	
433	906	10	個別 23	CE48	SD1085	弥生土器	甕	17.0			内：磨滅 外：ハケ、直 線文、波状文	密	1-4	良	淡黄褐色	口縁にて ほぼ完全形	
434	907	10	個別 22	CE47	SD1085	弥生土器	甕				内：磨滅 外：直線文、波状文	やや 密	1-3.7	良	淡褐色	胴部にて 1/4	
435	905	10	個別 22	CE47	SD1085	弥生土器	高杯	18.8	10.0	10.6	内外・磨滅 透かし(3ヶ所)	密	1-2	良好	にぶい褐色	1/6	
436	908	10	960	CH45	SD1098	弥生土器	甕	11.8			内外・磨滅	密	ほとんど 含まない	良	黄褐色	口縁にて 1/4	
437	911	10	個別 11+ 962	CH44	SD1098	弥生土器	甕	13.8			内外・磨滅	密	1-3	良	内：黒灰色 外：黄褐色	上半部にて 1/6	
438	909	10	個別 11	CH44	SD1098	弥生土器	甕			7.4	内：ハケ 外：磨滅	密	1-2	良	淡褐色	底部にて 1/3	
439	910	10	961	CG46	SD1098	弥生土器	甕			7.0	内外・磨滅	密	1	良好	内：黄褐色 外：淡褐色	底部にて 1/2	
440	914	10	1097	CH43	SD10117 ~SD1098	弥生土器	甕	14.8			内外・磨滅	密	1-2	良	黄灰色	口縁にて 1/6	
441	913	10	852	CH48	SD1098	弥生土器	付付置			7.0	内外・磨滅	密	1-3	良	黄褐色	胴部にて 1/2	
442	912	10	個別 10+ 960	CH45	SD1098	弥生土器	高杯	21.6			内外・磨滅	密	1-3	良	淡黄褐色	杯部にて 1/4	
443	915	10	1098	CH44	SD10117 ~SD1098	弥生土器	甕			6.2	内：接合痕、オサエ 外：磨滅	密	1-4	良	黄褐色	下半部にて 1/3	
444	490	9	11	CH50/51	SD0907	山形甕	甕	14.6			内外：ロクロナデ	密	ほとんど 含まない	良好	灰色	口縁にて 1/12	内面に障灰の痕 跡あり
445	491	9	49	CH51	SD0915	弥生土器	甕			5.4	内外・磨滅	やや 密	1-4	良	黄褐色	底部にて 完全形	
446	492	9	57	CH50	SD0917	弥生土器	付付置			7.4	内：ナデ 外：ハケ後ナデ	密	1-3	良好	黄褐色	胴部にて 完全形	
447	493	9	65	CH51	SD0921	弥生土器	高杯	16.9			内：磨滅 外：ミガキ	密	ほとんど 含まない	良好	明褐色	杯部にて 1/6	
448	494	9	271	CH48	SD0945	土師器	甕	9.6		1.1	内：磨滅 外：ヨコナデ、ユビオ サエ	密	ほとんど 含まない	良	黄白色	1/6	
449	495	9	377	CH52	SD0961	須恵器	杯蓋	13.7			内外：ロクロナデ 大井・回転ヘリ削り(方 向不明)	密	1-2	良好	暗黄灰色	口縁にて 1/8	
450	500	9	699	CH49	SD0979	弥生土器	高杯				内：シボリ 外：直線文(3段) 透かし(1ヶ所)	密	1-3	良	黄褐色	胴部にて 底部を欠 く	
451	501	9	739	CH50	SD0981	石磨	砥石				現存長6.6×幅3.8× 厚さ2.1cm。 重さ45.9g	密	1-8	良	淡褐色	杯部にて 1/6	
452	504	9	1032	CP/CG53	SD09100	弥生土器	高杯	15.0			内外・磨滅	密	1-8	良	淡褐色	杯部にて 1/6	
453	502	9	1032	CP/CG53	SD09100	弥生土器	付付置			8.2	内：ナデ 外：オサエ、ハケ	密	1-4	やや 軟	明褐色	胴部にて 完全形	
454	503	9	1032	CP/CG53	SD09100	弥生土器	付付置			7.0	内外・磨滅	密	1-3	良	内：黒色 外：灰黒～ 黄褐色	胴部にて ほぼ完全形	
455	505	9	1159	C055	SD09101	弥生土器	甕	17.0			内外：ミガキ	密	ほとんど 含まない	良好	淡黄褐色	口縁にて 1/6	
456	506	9	1312	CR52	SD09101	弥生土器	甕			3.2	内：ハケ 外：磨滅	密	1-6	良	内：黒褐色 外：黄褐色	底部にて 完全形	
457	507	9	個別 136	C054	SD09103	弥生土器	甕	16.0			内外・磨滅	やや 密	1-5	良	内：黄褐色 外：黄褐色	口縁にて ほぼ完全形	

Tab.3 遺物観察表 15

報告 番号	実測 番号	調査 回数	登録 番号	地区	遺構/層位	種類	器形	口径	底径	器高	技法・調整の特徴	胎土 の 大きさ (mm)	焼成	色調	残存率	備考		
458	510	9	1125	CR51	SD09106	弥生土器	高杯	14.8			内外・磨滅	密	1-2	良	灰白色	杯底にて1/8		
459	508	9	1156	CR52	SD09106	弥生土器	台付甕		6.8		内外・磨滅	密	1-3	良	褐色	脚部にてほぼ完形		
460	509	9	1125	CR51	SD09106	弥生土器	甕		4.0		内外・磨滅	密	1-2	良	灰褐色	底部にて完形	外面に黒痕あり	
461	511	9	1552	CO55	SD09119	弥生土器	甕	18.4			内外・磨滅	密	1-4	良	黄白色	口縁にて1/6		
462	876	10	5	CL53/54 CK55	SD1002	須恵器	高杯				内外・ロクロナデ	密	ほとんど含まない	良好	青灰色	脚部にて端部を欠くのみ		
463	877	10	5	CL53/54 CK55	SD1002	山形碗	碗				内外・ロクロナデ 外底:糸切り	密	1	良好	灰色	底部にて完形	高台に輪痕あり	
464	878	10	7	CL53/54 CK55	SD1004	須恵器	釘か				残存径5.4×残存幅1.9 ×残存厚1.8cm, 重量10.7g					下半分のみ	本来の断面は四角形	
465	883	10	292	CJ53	SD1023	弥生土器	高杯	19.6			内外・磨滅	密	ほとんど含まない	良	灰褐色	口縁部にて1/12		
466	884	10	292	CJ53	SD1023	弥生土器	高杯		15.4		内外・磨滅	密	ほとんど含まない	やや軟	淡黄褐色	脚部にて1/6		
467	885	10	281	CE52	SD1025	弥生土器	甕		3.6		内外・磨滅	密	1-2	良	黄白色	底部にて完形		
468	886	10	381	CH53	SD1036	弥生土器	甕	11.5			口縁:ヨコナデ	密	ほとんど含まない	良好	内:黄褐色 外:黒褐色	口縁部にて1/6		
469	887	10	制測 36	CH52	SD1037	弥生土器	甕				内:オサエ 外:磨滅	密	1-4	やや軟	淡黄褐色	上半部にて1/6		
470	888	10	511	CC53	SD1041	弥生土器	甕	13.0			内外・磨滅	密	1-2	良	内:暗褐色 外:赤褐色	口縁部にて1/8		
471	889	10	制測 39	CC52	SD1048	山形碗	碗	6.9			内外・ロクロナデ 外底:糸切り	密	1-2	良好	灰色	底部にて完形	内面は使用によりよく磨滅する。高台には輪痕が残る	
472	891	10	596	CD50	SD1049	弥生土器	甕		7.0		内外・磨滅	やや密	1-3	良	黄白色	底部にて完形		
473	890	10	597	CD51	SD1049	石器	砥石				残存径8.4×幅3.6× 残存厚3.1cm, 重量150.4g					1/2	チャート製か、1面のみの使用	
474	892	10	532	CC53	SD1052	弥生土器	台付甕		8.0		内外・磨滅	やや密	1-2	良	内:黄褐色 外:灰褐色	脚部にて1/4		
475	894	10	889	CE/CF46	SD1054	山形碗	碗				内:ロクロナデ、不整 方向ナデ 外:ロクロ ナデ 外底:糸切り	密	1	良好	灰色	底部にて1/4		
476	893	10	759	CE49/50	SD1054	瓦	丸瓦				点:ヨコナデ 凹:布目	密	1-5	良好	暗赤褐色	一部のみ		
477	903	10	760	CE48	SD1083	弥生土器	台付甕		6.0		内外・磨滅	密	1-3	良	内:灰褐色 外:淡赤褐色	脚部にて完形		
478	916	10	912	CF/CG46	SD10105	山形碗	碗	17.6			内外・ロクロナデ	密	ほとんど含まない	良好	灰色	口縁にて1/12		
479	917	10	1152	CF41/42	SD10134	須恵器	高杯		8.4		内外・ロクロナデ 方 形透かし(径3ヶ所)	密	1-3	良好	暗青灰色	脚部にて1/3		
480	456	9	制測 2	CH51	SX0905 1段目	山形碗	碗	16.8	7.8	5.3	内外・ロクロナデ 内:陰気痕あり 外底:糸切り	密	1-2	良好	灰白色	ほぼ完形		
481	457	9	制測 61	CH51	SX0905 2段目	山形碗	碗	17.4	8.4	4.9	内外・ロクロナデ 内:陰気痕あり	密		ほとんど含まない	良好	灰白色	1/4	
482	458	9	224	CH51	SX0905 3段目	山形碗	碗	17.2			内外・ロクロナデ	密		ほとんど含まない	良好	灰白色	口縁にて1/8	
483	459	9	制測 3	CH51	SX0905 1段目	山形碗	碗		7.4		内外・ロクロナデ 外底:糸切り	密	1-2	良好	灰白色	底部にて完形		
484	460	9	制測 5	CH51	SX0905 1段目	山形碗	碗		7.5		内外・ロクロナデ 内:不整方向ナデ 外底:ナデ	密		ほとんど含まない	良好	灰白色	底部にて完形	
485	461	9	制測 6	CH51	SX0905 1段目	山形碗	碗		8.4		内外・ロクロナデ 内:陰気痕あり 外:糸切り	密		ほとんど含まない	良好	灰白色	底部にて1/2	内面は使用によりよく磨滅する
486	462	9	制測 4	CH51	SX0905 1段目	白磁	碗		7.2		内外・ロクロナデ 内:磨滅	密	ほとんど含まない	良好	素地:白色 釉:白灰色	口縁端部を欠くのみ		
487	455	9	804	CL51	SX0958 3段目継輪出中	陶器(雲 母焼)	西鉢	23.4			内:ロクロナデ 外:ナデないしケズリ	密		ほとんど含まない	良好	暗褐色	口縁にて1/12	
488	454	9	1379	CL51	SX0958 5段目	陶器(雲 母焼)	西鉢	30.0			内:ロクロナデ 外:ナデないしケズリ	密		ほとんど含まない	良好	明褐色	口縁にて1/6	内面は使用によりよく磨滅する
489	937	10	312	CG54	SX1026 北西 埋土	須恵器	杯身	10.7			口縁:ロクロナデ	密		ほとんど含まない	良好	灰色	口縁にて1/6	
490	927	10	制測 1	CH54	SX1026	須恵器	杯身	12.2		3.6	内~口縁:ロクロナデ 外底:回転へろ削り(時 計回り)	密	1-2	良好	灰青色	1/4		
491	938	10	374	CG/CH54	SX1026 北西	須恵器	杯蓋	11.0			口縁:ロクロナデ	密	1	良	灰青色	口縁にて1/8		

Tab.3 遺物観察表 16

報告 番号	実測 番号	調査 回数	図録 番号	地区	遺構 / 層位	種類	器形	口径	底径	高さ	技法・調整の特徴	胎土	胎粒の 大きさ (mm)	焼成	色調	現存率	備考
492	943	10	524	CH54	SX1026 埋土 東へルト掘土	甕器	杯蓋	12.7			内外:ロクロナデ 外:回転へう割り(時計 回り)	密	ほとんど 含ま ない	良好	黒青色	口縁にて 1/6	
493	934	10	309	CH/C154	SX1026 北東	甕器	杯蓋	12.8		4.0	内外:ロクロナデ 天井:回転へう割り(方 向不明)	密	ほとん ど含 ま ない	良好	灰色	1/6	重ね焼きの痕跡 あり
494	935	10	310	CH/C1- 54/55	SX1026	甕器	杯蓋	13.6		4.0	内外:ロクロナデ 天井:回転へう割り(時 計回り)	密	1	良好	青灰色	1/2	
495	931	10	個測 6	CH54	SX1026	甕器	高杯蓋	14.4			内~口縁:ロクロナデ 天井:回転へう割り(時 計回り)	密	1-2	良	灰青色	1/2	
496	933	10	309	CH/C154	SX1026 北東	甕器	高杯蓋				内~口縁:ロクロナデ 外:カキ目 天井:沈線、刺点文	密	1	良好	内:暗青灰色 外:青灰色	1/4	
497	942	10	375	CH/C154	SX1026 北東	甕器	高杯				内外:ロクロナデ 内:不整方向ナデ	密	1	良好	灰青色	脚部にて 端部を欠 くのみ	
498	939	10	374	CG/CH54	SX1026 北西	甕器	高杯		10.8		内外:ロクロナデ 円形穿孔	密	ほとん ど含 ま ない	良好	暗青灰色	脚部にて 1/4	外面に凹痕あり
499	940	10	374	CG/CH54	SX1026 北西	甕器	甕	20.6			口縁:ロクロナデ 内:同心円文 外:タタキ	密	ほとん ど含 ま ない	良好	灰色	口縁にて 1/8	
500	932	10	個測 38	CH54	SX1026	甕器	ハソウ				内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、沈線、 カキ目	密	1-2	良好	暗青灰色	1/4	
501	930	10	個測 4	CG54	SX1026	甕器	甕				内:ロクロナ、押し出し 外:ロクロナデ、 タタキ	密	1	良好	灰青色	底部にて 完形	
502	929	10	個測 3	CH54	SX1026	甕器	甕	13.2		10.0	内:不整方向ナデ 口縁:ロクロナデ 外底:回転へう割り(時 計回り)	密	1-3	良好	灰青色	1/2	
503	928	10	個測 2	CH54	SX1026	土師器	高杯		9.4		内外:磨滅	密	1	良	淡黄褐色	脚部にて ほぼ完 形	
504	936	10	310	CH/C1- 54/55	SX1026	土師器	甕	14.8			内外:磨滅	密	1-3	良	淡赤褐色	口縁にて 1/4	
505	941	10	374	CG/CH54	SX1026 北西	土師器	甕				内外:磨滅	密	1	良好	淡黄褐色 ～ 淡赤褐色	底部にて 完形	丸底の甕
506	479	9	個測 68	CJ50	SK0952	弥生土器	甕	4.9	3.2	8.0	内:磨滅 外:円形刺突	密	1-3	良	黄白色	ほぼ完形	
507	481	9	個測 66	CJ50	SK0952	弥生土器	甕		4.7		内:磨滅 外:ミガキ	密	1	良好	内:灰褐色 外:灰褐色	底部にて 完形	
508	480	9	179	CJ50	SK0938	弥生土器	甕		7.4		内:ハケ 外:ミガキ	密	1-2	良	内:黒褐色 外:灰褐色	底部にて 1/2	ハケの間隙が広い
509	476	9	個測 65	CJ50	SK0952	弥生土器	甕	18.8			内:磨滅 外:ハケ、直線文	密	1-3	良	灰褐色	口縁にて 1/3	
510	477	9	個測 72	CJ50	SK0952	弥生土器	甕	4.6			内外:磨滅	密	ほとん ど含 ま ない	良	内:灰褐色 外:灰褐色	底部にて 1/2	
511	473	9	個測 66+ 個測 70	CJ50	SK0952	弥生土器	高杯	27.4			内外:磨滅	密	ほとん ど含 ま ない	良	黄白色	杯部にて 1/6	
512	475	9	個測 73	CJ50	SK0952	弥生土器	高杯		10.6		内:シボリ 外:磨滅 透かし(ウツ所)	やや 粗	1-3	良	黄白色	脚部にて 完形	
513	474	9	個測 72+ 288 +350	CJ50	SK0952	弥生土器	脚付甕				内外:磨滅 透かし(ウツ所)	密	1	良	灰褐色	脚部にて 端部を欠 く	
514	478	9	288	CJ50	SK0952	弥生土器	鉢	12.0			内外:ミガキ	密	ほとん ど含 ま ない	良好	灰褐色	口縁にて 1/4	
515	469	9	1089	CR51	SK09110	弥生土器	甕	30.6			内:ミガキか 外:ヨコナデ 口縁:円形刺突	密	ほとん ど含 ま ない	良好	灰褐色	口縁にて 1/8	赤彩するようだ が、不詳
516	470	9	1089	CR51	SK09110	弥生土器	甕	20.0			内:刺突か 外:磨滅	密	1-4	やや 粗	明褐色	口縁にて 1/4	
517	471	9	1089	CR51	SK09110	弥生土器	甕	15.0			内:磨滅 外:ヨコナデ 口縁:刺突、円形刺突	密	1-3	良好	淡黄褐色	口縁にて 1/4	
518	468	9	1089	CR51	SK09110	弥生土器	甕		3.4		内外:磨滅	やや 密	1-3	良	内:灰褐色 外:黒褐色	底部にて 完形	
519	472	9	1171	CR51	SK09110 西丘遺	弥生土器	甕	10.4			内:磨滅 外:刺突か	密	1-3	良	灰褐色	口縁にて 1/6	
520	465	9	1089	CR51	SK09110	弥生土器	甕	15.0			内:磨滅 外:刺突、直線文	密	1-3	やや 粗	灰褐色	口縁にて 1/2	
521	466	9	1089	CR51	SK09110	弥生土器	甕	14.0			内:磨滅 外:ハケ	密	1-5	良	灰褐色	口縁にて 1/4	外面に黒痕あり
522	467	9	1089	CR51	SK09110	弥生土器	甕		5.0		内外:磨滅 外:ハケ	密	1-2	良好	灰褐色	底部にて 1/2	
523	463	9	1089	CR51	SK09110	弥生土器	高杯	26.6			内外:磨滅	密	1-3	良	黄白色	杯部にて 1/2	
524	464	9	1089	CR51	SK09110	弥生土器	脚付甕		6.6		内:オサエ 外:磨滅	密	1-2	良	黄白色	脚部にて ほぼ完 形	
525	441	9	1428	CN50	SK0977 北平	縄文土器	深鉢	36.0			内:ナデ、接合痕 外:無文	密	1-5.8	良好	灰褐色	口縁にて 1/8	537 と同一個体 か

Tab.3 遺物観察表 17

報告 番号	実測 番号	調査 回数	登録 番号	地区	遺構 / 層位	種類	器形	口径	底径	高さ	技法・調整の特徴	胎土	胎粒の 大きさ (mm)	地味	色調	残存率	備考	
526	447	9	691	CN50	SK0977 南平	縄文土器	深鉢				内外: 磨滅	密	1.5	良	淡褐色	製部破片		
527	451	9	1428	CN50	SK0977 北平	縄文土器	深鉢				内: ナデ、オサエカ 外: 無文	やや密	1.6	良	褐色	口縁部破片	断面の凸凹が激しい	
528	446	9	691	CN50	SK0977 南平	縄文土器	深鉢				内: ナデ、オサエカ 外: 無文	密	1.3	良	灰褐色	口縁部破片	536 と同一個体か	
529	444	9	1428	CN50	SK0977 北平	縄文土器	深鉢				内: ナデ、オサエカ 外: 無文 口縁部: 面取り	密	1.4	良	内: 黄灰色 外: 灰褐色	口縁部破片	525 や 537 と同一個体か	
530	448	9	691	CN50	SK0977 南平	縄文土器	深鉢				内外: 磨滅	密	1.3	良	内: 黄灰色 外: 灰褐色	口縁部破片		
531	443	9	691	CN50	SK0977 南平	縄文土器	深鉢				内: ナデ、オサエカ 外: 無文 口縁: 波状	密	1.4	良	内: 黄灰色 外: 灰褐色	口縁部破片		
532	449	9	691	CN50	SK0977 南平	縄文土器	深鉢				内: ナデ 外: 無文	密	1.3	良	灰褐色	口縁部破片	525 や 537 と同一個体か	
533	452	9	1428	CN50	SK0977 北平	縄文土器	深鉢				内外: 磨滅 口縁: 波状	やや密	1.6	良	褐色	口縁部破片		
534	453	9	1428	CN50	SK0977 北平	縄文土器	深鉢				内: ナデ 外: 沈線、無文	やや密	1.4	やや軟	暗褐色	口縁部破片		
535	450	9	691	CN50	SK0977 南平	縄文土器	深鉢				内: ナデ 外: 沈線、無文	密	1.2	良	灰褐色	製部破片		
536	445	9	691	CN50	SK0977 南平	縄文土器	深鉢				内外: 磨滅	やや密	1.4	良	褐色	製部破片	528 と同一個体か	
537	442	9	1428	CN50	SK0977 北平	縄文土器	深鉢				内: ナデ 外: 無文 口縁部: 面取り	密	1.5	良	内: 灰褐色 外: 灰褐色	製部破片	525 と同一個体か	
538	483	9	1031	CR50	SK09105	弥生土器	甕	16.2			内外: 磨滅 口縁: 修整文(口単位4割)	密	1.2	やや軟	明褐色	底部にて	厚文は4リ角の1/4	
539	482	9	1031	CR50	SK09105	弥生土器	甕				内: ハケ 外: ミガキ	密	1.2	良好	褐色	底部にて	1/3	
540	484	9	1127	CR50	SK09113	弥生土器	甕	31.6			内外: 磨滅	密	1.3	良	内: 灰褐色 外: 明褐色	口縁にて	1/8	
541	486	9	1173	CN54	SK09115	弥生土器	甕	16.0			内外: 磨滅	密	1	良	淡褐色	口縁にて	1/6	
542	489	9	1351	CN54	SK09105	弥生土器	甕	8.5			内: 接合痕、ユビオサエ 外: ハケ	密	1.3	良好	内: 灰褐色 外: 灰褐色	口縁にて	1/4	口縁は縦口縁で、もう1段上があるかも。粘土質の急な上げが顕著
543	488	9	1351	CN54	SK09115	弥生土器	高杯				内外: 磨滅	密	1.2	良	淡黄褐色	杯部にて	1/8	
544	487	9	1198	CN54	SK09115	弥生土器	高杯		10.0		内: シボリ 外: ミガキ	密	1.3	良好	灰褐色	脚部にて 断面を欠く	脚付面かも	
545	485	9	1551	CO57	SK09137(カラン)	弥生土器	甕	4.5			内: 磨滅 外: ハケ	密	ほとんど含まない	良好	淡灰黄色	底部にて 完形	底部の接合面はよく磨滅する	
546	926	10	316	CR55	SK1028	土師器	甕	17.0			内: 磨滅 外: ハケ	密	1.2	良	灰褐色 外: 淡褐色	口縁にて	1/8	半田型製
547	921	10	746	北94	SK1047	弥生土器	甕	8.0			内: ハケ 外: 磨滅	密	1.3	良	内: 灰褐色 外: 灰褐色	底部にて	1/4	
548	922	10	746	北94	SK1047	陶器	甕	10.0			内外: ロクロナデ 断面: 灰色	密	2.3	良好	暗褐色	口縁にて	1/6	口縁から外面にかけて自然釉がかかる
549	918	10	745	CE/CF50	SK1081	弥生土器	甕	4.4			内: ハケ 外: 磨滅	密	3	良	黄灰色	底部にて 完形		
550	919	10	745	CE/CF50	SK1081	弥生土器	甕	5.0			内: ハケ 外: 磨滅	密	1.2	良	淡褐色	底部にて	1/2	
551	920	10	745	CE/CF50	SK1081	弥生土器	甕	4.6			内外: ハケ	密	ほとんど含まない	良好	内: 灰褐色 外: 灰褐色	底部にて	1/2	
552	923	10	1208	CC45	SK10143 南平 0-15cm	須恵器	杯蓋	11.8	4.7		内外: ロクロナデ 外: 回転へつ削り(時評あり)	密	1.3	良好	灰色	1/6		
553	924	10	1207	CC44	SK10143 北平 下層	弥生土器	台付甕	7.5			内外: 磨滅	密	1.4	良	灰褐色	脚部にて 完形		
554	925	10	1207	CC44	SK10143 北平 下層	弥生土器	高杯	18.2			内外: 磨滅	密	1.2	良	淡赤褐色	脚部にて	1/4	
555	648	9	772	CJ50	SK09145 SK09145 下部 pt	弥生土器	高杯	27.8			内外: 磨滅	密	1.2	良	明褐色	脚部にて	口縁の断面大きい	
556	649	9	1198	CJ50	SK09146 P09116	弥生土器	甕	14.0			内外: 磨滅	密	1.2	良	灰褐色	口縁にて 完形		
557	650	9	312	CJ50	SK09146 P09166	弥生土器	甕	3.2			内外: 磨滅	密	1.2	良	灰褐色	底部にて 完形		
558	651	9	359	CR50	SK09148 P09194	弥生土器	高杯	29.2			内外: 磨滅	密	1.3	良	灰褐色	杯部にて	1/6	
559	652	9	460	CM49	SK09149 P09234	土師器	甕	17.0			内: ナデ 外: ハケ 口縁: ヨコナデ	密	ほとんど含まない	良	淡褐色	口縁にて	1/4	大部分が割壊しているが、内外とも化粧土が塗ってありそう
560	653	9	1198	CM49	SK09149 P09234	土師器	台付甕	8.8			内: オサエ 外: ユビオサエ、板ナデ	やや密	1.5	良	明黄褐色	脚部にて 完形		
561	654	9	1198	CM49	SK09149 P09234	弥生土器	高杯				内: シボリ 外: ミガキ、直線文 (布紋上)	密	1.3	良好	淡褐色	脚部にて 断面を欠く		
562	646	9	942	CP52	SK09126 P09576	須恵器	高杯	8.4			内: ロクロナデ 外: カナ目 方形通かし	密	ほとんど含まない	良好	暗青灰色	脚部にて	1/6	
563	647	9	1716	CP52	SK09126 遺のト P09576	須恵器	甕				内: ナデ 外: タタキ	密	1	良好	内: 灰白色 外: 灰色	製部破片		

Tab.3 遺物観察表 18

報告番号	実測番号	調査年度	図録番号	地区	遺構/層位	種類	器形	口径	底径	高さ	技法・調整の特徴	粘土	移動の大きさ(mm)	焼成	色調	残存率	備考
564	643	9	1722	CP52	SB09127 溝口P09631	甕	杯蓋	14.8			内外: ロクロナデ 天井: 回転ヘラ削り (時計回り)	密	1-2	良好	灰青色	1/3	
565	644	9	1008	CP52	SB09127 P09631	甕	杯蓋				内外: ロクロナデ 天井: 回転ヘラ削り (時計回り)	密	1-3	良好	灰青色	つまみ部分のみ	
566	645	9	1358	CQ52	SB09127 P09682 ベルト重出	土師器	甕	13.2			内外: 磨滅 口縁: ココナデ	密	1-2	良	黄灰色	口縁にて1/6	宇田型甕
567	642	9	1245	CO54	SB09128 P09720	甕	杯蓋	13.0			内外: ロクロナデ	密	ほとんど含まない	良好	暗青灰色	口縁にて1/3	
568	660	9	116	CI51	P0953	土師器	鉢				外: ナデ, オサエ	密	1	良好	黄褐色	把手部分のみ	
569	867	10	1060	CH42	SB10123 P10716	土師器	宇田型甕	13.0			内外: 磨滅 外: ハケ	密	1	良	淡黄褐色	口縁部にて1/8	
570	874	10	1267	CJ40	SB10155 P10830	甕	杯蓋	10.6			内~口縁: ロクロナデ 天井: 回転ヘラ削り (反時計回り)	密	2	良好	青灰色	1/6	
571	875	10	1267	CJ40	SB10155 P10830	ミニチュア土器	鉢形	12.8			内外: 磨滅	密	ほとんど含まない	良	淡黄褐色	口縁部にて1/6	
572	830	10	32	CM57	SB09157 P1022	甕	台付甕	7.3			内: シボリ 外: ハケ	密	1-2	良好	細褐色	胴上部にて完成	
573	832	10	252	CI53	SB10162 P10215	甕	甕	4.0			内外: 磨滅	密	2-4	やや軟	淡黄褐色	底部にて完成	
574	702	9	1536	CN55	SB09156 P09963	土師器	甕	14.0			内: 磨滅 外: ハケ	密	1-3	良	灰褐色	口縁にて1/3	
575	831	10	249	CK53	SB10161 P10212	甕	鉢	22.4			内外: 磨滅	密	1-3	良	黄褐色	口縁部にて1/2	
576	656	9	39	CJ48	P0906	甕	甕	12.6			内外: 磨滅	密	1-3	良	淡褐色	口縁にて1/6	
577	657	9	92	CI49	P0929 SH0903 上面焼出	甕	甕	6.0			内外: 磨滅	密	1-2	良	内: 黒灰色 外: 灰褐色~黒灰色	底部にて1/3	
578	658	9	80	CI51	P0964 SH0918 内	甕	甕	7.8		12.4	内外: 磨滅	やや密	1-3	良好	灰褐色	完成	
579	659	9	80	CI51	P0964 SH0918 内	甕	甕	8.8			内: 接合痕, ユビオサエ 外: 磨滅	密	ほとんど含まない	良	黄白色	底部を欠くのみ	
580	661	9	133	CI51	P0966 SH0918 内	甕	杯蓋	11.3			内外: ロクロナデ 天井: 回転ヘラ削り (方向不明)	密	ほとんど含まない	良好	灰色	口縁にて1/8	
581	662	9	134	CI52	P0967	甕	台付甕	7.4			内: ナデ 外: ハケ, ココナデ	密	1-3	良好	赤褐色	胴上部にて1/4	
582	663	9	150	CJ48	P0984	甕	甕	7.0			内外: 磨滅	やや密	1-3	良	灰褐色~黒灰色	底部にて1/2	
583	664	9	158	CJ49	P0985	甕	甕	6.0			内外: 磨滅	密	1-2	良	内: 黄白色 外: 黒灰色	底部にて完成	
584	668	9	256	CK48	P09143	甕	甕	6.0			内: ナデ 外: 磨滅	密	1-2	良	褐色	口縁にて1/3	甕蓋
585	665	9	162	CH50	P0990	甕	甕	17.2			内外: 磨滅	密	1-2	良	黄褐色	口縁にて1/6	
586	666	9	162	CH50	P0990	甕	甕	8.0			内外: 磨滅	密	1-3	やや軟	淡褐色	底部にて1/4	
587	667	9	243	CH50	P09130 SH0918/19 内	甕	甕	14.0			内外: 磨滅	やや密	1-4	良	黄褐色	口縁にて1/6	
588	672	9	337	CL48	P09181 SH0941 内	甕	甕	16.0			内: 磨滅 外: ハケ	やや粗	1-3	良	淡褐色	口縁にて1/6	
589	669	9	305	CK51	P09158 SH0930/31/32 内	甕	甕	3.7			内外: 磨滅 外: ハケ	やや粗	1	良	淡褐色	底部にて1/6	
590	670	9	305	CK51	P09158 SH0930/31/32 内	甕	高杯	33.2			内外: 磨滅	密	1-3	良好	灰褐色	杯部にて1/12	
591	671	9	323	CK48	P09171 SH0941 内	甕	甕	15.6			内: 磨滅 外: ミガキ 口縁: 磨滅	密	1-3	良好	淡褐色	口縁にて1/3	
592	673	9	323	CK48	P09171 SH0941 内	甕	高杯	26.0			内外: 磨滅	密	1	良	淡褐色	杯部にて1/8	
593	677	9	446	CM48	P09221 SH0941 内	甕	高杯				内: 磨滅 外: ハケ	密	1-3	良	内: 黄白色 外: 淡褐色	胴部にて1/8	赤彩の痕跡あり
594	674	9	434	CL49	P09208 SH0941 内	石器	砥石				長さ14.9×幅5.4×厚さ3.3cm, 重量300g					元形	砥石若装
595	675	9	435	CL49	P09209 SH0941 内	土師器	高杯	13.2			内外: 磨滅	密	ほとんど含まない	良	赤褐色	杯部にて1/4	
596	676	9	442	CM49	P09216 SH0941 内	甕	甕	5.4			内外: 磨滅	密	1-6	良	内: 灰褐色 外: 灰褐色	底部にて完成	
597	679	9	492	CL51	P09265 SH0947 上面焼出	瓦	平瓦				内: 磨滅 凸: タタキ	密	1-2	良	淡褐色	破片	
598	678	9	490	CL51	P09263 SH0947 上面焼出	瓦	平瓦				内: 磨滅 凸: タタキ	密	1	良	淡褐色	破片	
599	680	9	80	CL52	P09274	甕	甕				内: シボリ 外: 磨滅	密	ほとんど含まない	良好	明褐色	口縁と胴部を欠く	

Tab.3 遺物観察表 19

報告 番号	実測 番号	調査 回数	登録 番号	地区	遺構 / 層位	種類	器形	口径	底径	高さ	技法・調整の特徴	粘土	移動の 大きさ (mm)	焼成	色調	残存率	備考	
600	681	9	532	CO52	P09302 SH0962 内	甕器	甕	22.8			内外・タタキ 口縁: ロウロナデ	密	1	良好	灰白色	口縁にて 1/4		
601	683	9	543	CM50	P09313	弥生土器	高杯	27.6			内外・磨滅	密	1	良	淡褐色	底部にて 1/12		
602	682	9	543	CM50	P09313	弥生土器	高杯		7.4		内外・磨滅 脚部部: 割突 (1 単位 2 個が 4 ヶ所)	やや粗	1.3	良	灰褐色	脚部にて ほぼ完了		
603	684	9	制測 81	CO53	P09320 SH0962 内	弥生土器	甕	12.8			内外・磨滅	やや粗	1.5	良	黄白色	口縁にて 完了		
604	685	9	562	CK52	P09323	弥生土器	甕	19.5			内外・磨滅	密	1	良	淡褐色	口縁にて 1/6		
605	686	9	590	CM48	P09350 SH0966 内	弥生土器	甕	16.2			内外・磨滅	密	1.2	良	灰褐色	口縁にて 1/6	人地窓となり高 杯かも	
606	687	9	661	CL52	P09400 SH0974 内	弥生土器	高杯	15.6			内外・磨滅	密	1.3	良	淡褐色	口縁にて 1/8	通口縁窓にな るか	
607	688	9	895	CR49	P09546	甕器	刀・削 か				残存長 8.1 × 残存幅 2.8 × 厚さ 1.2cm、 重量 35.3 g					破片	断面は菱形のよ う、目釘穴ある かも	
608	689	9	999	CR52	P09622 SH09104 上面焼出	土師器	鉢				内: ナデ 外: オサエ	密	1.2	良	淡黄褐色	底部部分 のみ		
609	690	9	1039	CQ50	P09655	弥生土器	高杯	21.6			内外・磨滅	密	1.2	良	黄褐色	杯部にて 1/8		
610	691	9	1044	CR50	P09660 SH09104 上面焼出	弥生土器	甕				内外・磨滅 貼り付け突部	密	1.2	良	内: 淡褐色 外: 黄褐色	底部にて 1/4		
611	692	9	1076	CR53	P09698 SH0997 内	弥生土器	付付甕		7.0		内外・磨滅	密	1.2	良	淡赤褐色	脚部にて 1/2		
612	693	9	1108	CR51	P09714	弥生土器	甕	22.8			内外・磨滅	やや粗	1.3	良	灰褐色	口縁にて 1/8		
613	694	9	1134	CS52	P09729	弥生土器	甕	19.2			内外・磨滅	密	ほとんど 含まない	1.3	良	淡褐色	口縁にて 1/4	
614	695	9	1192	CR51	P09762 SX09113 内	弥生土器	甕		6.1		内外・磨滅	密	1.3	やや粗	淡黄褐色	底部にて 完了		
615	696	9	1198	CR51	P09768 SH09104 上面焼出	弥生土器	甕		6.0		内外・磨滅	密	1.3	良	内: 灰白色 外: 淡黄褐色	底部にて 1/2	底部に穿孔ある かも	
616	655	9	1238	CN54	SA09155 P09813	弥生土器	甕	11.8			内外・磨滅 口縁: 削突	やや粗	1.3	良	明褐色	口縁にて 1/6		
617	698	9	1277	CQ55	P09849	弥生土器	甕	12.8			内外・磨滅 口縁: 円形浮文	密	1.2	良	灰褐色	口縁にて 1/6		
618	700	9	制測 146	CR51	P09912 SH09104 上面焼出	弥生土器	高杯				内: シボリ 外: 磨滅 通かし (3 ヶ所)	密	1.4	良	淡黄褐色	脚部にて 底部を欠く		
619	699	9	制測 146	CR51	P09912 SH09104 上面焼出	弥生土器	高杯				内外・磨滅	密	1.3、7	良	淡黄褐色	脚部にて 底部を欠く		
620	701	9	1527	CM55	P09953 SH09135 上面焼出	弥生土器	甕		7.6		内外・磨滅	密	1.3	良	内: 黒灰色 外: 灰褐色	底部にて 1/2		
621	697	9	1265	CQ54	P09837	土師器	甕	14.0			内外・磨滅	密	ほとんど 含まない	1.3	良	淡褐色	口縁にて 1/8	
622	703	9	1567	CN56	P09982	弥生土器	付付甕		6.8		内外・磨滅	密	1.6	良	内: 灰褐色 外: 赤褐色	脚部にて 完了		
623	706	9	1547	CN55	P09962 SH09135 上面焼出	弥生土器	甕		5.5		内外・磨滅	密	1.2	良	内: 灰褐色 外: 暗赤褐色	底部にて 完了	ミニチュア土器 かも	
624	705	9	1584	CO55	P09999	弥生土器	高杯				内: シボリ 外: 磨滅	密	1.3	良	灰褐色	脚部にて 底部を欠く		
625	704	9	1599	CN55	P091014 SH09135/136 内	弥生土器	高杯		15.0		内外・磨滅	密	1.3	良	淡黄褐色	脚部部にて 1/6		
626	833	10	11	CM53	P1001	甕器	鉢蓋	11.2			内・口縁: ロウロナデ 天井: 凹陥ヘラ削り (時計回り)	密	1	良好	灰白色	口縁部にて 1/8	天井部から口縁 外面にかけて重 ね様子の痕跡あり	
627	835	10	96	CM53	P1086	石器	磨製石 斧				残存長 2.8 × 残存幅 2.6 × 残存厚 0.6cm、 重量 7.8 g					刃部付着 の破片	ハイアロクラ スタイド製	
628	834	10	99	CM53	P1089	弥生土器	甕	11.5			内外・磨滅 外: ハケ	密	2.3	良	淡黄褐色	口縁部にて 1/6	第 9 次の P09 917 と同一ビ ット	
629	837	10	320	CC55	P10268	弥生土器	付付甕		6.6		内外・磨滅	密	1.3	良	黄白色	脚部にて ほぼ完了		
630	836	10	139	CL52	P10123 SH1014 上面焼出	灰釉陶器	瓶	17.8		5.3	内外・ロウロナデ 内: 灰釉施釉	密	1	良好	内外・灰色 釉: 薄黄灰色	1/3	口縁外面の施釉 は不明瞭	
631	838	10	330	CC55	P10273	弥生土器	甕	14.6			内外・磨滅	密	1.4	良	淡黄褐色	口縁部にて 1/6		
632	841	10	350	CH55	P10293 (木箱かも)	土師器	甕	18.0			内外・磨滅	密	1	良	内: 灰褐色 外: 灰褐色	口縁部にて 1/12	宇田型製	
633	842	10	425	CC53	P10339	陶板・土 師器	皿	13.6	7.0	2.6	内外・ロウロナデ 外底: 糸切り	密	ほとんど 含まない	良好	黄褐色	1/2		

Tab.3 遺物観察表 20

報告番号	実測番号	調査年度	図録番号	地区	遺構/層位	種類	器形	口径	底径	高さ	技法・調整の特徴	胎土	胎輪の大きさ(mm)	焼成	色調	残存率	備考
634	839	10	334	CH55	P10277 SX1026 内	甕器	杯蓋	10.8			内へ口縁:ロクロナデ 天井:回転ヘタ削り (時計回り)	密	ほとんど含まない	良好	黒灰色	1/4	
635	840	10	334	CH55	P10277 SX1026 内	甕器	杯身	10.2			内へ口縁:ロクロナデ 外底:回転ヘタ削り (時計回り)	密	ほとんど含まない	良好	灰青色	口縁部に て 1/8	
636	849	10	551	CH54	P10425 SX1026 内	甕器	杯蓋				内外:ロクロナデ	密	ほとんど含まない	良好	灰色	つまみ部 のみ	
637	846	10	453	CH52	P10367	白磁	小皿	4.5			内外:ロクロナデ、施 軸	密	ほとんど含まない	良好	密:白色 軸:白灰色	底部にて 1/2	内底面の一部を 軸跡とする
638	847	10	468	CG52	P10378	弥生土器	台付甕	7.3			内外:磨減	密	1	良	黒灰色	脚部に てほぼ完 形	
639	843	10	427	CG53	P10341	弥生土器	台付甕	7.0			内外:磨減	密	1-3	良	黒褐色	脚部に てほぼ完 形	
640	848	10	529	CH54	P10413	弥生土器	甕	4.9			内:磨減 外:ハケ	やや 密	1-2	良	黒褐色	底部にて 完形	底部穿孔あり
641	850	10	592	CE54	P10456 SH1051 内	石器	砥石				現存長 4.0 × 幅 1.1 × 厚 1.0cm、重量 8.1 g					1/2	片岩製か、4 面 とも使用
642	851	10	610	CE53	P10464	弥生土器	甕	14.4			内外:磨減	密	2-7	良	黒褐色	口縁部に て 1/4	
643	852	10	637	CF52	P10478 (SH1065 内)	弥生土器	甕				内:ミガキか 外:ミガキ	密	ほとんど含まない	良好	明褐色	口縁部 にて 1/2	甕底か、口径は 8.5cm くらいに 復元できる
644	853	10	655	CF53	P10488	弥生土器	台付甕	8.0			内外:磨減	密	1-3	良	黒褐色	脚部に てほぼ完 形	底 部 に 直 径 8mm の穿孔あ り
645	859	10	840	CG51	P10601 SH1070 内	弥生土器	高杯	11.8			内:磨減 外:直線文 (1 単位 8 条以上が 2 段) 透かし (5 ヶ条)	密	ほとんど含まない	良	灰褐色	脚部に て完形	
646	860	10	858	CG49	P10610 SH1090.92 内	石器	磨石				長 8.9 × 幅 7.6 × 厚 3.3cm、重量 350 g					完形	砂岩製、全体に 磨減する
647	864	10	889 9	CE45	P10641	弥生土器	甕				内:旋削面 外:磨減	やや 密	1-4	良	淡赤褐色	上平にて 口縁を欠 くのみ	
648	865	10	956	CG44	P10667 SH10106 上面焼出	甕器	杯蓋	13.2	4.9		内へ口縁:ロクロナデ 天井:回転ヘタ削り (時計回り)	密	1-2	良好	暗青灰色	1/4	
649	866	10	1006	CH45/46	P10685	弥生土器	甕	8.2			内外:磨減	密	1-3	良	淡青褐色	口縁部に て 1/4	
650	870	10	1166	CD46	P10773	弥生土器	甕	4.5			内外:磨減 外:ミガキ	密	1-3	良好	灰褐色	底部にて 完形	
651	872	10	1244	CI39	P10817	土師器	甕	13.1			口縁:ヨコナデ 内:磨減 外:ハケ	密	1-3	良	灰褐色	口縁部に て 1/6	S 字溝 D 軸か
652	871	10	1183	CF43	P10785	土師器	甕				内外:磨減 肥手:ミビオサエ	密	1-4	良	灰褐色	肥手部分 のみ	
653	868	10	1133	CJ44	P10752	甕器	杯蓋				内外:ロクロナデ	密	2	良好	暗青灰色	つまみ部 のみ	
654	-	9	889 84	C050	SH0960 北東埋土	石器	石杵か				長 11.5 × 幅 11.7 × 厚 7.3cm、重量 1,160 g					完形	石材不明、底面 のみを使用
655	-	10	745	CE/CF50	SK1081	石製品	原石				長 6.0 × 幅 5.0 × 厚 5.3cm、重量 38.7 g					完形	軽石
656	-	9	806	CP50	SH0960 埋土	石製品	原石				長 6.0 × 幅 5.0 × 厚 5.3cm、重量 38.6 g					完形	軽石

第VI章 自然科学分析

1 分析するにあたって

磐城山遺跡第9・10次調査時に採取した試料の自然科学分析を、令和元年度に株式会社パレオ・ラボに発注した。試料の提供時は「市内遺跡の出土物」とだけ伝達し、出土した遺跡名や遺構等の情報は伏せた状態で依頼した。なお、試料採取時の所見はTab.4のとおりである。

年代測定は放射性炭素年代測定 (^{14}C) を実施した。C-1～C-7の7点とし、概ね年代が古く出るだろうと想定した順に番号をつけた。また、赤色顔料の分析はR-1とした1点のみである。蛍光X線分析によって顔料に含まれる成分を計測し、その種類を同定する方法とした。

Tab.4 分析試料一覧表

試料番号	調査回数	登録番号	地区	出土遺構	層位	出土年月日	発掘調査時の所見
C-1	9	1429	CN50	SK0977 北平	最下層	20161020	土坑 縄文中期末～後期頃の無文土器出土
C-2	9	1497	CS51	P09936 (SH09104 中央焼土)	-	20170208	竪穴建物の地床跡 同竪穴建物からは弥生後期前半の土器が出土
C-3	9	1517	CR52	P09923 (SH09104 南西主柱穴)	2 層目	20170213	竪穴建物の南西主柱穴 同竪穴建物からは弥生後期前半の土器が出土
C-4	9	1519	CR50	P09938 (SH09104 北西主柱穴)	1 層目最下部	20170213	竪穴建物の北西主柱穴 同竪穴建物からは弥生後期前半の土器が出土
C-5	9	個別 80	CL52	P09274	竪内部の土	20160630	竪穴建物に関わる柱穴か？ 弥生時代後期頃？
C-6	10	1222	CC44	SX10143 北平	最下層	20180131	中世の方形竪穴 出土遺物に乏しいが、木田城跡（室町時代）に関わるものか？
C-7	10	1224	CC45	SX10143 南平	最下層	20180131	中世の方形竪穴 出土遺物に乏しいが、木田城跡（室町時代）に関わるものか？
R-1	9	個別 202	CM48	SD0975 (SH09104 排水溝)	-	20161209	弥生時代の石杵（製粉用具） 弥生時代後期の土器が出土

2 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹
Zaur Lomtadize・小林克也・竹原弘展

(1) はじめに

鈴鹿市内に所在する磐城山遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

遺跡より出土した炭化材である。このうち、試料番号 C-1 は樹皮で、試料番号 C-3、C-6 は最終形成年齢が確認されている。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

(2) 試料と方法

測定試料の情報、調製データは Tab.5 のとおりである。試料番号 C-1～C-7（PLD-39008～39014）は磐城山

(3) 結果

Tab.6に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、Fig.147に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.3 (較正曲線データ: IntCal13) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

Tab.5 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-39008	試料番号 C-1 遺跡：磐城山遺跡 (9 次) 地区：CN50 登録番号：1429 遺構：SK0977 北半 層位：最下層	種類：炭化材 (樹皮) 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L)
PLD-39009	試料番号 C-2 遺跡：磐城山遺跡 (9 次) 地区：CS51 登録番号：1497 遺構：P936(SH09104 中央焼土)	種類：炭化材 試料の性状： 最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L)
PLD-39010	試料番号 C-3 遺跡：磐城山遺跡 (9 次) 地区：CR52 登録番号：1517 遺構：P923(SH09104 南西主柱穴) 層位：2 層目	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L)
PLD-39011	試料番号 C-4 遺跡：磐城山遺跡 (9 次) 地区：CR50 登録番号：1519 遺構：P938(SH09105 北西主柱穴) 層位：1 層目最下部	種類：炭化材 試料の性状： 最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L)
PLD-39012	試料番号 C-5 遺跡：磐城山遺跡 (9 次) 地区：CL52 登録番号：コ 80 遺構：P274 (壺内部の土)	種類：炭化材 試料の性状： 最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L)
PLD-39013	試料番号 C-6 遺跡：磐城山遺跡 (10 次) 地区：CC44 登録番号：1222 遺構：SX10143 北半 層位：最下層	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L)
PLD-39014	試料番号 C-7 遺跡：磐城山遺跡 (10 次) 地区：CC45 登録番号：1224 遺構：SX10143 南半 層位：最上層	種類：炭化材 試料の性状： 最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L)

(4) 考察

以下に、 ^{14}C 年代と2 σ 暦年代範囲(確率95.4%)を示す。土器編年と、 ^{14}C 年代および暦年代との対応関係は、千葉(2008)、石田(2008)、小林(2009)、工藤(2012)を参照した。

C-1 (PLD-39008) は、 ^{14}C 年代が 3895 ± 20 ^{14}C BP、2 σ 暦年代範囲が 2465-2334 cal BC (87.4%) および 2325-2301 cal BC (8.0%) であった。これは、縄文時代後期初頭に相当する。

C-2 (PLD-39009) は、 ^{14}C 年代が 2045 ± 20 ^{14}C BP、2 σ 暦年代範囲が 156-138 cal BC (3.6%) および 114 cal BC-16 cal AD (91.8%) であった。これは、弥生時代中期～後期に相当する。

C-3 (PLD-39010) は、 ^{14}C 年代が 2005 ± 20 ^{14}C BP、2 σ 暦年代範囲が 46 cal BC-30 cal AD (88.6%) および 37-51 cal AD (6.8%) であった。これは、弥生時代中期～後期に相当する。

C-4 (PLD-39011) は、 ^{14}C 年代が 2015 ± 20 ^{14}C BP、2 σ 暦年代範囲が 52 cal BC-30 cal AD (91.5%) および 37-50 cal AD (3.9%) であった。これは、弥生時代中期～後期に相当する。

C-5 (PLD-39012) は、 ^{14}C 年代が 2095 ± 20 ^{14}C BP、2 σ 暦年代範囲が 177-51 cal BC (95.4%) であった。これは、弥生時代中期に相当する。

C-6 (PLD-39013) は、 ^{14}C 年代が 360 ± 20 ^{14}C BP、

2 σ 暦年代範囲が 1459-1525 cal AD (50.2%) および 1558-1632 cal AD (45.2%) であった。これは、室町時代～江戸時代初期に相当する。

C-7 (PLD-39014) は、 ^{14}C 年代が 360 ± 20 ^{14}C BP、2 σ 暦年代範囲が 1455-1524 cal AD (55.1%)、1559-1564 cal AD (1.3%)、1571-1631 cal AD (39.0%) であった。これは、室町時代～江戸時代初期に相当する。

なお、C-1 は樹皮で、C-3、C-6 は最終形成年輪が残っており、得られた年代は伐採年を示すが、その他は最終形成年輪が残っていないため、測定部位と最終形成年輪との差分、伐採年より古い年代となる(古木効果)。

引用・参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.
- 千葉 豊 (2008) 緑帯文土器、小林達雄編「総覧縄文土器」: 642-649, アム・プロモーション.
- 石田由紀子 (2008) 中津式・福田Ⅱ式土器、小林達雄編「総覧縄文土器」: 634-641, アム・プロモーション.
- 小林謙一 (2009) 近畿地方以東の地域への拡散、西本豊弘編「新弥生時代のほじまり第4巻弥生農耕のはじまりとその年代」: 55-82, 雄山閣.
- 工藤雄一郎 (2012) 旧石器・縄文時代の環境文化史—高精度放射性炭素年代測定と考古学—, 373p, 神泉社.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎, 日本先史時

Tab.6 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-39008 C-1	-27.21 $\pm$ 0.18	3893 $\pm$ 19	3895 $\pm$ 20	2457-2400 cal BC (41.9%) 2384-2348 cal BC (26.3%)	2465-2334 cal BC (87.4%) 2325-2301 cal BC (8.0%)
PLD-39009 C-2	-28.40 $\pm$ 0.24	2045 $\pm$ 21	2045 $\pm$ 20	91-70 cal BC (18.0%) 61-20 cal BC (40.7%) 12-1 cal BC (9.5%)	156-138 cal BC (3.6%) 114 cal BC-16 cal AD (91.8%)
PLD-39010 C-3	-28.53 $\pm$ 0.18	2006 $\pm$ 19	2005 $\pm$ 20	40 cal BC-19 cal AD (68.2%)	46 cal BC-30 cal AD (88.6%) 37-51 cal AD (6.8%)
PLD-39011 C-4	-29.51 $\pm$ 0.18	2014 $\pm$ 19	2015 $\pm$ 20	43 cal BC-5 cal AD (68.2%)	52 cal BC-30 cal AD (91.5%) 37-50 cal AD (3.9%)
PLD-39012 C-5	-29.95 $\pm$ 0.18	2097 $\pm$ 20	2095 $\pm$ 20	167-92 cal BC (68.2%)	177-51 cal BC (95.4%)
PLD-39013 C-6	-29.22 $\pm$ 0.21	358 $\pm$ 19	360 $\pm$ 20	1471-1521 cal AD (43.1%) 1592-1620 cal AD (25.1%)	1459-1525 cal AD (50.2%) 1558-1632 cal AD (45.2%)
PLD-39014 C-7	-26.68 $\pm$ 0.21	362 $\pm$ 19	360 $\pm$ 20	1470-1517 cal AD (45.1%) 1595-1618 cal AD (23.1%)	1455-1524 cal AD (55.1%) 1559-1564 cal AD (1.3%) 1571-1631 cal AD (39.0%)

代の14C年代編集委員会「日本先史時代の¹⁴C年代」:
3-20, 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafflason, H., Hajdas, L., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0750,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

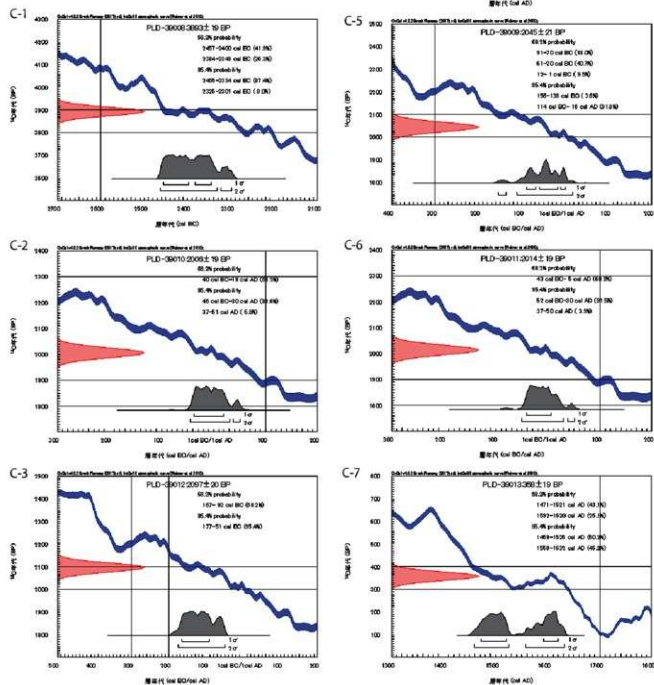


Fig.147 暦年較正結果

3 市内遺跡出土遺物に付着する赤色顔料分析

竹原弘展（パレオ・ラボ）

（1）はじめに

鈴鹿市内に所在する磐城山遺跡の発掘調査で出土した遺物に付着する赤色顔料について、蛍光X線分析を行い、顔料の種類を検討した。

（2）試料と方法

分析対象は、磐城山遺跡の9次調査SD0975より出土した弥生時代の石杵（R-1）に付着する赤色顔料である（Tab.7, Fig.148）。石杵は、磨砕面とみられる一面に顔料が付着している。実体顕微鏡下で、セロハンテープに赤色部分を極微量採取して、分析試料とした。

分析装置は、エネルギー分散型蛍光X線分析装置である（株）堀場製作所製分析顕微鏡XGT-5000Type IIを使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV・1mAのロジウムターゲット、X線ビーム径が100 μ mまたは10 μ m、検出器は高純度Si検出器（Xerophy）である。検出可能元素はナトリウム～ウランであるが、ナトリウム、マグネシウムといった軽元素は蛍光X線分析装置の性質上、検出感度が悪い。

本分析での測定条件は、50kV、0.36～0.90mA（自動設定による）、ビーム径100 μ m、測定時間500sに設定した。定量分析は、標準試料を用いないファンダメンタル・パラメータ法（FP法）による半定量分析を装置付属ソフトで行った。

さらに、蛍光X線分析用に採取した試料を観察試料として、生物顕微鏡で赤色顔料の粒子形状を確認した。

（3）結果

分析により得られたスペクトルおよびFP法による半定量分析結果をFig.149に示す。

R-1は、水銀（Hg）、硫黄（S）、ケイ素（Si）、アルミニウム（Al）が主に検出され、ほかにカリウム（K）、カルシウム（Ca）、チタン（Ti）、鉄（Fe）が検出された。

生物顕微鏡観察により得られた画像を図版1-1c、2cに示す。いずれも、不定形の赤色粒子が観察された。

（4）考察

赤色顔料の代表的なものとしては、朱（水銀朱）とベンガラが挙げられる。水銀朱は硫化水銀（HgS）で、鉱

物としては辰砂と呼ばれ、産出地はある程度限定される。ベンガラは狭義には三酸化二鉄（Fe₂O₃、鉱物名は赤鉄鉱）を指すが、広義には鉄（Ⅲ）の発色に伴う赤色顔料全般を指し（成瀬2004）、広範な地域で採取可能である。また、ベンガラは直径約1 μ mのパイプ状の粒子形状からなるものも多く報告されている。このパイプ状の粒子形状は鉄バクテリア起源であると判明しており（岡田1997）、



Fig.148 試料採取位置 (1a)

赤色顔料付着部位の実体顕微鏡写真 (1b)

赤色顔料の生物顕微鏡写真 (c)

Tab.7 分析対象一覧

分析 No.	遺跡名	調査回数	地区	登録番号	出土遺構	赤色顔料付着物	時期
R-1	磐城山遺跡	9次	CM48	個別 202	SD0975	L字状石杵	弥生時代

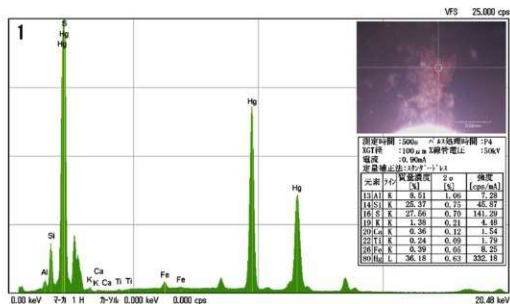


Fig. 149 赤色顔料の蛍光 X 線分析結果

含水水酸化鉄を焼いて得た赤鉄鉱がこのような形状を示す（成瀬 1998）。鉄バクテリア起源のパイプ状粒子は、湿地などで採集できる。

R-1 は、水銀（Hg）と硫黄（S）が顕著に検出され、水銀朱と考えられる。

(5) おわりに

磐城山遺跡出土石椁に付着する赤色顔料を分析した。その結果、石椁に付着する赤色顔料は、水銀朱と判明した。

引用文献

- 成瀬正和（1998）縄文時代の赤色顔料 I—赤彩土器—。考古学ジャーナル, 438, 10-14, ニューサイエンス社。
- 成瀬正和（2004）正倉院宝物に用いられた無機顔料。正倉院紀要, 26, 13-61, 宮内庁正倉院事務所。
- 岡田文明（1997）パイプ状ベンガラ粒子の復元。日本文化財科学会第 14 回大会研究発表要旨集, 38-39。

4 分析結果の検討

まずはじめに、今回の分析は令和元年度（2019）に実施しているため、校正曲線は IntCal13 を用いていることを明記しておく。これを踏まえた上で、分析結果の年代を検討したい。

年代測定によって得られた数値は、概ね発掘調査時の所見と一致した。縄文時代中期末から後期と思われる土器が出土した SK0977（C-1）は $3.895 \pm 20^{14}\text{CBP}$ と古い数値が出され、逆に中世末期と推定していた SX10143（C-6・C-7）はともに $360 \pm 20^{14}\text{CBP}$ と新しかった。数値自体も従来の年代どおりだといえる。

また、SH09104 から採取した試料（C-2～C-4）は、順に $2.045 \pm 20^{14}\text{CBP}$, $2.005 \pm 20^{14}\text{CBP}$, $2.015 \pm 20^{14}\text{CBP}$ という年代であった。概ね誤差の範囲内で、ほぼ一致した数値が得られた。後述するが SH09104 出土遺物は、県下でも類例の少ない弥生時代後期前半のものと考えられる。年代値はちょうど紀元前後をしている。IntCal13 では、この時期の年代値がやや古めに出る傾向が指摘されており、1 世紀代のものとするのが妥当と判断している。この時期の試料の分析例は数少なく、非常に重要な年代値となる。

なお、C-5 は P09274 出土の壺内部から採取した炭化物の年代である。壺自体は弥生時代後期のものだと考えられ、1～2 世紀前後の年代が示されるかと想定していたが、 $2.095 \pm 20^{14}\text{CBP}$ という想定値よりも 100～200 年も古い値が示された。壺内部から採取した試料であるので、古い炭化材が混入したと考えておきたい。

SD0975（弥生時代後期）から出土した石椁に付着していた赤色顔料は、水銀朱と同定された。三重県下では、水銀朱の素材である辰砂が多気郡多気町周辺で採取できることが知られており、松阪市の天白遺跡をはじめとして縄文時代後期には利用が開始されていることが確認されている。磐城山遺跡においても、何らかの手段で辰砂を入手し、遺跡内で製粉化していた可能性が高い。なお、弥生時代後期の山中式から古墳時代初頭の廻間式土器の壺や高杯には、赤彩されるものが一定量あることはよく知られている。磐城山遺跡から出土した壺等にも赤く飾られたものが存在しているので、遺跡内で朱の生産から土器の製作までしていたことが類推される。

第Ⅶ章 調査の成果と課題

磐城山遺跡では、これまで10次にわたって発掘調査が進められてきた。これまでの成果から、山中式を中心とした弥生時代後期の大集落に加え、5世紀末から6世紀にかけての古墳時代の小規模な集落も確認されている。さらに、6～7世紀頃の倉庫群やその区画溝、明らかに古代に下る掘立柱建物群、中世末期の木田城跡に関わる遺構等が夥しく重複する遺跡として周知されている（田部2011・2014・2015・2018）。

遺跡の範囲はより広範囲であるため、全体像が判明したわけではないが、以下では第9・10次調査で得られた知見を中心にまとめておきたい。

1 竪穴建物に付随する溝について

磐城山遺跡では数百棟の竪穴建物が確認されているが、その多くに溝が付随している。その建物の隅の周壁溝から地形的に低い方へのびていくため、排水の機能が類推されているところである。

これまであまり明確でなかったが、主となる溝に副次的な溝が接続している様子がはっきりしてきた。このようなあり方は、既に多気郡明和町北野遺跡の調査の際にも指摘され、共有する溝に群を見出してそこに帰属集団を類推している（竹田1996）。

今回の調査から磐城山遺跡を例示すると、SH1070の排水溝であるSD1082・SD0909が主たる溝となり、そこにSH1032/33の排水溝SD1037とSD1039が接続する。また、SH0910等のSD0925やSD0926もSD0909に接続する。この他にも、SD10101にSD10119が接続して

いるし、SD10101はさらにSD10111に繋がっている。これら溝を共有する建物が全て同時期だったという保証はないが、時間的には近いものがあったであろう。

なお、この主となる排水溝は検出面から0.3～0.5mと深いものが多く、かつ断面形状が箱型をしており、しっかりとしたつくりの溝である。排水という機能を類推しているが砂の堆積等が確認できず、数10mもの長さに及ぶにも関わらず崩れたような箇所も確認されていない。溝の肩も垂直に近く切り立っており、長期間風雨にさらされたような状況を認めたい。土層断面で確認できた事例はないが、今後は暗渠であった可能性も視野に入れて調査を進める必要がある。

2 SH09104の規模について

第4次調査時に東半分を確認していたが、今回の調査によって全形を確認した。両者を座標上で合成した結果、東西10.9m、南北9.5m（103.55㎡）の規模があることが判明した。調査年度が異なるため半々ずつ調査しているだけで、規模等は明確に把握できている（Fig.150）。

これまで三重県下の竪穴建物は、四日市市の菟上遺跡のSH71の14.6×9.7m（141.62㎡）が最大とされてきた（Fig.151）。他にも、津市長遺跡SH11や四日市市西ヶ広D遺跡SB211等の大型竪穴建物が知られているが、一辺が9mをこえるものや床面積が80㎡をこえるようなものはTab.8くらいである。これらの内、菟上・長・山奥の事例は平面の半分程度が確認できたのみで柱穴の位置などから規模を推定したものである。つまり、磐

Tab.8 三重県における大型竪穴建物

市町村名	遺跡名	遺構番号	時期	形状	長辺(m)	短辺(m)	床面積(㎡)	主柱穴間(m)	主柱穴の規模(m)	その他の施設	特記事項	文献
四日市	菟上	SH71	後期?	長方形	14.6	9.7	141.62	7.1 × 5.1	1.0 × 1.0	仮、独立棟持柱?	規模は復原値	『菟上遺跡』
鈴鹿	磐城山	SH09104	後期初頭	長方形	10.9	9.5	103.55	5.4 × 5.2	1.3 × 0.8	地床が多数、周辺中央土坑		本書
鈴鹿	磐城山	SH1031	後期か	正方形	9.4	9.2	86.48	4.9 × 4.8	0.6 × 0.4	重複が著しく詳細不明		本書
津市	長西ヶ広	SH11	中期後葉	長方形	12.0	8.4	100.80	5.9 × 3.7	2.2-1.1 × 0.9	独立棟持柱になるか?	規模は推定値	『長遺跡』
四日市	D	SB211	後期	正方形	9.6	9.4	90.24	5.5 × 5.0				鈴鹿市年報第7号
鈴鹿市	天王	SH13150	後期	正方形	9.5	9.0	85.50	6.0 × 4.8	0.5 × 0.4	暗渠排水	規模は推定値	
四日市	山奥	SH178	後期前半	長方形	9.8	8.7	86.24				規模は推定値	『山奥遺跡Ⅱ』
津市	納所	SB6	中期	八角形	10.3	8.2	84.46					『納所遺跡』

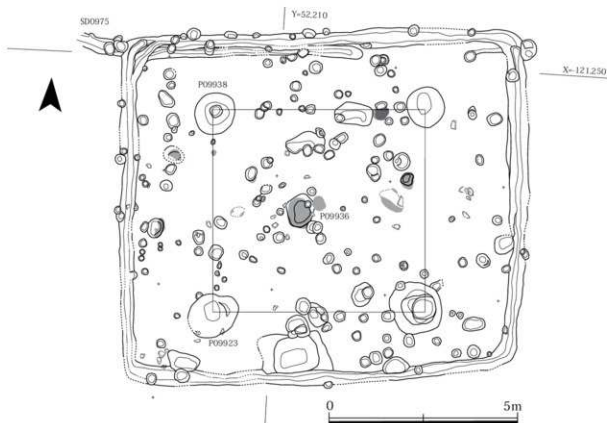


Fig.150 SH09104 平面図（上層遺構を除く）（5=1/100）

城山遺跡のSH09104は全形を確認できたものとしては県下で最大規模を誇ることとなる。

なお、磐城山遺跡SH09104は後期前半の建物である。三重県下の竪穴式建物は後期になると正方形になることが指摘されるが、中期末の長遺跡SH151（Fig.151）に比べると正方形に近い。建物規模に見合って大きい主柱穴4本を持ち、内部に地床炉を複数持っている。なお、直床炉（P09936）や主柱穴（P09923, P09938）から採取した炭化物の年代測定も実施している（第VI章参照）。周壁溝は全周し、南辺の中央には貯蔵穴があり、北西隅から北西方へ排水溝SD0975がのびる。第4次調査に際し明らかにできなかったのだが、壁際に小ピットが巡ることから壁立式の建物になるようである。葦上遺跡や長遺跡のような独立棟持柱になりそうな柱穴は確認できなかった。壁立式の建物は遺跡内でも大型のものに多く認められ、その遺跡の中心的な建物であった可能性が指摘されている（森2015）。

また、SH09104は磐城山遺跡の中でも標高の最も高い位置にあたる。弥生時代中期末まで空白であったこの地に、後期前半になって突然SH09104等が形成されることになる。このSH09104は、新たに作られる集落の中でも最もよい場所を選地していることから、集落の首長層の主屋であった可能性を示唆している。

3 SH09104の出土土器について

SH09104からは弥生時代後期前半に帰属すると思われる土器が多数出土した。床面直上や主柱穴埋土からも多く出土し、良好な一括資料として提示できる。この時代の資料は県下でも少なく重要な指標となるので、ここにまとめておきたい。

まず、器種構成としては壺・甕・高杯に器台と小型鉢があり、それぞれの器種ごとにいくつかに分類できる（Fig.152）。なお、磐城山遺跡の出土遺物は磨滅が著しく、調整は不明なものが多いので、概ね器形で分類した。

高杯A…口縁が直立し、盤状の杯部をもつ。脚部は八字に開き、下位に円孔を多数あける。

高杯B…小型の盤状高杯。

高杯C…口縁は直立しながらも僅かに外反しながら開く。脚部は細長く、直線文を多段施す。

高杯D…口縁が外反しながら、有段の杯部をもつ。

高杯E…口縁は丸みを持った碗形の杯部をもつ。

甕A…受口状の口縁を呈し、肩部に直線文を刺突列を施す。外面は全面ハケ調整され、平底となる。

甕B…く字の口縁を呈する。胴部の最大径は中位にあり、やや張った形状である。内部にケズリ調整を施す。平底の底部をもつ。

甕C…く字の口縁を呈する。胴部の最大径は中位に

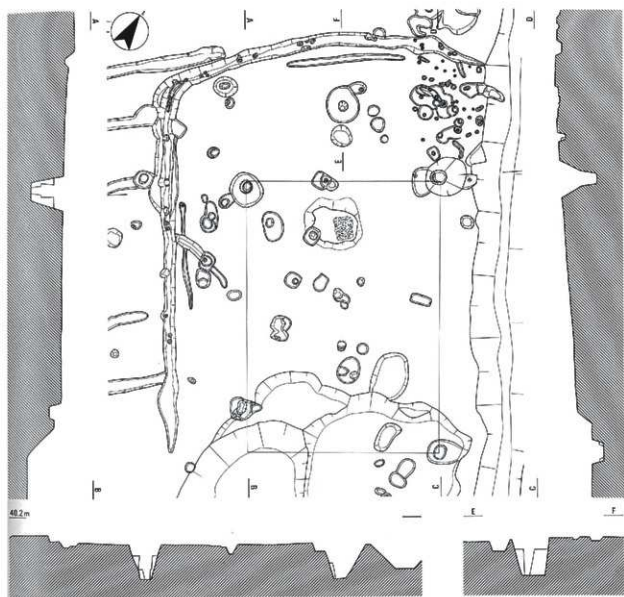


Fig.151 菟上遺跡 SH71 実測図 (S=1/100)

- あり、丸みをもっている。内外面ともハケ調整を施す。平底の底部をもつ。
- 甕 D…小型の甕であり、強く屈曲したく字の口縁を呈する。口縁端部は面をもつものが多いようである。平底の底部をもつ。
- 甕 E…タタキ調整の甕とする。
- 壺 A…広口壺とする。大きく外反する頸部から、口縁端部を素直にそのままおさめるものを1類とし、口縁端部を肥厚させるものを2類とする。2類の端面に擬凹線等が施され、内面に羽状の刺突が巡らされるものが多い。
- 壺 B…直口壺とする。口縁は直立して立ち上げ、丸くおさめるものと、外傾する面をもつものがある。
- 壺 C…長頸壺とする。1点のみで詳細不明。
- 壺 D…小型の広口壺である。

- 壺 E…小型の直口壺である。
- 壺 F…小型壺で、く字の口縁をもつ。
- 壺 G…小型の短頸壺である。
- 器台 A…筒状の脚部から大きく開く口縁と脚部をもつ。
- 器台 B…かなり大型の器台となるようであるが、全形は不明である。突帯を巡らせたり、円形や方形の透かしを多用するようである。
- 鉢 …小型の鉢である。明確な口縁をもたず、内湾しておさめる。

以上に分類できるが、磐城山遺跡 SH09104 に特徴的なのは高杯 A・B・C、甕 A・B・C である。確認できる甕の全ては平底であり、台付甕を一切含んでいない点は注目できる。また、総じて白色系の胎土をなす土器が多い点も特徴的であった。

県下でこの時期の土器がまとまって出土した事例は、

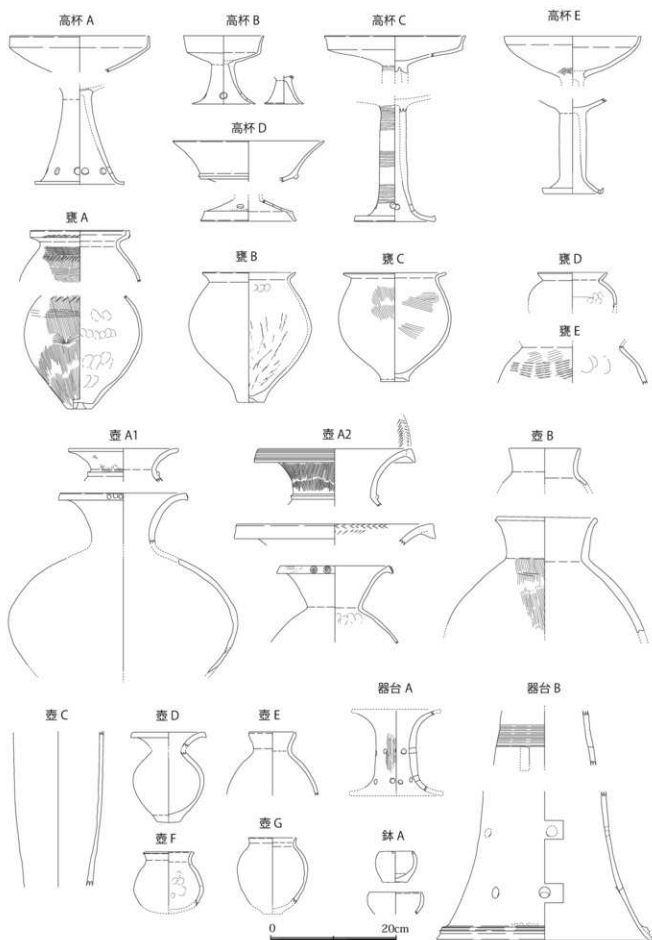


Fig.152 SH09104 の器種組成 (S=1/6)

松阪市の川原表B遺跡ぐらいであろう。川原表B遺跡例では、高杯に類似の点が多いものの、甕や壺のあり方は異なっている。同じ三重県下でも細部に違いが認められるが、これが微妙な時期差によるものなのか、地域の差によるもののかは今後の検討課題である。

ただし、磐城山遺跡SH09104の出土遺物は、周辺地域の土器と類似しながら独自の組成を呈しており、北勢地域の1世紀の土器の指標として十分な内容を持っている。そのため、これらの土器群を「磐城山式」と呼んで差し支えないと思うが、「磐城山式」と呼ぶのか、「磐城山類型」と呼称するのかについては、今後、十分に議論を深める必要があろう。

4 倉庫群と区画について

これまでの発掘調査によってN-5°-Wの区画溝とともに、その軸方向と一致するような向きの総柱の掘立柱建物（倉庫）が13棟以上見つかった（Fig.153）。今回はその続きを調査したが、前回のような複数回にわたる倉庫の建て替えは確認できず、SB19126とSB09127の2棟が確認されるにとどまった。

ただし、この2棟はともに柱穴の上位から中位にかけての礎石を配置する根巻石という工法で建てられていた。北側でまとまって確認された倉庫群でも一部に同じような構造が窺える。また、今回確認された2棟の建物は西側のSB09126が古く、軸方向はN-5°-Wと区画溝の方位と一致している（Fig.154）。その後、建て替えられたSB09127は、N-16°-Wと西へ振っている。前者が前回の報告でI群とした類型に該当し、後者はII-I群とした類型になる。検出されたのは2棟と少ないが、構造的にも軸方向も一致することから、区画溝（SD0777）や北東隅の掘立柱建物群と同じような倉庫だったものと想定している。

なお、SD0977及びSD0159に区画された範囲の発掘調査がずいぶん進んできたが、倉庫と考えられる掘立柱建物以外に同時期の遺構は稀である。他の軸方向を揃えない掘立柱建物との時間的な関係は不明な点が多いが、これらは後世の建物と判断しており、倉庫の周囲には空白地が広がっていたと想定しておきたい。磐城山遺跡の所在する河曲部には、式内社の大龍三宅神社の存在も記録されている。残念ながら、墨書土器等、直接屯倉の存在を類推させるものが確認されていないが、非常に興味深い内容であるので、今後の調査の進展に期待したい。

5 中世城館に関わる遺構について～方形竪穴の確認～

古代の掘立柱建物の後は、平安時代の遺構は皆無であ

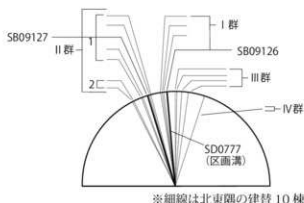


Fig. 153 掘立柱建物の方位の分析

り断絶が認められる。次いで目立つようになるのは中世後半の木田城跡に関わる遺構であったが、今回の調査によってはじめて、12～13世紀に遡る可能性のある土壌層SX0905を1基確認することができた。今後は中世前半も視野に入れて調査する必要がある。

さて、中世後半の遺構としては、まず区画溝（道路状遺構）と掘立柱建物があげられる。今回の調査によって道路状遺構は3時期あることが確認できたが、概ねN-10°-Eの方位であり、鈴鹿川下流域の十宮以西に広がる条理地割（N-10°-E）と一致することが追認できた。なお、道路として報告したが、その側溝は直角に屈曲しながら西へ続き、さらに北へ折れてのびていくので、屋敷地を区画しその周囲をまわる街路のようなものであった可能性が高い。区画された内部には、今回N-12°-Eと軸方向を揃えた掘立柱建物（SB09145）や井戸らしきSK0901等が検出された。また、道路の東側にもN-10°-EのB09128が確認でき、出入り口（門か）であった可能性が考えられる。このように、少しずつ内部の様子も判明してきており、今後の継続した調査が必要である。

なお、今回の調査で初めて方形竪穴が検出された。一部が調査区外であるので、詳細な報告は次年度以降の報告書に譲るが、上方で開き一辺4.5m程度、下段で3m前後の方形を呈し、軸方向も区画溝等の向きとして問題ない。深さは0.6mと深く、法面は直立に近く立ち上がっている。壁際に石組等は見えず素掘りのままで、内部にも明確な柱穴はない。出土遺物に乏しいものの土師器の羽釜がみられ、年代測定の結果からも16世紀頃まで下ることは間違いない。磐城山遺跡で、はじめて区画溝や掘立柱建物・井戸・土壌層以外に確認された中世後半の遺構である。方形土坑の性格は倉庫とみる意見が多いが、今後の調査は木田城跡にさらに近づくため、城館に関わる多様な遺構が検出されることを期待したい。



Fig.154 区画溝と掘立柱建物の位置関係 ($S=1/500$)

参考・引用文献

- 赤塚次郎 1990 『廻間遺跡』 財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎 1992 『山中遺跡』 財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎 1997 『西上免遺跡』 財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎 2001 『八王子遺跡』 財団法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎 2003 『八王子古宮式と近江湖南型甕』 『研究紀要』 第4号 財団法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター
- 浅尾 悟 1993 『伊勢国分寺跡(5次)・長者屋敷遺跡(1次)』 鈴鹿市教育委員会
- 浅野隆司 2007 『境谷遺跡第1次発掘調査概要報告』 鈴鹿市考古博物館
- 浅野隆司 2008 『境谷遺跡第2次発掘調査概要報告』 鈴鹿市考古博物館
- 伊藤淳ほか 2007 『南山遺跡(第3次)』 『鈴鹿市考古博物館年報』 第8号 鈴鹿市考古博物館
- 伊藤 洋 2010 『十宮古里遺跡発掘調査報告』 鈴鹿市考古博物館
- 伊藤裕偉 2004 『河曲の遺跡』 三重県埋蔵文化財センター
- 池端清行 2000 『長道遺跡発掘調査報告書』 三重県埋蔵文化財センター
- 上村安生 2002 『伊勢・伊賀地域』 『弥生土器の編年と様式』 木耳社
- 大場範久・仲見秀雄 1972 『鈴鹿市高岡青谷遺跡調査報告』 『神戸史談』 第8号 三重県立神戸高等学校
- 岡田雅幸 2000 『磐城山遺跡(2次)』 『鈴鹿市考古博物館年報』 第1号 鈴鹿市考古博物館
- 岡田雅幸・林和範 2003 『一反通遺跡(4次)』 『鈴鹿市考古博物館年報』 第4号 鈴鹿市考古博物館
- 岡田 登 1995 『伊勢大鹿氏について』 『史料』 第135・136号 皇學館大学史料編纂所
- 岡田 登 2005 『西ノ岡A遺跡』 『三重県史』 資料編考古1 三重県
- 小倉 整 2005 『国分北遺跡(3次)発掘調査報告』 三重県埋蔵文化財センター
- 角正淳子 2000 『国分北遺跡発掘調査報告』 三重県埋蔵文化財センター
- 真田幸成・大場範久・仲見秀雄 1970 『上真田 弥生式遺跡第二次調査報告』 鈴鹿市教育委員会・上真田遺跡調査会
- 清水政宏 2004a 『山奥遺跡』 I 四日市市教育委員会
- 清水政宏 2004b 『山奥遺跡』 II 四日市市教育委員会

- 杉立正徳 1997 『山辺瓦窯跡発掘調査報告』 『鈴鹿市埋蔵文化財年報』 IV 鈴鹿市教育委員会
- 杉立正徳 1998 『磐城山遺跡発掘調査概要』 『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報』 V 鈴鹿市教育委員会
- 鈴鹿市 2008 『鈴鹿市の自然—鈴鹿市自然環境調査報告書—』 鈴鹿市環境部環境政策課
- 鈴鹿市教育委員会編 1980 『鈴鹿市史』 第一巻 鈴鹿市
- 竹田憲治 1996 『北野遺跡(第5次)発掘調査概要』 三重県埋蔵文化財センター
- 田中秀和ほか 1998 『大城遺跡発掘調査報告書』 安濃町教育委員会・安濃町遺跡調査会
- 田部剛士 2009 『沢城跡第1次発掘調査報告書』 鈴鹿市考古博物館
- 田部剛士 2011 『磐城山遺跡(3次)』 『鈴鹿市考古博物館年報』 第13号 鈴鹿市考古博物館
- 田部剛士 2013a 『磐城山遺跡(4次)』 『鈴鹿市考古博物館年報』 第14号 鈴鹿市考古博物館
- 田部剛士 2013b 『須賀遺跡(6次)』 『鈴鹿市考古博物館年報』 第14号 鈴鹿市考古博物館
- 田部剛士 2013c 『磐城山遺跡(5次)』 『鈴鹿市考古博物館年報』 第15号 鈴鹿市考古博物館
- 田部剛士 2014 『磐城山遺跡(第4・5次)発掘調査報告書』 鈴鹿市考古博物館
- 田部剛士 2015a 『磐城山遺跡(第6・7次)発掘調査報告書』 鈴鹿市考古博物館
- 田部剛士 2015b 『宮ノ前遺跡(第2次)』 『鈴鹿市考古博物館年報』 第16号 鈴鹿市考古博物館
- 田部剛士 2015c 『磐城山遺跡(6次)』 『鈴鹿市考古博物館年報』 第16号 鈴鹿市考古博物館
- 田部剛士 2015d 『磐城山遺跡(第7次)』 『鈴鹿市考古博物館年報』 第17号 鈴鹿市考古博物館
- 田部剛士 2016 『平田遺跡発掘調査報告書—御門垣内地区の調査—』 鈴鹿市考古博物館
- 田部剛士 2017a 『磐城山遺跡(第8次)』 『鈴鹿市考古博物館年報』 第18号 鈴鹿市考古博物館
- 田部剛士 2017b 『間瀬口遺跡(第1次)』 『鈴鹿市考古博物館年報』 第18号 鈴鹿市考古博物館
- 田部剛士 2017c 『宮ノ前遺跡(第3次)発掘調査報告書』 鈴鹿市
- 田部剛士 2018a 『磐城山遺跡(第7・2・8・2次)発掘調査報告書』 鈴鹿市
- 田部剛士 2018b 『磐城山遺跡(第9次)』 『鈴鹿市考古博物館年報』 第19号 鈴鹿市考古博物館
- 田部剛士 2019 『磐城山遺跡(第10次)』 『鈴鹿市考古博物館年報』 第20号 鈴鹿市考古博物館

- 田部剛士 2020 『磐城山道跡（第11次）』『鈴鹿市考古博物館年報』第21号 鈴鹿市考古博物館
- 田部剛士 2021 『磐城山道跡（第12次）』・『磐城山道跡（第12次）』『鈴鹿市考古博物館年報』第22号 鈴鹿市考古博物館
- 仲見秀雄 1961 『上賀田 弥生式遺跡第一次調査報告』三重県立神戸高等学校郷土研究クラブ
- 中森成行 1978 『富士山10号墳発掘調査概要』鈴鹿市教育委員会
- 新田 剛 1991 『南山道跡・南山6号墳』鈴鹿市教育委員会・鈴鹿市遺跡調査会
- 新田 剛 1993 『上賀田遺跡』鈴鹿市教育委員会・鈴鹿市遺跡調査会
- 新田剛ほか 1996 『南山道跡発掘調査報告』『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報』Ⅲ 鈴鹿市教育委員会
- 新田 剛 1998 『一反通道跡（3次）』『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報』Ⅴ 鈴鹿市教育委員会
- 新田 剛 2005 『中尾山道跡』『三重県史』資料編 考古1 三重県
- 新田 剛 2010 『八重垣神社道跡（第6次）』鈴鹿市考古博物館
- 新田 剛 2018 『史跡伊勢国分寺跡・遺構編-』鈴鹿市
- 服部英世 2006 『萱町道跡』『鈴鹿市考古博物館年報』第7号 鈴鹿市考古博物館
- 林 和範 2004 『天王道跡（第10次）』『鈴鹿市考古博物館年報』第5号 鈴鹿市考古博物館
- 林 和範 2006 『天王道跡（第13次）』『鈴鹿市考古博物館年報』第7号 鈴鹿市考古博物館
- 藤原秀樹 1996 『木田坂上道跡（2次）発掘調査報告』『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報』Ⅳ 鈴鹿市教育委員会
- 藤原秀樹 1998 『岸岡山Ⅲ道跡—平成9年度発掘調査概要—』鈴鹿市教育委員会
- 藤原秀樹 2003 『神ノ坂道跡』『発掘された鈴鹿1991』鈴鹿市考古博物館
- 藤原秀樹 2005 『扇広道跡』『三重県史』資料編 考古1 三重県
- 藤原秀樹 2007 『南山道跡（第4次）』『鈴鹿市考古博物館年報』第9号 鈴鹿市考古博物館
- 藤原秀樹 2008a 『Ⅳ.7. 八重垣神社道跡（第4次）』『鈴鹿市考古博物館年報』第10号 鈴鹿市考古博物館
- 藤原秀樹 2008b 『Ⅳ.9. 八重垣神社道跡（第5次）』『鈴鹿市考古博物館年報』第10号 鈴鹿市考古博物館
- 藤原秀樹・吉田真由美 2015 『河曲郡面と伊勢国分寺』『平成27年度あいちの考古学2015資料集』公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター
- 藤原秀樹 2017 『史跡伊勢国分寺跡・遺構編-』鈴鹿市
- 穂積裕昌 2005 『菟上道跡発掘調査報告書』三重県埋蔵文化財センター
- 松阪市教育委員会 1991 『中部平成台団地埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 森 泰通 2015 『弥生時代・古墳時代の竪穴建物』『新修豊田市史19資料編 考古Ⅱ 弥生・古墳』愛知県豊田市
- 森川常厚 1994 『磐城山道跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター
- 山田 猛 1973 『鈴鹿市土師町・土師南方道跡』『昭和47年度県営圃場整備事業地域 埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会
- 吉田隆史 2011 『岸岡山Ⅲ道跡』鈴鹿市考古博物館
- 吉田隆史 2013 『平田道跡（第19・22次）-平田送水場改築に伴う発掘調査報告書』鈴鹿市考古博物館
- 吉田隆史 2018 『十宮古里道跡（第5・6次）』『鈴鹿市考古博物館年報』第19号 鈴鹿市考古博物館
- 吉田真由美 2007 『寺山道跡（7次）』『鈴鹿市考古博物館年報』第8号 鈴鹿市考古博物館
- 吉田真由美 2008 『Ⅳ.1. 萱町道跡（第2次）』『鈴鹿市考古博物館年報』第10号 鈴鹿市考古博物館
- 吉田真由美 2012 『須賀道跡（第5次）一宅地造成工事にかかる発掘調査報告書—』鈴鹿市考古博物館

写 真 图 版



1 第9次調査区完掘（西から）



2 第9次調査区完掘②（南東から）



3 第9次北西区検出（西から）



4 第9次北西区検出②（南から）



5 SH0930/31/32 完掘（北西から）



6 第9次中央北区中世道路完掘（南から）



7 第9次中央北区完掘（南から）



8 SH0966・SH0960/80 等完掘（北西から）



9 SH0966 完掘（南東から）



10 SH0960/80 検出 (南西から)



11 SH0960/80 完掘 (南東から)



12 SH0974 完掘（北から）



13 SH0994/95 完掘（南から）



14 SH0960/80-SH0993 完掘 (東から)



15 SH0993 完掘 (東から)



16 SH0962 完掘 (南東から)



17 SH0962 完掘② (北西から)



18 SH09104 検出 (南から)



19 SH09104 床面検出 (南から)



20 SH09104 完掘（南から）



21 SH09104 完掘②（北から）



22 SB09126/127 検出 (南から)



23 SB09126/127 検出② (南東から)



24 第9次北東区～北西区完掘（東から）



25 第9次南東区完掘（西から）



26 SH09102 完掘 (南西から)



27 SH09140 完掘 (北から)



28 SH09135/136 検出 (西から)



29 SH09135/136 完掘 (北から)



30 SD09101/111/119 の接続（北東から）



31 SB09156 掘削・検出（北西から）